

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第78集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

大島上城遺跡 北山茶臼山西古墳

鐮川流域における前期古墳の調査

1988

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

資料	馬場埋藏文化 調査事業団保	01-321
		/
No. 2-200	平成 2 年 7 月 20 日	(6)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第78集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

大島上城遺跡 北山茶臼山西古墳

鐮川流域における前期古墳の調査

1988

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



北山茶臼山西古墳遠景(北東より)



北山茶臼山西古墳全景(西上空より)



北山茶臼山西古墳近景(南東上空より)



方格規矩鏡

序

経済の高度成長と社会環境の変化により地域間の距離の短縮の要請は深く幅広く起こりました。その動きに合わせて関東地方にも高速道路、鉄道網が整備されつつあります。群馬県内においては上越新幹線、関越自動車道新潟線の工事がなされ、それぞれがすでに完成され、使用されています。

いままた、群馬県から長野県をへて新潟県上越市に向かう高速自動車道として関越自動車道上越線が計画されました。この地域は古くから「甘楽の谷」として知られ、国の特別史跡である多胡碑をはじめとして、渡来人、東アジア文化にかかわりを持つ遺跡の多い地域であり、遺跡の宝庫として周知されてきました。

これら史跡にかかわる遺跡の存在が予想されたために、道路公団と群馬県教育委員会の間で遺跡の保護についてのとりきめがなされ、発掘調査を群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり、昭和61年度より調査を開始しました。さらに続いて昭和63年度より整理事業も開始の運びとなりました。

ここに報告します、北山茶臼山西古墳は方格規矩鏡を伴う前方後方墳であり、当地方の古墳出現期の資料として、貴重であります。また大島上城遺跡は、中世末の山城で、祭祀遺跡も伴っておりました。これまで具体的な資料が乏しかった古墳前期及び中世の各時代に有力な資料が加えられた事になります。

北風吹きすさぶ中、酷暑続く中、調査、資料整理にと尽力された皆様の骨折りをねぎらうとともに、本報告書によって群馬県の歴史解明が多少なりとも前進し、県民の生涯学習の資料として活用されることを願ひまして序といたします。

最後に、発掘調査、整理事業の実施にあたりまして、種々ご配慮を頂きました日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会並びに地元関係者各位に感謝申し上げます。

昭和63年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「西平城遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 西平城遺跡は調査の進行に伴い、中世城郭部分を大島上城遺跡と称するのが妥当と考え、改名した。
また、谷をはさんで東に所在する古墳を北山茶臼山古墳との位置関係を考慮して、北山茶臼山西古墳と命名した。
- 3 大島上城遺跡は群馬県富岡市大島163番他に所在する。
北山茶臼山西古墳は富岡市南後箇169番他に所在する。
- 4 本発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 5 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。関越道上越線調査事務所は上越線地域埋蔵文化財の調査を目的に設置された事業団組織である。
- 6 調査期間及び担当者
 - (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年9月1日～昭和62年3月31日
調査担当者 津金沢吉茂（主任調査研究員）、綿貫鋭次郎（調査研究員、現主任調査研究員）田口正美（調査研究員）
 - (2) 整理 整理期間 昭和63年4月1日～昭和63年12月31日
整理担当者 田口正美
 - (3) 事務 常務理事 白石保三郎、事務局長 井上唯雄（昭和61、62年度）松本浩一
管理部長 大沢秋良（昭和61年度）田口紀雄、調査研究部長 上原啓巳
関越道上越線調査事務所々長 井上 信、総括次長 片桐光一、次長 原田恒弘
（昭和62年度）徳江 紀、課長 長谷部達雄（昭和61年度） 鬼形芳夫
庶務課 係長代理 黒沢重樹、主任 国定 均
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹
- 7 報告書作成担当者
 - 編集 田口正美
 - 本文執筆 徳江 紀（I-1-（1））
田口正美（上記以外）
 - 遺構写真 津金沢吉茂、綿貫鋭次郎、田口正美
 - 遺物写真 佐藤元彦（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
 - 遺物観察 田口正美
 - 遺物実測 図版作成 古賀文江、柿田順子、遠藤栄子、菊池スミ子、原 恵子、石井 緑、渡部重子
 - 委託関係 航空写真は青高館航空写真、及び株式会社中央航業に、トレースは株式会社技研測量に依頼した。

- 8 報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。

(敬称略)

宮内庁書陵部、東京国立博物館、東京国立文化財研究所、京都大学文学部付属博物館、奈良県立橿原考古学研究所、群馬県警察本部、群馬県立歴史博物館、群馬県工業試験場、佐賀県教育委員会、前橋市教育委員会、城陽市教育委員会、京北町教育委員会、峰山町教育委員会、久美浜町教育委員会、岩滝町教育委員会、国友鉄砲の里資料館

新井 仁、新井房夫、石川正之助、今井幹夫、石守 晃、井上 太、梅沢重昭、大賀 健、鹿沼栄輔、加部二生、木津博明、小島敦子、小林重夫、小林敏夫、小林行雄、小山友孝、坂本和俊、沢田太吉、白石太一郎、白石元昭、神保侑史、杉山晋作、田村晃一、田口一郎、千賀 久、寺沢 薫、中沢 悟、西垣晴次、巾 隆之、橋本博文、土生田純之、菱田哲郎、平尾良光、福尾正彦、福田紀雄、松島栄治、馬淵久夫、森 浩一、右島和夫、水田 稔、茂木雅博、湯沢行孝、依田治雄

上記の他、

山崎 一(群馬県文化財保護審議会委員)、鈴木三男(金沢大学教養部助教授)、緑川 順(群馬県警察本部科学捜査研究所)、花岡紘一、大山義一、小沢達樹(群馬県工業試験場)の各氏からは玉稿をいただき、村田修三氏(奈良女子大学文学部助教授)には大島上城の地形図作成に際して、現地踏査の労を煩わせた。大江正行氏(当団専門員)には陶磁器の観察を、石坂 茂氏(当団主任調査研究員)には縄文土器の観察を、川原 隆氏(群馬貨幣研究会)には古銭の鑑定をそれぞれ依頼した。また、普及資料課には遺跡周辺の鳥瞰図作成に際して、コンピューターを利用したシュミレーション図作成に御協力をいただいた。

- 9 北山茶臼山古墳出土三角縁神人車馬画像鏡の写真は宮内庁書陵部の、鉄矛の写真東京国立博物館の、オオツノシカの写真は群馬県立歴史博物館の各位の御高配の元に写真掲載の許可をいただいた。また、大島上城遺跡と北山茶臼山西古墳の航空写真(写真図版1)はたつみ写真スタジオの提供による。
- 10 出土遺物は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
- 11 発掘調査従事者

藤巻祐一、三田とめ、新井正子、鶴田多恵子、吉田美津子、三ツ木国雄、高橋政雄、山田晋三郎、葦塚 峯、高田房雄、山田福一、宮下君枝、小林 茂、山口 清、斎藤俊夫、山田春一、小島良雄、伊藤しちを、坂本豊吉、原田 茂、高田秀介、高田なつ、小林フミ江、岡野てる、白石かね子、斎藤昇三、小林和子、高橋ツナ、森 千代子、安河内恵子、広木正幸、黒沢きみ枝、三田とり、小林たか、岡野乙二、高松あき、宮下保次、石川米吉、桐淵サダ、堀越美恵子、茂木はる江、柳沢一寿、飯塚喜与治、柴崎文八、渡辺文江、佐藤信平、古賀文江、永峰うめ子、小川国雄、小川甲子、市川はつみ、横山子之吉、臼田こう、石川千代、沢田八蔵、中村福治、中村明子、斎藤つる、林 通清、松井松次、田中喜代美、細野やすの、新井イサミ

上記の他、富岡市を中心として、多くの方々の協力を得た。

凡 例

- 1 遺構図の縮尺率は遺構の性格上、統一のあるものとする事ができなかった。縮尺率はスケールを参照されたい。
- 2 遺物実測図の縮尺率は1：3を基本としたが、個体に応じて、若干の異動がある。
- 3 遺構図中の方位記号は座標北を表す。
- 4 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
- 5 遺構図、遺物実測図、遺物観察表の番号は基本的に一致する。
- 6 X線写真撮影の仕様は次のとおりである。

方格規矩鏡

電圧 110K.V.P、電流 5 mA、露出時間 12sec、距離 60cm、焦点 2.0mm×2.0mm

フィルム FUJI-100、増感紙 PB、現像 20°C 5 min

変形四獣鏡

電圧 110K.V.P、電流 5 mA、露出時間 9 sec、距離 60cm、焦点 2.0mm×2.0mm

フィルム FUJI-100、増感紙 PB、現像 20°C 5 min

鉄矛

電圧 110K.V.P、電流 5 mA、露出時間 6 sec～9 sec、距離 60cm、焦点 2.0mm×2.0mm

フィルム FUJI-100、増感紙 PB、現像 20°C 5 min

- 7 遺跡位置図及び関越道自動車道（上越線）路線図に使用した地図は国土地理院発行50,000分の1地形図の「富岡」「高崎」「御代田」「軽井沢」「榛名山」である。
- 8 遺跡周辺の鳥瞰図は国土地理院発行50,000分の1地形図「富岡」を使用し、遺跡地を中心として東西水平距離10km、南北水平距離10kmの範囲を250mメッシュで網かけして得られた標高値を基礎データとして作成したものである。尚、遺跡地周辺の地形の特徴を鑑み、東上空からの鳥瞰を目途とした。作図はコンピュータグラフィックによる。

目 次

序
例
凡

言 例		
第 I 章	発掘調査の実施と経過	1
1	調査に至る経緯	3
2	遺跡をとりまく環境	6
3	調査の方法	15
4	標準土層	18
5	調査の経過	20
	付載 大島地区百八灯	22
第 II 章	大島上城遺跡	25
1	遺跡の概観	27
2	縄文時代	28
3	古 代	30
4	中 世	33
5	近 世	50
6	考 察	80
	付載 2号土壇出土の人骨について	88
第 III 章	北山茶臼山西古墳	101
1	遺跡の概観	103
2	縄文時代	104
3	古墳時代	105
4	古 代	140
5	考 察	147
	付載 1 ガラス小玉の分析	168
	付載 2 方格規矩鏡の分析	169
	付載 3 木質片の同定	170
	付載 4 方格規矩鏡系古鏡出土地一覧	172
	付載 5 四獣鏡系古鏡出土地一覧	181
	写 真 図 版	

挿 図 目 次

第 1 図	関越道（上越線）路線図	4
第 2 図	富岡市の位置	6
第 3 図	オオツノシカの化石（富岡市蛇宮神社蔵）	7
第 4 図	弥生式土器実測図	8
第 5 図	天王塚古墳地形図	9
第 6 図	鑓川周辺古墳群位置図	10
第 7 図	鑓川周辺中世城郭位置図	11
第 8 図	遺跡位置図	12
第 9 図	鳥瞰図及びエレベーション図	14
第 10 図	遺跡周辺路線図	16
第 11 図	グリッド配置図	16
第 12 図	大島上城テラス呼称図	17
第 13 図	標準土層図(1)	18
第 14 図	標準土層図(2)	18
第 15 図	ボーリング柱状図	19
第 16 図	遺跡風景	21
第 17 図	百八灯(1)	22
第 18 図	百八灯(2)	23
第 19 図	遺構概念図	27
第 20 図	縄文ピット全体図	28
第 21 図	ピット 1、3	28
第 22 図	ピット 4、5、6、7	29
第 23 図	縄文土器実測図	30
第 24 図	石器実測図	30
第 25 図	大溝全体図	31
第 26 図	大溝出土 高台付塚実測図	31
第 27 図	テラス⑩	33
第 28 図	1号柱穴列	34
第 29 図	テラス⑩かわらけ出土状況図	35
第 30 図	テラス⑩出土かわらけ	35
第 31 図	テラス①②③遺構全体図	36
第 32 図	2号柱穴列及び1号土坑	37
第 33 図	1号土坑	38
第 34 図	1号土坑出土かわらけ実測図	39
第 35 図	1号墓壇	39
第 36 図	テラス③虎口遺構	40
第 37 図	1号集石	41
第 38 図	ピット 1、2、4、7	42
第 39 図	ピット 7 出土かわらけ実測図	43
第 40 図	2号集石	43
第 41 図	テラス⑨	44
第 42 図	2号土坑位置図	45
第 43 図	2号土坑（左：遺物出土状況、右：掘り方）	45
第 44 図	土鍋実測図	46
第 45 図	鉄砲玉実測図	46
第 46 図	鉄砲玉出土位置図	47
第 47 図	石つぶて実測図	48
第 48 図	大島富士東側地形図	49
第 49 図	テラス⑪	49
第 50 図	テラス⑪内耕作溝	50
第 51 図	テラス⑮⑯⑰	51
第 52 図	テラス⑳	52
第 53 図	墓石実測図	53
第 54 図	2号墓壇位置図	54
第 55 図	2号墓壇	55
第 56 図	2号墓壇出土遺物実測図	56
第 57 図	2号墓壇出土古銭	57
第 58 図	大島上城遺跡出土陶磁器実測図(1)	59
第 59 図	大島上城遺跡出土陶磁器実測図(2)	60
第 60 図	大島上城遺跡出土陶磁器実測図(3)	61
第 61 図	大島上城遺跡出土陶磁器実測図(4) 石製品等実測図	62
第 62 図	古銭出土状況（中世面）	66
第 63 図	大島富士（中世面）	67
第 64 図	大島富士地層断面図	68
第 65 図	大島富士遺構位置図	69
第 66 図	大島富士頂部柱穴周辺図	70
第 67 図	大島富士現況図	71
第 68 図	大島富士出土古銭(1)	72
第 69 図	大島富士出土古銭(2)	73
第 70 図	大島富士出土古銭(3)	74
第 71 図	大島富士出土古銭(4)	75
第 72 図	大島富士出土古銭(5)	76
第 73 図	大島富士出土古銭(6)他	77
第 74 図	大島上城縄張り図（山崎 一原図）	82
第 75 図	大島上城地形図	84
第 76 図	名胡桃城出土鉄砲玉	85
第 77 図	真壁城出土鉄砲玉	85
第 78 図	一之宮城出土鉄砲玉(1)	85
第 79 図	一之宮城出土鉄砲玉(2)	86
第 80 図	現地調査時における資料骨（頭蓋骨）	91
第 81 図	本調査時における資料骨（全体図）	92
第 82 図	頭蓋骨写真(1)	93
第 83 図	頭蓋骨写真(2)	93
第 84 図	左右寛骨写真	94
第 85 図	頭蓋骨矢状縫合写真矢状縫合近影（完全癒合）	95
第 86 図	残存歯牙写真	95
第 87 図	上下顎歯列弓写真	96
第 88 図	右後頭部インカ骨	97
第 89 図	頭蓋骨（復元写真）	98
第 90 図	頭蓋骨トレース写真	98
第 91 図	平均的軟部組織による輪郭の推定	98
第 92 図	線描による復顔像	99
第 93 図	北山茶臼山西古墳遺構概念図	103
第 94 図	縄文時代ピット	104
第 95 図	縄文土器片実測図	104
第 96 図	西古墳現況図及びベルト位置図	106
第 97 図	西古墳墳丘地層断面図	107
第 98 図	墳丘内遺物出土位置図	108
第 99 図	墳丘内遺物実測図	108
第 100 図	西古墳構築面石組状況	109
第 101 図	1号溝遺物出土状況	111
第 102 図	1号溝	112
第 103 図	墳丘削り出し状況	113
第 104 図	1号溝出土遺物実測図	114
第 105 図	2号溝	115
第 106 図	2号溝出土遺物実測図(1)	116
第 107 図	2号溝出土遺物実測図(2)	117
第 108 図	墳丘上出土遺物実測図	118
第 109 図	西古墳墳丘推定図	119
第 110 図	変形四獣鏡	121
第 111 図	掘り方設定状況	122
第 112 図	主体部地層断面図	123
第 113 図	主体部掘り込み状況	124
第 114 図	西木口礫出土状況	125
第 115 図	東木口礫出土状況	126
第 116 図	主体部北西隅礫出土状況	128

第117図	主体部	129
第118図	主体部掘り方	131
第119図	主体部遺物出土状況	133
第120図	方格規矩鏡	134
第121図	方格規矩鏡主要図像	135
第122図	方格規矩鏡出土状況	135
第123図	木質片(上:実測図、下:文様概念図)	136
第124図	鉄矛実測図	137
第125図	鉄斧実測図	138
第126図	刀子実測図	138
第127図	鉋状鉄製品実測図	139
第128図	ガラス小玉実測図	139
第129図	鉄剣(?)実測図	139
第130図	1号住居跡	140
第131図	1号住居跡かまど部分	141
第132図	1号住居跡出土遺物実測図(1)	142
第133図	1号住居跡出土遺物実測図(2)	143
第134図	窯体状施設	146
第135図	主要図像の変遷(1)	147

第136図	主要図像の変遷(2)	148
第137図	沖ノ島17号遺跡出土鏡	149
第138図	方格規矩鏡文様割り付け(1)	152
第139図	方格規矩鏡文様割り付け(2)	153
第140図	方格規矩鏡文様割り付け(3)	154
第141図	鳥像各型式	155
第142図	J K式図像	155
第143図	西古墳出土方格規矩鏡文様割り付け	157
第144図	佐味田宝塚古墳出土鏡鳥文概念図	157
第145図	県内出土鉄矛(1)	160
第146図	県内出土鉄矛(2)	161
第147図	県内鉄矛出土地(1)	161
第148図	県内鉄矛出土地(2)	162
第149図	北九州出土鉄矛実測図	163
第150図	下郷遺跡出土壺型土器	165
第151図	茶臼山古墳、西古墳出土遺物	166
第152図	木質片顕微鏡写真	171
第153図	方格規矩鏡出土地	189
第154図	四獣鏡出土地	189

表 目 次

第1表	遺跡地名表	13
第2表	調査日誌	20
第3表	最近20年間の文字の変遷	23
第4表	縄文ピット計測表	29
第5表	縄文土器片観察表	30
第6表	石器観察表	30
第7表	大溝出土坑観察表	31
第8表	1号柱穴列計測表	35
第9表	2号柱穴列計測表	38
第10表	テラス③内ピット計測表	42
第11表	土鍋観察表	46
第12表	鉄砲玉観察表	46

第13表	石つぶて観察表	48
第14表	墓石観察表	52
第15表	2号墓壇出土古銭観察表	58
第16表	2号墓壇出土陶磁器観察表	58
第17表	大島上城遺跡出土陶磁器観察表	63
第18表	吸口観察表	65
第19表	石製品観察表	65
第20表	大島富士出土古銭観察表	77
第21表	玉割表	86
第22表	縄文土器片観察表	104
第23表	墳丘内遺物出土観察表	108
第24表	1号溝出土土器観察表	114

第25表	2号溝出土土器観察表	117
第26表	墳丘上土器観察表	118
第27表	北山茶臼山西古墳各部計測表	120
第28表	墓壇各部計測表	127
第29表	1号住居出土遺物観察表	144
第30表	文様割り付け一覧表(1)	155
第31表	文様割り付け一覧表(2)	156
第32表	鉄矛の種類	162
第33表	蛍光X線スペクトルの強度	168
第34表	鏡の分析結果	169

写真図版目次

図版1	遺跡航空写真 東より
図版2	テラス⑩1号柱穴列、テラス①全景
図版3	テラス③大溝全景、テラス③、④全景
図版4	1号土坑(テラス①)、ピット7
図版5	1号土坑、1号墓壇、テラス③北斜面石組状況 東より
図版6	テラス①調査風景、テラス④~⑩
図版7	テラス④~⑯雑草伐採後
図版8	テラス⑧、テラス⑩
図版9	テラス⑪~⑳遺構全景、1号溝、2号溝
図版10	2号墓壇全景、人骨出土状況
図版11	大島富士全景
図版12	大島富士古銭出土状況
図版13	大島上城出土遺物
図版14	2号墓壇出土遺物
図版15	中、近世陶磁器(1)
図版16	中、近世陶磁器(2)
図版17	大島富士古銭(1)
図版18	大島富士古銭(2)
図版19	大島下城俯瞰写真
図版20	西古墳航空写真(南東上空より)
図版21	北山茶臼山西古墳全景
図版22	西古墳調査前の状況 南より 墳丘(A軽石除去後) 西より

図版23	1号溝全景 北東より 2号溝全景 南東より
図版24	内部主体部地層断面(1) 南東より 内部主体部地層断面(2) 南東より
図版25	東木口礫検出状況 北西より 西木口礫検出状況 南東より
図版26	内部主体部北西隅石組検出状況 北より
図版27	西古墳全景(墳丘構築面)(地層断面、東部分) 構築面石組状況(平面、東部分)
図版28	方格規矩鏡出土状況 南東より 鉄矛出土状況 南東より
図版29	1号住居全景 西より 同かまど部分全景 西より
図版30	窯体状施設
図版31	変形四獣鏡
図版32	方格規矩鏡(部分拡大)
図版33	方格規矩鏡(X線写真)
図版34	鉄矛
図版35	内部主体部出土遺物 木質片、鉄斧、刀子、鉋状鉄製品
図版36	西古墳出土土器
図版37	1号住居出土土器
図版38	北山茶臼山西古墳地形図(「群馬県史」資料編3)、三角縁神人車馬面像鏡(宮内庁蔵)

抄 録

1 遺跡の概略

大島上城遺跡は群馬県富岡市大島に所在する。丘陵上に立地する中世城郭の調査を中心に、昭和61年9月1日より翌62年3月13日まで、約6カ月半を費した。調査によって、中世の城郭の他、縄文時代のピット、古代の大溝、中～近世の丘陵上祭祀遺構、近世の墓や耕作溝を検出し得た。

北山茶臼山西古墳は大島上城から約500m東の群馬県富岡市南後箇に所在する。昭和61年11月4日より翌62年3月31日までの約5カ月の間の調査で、丘陵上に造営された前期古墳を始めとして、縄文時代のピット、平安時代の離群住居や窯体状施設を検出し得た。

2 遺構数量

	種 別	時 代	数 量	備 考
大島上城遺跡	ピ ッ ト	縄 文	7	
	大 溝	古 代	1	
	柱 穴 列	中 世	2	中世城郭に関する遺構と推定される。
	土 坑	中 世	2	//
	虎 口	中 世	1	
	墓 墳	中、近 世	2	
	祭 祀 遺 構	中、近 世	1	浅間信仰に由来する、丘陵頂部の祭祀遺構。
	耕 作 溝	近 世	2	
北山茶臼山西古墳	ピ ッ ト	縄 文	1	
	古 墳	古 墳	1	主体部を完掘。
	竪穴式住居	平 安	1	離群住居。
	窯体状施設	平 安	1	

3 ま と め

大島上城は自然の丘陵を巧みに利用した山城で、中世末における位置づけは可能となったが、それ以前の歴史は定かではない。南東に位置する小幡氏の居城、国峰城の防塁ラインの一つを形成する城郭としての機能が推定される。

北山茶臼山西古墳は調査の結果、丘陵上に造営された前期古墳であることが判明した。墳丘は前方後方形で、木棺直葬の主体部をもつことが確認された。方格規矩鏡（仿製鏡）、変形四獣鏡（仿製鏡）の他、鉄矛、鉄斧、刀子、木質片、ガラス小玉、底部穿孔壺形土器などが出土している。東側の丘陵上に占地する三角縁神人車馬画像鏡、石釧を出土した北山茶臼山西古墳よりも古い時期の古墳と考えられ、鐮川の上、中流域を支配し得た、在地首長層の造営によるものと推定される。

発掘調査の実施と経過

第I章 発掘調査の実施と経過

第1節 調査に至る経緯

1 関越自動車道上越線埋蔵文化財発掘調査の経緯

関越自動車道上越線は、首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長約280km、内、練馬～藤岡インター間は関越自動車道新潟線との重複区間として既に供用されている。今回建設される藤岡インター～佐久インター間は約67kmで群馬県藤岡市(5.6km)、吉井町(6.3km)、甘楽町(4.3km)、富岡市(11.6km)、妙義町(2.5km)、松井田町(19.5km)、下仁田町(5.3km)、長野県佐久市(11.9km)の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は、昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)、同57年松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次の通りである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県(企画部交通対策課)より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分けし、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した(後の試掘により52遺跡に変更)。そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ①発掘調査終了年度を昭和66年末とする(道路公団とは協議中となる)。
- ②(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には、進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行なう。
- ④機関別対応面積は次の通りとする。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行ない、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月、埋文事業団上越線調査事務所を、吉井町南陽台3-15-8に設置し、15人体制で発足。矢田・

第 I 章 発掘調査の実施と経過

羽田倉・田篠遺跡の調査及び内匠下高瀬の試掘。試掘終了後西平城遺跡へ移動。

12月、妙義町遺跡調査会発足。古立II遺跡調査。

昭和62年度 上越線調査事務所22人体制。6班で大御堂・栗崎八幡・矢田・羽田倉・田篠・内匠下高瀬(上之宿分)遺跡の調査。羽田倉終了後上神保、栗崎八幡終了(1/2)後植松、内匠下高瀬終了後塩之入城東、田篠終了後井出及び安坪へ移動。

妙義町遺跡調査会 古立I・八木連II・八木連I遺跡の調査。

6月、藤岡市調査に参加 新堀・稲荷屋敷遺跡調査。

11月、下仁田町遺跡調査会及び松井田町遺跡調査会発足。各々杣瀬・恩賀遺跡調査。1月から県教委による包蔵地範囲・調査期間算定のための試掘。

昭和63年度 上越線調査事務所36人体制。9班で寺前・大御堂・矢田・植松・上神保・安坪・早道場・内匠下高瀬・塩之入城東遺跡の調査。なお植松終了後栗崎八幡、上神保終了後中山、安坪終了後根岸、早道場終了後井出、塩之入城東終了後塩之入城及び内匠下高瀬遺跡へ移動の予定。整理班は、西平城・羽田倉・田篠遺跡を配置した。

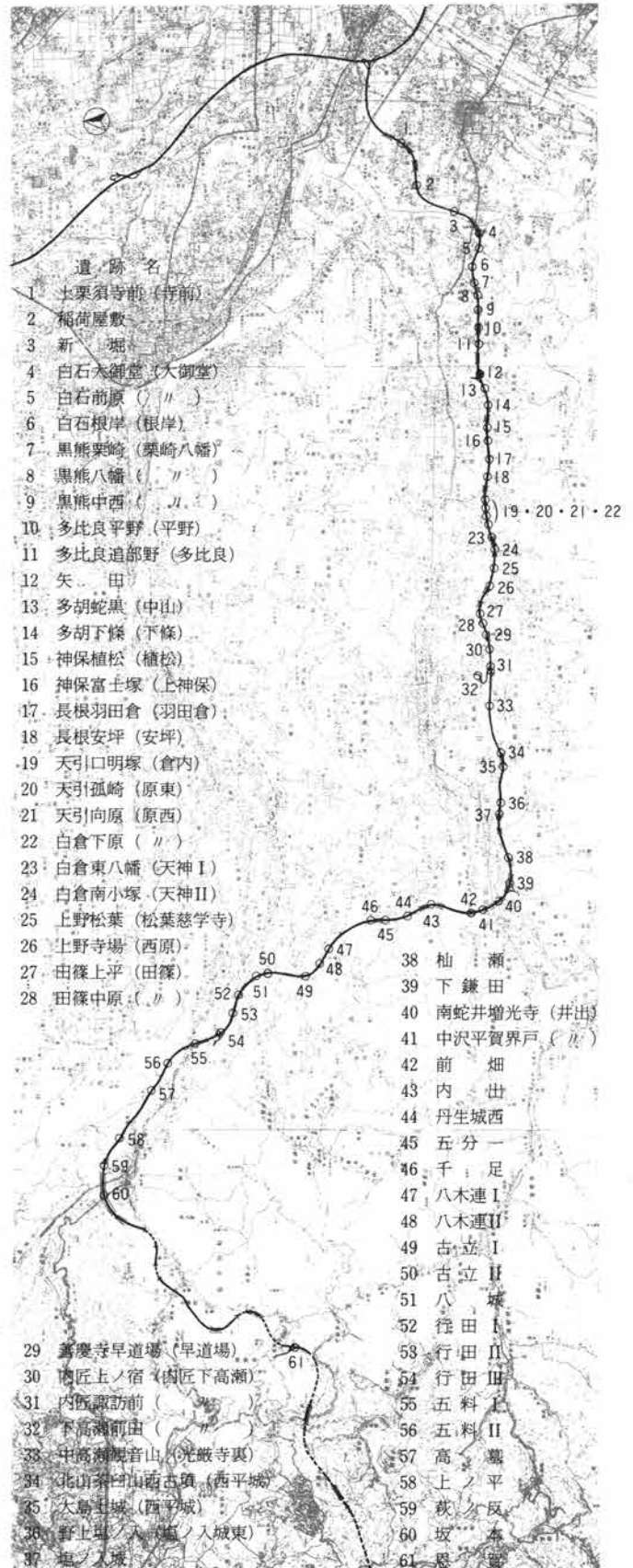
下仁田町遺跡調査会 杣瀬遺跡継続。

松井田町遺跡調査会 恩賀・八城遺跡調査。

藤岡市 稲荷屋敷遺跡調査継続。

富岡市 調査に参加、前畑遺跡・丹生城西遺跡調査。

7月から、事業団による栗崎八幡・矢田・内匠下高瀬・井出の試掘。



第1図 関越道(上越線)路線図

関越自動車道上越線調査遺跡

昭和60年分布調査により55遺跡が認定されたが、その後の試掘による削除、広大な遺跡地の分割等により遺跡名は61になっている。埋文事業団担当遺跡については、遺跡名を原則として大字小字の連記とすることで変更しており、旧遺跡名は事業名称として存続する。

なお、上記地図内遺跡名は新遺跡名を使用し、()内が旧遺跡名(事業名)である。(昭和63年8月現在)

2 大島上城遺跡及び北山茶臼山西古墳発掘調査の経緯

大島上城は、富岡市大島と同野上地区にはさまれた山地にあり、南及び東を野上川、北は大島の集落とその北を簗川、西は山地が続く地形になっている。簗川をはさんで東西に走る山地、丘陵上には、中世の山城が数多くあることが知られており、その中の一つ大島上城は、大島地区南側の山地の山頂部に主郭を持つ山城として周知されていた。

関越自動車道上越線は、この主郭部をはずして北側の斜面、大島富士と通称される小山頂部分を東西に通過する。分布調査に際し、この山城の北側の一部が地形等からみて路線内に入ることがわかり、約13,000㎡が調査の対象地とされ、内、約4,000㎡を発掘調査想定面積とした。なお、山城の範囲確認には、城郭研究者山崎 一氏にも指導をいただいた。

調査は工事工程との関係上、昭和61年度内に行うこととなり、内匠下高瀬遺跡の試掘終了後その班が引き続き調査に入ることとなった。内匠下高瀬遺跡との移行期間もあり、調査開始は9月1日からとなる。

調査地は山地という地形上の制約から、次のような困難さがあった。

- ①この地域は地すべり地帯であり、不測の事態もありうる。
- ②電気・水道が届かず、発掘事務所も400mもはなれて置かざるを得ず、効率の面から考えさせられた。
- ③真冬は日があたらず遺構面が凍りつくことが多かった。
- ④排土の搬出は、道が狭いことや、山頂部からの土砂排出の方法に問題点が生じた。
- ⑤大島富士山頂部の調査は狭いうえに周囲が急傾斜であり、安全柵等の安全対策処置を講じた。

以上のような条件下の中で、曲輪面の確認、大島富士山頂の掘り下げ、周辺地域の試掘等調査が展開したが、野上川を越えて東側の丘陵上に北山茶臼山西古墳の存在がわかり、大島上城の調査の中で同古墳の調査を併せ行うこととなった。

北山茶臼山西古墳は、南側がややゆるやかな傾斜であるが、東・北・西側は急傾斜となっている山頂部にあり、調査に際しては大島上城同様の困難さに加えて、調査のための登はん路の設置等多くの問題が重なった。また、大島上城調査の山場を越えていたとはいえ、離れた2つの遺跡の調査を併行する非効率もあった。

62年2月、大島上城の調査は終了。残った北山茶臼山西古墳の調査と、さらに内匠下高瀬遺跡(上之宿分)の調査を並行して行なった。北山茶臼山西古墳は既に南半分は開墾で墳丘部が削られ、その際、鏡等の出土があったが、今回の調査により数多くの成果を得ることができ、62年3月末をもって終了した。

整理調査は、63年4月から調査事務所に増設された整理棟で行なわれ、同年12月には整理作業を終了し年度内に報告書が刊行されることになったものである。

第2節 遺跡をとりまく環境

1 位置と地理的環境

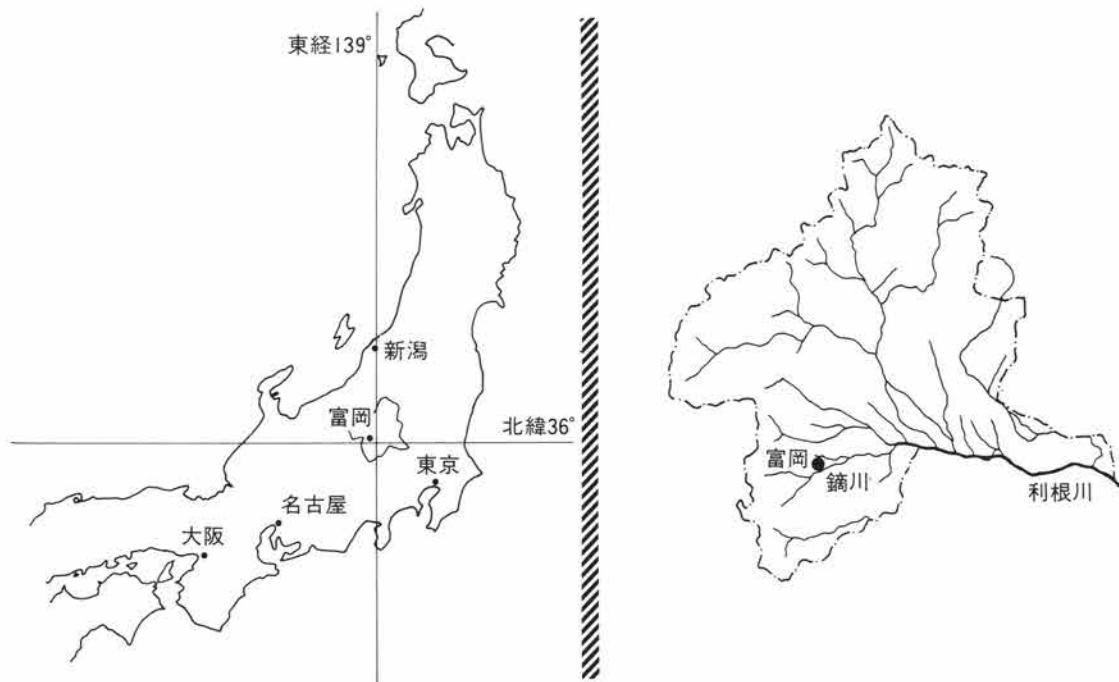
位置 大島上城は群馬県富岡市大島163番他に、北山茶臼山西古墳は同じく富岡市南後箇169番他に所在する。両遺跡が所在する富岡市は鎭川の上・中流域の両岸に開けた地方都市で、鎭川にほぼ平行して私鉄上信電鉄が走る。また、これに並走する形で国道254号線が東西に伸びており、特に関東から信越に抜ける間道的役割を果たしている。

大島上城は古くから地元の人々によって、城郭として認識されていた遺跡であり、大島下城との関係も指摘されている。大島上城の存在する丘陵上にはさらに多くの中世城郭の存在が知られており、これらの城郭を結び付けた防禦ラインが想定される。

また、北山茶臼山西古墳は市指定史跡である北山茶臼山西古墳の西方約500mの丘陵上に立地しており、両者の立地面での共通性が指摘できる。

地理的環境 大島上城と北山茶臼山西古墳が位置する富岡市は東西約16km、南北約14kmのほぼ逆三角形を呈する市域を持つ。地形的には市域を西から東へ流れる鎭川が形成した河岸段丘を中心として、これを南北に挟む形で丘陵地や山地が展開する。河岸段丘は非常に良く発達しており、鎭川の左岸（北側）において、それが広い範囲を占めており、市の中心部もここに形成されている。

大島上城と北山茶臼山西古墳は野上川によって分断されてはいるものの、直線距離にして約500mという指呼の間にあり、地形的にも丘陵上に立地するという共通性をもつ。両遺跡が立地する丘陵は微視的に見れば、前述した野上川によって隔絶されてはいるものの、本来的にはひと続きの同一丘陵である。本丘陵はその東側が鎭川の形成による、頂部が平坦な上位段丘であり、これに西側において関東山地に移行する丘陵地が接続したものと考えられる。従って、東側の上位段丘部においては標高240～250mで比較的緩やかな傾斜をもつ



第2図 富岡市の位置

のに対して、西側の丘陵部は谷が複雑に入り込み、尾根の高低差がかなり認められる。標高も最高値で338mを測り、特に北側斜面においては鑓川の侵食によって断崖をなすところが多い。

大島上城はこのような地形の中で、野上川の西、すなわち尾根の高低が顕著に現れる丘陵の一面に位置する。ここは、また鑓川と野上川に挟まれた部分であり、鑓川だけでなく、野上川も大きく地形を侵食している。特に舟川と部分的に呼ばれる野上川の一部は河床と河岸の比高差が約15mもあり、大島上城を含めた大島地区は北と東を鑓川と野上川という大小河川によって周辺から完全に遮断されるという特徴をもつ。

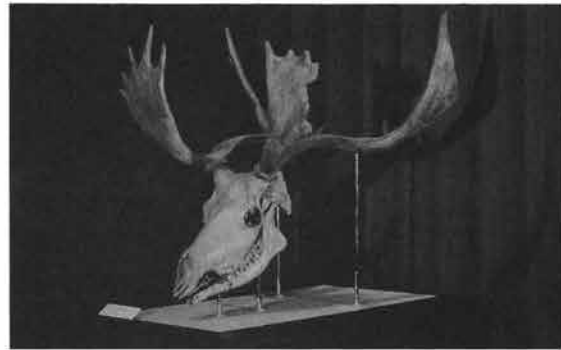
また、北山茶臼山西古墳は野上川の東に位置し、あたかも単独で存在するかのような丘陵上に立地する。特に、その傾向は北からの眺めにおいてより顕著であり、独立した截頭三角形のように見える。周囲との比高差も50mから70mあり、この丘陵の頂に登ると、この傾向が確認される。更にこの北側には鑓川との間に「高瀬田圃」と呼ばれる、富岡市では最も広い平地が展開しており、この眺望は絶景である。ここは地形的には鑓川の下位段丘面に相当し、現在、水田や畑地として農地利用されている。

地質的には富岡市が関東山地の北縁に位置している関係上、市の南部に関東山地の構成岩たる三波川結晶片岩が広く分布している。この他、市西部の一部には中生代の地層が見られるが、残りの殆どの部分は富岡層群と広い範囲で呼称される新生代第三紀の地層に属するものと考えられる。富岡層群は下位より牛伏層、小幡層、井戸沢層、福島層、吉井層、板鼻層に細分されるものであるが、砂岩と泥岩が交互に積み重なった所謂、砂泥互層を基本とする。大島上城の立地する丘陵は小幡層でおおわれており、厚さ10cmから1m数10cmの砂岩と、これとほぼ同じ厚さの灰色の泥岩が交互に堆積した地層をなしている。

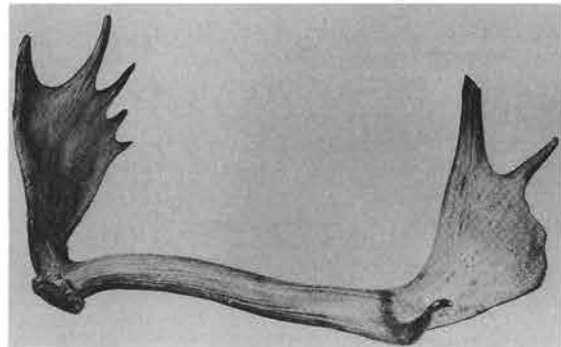
また、茶臼山西古墳の丘陵は井戸沢層であり、10～40cmの厚さの灰色を呈する中～細粒砂岩と、暗灰色泥岩の互層で構成されている。

市の北部には福島層と吉井層が広く分布するが、福島層の分布する上黒岩地区よりオオツノシカの角、下顎骨、脊椎骨、肩甲骨、中足骨、肋骨が出土し、現在市内蛇宮神社に所蔵されている。寛政9年(1797)丘陵の崖より発掘されたオオツノシカの化石骨は角が2本ともほぼ完全であり、保存状態も良好なことから資料としての価値が高い。後期洪積世(15万年～1万年前)の時代が与えられている。

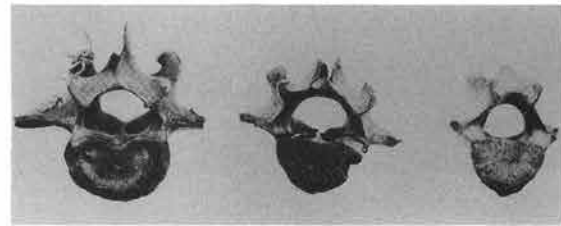
富岡市の産業は古くは養蚕を背景として、官営富岡製糸場がつくられ、製糸業が栄えたが、今は大きく様変わりし、電気工業や金属加工業に転換しつつある。畑地が多く商品作物である、こんにゃく栽培の占める割合が非常に高い。しかし、こんにゃく栽培も農地は昭和50年頃をピークに減少しつつある。



オオツノシカ(復元)



右角



脊椎骨

第3図 オオツノシカの化石
(富岡市 蛇宮神社蔵)

2 歴史的環境

両遺跡の所在する富岡市内の主な遺跡を時代別に概観しておきたい。

旧石器時代 10数年前に本時代最終末に属すると考えられる、長さ15.6cmの尖頭器が採集されたのみで、現在までにこれに追加する遺物の発見や遺構の検出には至っていない。

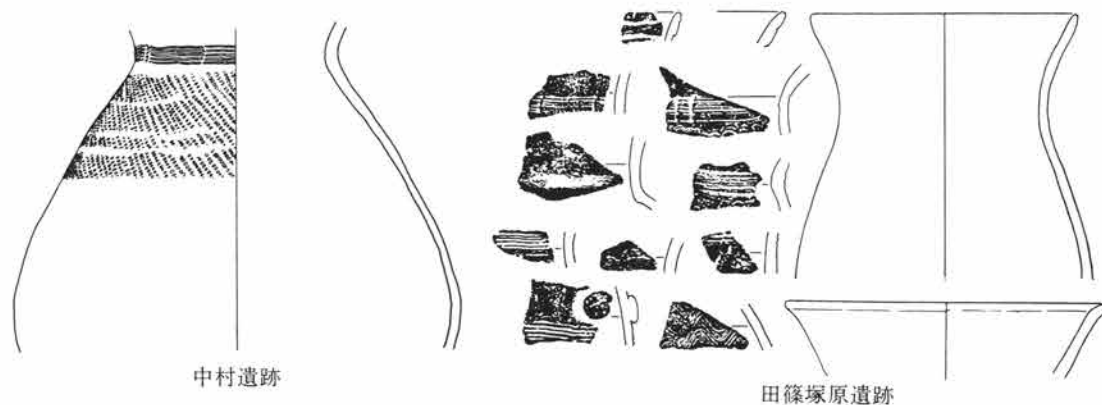
縄文時代 鎭川を挟んで東西方向に広がる丘陵地を中心に多くの遺跡の分布が見られる。最も古い時代の例として、上丹生字和田から押型文系土器が採集されている。さらにこれに続くものとして、関山式土器の出土が見られるが、次の中期と共にこの頃から集落の存在を推定させるようになる。七日市字観音前から焼土を伴って出土した阿玉台式あるいは加曾利E式に比定される土器の出土がそれで、更に安行式土器へと続く。

発掘調査は本宿、郷土遺跡（一ノ宮字本宿他）や小塚遺跡（黒川）で実施されており、次第に遺構の諸相も把握されてきている。本宿、郷土遺跡からは縄文時代の住居跡4軒と土壌が検出されており、関山式期から阿玉台式期の土器が伴出している。

弥生時代 富岡市内におけるこの時代の最も古い時期の例としては黒川字小塚に所在する小塚遺跡があげられる。中期後半に属する本遺跡からは住居跡7軒の他、それらを取り巻くような形で幅、深さともに1.5m程の大きな溝が検出されており、環濠集落を推定させる。また、北西方向にある宇田地内の阿曾岡遺跡からは中期の末から後期全般、更には古墳まで連綿と続く遺物の出土を見ており、小塚遺跡から阿曾岡遺跡への連続性を窺わせている。

後期に属する遺跡として中高瀬遺跡（高瀬字相之田）や田篠塚原遺跡（田篠字塚原）がある。いずれも鎭川右岸の下位段丘面上にあり、土器片の採集のみで遺構の検出はできなかったが、下位段丘面上に集落の存在していたことを示すものと考えられる。特に、田篠塚原遺跡は後期でも中葉から後葉に比定される遺物が散見されており、弥生時代の終末期の様相を伝える。

北山茶臼山西古墳に近い地域では西平原遺跡（野上字西平原）と中村遺跡（南後箇字中村）が知られる。西平原遺跡からは口縁部外側と頸部に櫛描の波状文を施し、「く」字形に折れる頸部を持った壺と、口縁部から頸部、胴上部にかけて波状文、簾状文が施され、壺と同じように「く」字形頸部を持った甕が出土しており、後期初頭の時期が与えられている。また中村遺跡からは北山茶臼山西古墳の立地する丘陵の南斜面にあり、ここから二連ないし三連止めの簾状文と単節縄文（RL）がまわる壺が採集されている。後期中頃以降の特徴を示す。



第4図 弥生式土器実測図

古墳時代 古墳時代の土器はその初期に属するものと思われるものが、南後箇菅原遺跡（南後箇字菅原）と高瀬陣屋遺跡（高瀬字陣屋）から検出されている。菅原は台地裾部の斜面に位置しており、ここから台付甕が出土している。また陣屋遺跡からは石田川式、あるいは五領式土器の流れを組むと考えられる台付甕や壺が出土している。この他、後期に属する本宿郷土遺跡（一ノ宮字本宿他）は竪穴住居跡126軒の他、首長の居館跡の一部と推定される濠が検出されており、後述する堂山稲荷古墳や太子堂古墳などの前方後円墳の被葬者との関連が指摘される。また、久保遺跡（曾木字久保）は鏡川の河岸に近い場所に立地しており、土師器、須恵器、銅製、鉄製儀器の他に、7,000点以上にのぼる滑石模造品の出土を見ている。水ないし山に対する自然尊拝に基づく祭祀遺跡と考えられるが、その遺物の量からして特筆されるべきものである。

富岡市内で最も古い古墳と考えられるものは北山茶臼山古墳である。鏡川の右岸の丘陵上に立地する本古墳は径40mの円墳と推定されるもので、三角縁神人車馬画像鏡(写真図版38)や石釧を出土した古墳として著名である。同範鏡の関係から大和朝廷との政治的関連が指摘され、古墳時代初頭において鏡川の上、中流域一帯を支配し得た豪族層が被葬者と推定される。

しかし、これに前後する時期古墳は北山茶臼山西古墳の他は見当たらず、富岡市内に所在する他の古墳の殆どは後期に築かれたものと考えられている。

主要古墳群は鏡川の両沿岸部の下位段丘面を中心に分布する(第6図)。その内、最も古墳の数が多い芝宮古墳群は105基を数えて、濃密な分布を示す。いずれも6世紀から7世紀にかけて築造されたと考えられるもので、所謂、後期の群集墳といえることができる。この辺の経緯について「富岡市史」古代編から引用しておく。



第5図 天王塚古墳地形図

第I章 発掘調査の実施と経過

「まず最初の6世紀中葉前後に古墳がつくられはじめたのは、鎭川縁辺の桐渚古墳群、芝宮古墳群、七日市古墳群、一ノ宮古墳群であった。この中で、七日市古墳群では御三社古墳、一ノ宮古墳群では堂山稲荷古墳といった前方後円墳が築かれており、この時点では両古墳群を築造した集団が大きな勢力を有していたと思われる。

6世紀後葉から末頃になると、あらたに南蛇井古墳群、上田篠古墳群、長久保古墳群さらに和田古墳群といった古墳群の築造がはじまっている。一ノ宮古墳群では前方後円墳の太子堂塚古墳が築かれ、ひき続いて優勢であったと考えられる。ところで6世紀末から7世紀初めの時期には甘楽町二日市古墳群では、前期の天王塚古墳の系譜につらなる全長100mという大型の前方後円墳、笹ノ森稲荷古墳がつくられており、鎭川流域でもっとも大きな勢力をもつ首長が存在したことがわかる。

これと前後する頃から、桐渚古墳群中に前方後円墳三基が次々つくられてゆき、7世紀代に有力な勢力となっている。7世紀代には、あらたに横瀬古墳群、塚原古墳群をはじめとする小古墳群の築造も開始されており、当地域での古墳築造の最盛期に達する」。

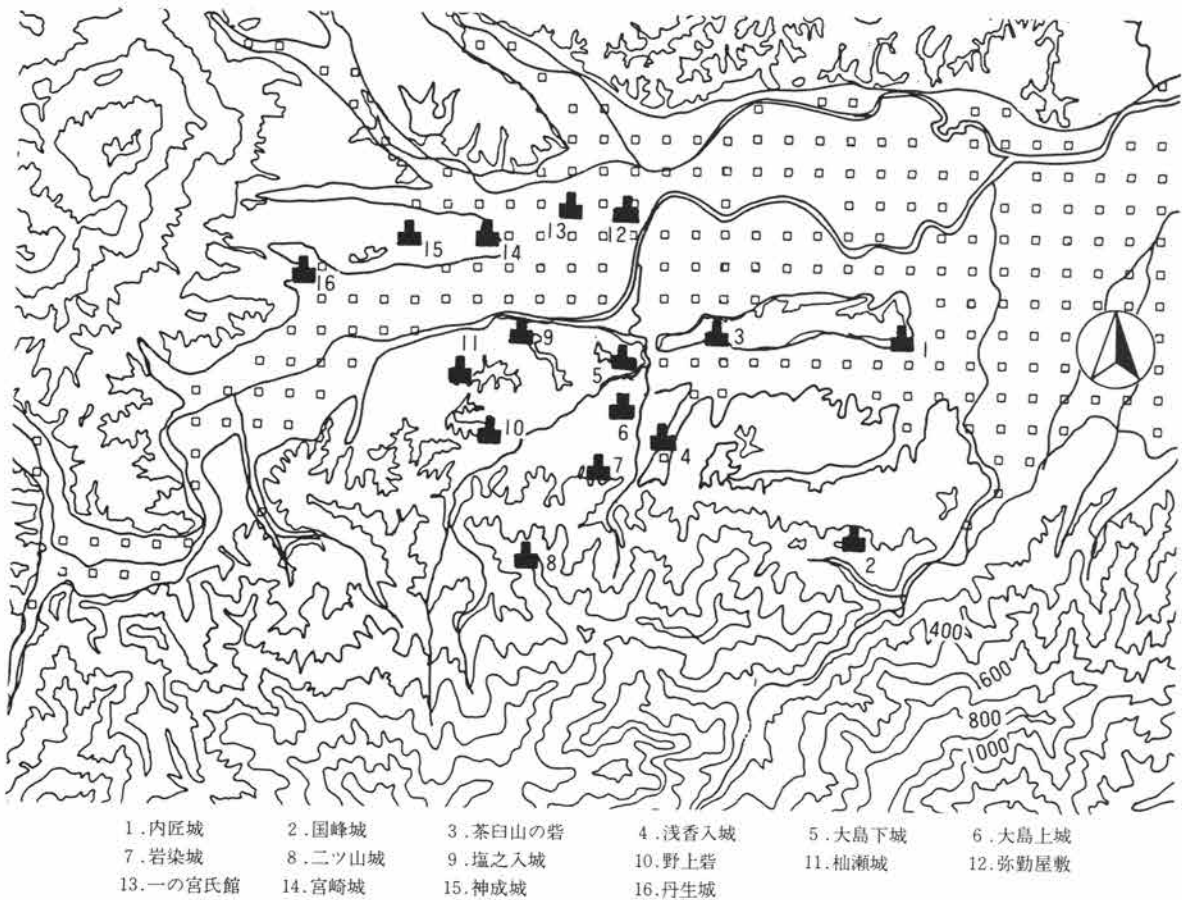


古 代 富岡地域の古代の集落は古墳時代後期に始まり、それを継承して立地することが多いとされている。分布する範囲も市域全域にまたがる可能性が強く、多くの包蔵地が確認されている。しかし、実際の遺跡調査例は意外と少なく、本宿・郷土遺跡（前掲）、内匠遺跡（内匠）、原田篠遺跡（田篠字諏訪平、原町）の3例が知られるものである。中でも本宿・郷土遺跡からは古墳時代に引き続いて、99軒の竪穴住居跡が検出しており、さらに周辺に広がることが推定されている。

また、通称「高瀬田圃」には条里制水田が存在していたことを推定させる区割りやB軽石（1108年浅間山より降下とされる軽石粒）に埋まる水路が圃場整備事業に伴う事前調査で確認されており、古代における大水田地帯であったことが想定されている。

中世 戦国時代、西上州の支配は安定せず、小幡氏、上杉氏、武田氏、北条氏、更には豊臣氏とめまぐるしく変わっていったが、そういった激動の中で富岡の丘陵上には多くの中世城郭が構築されていった。甲州、信州、西上州をその掌中におさめた武田信玄は永禄10年、生島足島神社に起請文を奉じたがそこに登場する240名余の武将の中に、上州の武将も100名余りの名を連ねている。その中で、特に鎭川流域に根ざすと考えられる武将として、小幡三河守、多比良、高（馬）庭、小串、多胡、内山、高田小次郎、小幡次郎、小幡道佐、後閑信純、高瀬能業などを挙げる事ができ、ここに多くの在地主豪が割拠していたことを推定させている。

富岡市所在の中世城郭の内、鎭川上、中流域の両岸には16に及ぶ城郭の存在が確認されている（第7図参照）。大島下城以外は全て丘陵上に築かれており、所謂山城の範疇に入るものである。城郭は時代時代のニーズに応じて何度も改修されることが通例であり、従って時代比定には様々な要素が混在しているために多くの困難を伴うが、一応これら16の中世城郭には室町から安土桃山時代にかけての時代が与えられている。



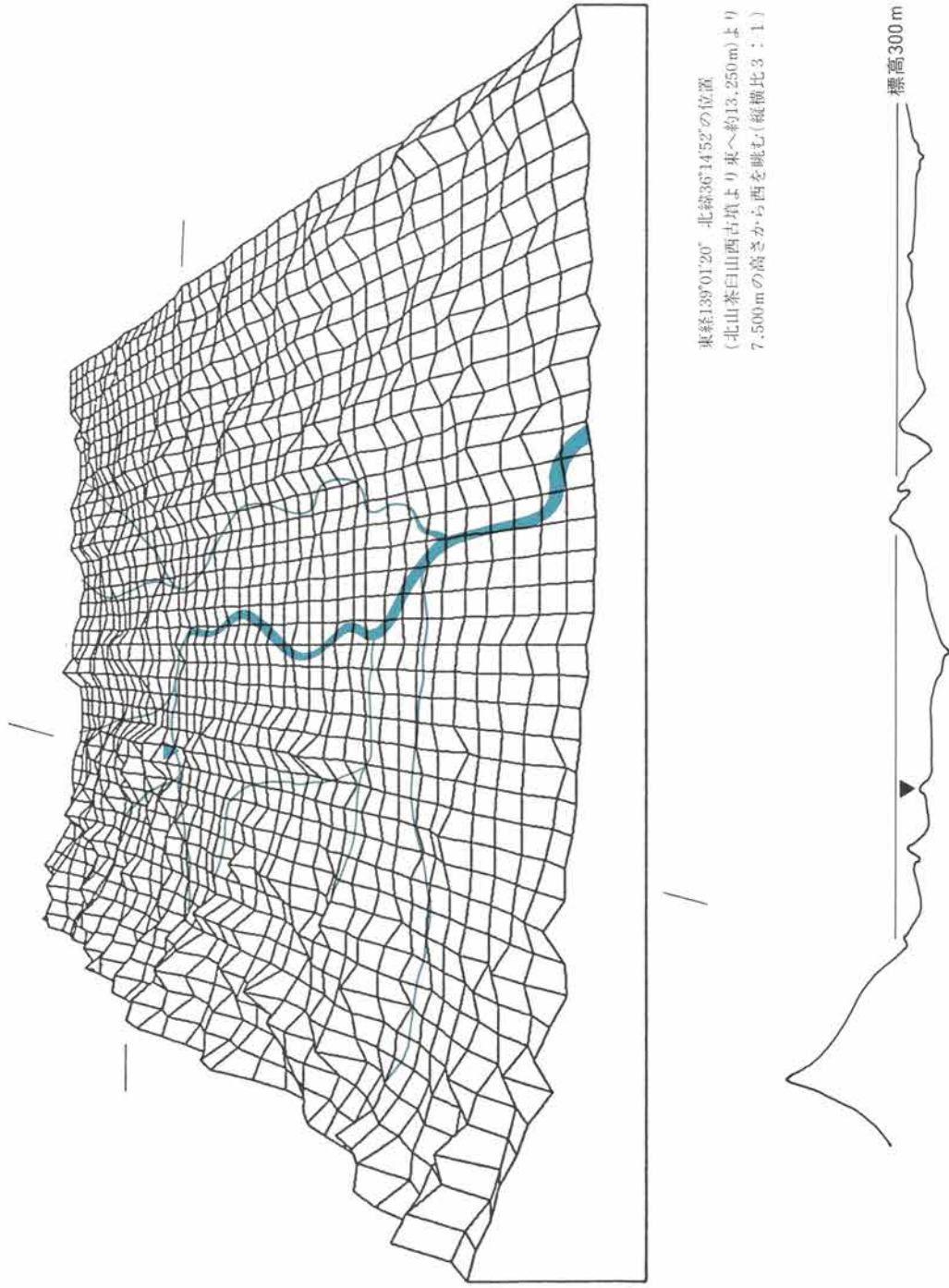
第7図 鎭川周辺中世城郭位置



第8図 遺跡位置図

第1表 遺跡地名表

番号	時代	種別	名称	所在地	備考
1	古墳	墳墓	二日市古墳群	富岡市二日市	
2	室町、安土桃山	城館跡	蕨城跡	// 中島976~999	
3	古墳	墳墓	後賀土橋	// 後賀土橋229~236	
4	縄文、古墳	包蔵地	後賀	// 後賀比浦297他	
5	// //	//	白岩	// 白岩清水403他	
6	// //	//	相野田(大平)	// 相野田大平810他	
7	古墳	墳墓	塚原古墳群	// 上田篠字塚原字駒形甲90	
8	古墳後期		久保遺跡	// 曾木字久保827他	富岡市教委(1982)
9	古墳	墳墓	原田篠古墳群	// 字菅川241他	「上田篠古墳群・原田篠古墳群発掘調査報告書」(1984)
10	//	//	布和田古墳群	// 田篠字布和田203他	
11	//	//	上田篠古墳群	// 上田篠字北谷戸998他	
12	//	//	善慶寺古墳群	甘楽郡甘楽町大字善慶寺字原1234他	
13	縄文	包蔵地	上ノ山遺跡	富岡市上高尾上ノ山817他	
14	//	//	背谷戸遺跡	// 背谷戸甲815、乙815	
15	縄文、弥生、古墳	集落	内匠遺跡	// 内匠1192他	県埋文事業団調査(1987)
16	古墳	包蔵地	上之宿遺跡	// 内匠字上之宿847他	「上之宿・千足遺跡発掘調査報告書」 富岡市教委(1988)
17	室町、安土桃山	城館跡	内匠城跡	// 内匠2309~2392他	県埋文事業団調査(1987)
18	//	//	富岡城跡	// 山際2767城山1409~1435	
19	//	//	十王山塁跡	// 十王山149	
20	古墳	墳墓	若宮古墳群	// 馬具塚180	
21	//	//	芝宮古墳群	// 芝宮462他	
22	江戸、安土桃山	城館跡	富岡陣屋跡	// 城1南城45~51他	
23	古墳	墳墓	桐淵古墳群	// 高瀬他	富岡市教委調査
24	江戸	城館跡	高瀬陣屋跡	// 高瀬陣2926~2972	
25	室町、安土桃山	//	高林城跡	// 上黒岩城山1470~1487	
26	//	//	七日市陣屋跡	// 七日市田郭1401~1421	
27	古墳	墳墓	七日市古墳群	// 七日市1452他	富岡5号墳調査(1968)
28	//	//	横瀬古墳群	// 上高瀬横瀬松谷戸802他	富岡市教委調査(1987、1988)
29	//	//	北山茶白山古墳	// 南後箇北山99~1他	三角縁神人車馬画像鏡出土
30	//	//	北山茶白山西古墳		当該遺跡
31	室町、安土桃山	城館跡	黒川城跡	// 黒川日向292他	
32	古墳	墳墓	一の宮古墳笑稲荷森支群	// 一の宮下り松稲荷森245、238	「稲荷森遺跡発掘調査報告書」 富岡市教委(1980)
33	古墳、古代、中世	居館跡等	本宿・郷土遺跡	// 一の宮字本宿、田島字郷土	「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」 富岡市教委(1981)
34	室町、安土桃山	城館跡	大島下城跡	// 大島屋敷36~59他	
35	弥生、古墳	包蔵地	阿蘇岡遺跡	// 宇田阿蘇岡433~484	
36	古墳、奈良、平安	//	山根遺跡	// 宇田山根30~133	
37	古墳	墳墓	不動塚古墳	// 宇田山根129宿道590	
38	//	//	神農原古墳群悪沢支群	// 宇田神農原悪沢1079他	
39	室町	城館跡	塩之入城跡	// 塩之入1571、1572	県埋文事業団調査(1988)
40	// 安土桃山	//	大島上城跡	// 野上西平日向1625他	当該遺跡
41	//	//	藤田地域城跡	// 野上(全域)	
42	// //	//	岩染城跡	// 下岩染城山378~395	
43	// //	//	宇田城跡	// 宇田東小谷666~787他	
44	縄文、古墳	包蔵地	神守寺南遺跡	// 宇田恵下原1中寺田	
45	室町、江戸	城館跡	宮崎城跡	// 宮崎本城101~118他	
46	// 安土桃山	//	大山城跡	// 神農山道1207、1208	
47	// //	//	野上内出跡	// 野上内出551~613	
48	// //	//	二ツ山城跡	// 野上二ツ山2484	
49	// 桃山	//	神成城跡	// 神成梅木田1188~1194他	
50	古墳	墳墓	不二塚	// 神成不二塚304	
51	縄文、古墳	集落	早道場遺跡	// 早道場683他	県埋文事業団調査(1988)
52	室町、安土桃山	城館跡	丹生東遺跡	// 下丹生城210~376	
53	古墳	墳墓	和田古墳群	// 上丹生和田	
54	縄文、古墳	包蔵地	丹生	// 山口井出森甲841、842甲75	
55	室町、安土桃山	城館跡	蚊沼内出跡	// 蚊沼内出274~281	
56	古墳	墳墓	物見塚	// 南蛇井熊野乙614	



第9図 鳥瞰図及びエレベーション図(矢印が北山茶臼山西古墳)(コンピューターグラフィック)

第3節 調査の方法

1 グリッド設定法

大島上城遺跡、北山茶臼山西古墳の調査対象地は南西から北東方向にゆるくカーブした東西に細長い範囲である。幅員は50mから100mと広狭があり、東西の延距離は約300mを測る。

調査区の区割りは、大島上城遺跡、北山茶臼山西古墳とも国家座標のX軸、Y軸に乗る形で軸線を設定したが、各グリッドの呼称については両遺跡、別々の方法を採用した。

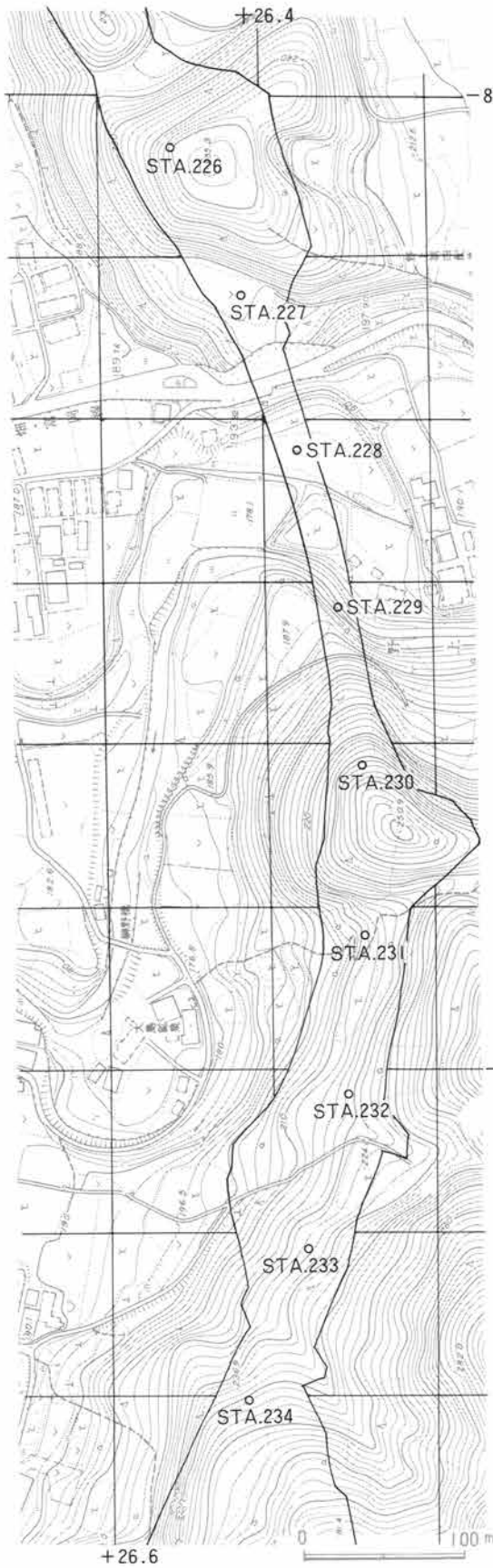
大島上城遺跡 遺跡地の北東隅を調査原点として、ここにA0I0を置いた。A0I0の国家座標は第IX座標系のX=26480.000、Y=-86700.000にあっている。この原点を基準として、南西方向に4mグリッドを設定していった。またその際南北ラインはA0、A2……A98、B0、B2……とアルファベットと算用数字、東西ラインはI0、I2……I98、II0、II2……とローマ数字と算用数字の併記で表現した。尚、各グリッドの呼称は北東隅のポイント名をもって、そのグリッドを示すものとした。

北山茶臼山西古墳 大島上城遺跡同様、北東隅を調査原点として、ここにA0-0を置いた。A0-0の国家座標は第IX座標系のX=26444.000、Y=-86416.000にあっている。この原点を基準として、南西方向に4mグリッドを設定していった。南北ラインA0、A2、……A16、東西ラインに0、2、……20と表記し、各グリッドの呼称は大島上城遺跡に準じている。

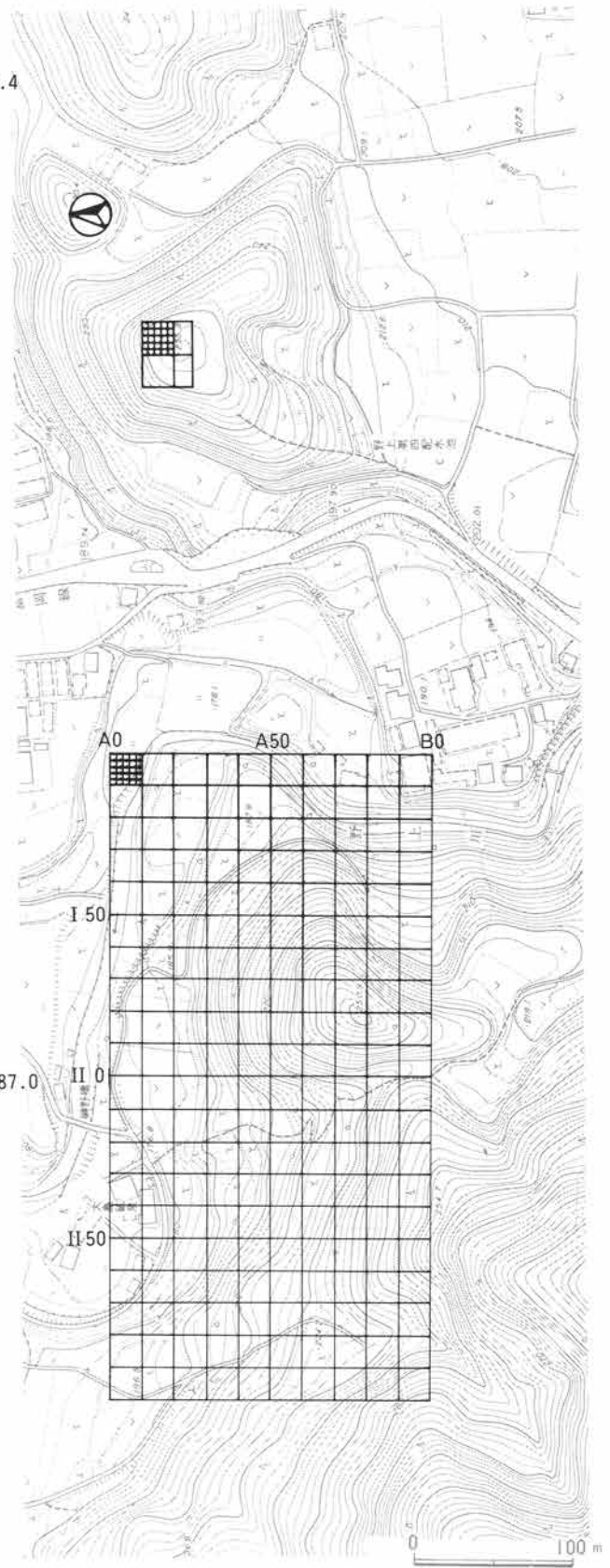
2 調査の方法

実際の調査にあたっては大島上城は全面発掘を旨とし、遺跡該当地全面の表土の排土を行った。また、丘陵上の立地という地形的特殊性から表土の堆積が少ないことが予想されたため、遺構の破壊を極力避ける目的で、人力による表土除去を第一義とし、遺構確認を目ざした。しかし、部分的には調査の進行の中で、人力では表土除去に困難が伴う箇所（調査該当地は丘陵北側斜面に位置するため、冬場は凍結によって、人力では歯が立たない箇所が出て来た）において部分的に小型重機を導入して排土を行った。また、遺構の存在が殆ど予想されない箇所においては、グリッド内の調査を先行し、遺構が更に広がる可能性のある箇所については随時拡張するものとした。調査区域はいくつもの平坦面の集合体としての地形的特徴を有していたため、マクロ的にはこれら全ての平坦面を一括して、大島上城の一部としての可能性を考える一方で、ミクロ的には平坦面ひとつひとつを地形的にも、機能的にも独立性が高いものとして、平坦面毎に調査を進行していく方法を採用した。便宜的に、この平坦面を「テラス」と呼称し、第11図に示す如く、南東端の平坦面から始まって北西方向に順次、テラス①、テラス②、テラス③……と名づけていった。また、縄張りの観察から、曲輪の北端と推定される『百八灯』直上の平坦面はテラス⑩と呼称した。また、所謂山城の範疇に入る大島上城は他の例外に洩れず自然地形を巧みに利用していることが看取されたため、自然地形と大島上城の縄張り関係をより明確に把握することを目的に、大島上城全体をカバーする形で現況地形図を作成した。

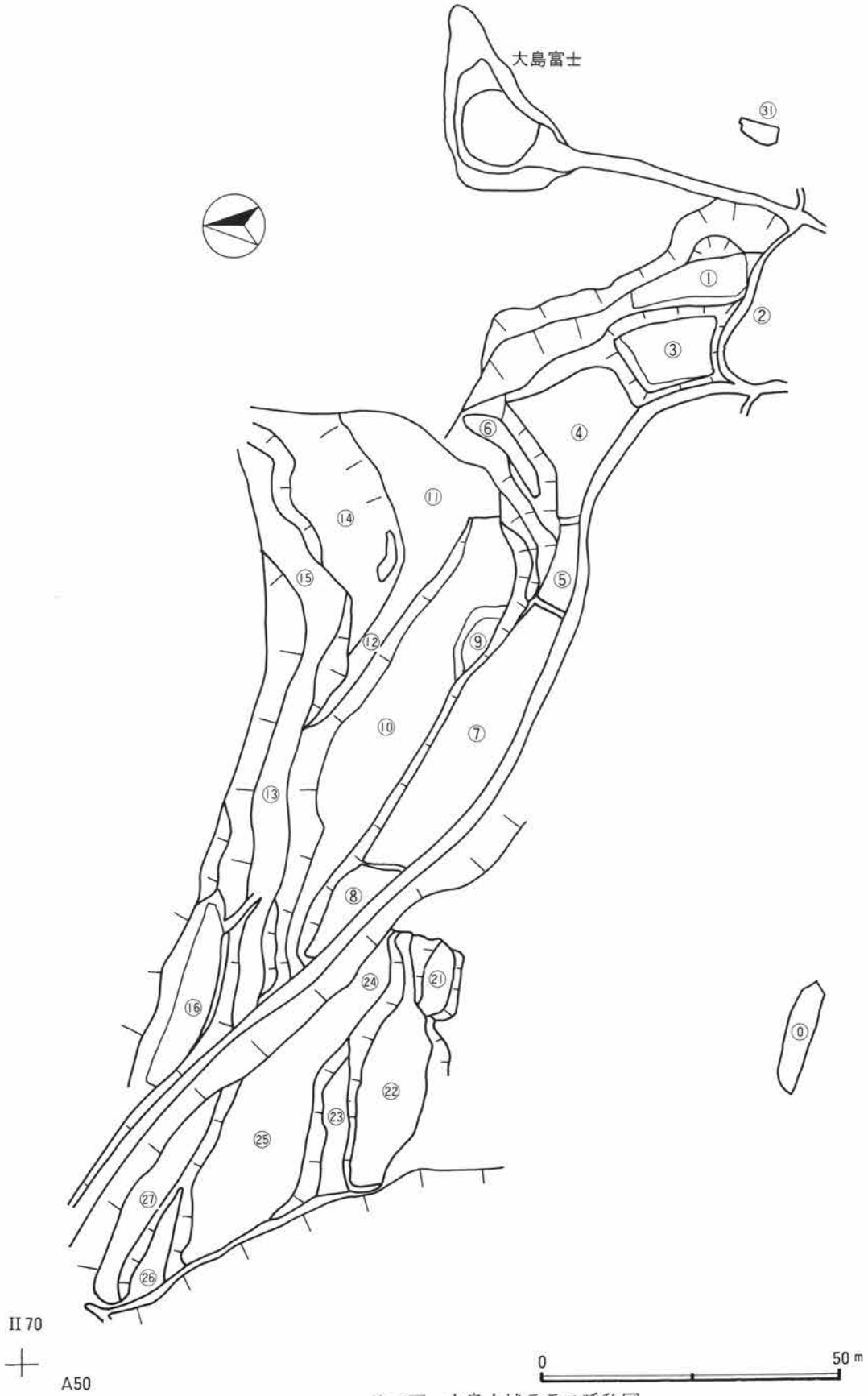
北山茶臼山西古墳は遺構の性格上、まず、現状の地形図作成に着手し、20cm間隔で等高線を計測した。また、大島上城と同様、調査該当地全面の発掘を旨とした。しかし、古墳の南半分は既に耕作によって完全に削平されてしまっていたため、切り取られて残った墳丘断面の観察を重視し、今後の調査方針の方向づけとした。主体部の調査は主軸ラインとこれに直交するラインを基準として、1m方眼を遣り方で設定し、出来る限り正確な図面を作成することを心がけた。また、遺構確認のための表土除去作業も大島上城同様、人力による方法を採用したが、古墳の南の緩斜面には多量の表土の堆積が推定されたため、民地を借用して登坂路をつくり、重機を丘陵上にあげて一部表土除去を行った。



第10図 遺跡周辺路線図



第11図 グリッド配置図



第12図 大島上城テラス呼称図

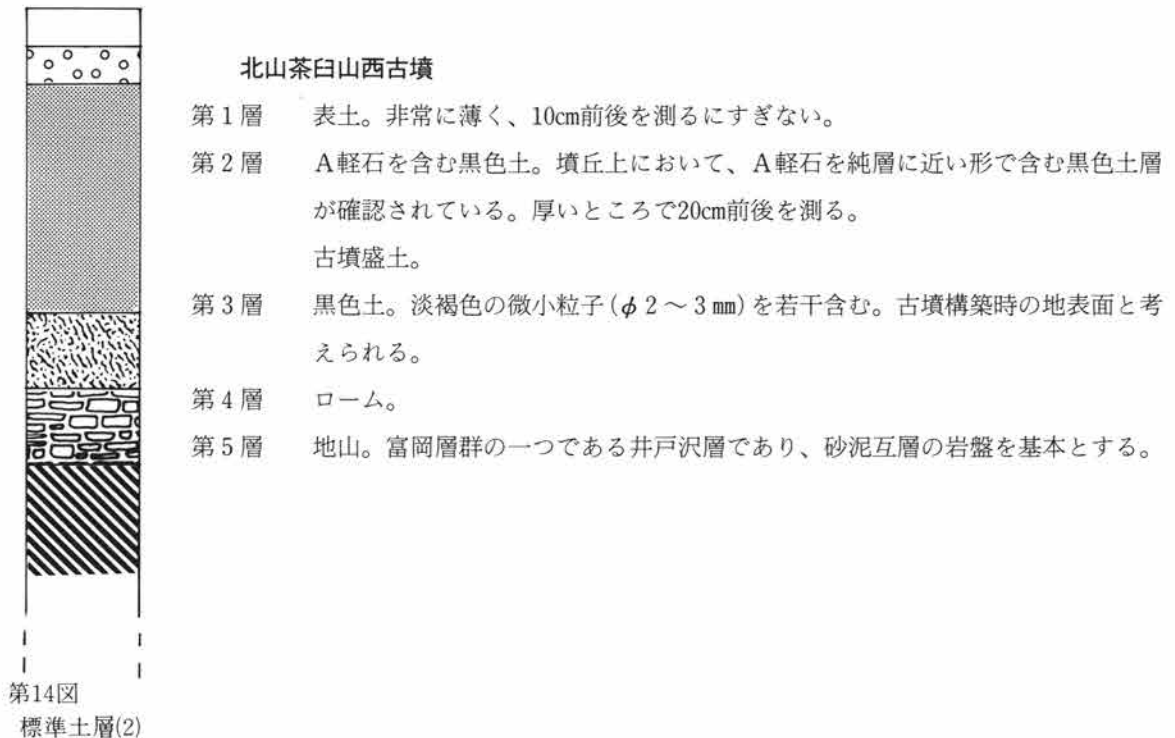
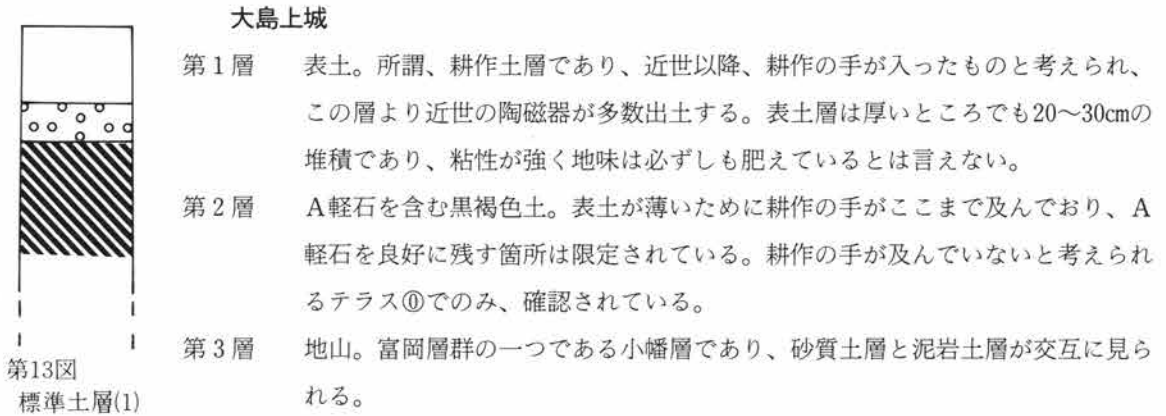
第4節 標準土層

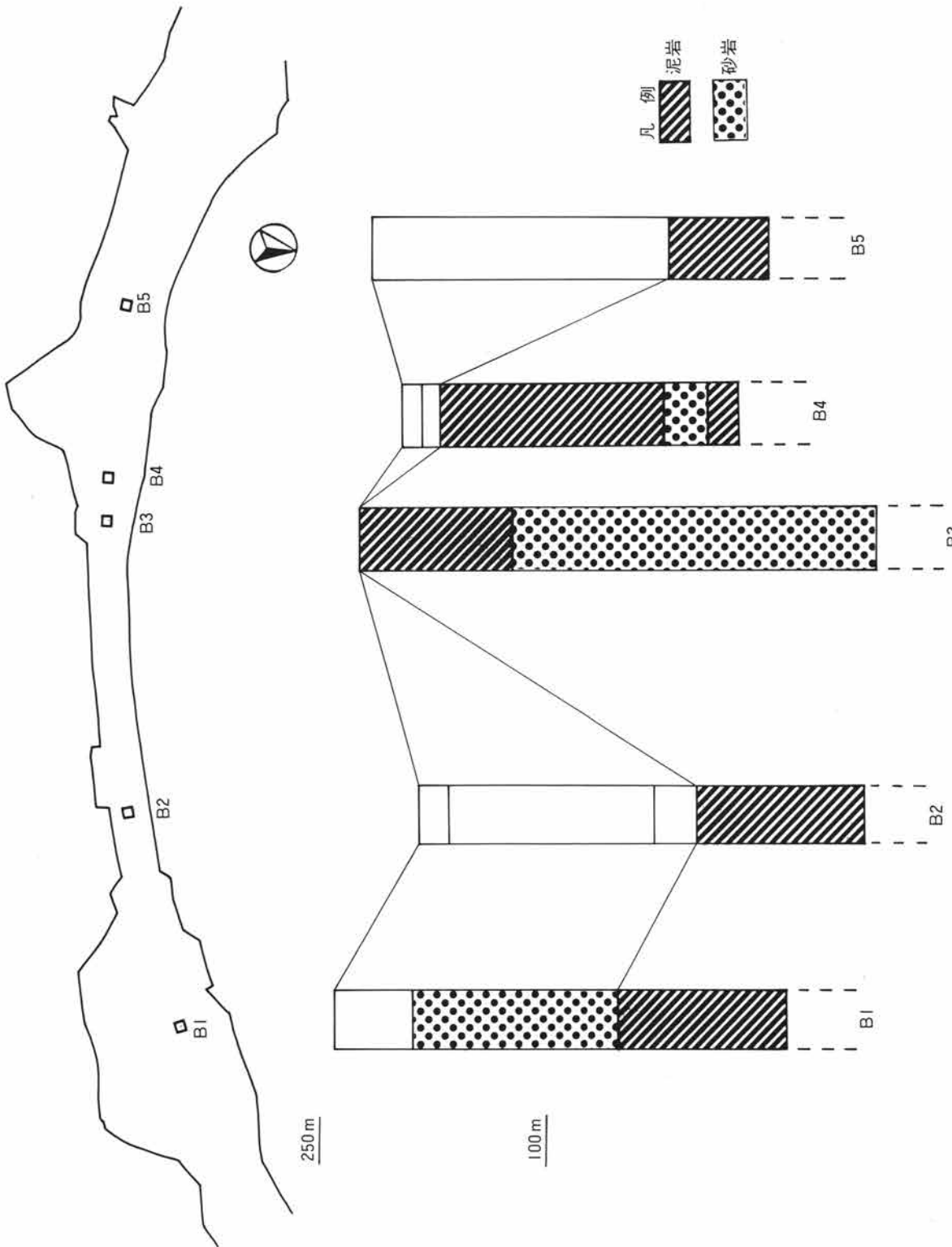
大島上城、北山茶臼山西古墳とも丘陵上に立地しているため、土量の堆積が少なく、従って、表土層以下の土層は両遺跡とも貧弱である。

大島上城遺跡においてはテラスと名づけた平坦部分は近世より畑地として利用されていたため、ただでさえ、土量の堆積が少ない上に、耕作の手によって更に地山に近いところまで攪乱が及んでいる箇所が多い。

また、本遺跡地の立地する地形は有数の地すべり地帯であり、部分的に土砂の地すべりによって堆積したと思われる二次的堆積を示す地層も見られる。

北山茶臼山西古墳は大島上城に比較して土量の堆積が多かったものと推定されるが、ここも単独丘陵上の頂部全面が古墳として利用され、人為的な土盛りが見られるため、古墳構築以後の自然の地層の堆積を示す箇所は皆無に等しかった。





第15図 ボーリング柱状図

第5節 調査の経過

発掘調査の経過 大島上城の発掘調査は昭和61年9月1日より開始した。当初、調査区域は9月に入って直後ということであり、雑草が生い茂り、調査区域への道路確保もままならないという状況であった。そこでまず、現状把握ということでこの雑草の除去に全力をあげた。調査区域は丘陵斜面が杉林であったが、それ以外の比較的平坦な面は桑畑として利用されていたため、雑草だけでなく放置された桑が縦横に伸びており、これを伐採することもあって、「なた鎌」を持ち込んでの大作業となった。しかも、除去した上物は膨大な量に上り、たちまち山になるという有り様であった。このため、除去した上物を処分する方法を考慮した結果、その場で焼却する方法が最善として、現地に焼却炉をつくり、9月10日より焼却作業と伐採作業を同時平行で行っていった。結局、この上物除去に1ヵ月弱を費やしたが、9月29日遺跡地全体のバルーンによる航空写真撮影を実施した。また現場事務所と遺跡地が離れていたために、現地遺跡地内にテントを設営し、ここを休憩所として活用した。

10月初めより全面発掘を前提として調査に着手。当面、テラスと称した平坦面から遺構検出を開始した。更に10月下旬からは当初、大島上城の物見台と推定された大島富士と呼ばれる小丘陵の調査も加わった。ここでは丘陵頂部の排土処理のために、「シュート」をつくり、随時、下のテラスに排土を落とす方法を採用した。それと共に、仮設営のテントに代わってプレハブ建物を現地に建て、器材置場兼休憩所の機能を持たせた。

北山茶臼山西古墳の調査は11月下旬より大島上城の調査と平行という形で着手した。当面、上物の除去と地形図作成を目標とした。例年にない大雪に見舞われ、しかもそれが根雪になるという悪条件の中で、大島上城の調査は困難を極めたが、それでも中～近世の祭祀跡、虎口遺構、土坑、古代の大溝等の検出を見、2月28日をもって調査を終了した。西古墳の調査はその後も継続して行われ、3月15日、16日には現地説明会を催し、650名弱の見学者を集めた。更に、3月中旬より主体部の調査に入り、方格規矩鏡や鉄矛等を検出し、3月31日をもって全ての調査を終了した。

調査経過の概要については次のとおりである。

第2表 調査日誌(抄)

月 日	大 島 上 城	北 山 茶 臼 山 西 古 墳
昭和61年 9月1日(日)	試掘調査終了に伴い内匠、下高瀬遺跡より発掘調査器材の運搬。現場事務所営繕作業。	
9月5日(金)	市杭確認。草刈り作業開始。	
9月10日(水)	上物焼却作業開始。	
9月29日(月)	大島富士所在浅間神社跡のお払い(辛科神社宮司神保侑史氏)。大島上城全景航空写真撮影(バルーン使用)。	
10月2日(木)	測量用方眼杭打ち作業。	
10月6日(月)	調査グリッド設定。排土処理用シュート設営作業。	
10月9日(木)	発掘作業開始(テラス①より着手し、順次西へ向かって進む)。	
10月14日(火)	大島富士現況地形図作成。18日(土)まで。	
10月19日(日)	大島上城地形図作成のための航空写真撮影。	
10月22日(水)	遺跡隣接地にプレハブ建設。	
10月27日(月)	大島富士トレンチ掘削作業。	
11月2日(日)	発掘作業員追加募集。	
11月4日(火)	遺跡内縁辺テラスに掘削用重機導入。	この日より、大島上城の調査と平行して西古墳の調査に着手。
11月25日(火)		遺跡内の立木伐採作業。
11月27日(木)		現況地形図作成。12月13日(土)まで。
12月2日(火)	発掘調査全面に展開。	
12月22日(月)	遺構検出作業開始。	富岡市立額部小学校6年生見学。

第5節 調査の経過

昭和62年 1月7日(水)		安全フェンス取付及び昇降階段設置工事。
1月14日(水)	安全フェンス取付工事。	
1月17日(土)	村田修三氏(奈良女子大学助教授)、山崎 一氏(県文化財保護審議会委員) 来跡。大島上城現地踏査。	
1月20日(火)		墳丘東西セクション精査。
1月26日(月)		方格規矩鏡一部出土。
2月2日(月)		掘削用重機導入。排土処理用シュート設置作業。
2月9日(月)	遺構の最も集中するテラス③及び大島富士を中心に調査展開。 大島富士中世文化面と、テラス③内の古代大溝検出作業。	調査一時中断し、大島上城調査に合流。
2月26日(水)		調査再開。 墳丘上、A軽石堆積面まで排土。
3月2日(月)	全景航空写真撮影(ラジコン使用)。	
3月5日(水)	遺跡地内断ち割り作業(下層遺構の有無を確認)。大島上城現場事務所を撤去し、西古墳現場事務所へ器材運搬。 2号墓墳調査。	
3月13日(金)	埋め戻し作業。14日(土)まで。 緑川 順氏(群馬県警鑑識課) 来跡。2号墓墳より出土の人骨鑑定。	
3月14日(土) 15日(日)		現地説明会。見学者646名。
3月17日(火)		周溝及び1号住居跡調査。
3月18日(水)		森 浩一氏(同志社大学教授) 来跡。
3月中旬		主体部調査開始。
3月25日(水)		主体部調査のため、遣り方設定。 白石太一郎氏(国立歴史民俗博物館教授)、杉山晋作氏(同助教授)、茂木雅博氏(茨城大学助教授) 来跡。
3月26日(水)		小林行雄氏(京都大学名誉教授) 来跡。
3月下旬		遺跡全景写真撮影。 墳丘構築面、石組検出作業開始。 墳丘構築面写真撮影。
3月31日(水)		現場発掘作業終了。 現場撤収作業。

※また、発掘作業中、地元の小学生、保育園児の多くの訪問を受け、勇気づけられることが多かった(富岡市立一の宮小学校4年生、額部小学校5年生、6年生、額部保育園年長児)。



担当の説明に聞き入る作業員(上城)



調査の見学に訪れた額部保育園児(西古墳)

第16図 遺跡風景

付載 大島地区 百八灯祭事について

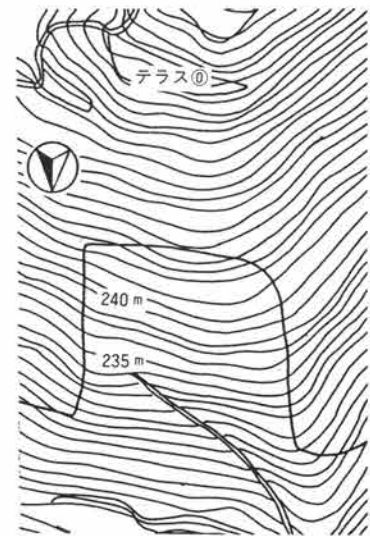
大島地区は先にも触れたように、地形的に独立性の強い地区であり、そのこともあってか、盆行事の一つである『百八灯』が地区の人々の手で今に伝えられている。既に、大島地区の『百八灯』は「群馬県史」資料編27や「富岡市史」民俗編に収録されているが、今回行事に同行する機会を得たので当日の時間を追う形で改めて稿を起こしてみたい。

日時：昭和63年8月16日(火)……例年8月16日が行事日として設定されている。

場所：富岡市大島168番他の通称「城山」とよばれる丘陵の中腹斜面（地形図参照）

- 5時30分 ・大島地区の全戸25軒から各1名が「城山」の西にある空き家に集合を始める。
- ・この時に手に手に点火用の、青竹にボロ布を巻いたものと、実際に点灯用に使うボロ布を持って集合する。
- 空き家には鉄の棒の先に、直径10cm程度の管をつけたものが保管されており、これに各自が持ち寄ったボロ布を詰め込んで点火の下準備をする（この時の点灯用の鉄棒は各自1年の月数である12本を用意する）
- 6時00分 ・軽4輪トラックに道具を積み込み、現地近くまで運びあげる。
- ・現地には中段に25人程度がちょうど腰を降ろせる場所があり、ここに道具一切を置く。
 - ・まだ、時間があるらしく花火をあげて、氣勢を高める。
- 6時30分 ・副区長を座長に今年の文字を何にするか、話し合いが始まる（毎年、当日この話し合いで文字が決定される）。
- 今年は雨が多いということで、これにまつわる提案が多く出される。

①光 ②空 ③青 ④天 ⑤火 ⑥太



U形に区画された部分が百八灯用地



集合場所で下準備（5：30pm）



文字の決定（6：50pm）

第17図 百八灯(1)

- 6時50分 ・この中で、光、天、太が残り、話し合いの内に太陽の太の字に決定する。
 - ・決定に基づき、字くばりが始まる。藁縄を12尋から15尋程度に何本か切り、これを丘陵斜面にはって、全体の字くばりのバランスを考える（字くばりの手順は非常に手慣れたもので、用地をいっばいに利用して字くばりを進める。また、この時に皆が最も真剣になるようである）。
 - 7時05分 ・字くばりが終了する。
 - ・字くばりの縄に沿って、用意してあった点灯用の鉄棒を立て始める。約30cm間隔。
 - ・この鉄棒にやかんで石油を注ぎ込む。この時に、字くばりの修正を行う。25人が連携して機能的に動く。
 - 7時30分 ・簗川を挟んで対岸に位置する一峰公園で花火があがると同時に、点火用の青竹で一斉に点火が始まる。1分足らずで点火が終わり、点火用の青竹を持って、一気に丘陵を駆け下りる。
 - ・手に手に火を携えて各戸に帰る。
 - 8時00分 ・約30分燃え続けた火もようやく消えようとする。
- 百八灯の行われる場所は一部が関越道上越線の路線内にあたるため、来年からは更に数m上に登ったところで行われる予定である。



一斉に点火（7：30pm）



下山（7：35pm）

第18図 百八灯(2)

第3表 最近20年間の文字の変遷

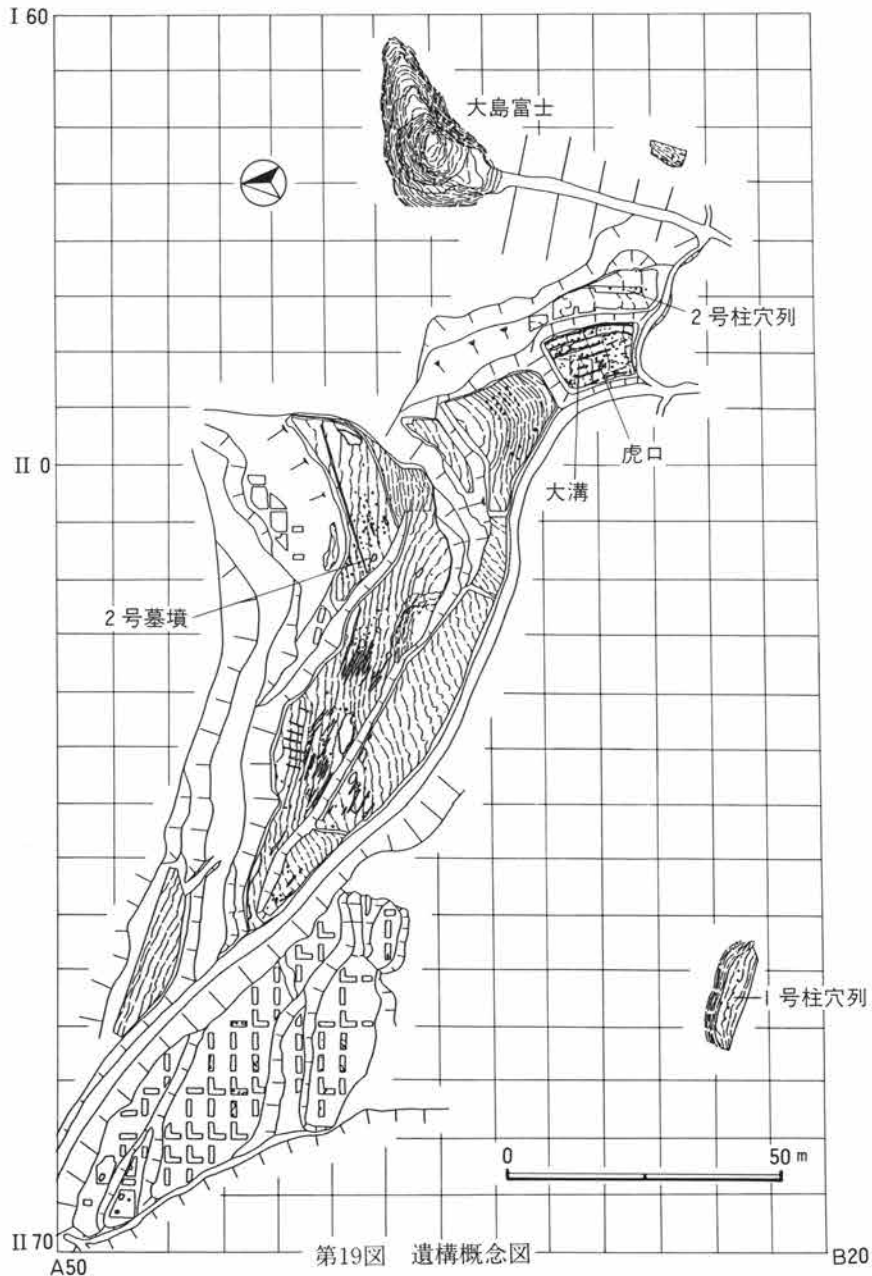
年 度	文 字	摘 要	年 度	文 字	摘 要
昭和 43 年	日	伸び行く日本	昭和 54 年	公	公明選挙を
44	ウ	アメリカ宇宙旅行	55	光	光を求めて
45	七 十	西暦1970年	56	上	景気上昇を求めて
46	天	天皇外遊記念	57	台	台風が多く 被害が無い様に
47	百	明治100年			
48	水	水を求めて	58	成	赤城国体成功を祈り
49	止	インフレを止めて	59 8/28	雨 水	日照り続きのため、雨を 求めたが効き目なく再度、 水で挑戦
50	安	安定経済を願って			
51	心	心を正しく ロッキード事件	60	祈	60. 8. 12 日航機墜落 520名の冥福を祈り
52	33	終戦33年			
53	日 中 水	日中交友平和条約 干ばつ 雨を求めて	61	良	良好を願って
			62	民	

大島上城遺跡

第II章 大島上城遺跡

第1節 遺跡の概観

大島上城遺跡からは大きく分けて、城郭に関する遺構と祭祀に関する遺構が検出されている。城郭(大島上城)に関する遺構として、テラス⑩、テラス①より柱穴列が、またテラス①、テラス③、テラス⑩より中世土器を出土するピットが検出されており、更にテラス③は虎口遺構として把握することができた。また、大島富士からは中世から近世にかけての祭祀跡として、古銭を出土する二つの文化面と、近世神社遺構の一部と見られるものが検出された。この他、大島富士からは縄文時代のピットを、テラス③からテラス⑥にかけては古代の大溝を、またテラス⑪からは近世墓等を検出することができた。以下、時代を追って詳述していくことにする。



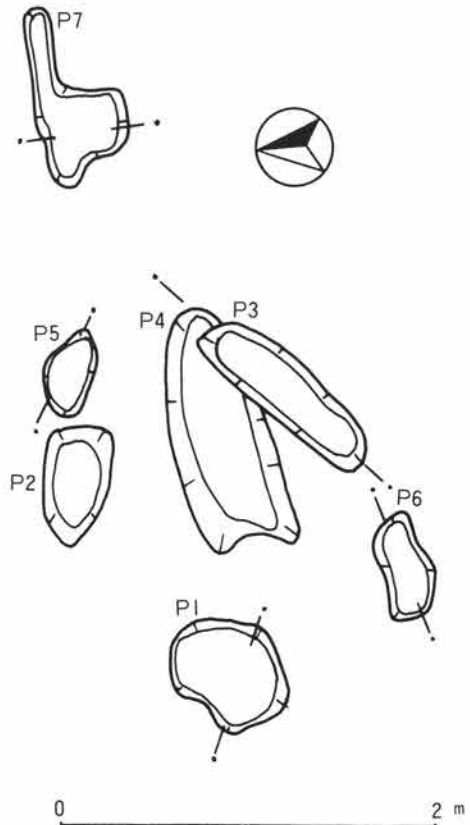
第2節 縄文時代

大島富士の頂部より縄文時代に属すると思われるピットが7基検出された。いずれも本地域の基盤層である砂泥互層を掘りこんで穿たれており、遺構掘り方上面より数片の縄文土器片が出土した。

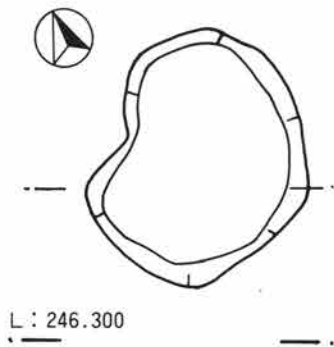
ピット1は西北隅のへこんだ円形、ピット3、ピット4は長円形を呈する。特に、ピット4からは黒曜石剝片に混じって、縄文土器片が数片検出されている。

大島富士は現状で247mを測る小丘陵で、縄文ピットはその頂部の比較的平坦な部分に集中して存在していた。

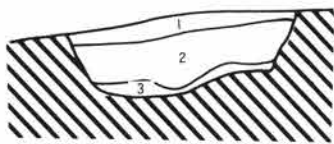
遺跡内より縄文時代に属すると思われる住居跡は検出されなかったが、大島富士以外のテラスからも微量ながら縄文土器片が検出されており、この丘陵一帯を足場にした狩猟の姿が浮かび上がってくる。大島富士自体、眺望のきく丘陵であることから、狩猟に関する臨時の露営跡と見ることができようか。



第20図 縄文ピット全体図

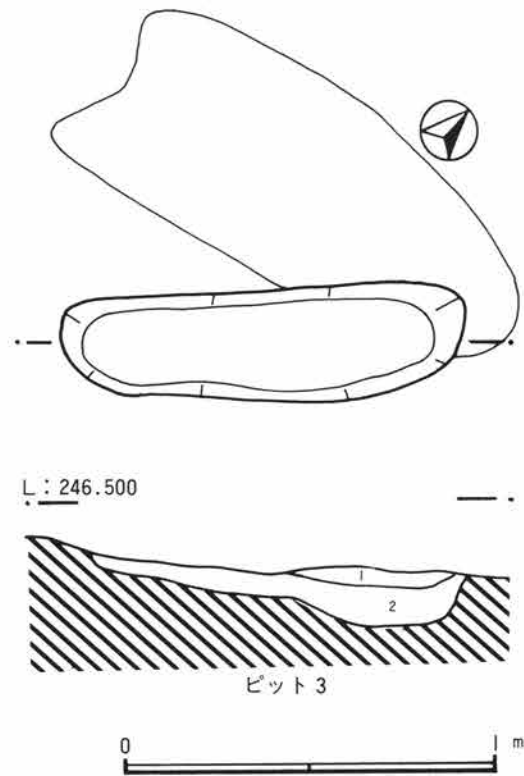


L : 246.300

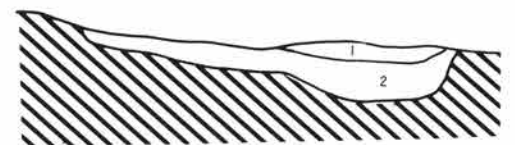


ピット1

- 1 黒褐色土層 B軽石を少量含む。やゝ粘性に欠ける。
- 2 黒褐色土層 砂泥岩を少量含む。
- 3 黒褐色土層 砂泥岩を多量に含む。



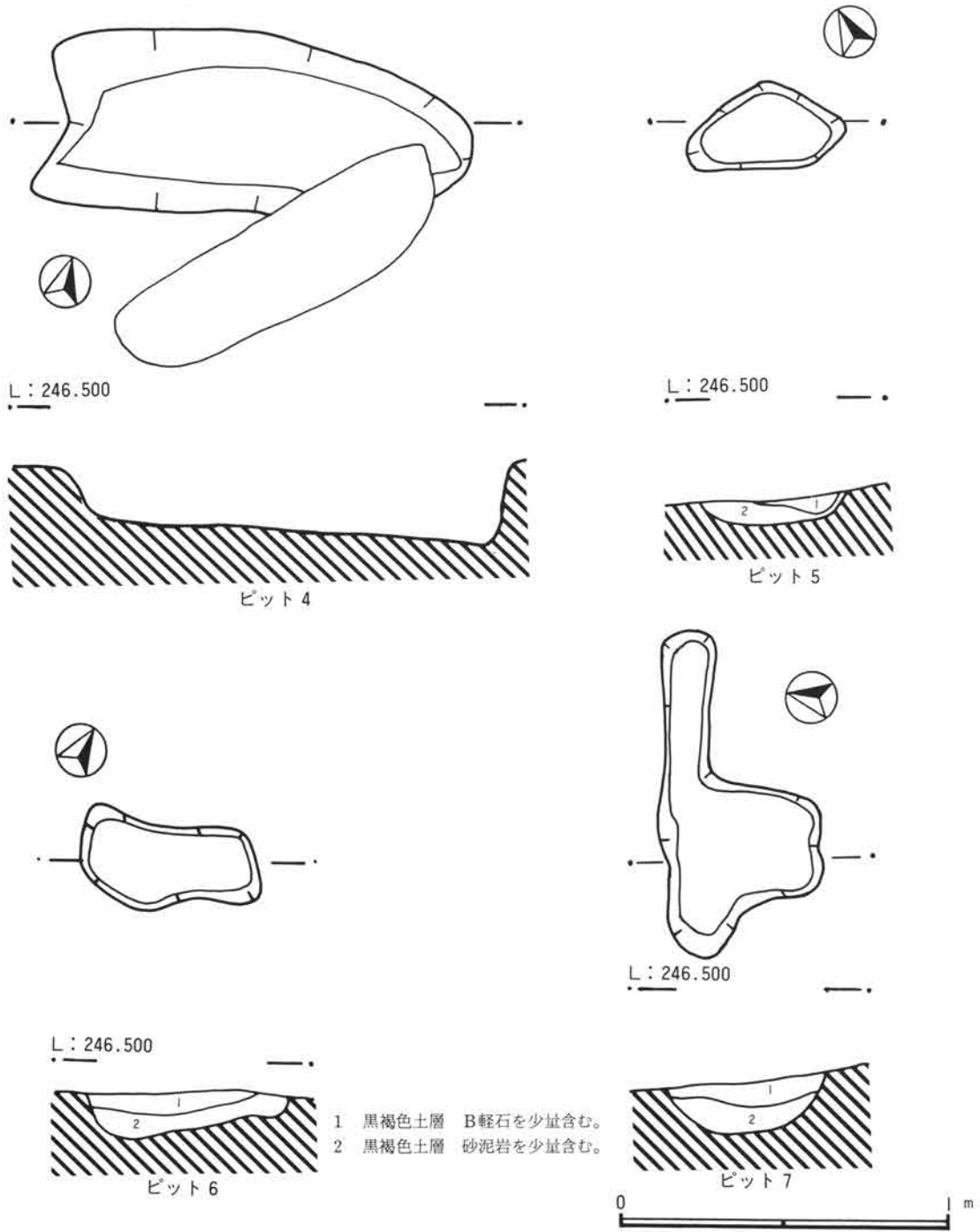
L : 246.500



ピット3



第21図 ピット1、3



第4表 縄文ピット計測表

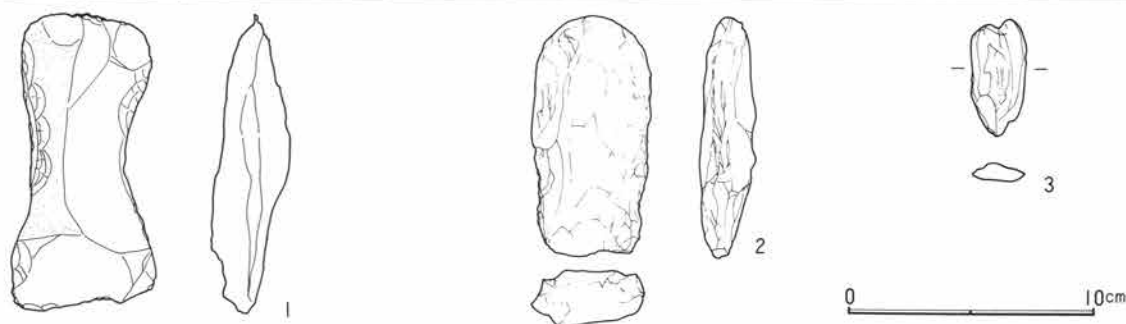
ピット番号	長径×短径	深さ	底面標高	備考
1	68cm×48cm	23cm	245.98m	
2	65cm×36cm	30cm	245.82m	
3	108cm×30cm	18cm	246.18m	ピット4と重複。
4	122cm×44cm	24cm	246.76m	ピット3と重複、縄文土器が数片出土。
5	48cm×26cm	10cm	246.13m	
6	54cm×22cm	15cm	246.26m	
7	98cm×48cm	15cm	246.07m	



第23図 縄文土器実測図

第5表 縄文土器観察表

図版番号	土器種類 器形	①胎土②焼成③色調	文 様 の 特 徴	備 考
23-1	縄文土器 深鉢	①石英礫を多量に含む ②良 ③橙色	外面：半截竹管による平行沈線 内面：研磨	早期に位置づけられる。
23-2	縄文土器 深鉢	①石英礫を多量に含む ②良 ③明褐色	外面：半截竹管による鋸歯状文が重層的に施文される 内面：研磨	早期に位置づけられる。



第24図 石器実測図

第6表 石器観察表

図版番号	種 別	出土位置	石 質	重量(g)	特 徴
24-1	打製石斧	テラス⑨	頁 岩	187.0	刃部は一部欠損している。裏面の一部に自然面を残す。
24-2	〃	テラス③	頁 岩	126.5	刃部に摩耗痕をとどめる。
24-3	石 錘	テラス⑩	緑泥片岩	10.0	片側に半円形の扶入。反対側は欠損。

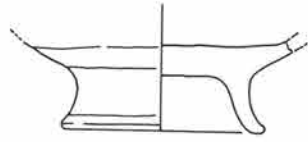
第3節 古 代

テラス③より大溝が検出された。テラス③の走向にほぼ平行する形で東南から北西方向へ向かって走っている。すり鉢状の底部をもち、11～12層にわたる埋土が確認されたが水が長期にわたって流れた形跡は認められなかった。上端幅は最大で5m95cm、深さは遺構確認より最深1m90cmを測り、南から北へ向かって底部のレベルが下がっていく傾向にある。時期的には底部に近いところをB軽石を主体とする暗黒褐色土(7層)が埋めており、少なくともB軽石降下以前から大溝が存在したことを窺わせると共に、B軽石降下時には若干大溝が埋まりつつあったものの、まだ大溝としての規模を保っていたことが推定される。

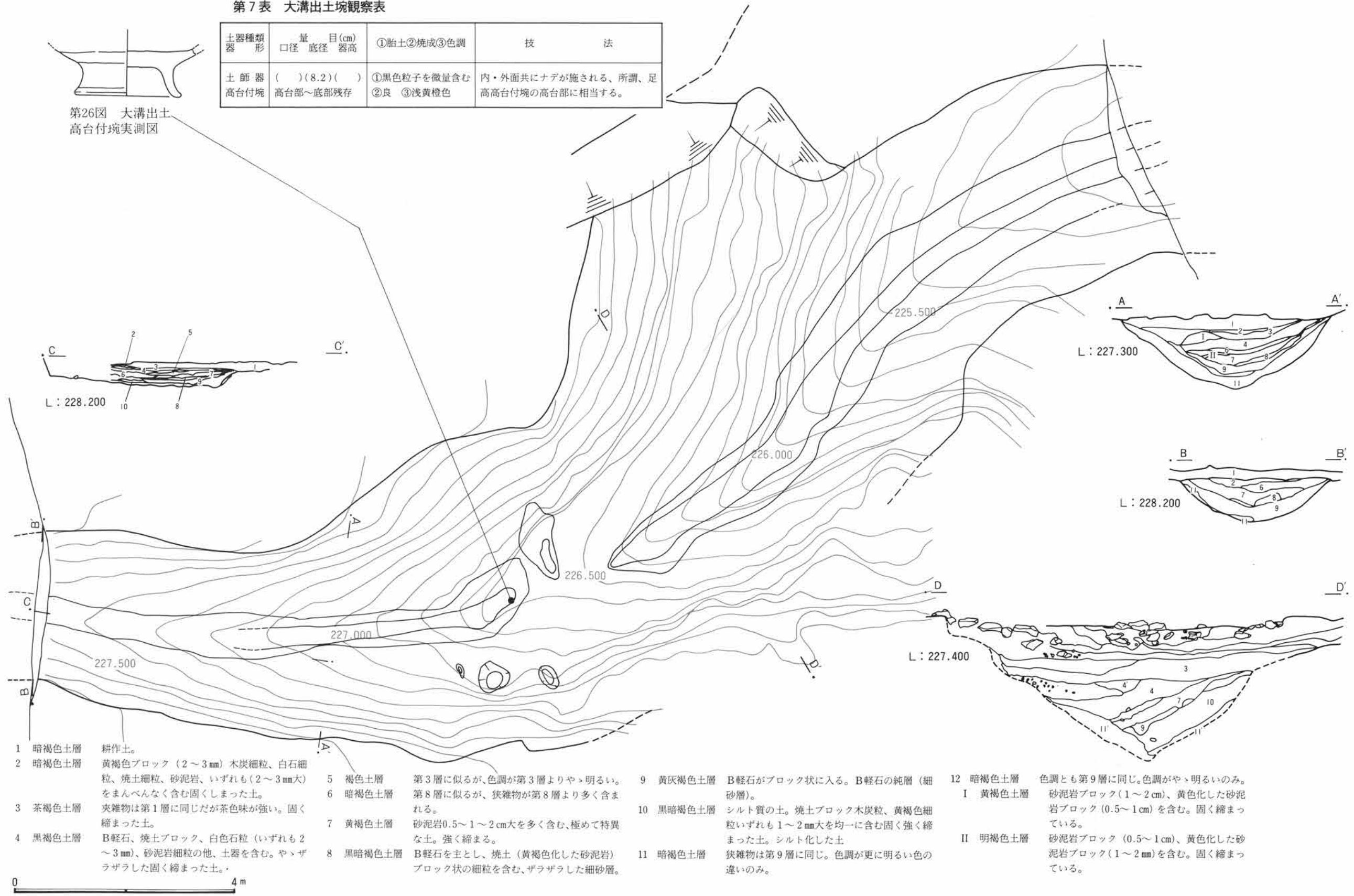
テラス③の西端は丘陵の鞍部に当たる部分で、大溝はこれから南へ向かって落ちながら続いて行くことが推定され、北では深掘りの結果、テラス⑥まで続いていることが確認されている。テラス⑩から北への連続性についてはここが地滑りによって何度か山崩れを起こしていることから判然としない面はあるが、恐らく大溝は当初、そのまま更に北へ伸びていたものと考えられる。また9層の上に乗る形で高台付塚の高台部が出土しており、これが11世紀前半に比定されることは更にこの大溝の時期が11世紀前半以前にまでさかのぼり得ることを推定させる。大溝は人工的な施設とは考えられず、鞍部を更に深く切って存在した自然地形であると想定される。大島上城との縄張り上での関連性が取り沙汰されるが、この大溝を人為的に埋め尽くして大島上城の虎口が築かれているため、結果として大島上城との関連はないものと考えられる。

第7表 大溝出土坑観察表

土器種類 器形	量目(cm) 口径 底径 器高	①胎土②焼成③色調	技法
土師器 高台付坑	() (8.2) () 高台部~底部残存	①黒色粒子を微量含む ②良 ③浅黄橙色	内・外面共にナデが施される、所謂、足高台付坑の高台部に相当する。



第26図 大溝出土
高台付坑実測図



- 1 暗褐色土層 耕作土。
- 2 暗褐色土層 黄褐色ブロック(2~3mm)木炭細粒、白石細粒、焼土細粒、砂泥岩、いずれも(2~3mm大)をまんべんなく含む固くしまった土。
- 3 茶褐色土層 夾雑物は第1層に同じだが茶色味が強い。固く締まった土。
- 4 黒褐色土層 B軽石、焼土ブロック、白色石粒(いずれも2~3mm)、砂泥岩細粒の他、土器を含む。ややザラザラした固く締まった土。

- 5 褐色土層 第3層に似るが、色調が第3層よりやや明るい。
- 6 暗褐色土層 第8層に似るが、狭雑物が第8層より多く含まれる。
- 7 黄褐色土層 砂泥岩0.5~1~2cm大を多く含む、極めて特異な土。強く締まる。
- 8 黒暗褐色土層 B軽石を主とし、焼土(黄褐色化した砂泥岩)ブロック状の細粒を含む、ザラザラした細砂層。

- 9 黄灰褐色土層 B軽石がブロック状に入る。B軽石の純層(細砂層)。
- 10 黒暗褐色土層 シルト質の土。焼土ブロック木炭粒、黄褐色細粒いずれも1~2mm大を均一に含む固く強く締まった土。シルト化した土。
- 11 暗褐色土層 狭雑物は第9層に同じ。色調が更に明るい色の違いのみ。

- 12 暗褐色土層 色調とも第9層に同じ。色調がやや明るいのみ。
- I 黄褐色土層 砂泥岩ブロック(1~2cm)、黄色化した砂泥岩ブロック(0.5~1cm)を含む。固く締まっている。
- II 明褐色土層 砂泥岩ブロック(0.5~1cm)、黄色化した砂泥岩ブロック(1~2mm)を含む。固く締まっている。

第25図 大溝全体図

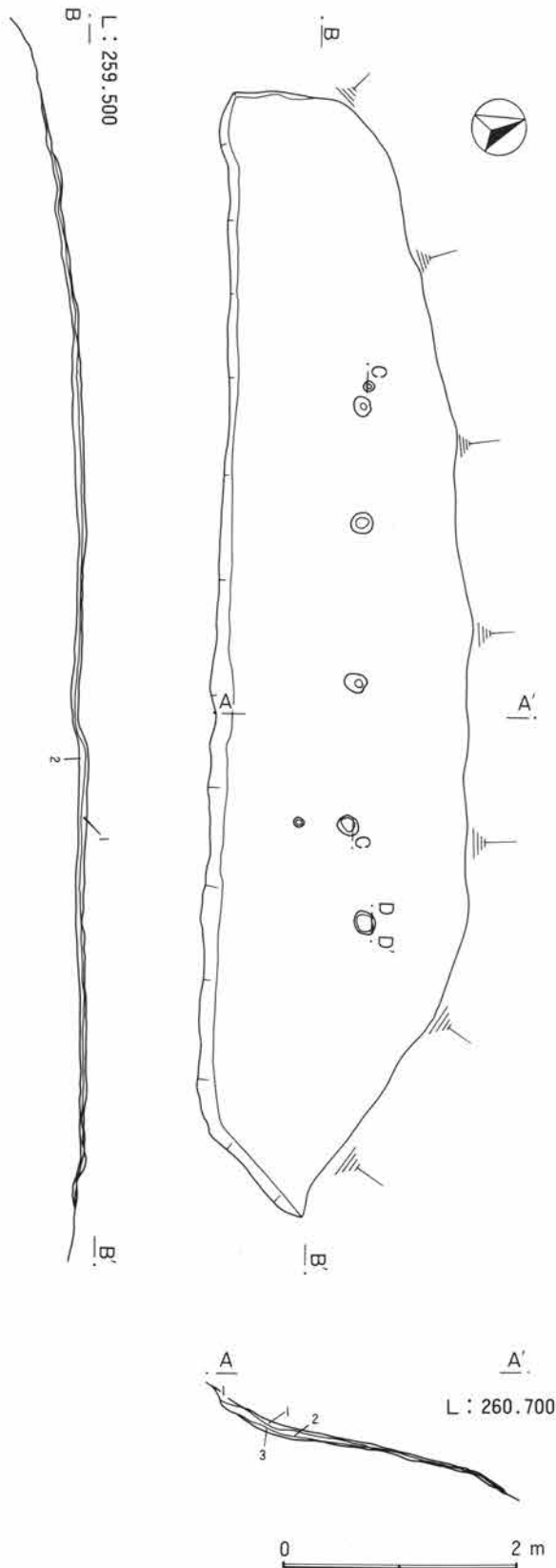
第4節 中 世

中世は大島上城の存した時期であり、必然的に最も多くの遺構、遺物が検出されている。

テラス① テラス①は大島上城の縄張りの中において、北側に伸びるテラス状遺構（「曲輪」と考えられる）の北端に位置している。北側に連続するテラス状遺構は広狭7面に及ぶが、虎口を突破した敵をまず最初に迎え撃つのが、テラス①の機能であったと考えられる。

地形的には東西方向においてはほぼ平坦な面が意識されているものの、南北方向においてはかなり北側に向かって傾斜しており、南端と北端では約1.5mの比高差をもつ。しかし、全体的に見れば、平坦な面をかなり意識しており、原地形を削平する形で地形が推定される。また、削平時に切り取った土量をテラス①の北端ラインに盛り土をして、より広い平坦面を意識して作っているような形跡は見当たらず、恐らく削平された土量は他の施設に持ち出されたものと考えられる。

基本的には虎口を突破して、大手筋を侵入してくる敵に対して、前面、あるいは側面より攻撃を加えることができるよう設置された曲輪であり、これから主郭に向かって続く曲輪もテラス①と同様の機能を持ち得たものと推定される。また、曲輪の構造自体もテラス①に近似したものと云えよう。



第27図 テラス①

- 1 黒色土層 腐食土。
- 2 暗褐色土層 5～15mmのA軽石を多量に含む。
- 3 灰茶褐色土層

1号柱穴列 (テラス⑩に所在)

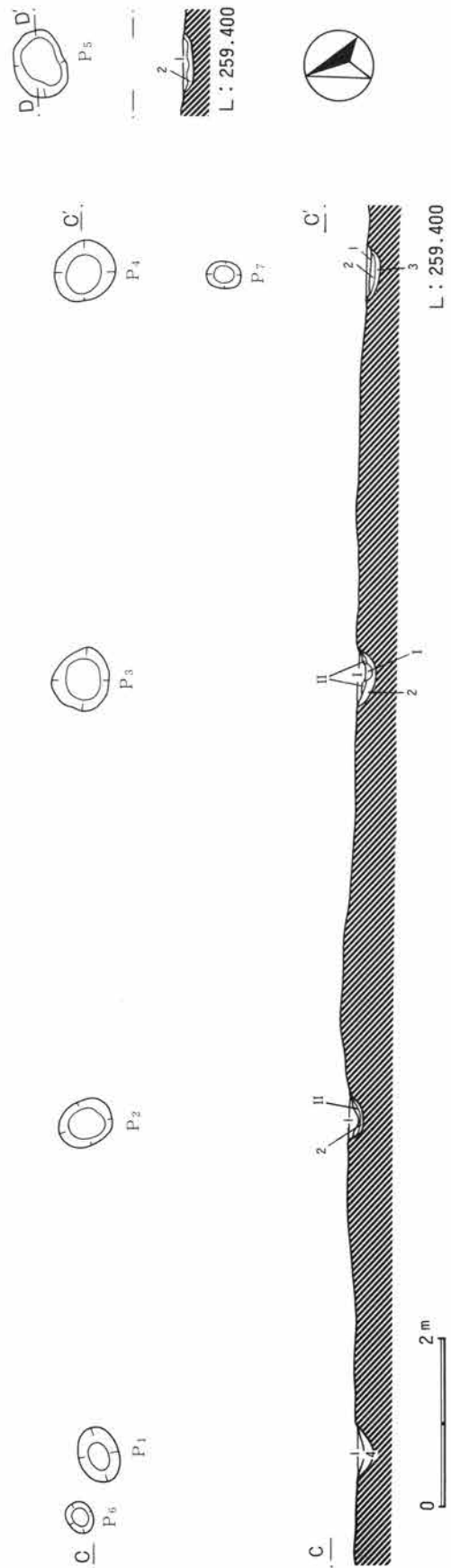
テラス⑩の長軸の走向にほぼ平行する形で1号柱穴列が東西方向に走る。大小7個の柱穴からなるが、その内4個の柱穴(P1、P2、P3、P4)は直線ラインに乗っており、形状も共通してほぼ円形を呈する。しかし、柱穴間の距離は一定ではなく、P1～P2が1.94m、P2～P3が2.60m、P3～P4が2.38mとまちまちの測定値を示す。

残り3個の柱穴はP5、P7がP4のそれぞれ東と南に、またP6がP1の西に、それぞれに不規則に存在し、P1～P4の支柱穴列との関係が曖昧である。

しかし、P3、P4においては確認面においてA軽石の堆積を確認しており、P5は埋土の上層をA軽石含みの灰褐色土層が埋めることから、これら大小7個の柱穴が同時期に存在していたものと考えて至当であると思われる。また、時期については遺構確認面、ないしは埋土の土層にA軽石が見られること、テラス⑩は北端肩より、かわらけが出土していることから、大島上城とほぼ同時期の遺構と考えることができる。

更に、その性質については、テラス⑩が前述した如く、北に連続する曲輪の最前線に位置することから、曲輪に關係する施設、すなわち逆茂木に類するものを埋めた柱穴列と言えるのではないだろうか。柱穴の走行ラインはテラス⑩のほぼ中央を走っており、その意味では不合理な位置にあると言えようが、テラス⑩が北に傾斜していることを考え合わせた時、比較的傾斜の緩やかな南半分の主眼を置いて、その先端ライン(テラス⑩全体から見れば、ほぼ中央部に相当する)に柱穴を穿たと推定することもできよう。

- 1 灰褐色土層 A軽石を含む。
- 2 明茶褐色土層 砂泥礫を少量含む。
- 3 明茶褐色土層 2層よりも粘性が強い。
- 4 褐色土層 砂泥礫を含む。
- I 暗褐色土層 粘性に欠ける。
- II 褐色土層 焼土ブロックを含む。

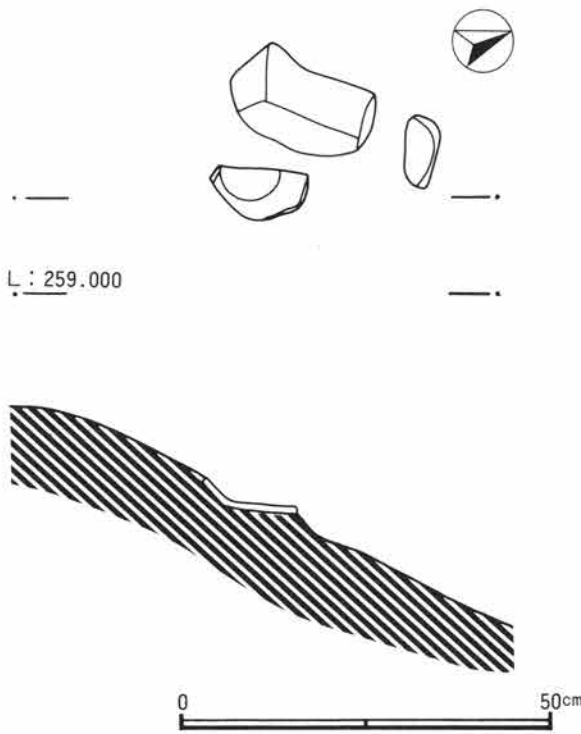


第28図 1号柱穴列

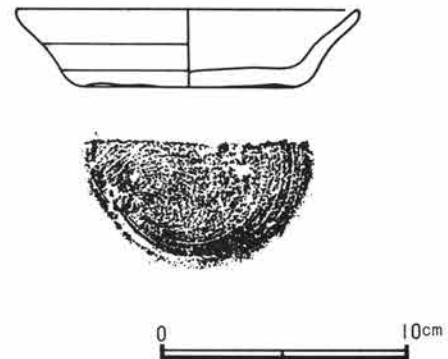
第8表 1号柱穴列計測表

ピット	形状	長径×短径	深さ	底面標高
1	長円形	32cm×25cm	12cm	259.210m
2	円形	23cm×28cm	10cm	259.180m
3	偏円形	37cm×34cm	11cm	259.100m
4	円形	38cm×36cm	8cm	259.080m
5	長円形	40cm×30cm	7cm	259.030m
6	円形	18cm×17cm	3cm	259.160m
7	長円形	21cm×17cm	6cm	259.200m

前述したように、かわらけ碗の破片が、テラス⑩の北端ラインの肩より出土している。



第29図 テラス⑩かわらけ出土状況図

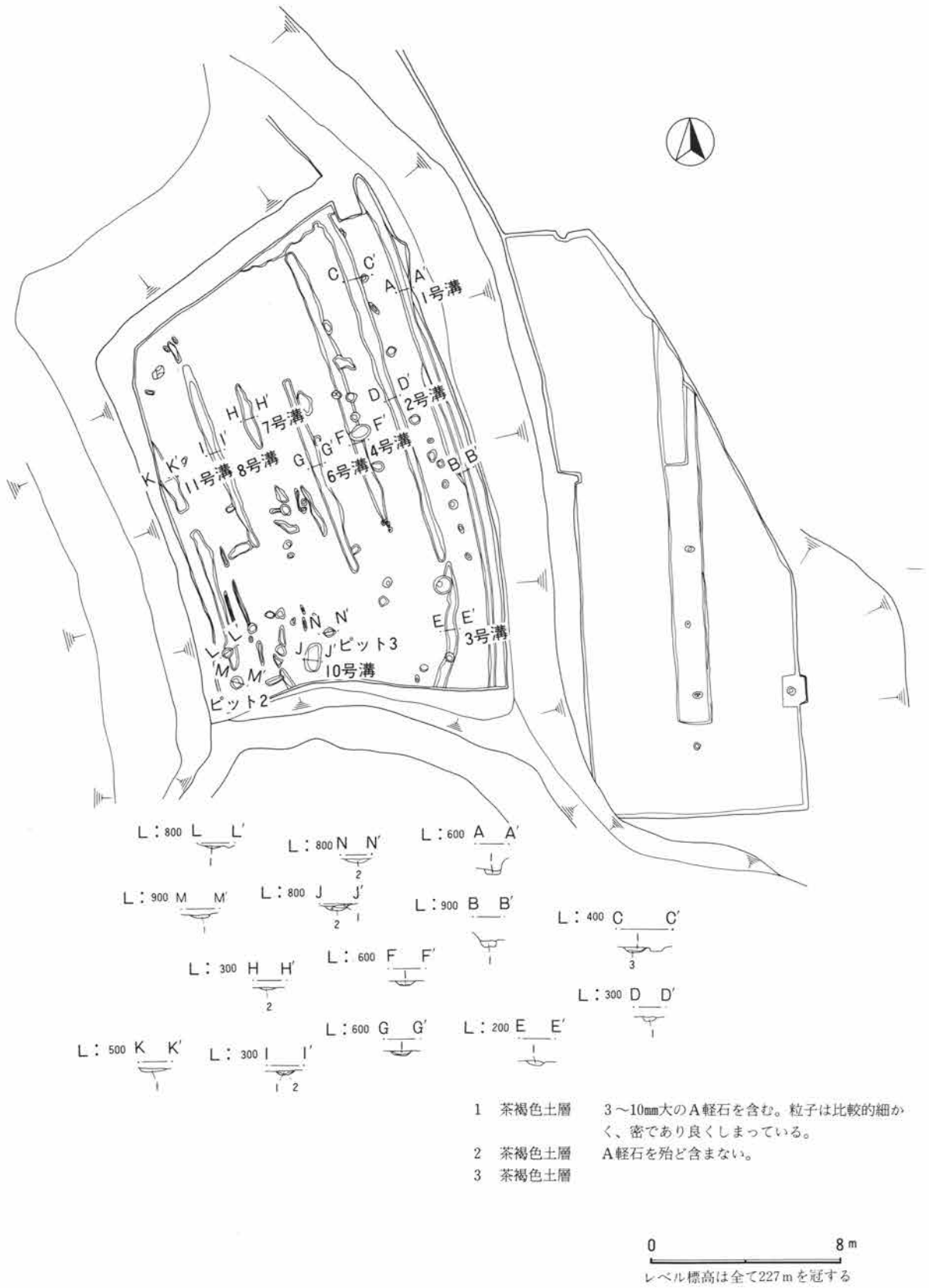


第30図 テラス⑩出土かわらけ

内外面共に横ナデが施され、底部には回転糸切り痕（左回転）をとどめる。
内外面の一部に2次焼成痕が認められる。胎土中に黒色微粒子を少量含み、にぶい橙色を呈す。
口径13.6cm。底径8.5cm。器高3.1cm。

テラス① テラス③と大島富士に挟まれた南北に狭小なテラスである(第31図参照)。大島富士の丘陵斜面から連続して存在するため、テラス⑩同様、平坦部分の占める割合はさほど広くなく、ここに大島上城に関する建築物が存在していた可能性は薄い。しかし、虎口と考えられるテラス③（後述）の東に接していること、平坦部分の中央において南から北へ走る2号柱穴列が検出されたこと、更に大島富士との境界部分でかわらけを出土する土坑が検出されたことを勘案すると、テラス①を大島上城の曲輪の一つと考えて差し支えないものと考えられる。

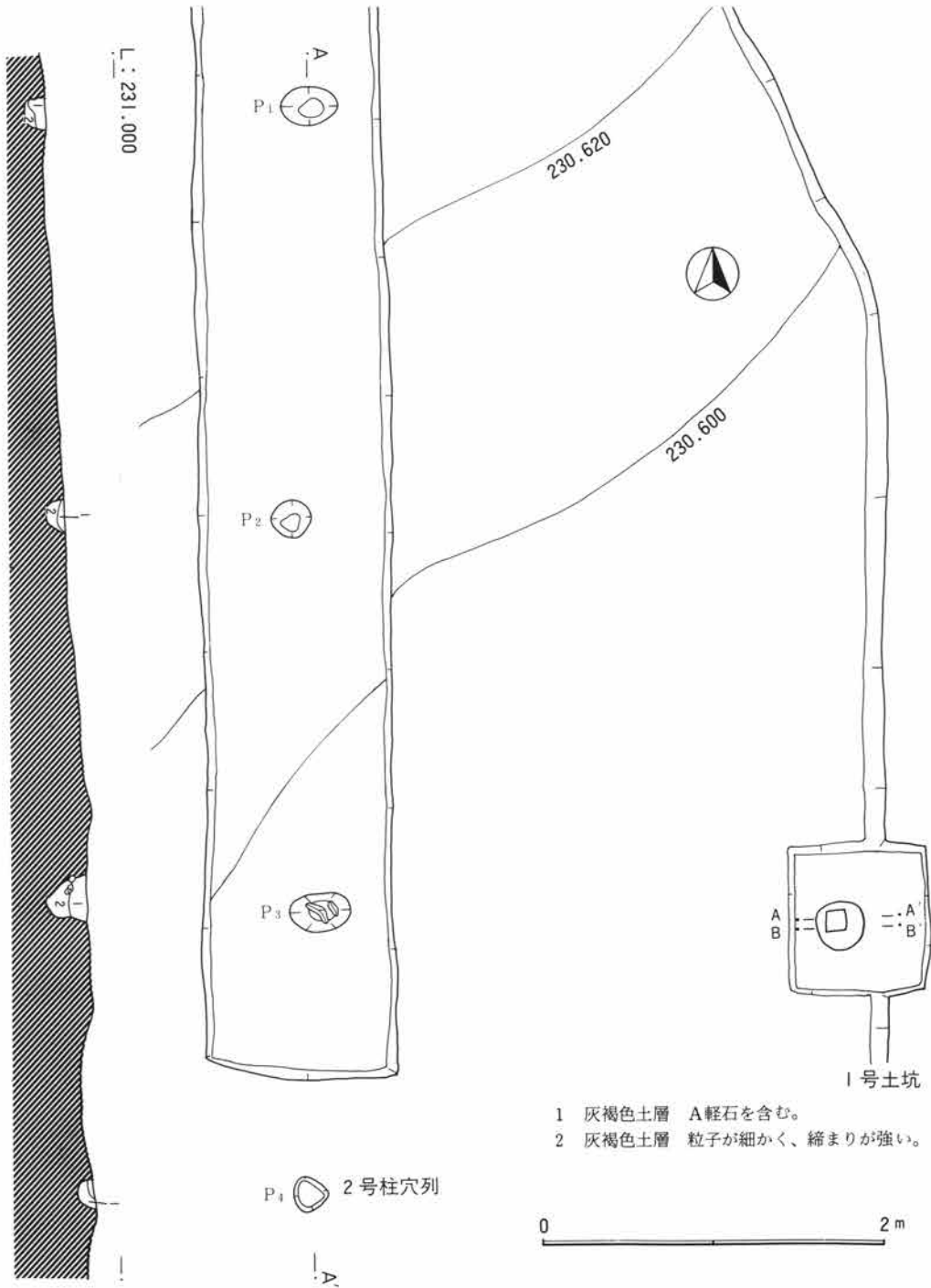
テラス①の南東方向の斜面（地形的には大島富士の裾部に相当する）には地すべりによると思われる平坦なテラス状遺構が数面連続して存在するが、ここを利用して攻め登ってくる敵を防ぐラインとして、テラス①の機能を考えることができよう。それは、換言すればテラス①が大島上城の東の防禦ラインとしての位置づけを担っているということである。



第31図 テラス①②③遺構全体図

2号柱穴列 テラス①のほぼ中央部をテラス長軸と同じ方向に南から北へ走る。合計4個の柱穴が存在するが、P1～P2間が2.34m、P2～P3間が2.28mとほぼ均似値を示すのに対して、P3～P4間は1.07mと極端に短くなる傾向にある。しかし、全体的に見れば、P1～P4の柱穴ラインは直線的であり、一連のものと考えることができよう。

時期的には全ての柱穴の埋土上層をA軽石を含む灰褐色土が埋めることから大島上城と同時期の遺構とすることができ、性格的にはテラス①に所在する1号柱穴列と同様、逆茂木等を立てた柱穴列と推定することができるであろう。



第32図 2号柱穴列及び1号土坑

第9表 2号柱穴列計測表

ピット	形状	長径×短径	深さ	底面標高	備考
1	長円形	34cm×23cm	13 cm	230.470m	
2	円形	25cm×23cm	10.5cm	230.590m	
3	長円形	35cm×23cm	25 cm	230.570m	根固め用の栗石とおもわれる泥岩が数片検出されている。
4	隅丸三角形	24cm×20cm	10.5cm	230.740m	

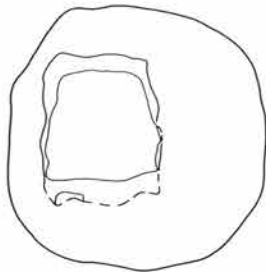
1号土坑

大島富士と2号柱穴列に狭まれる形で、1号土坑が検出された。位置的には防禦ラインと想定される2号柱穴列の外側に存在していることから遺構としての性格の把握が困難であるが、何らかの形で大島上城に付随する遺構であると思われる。

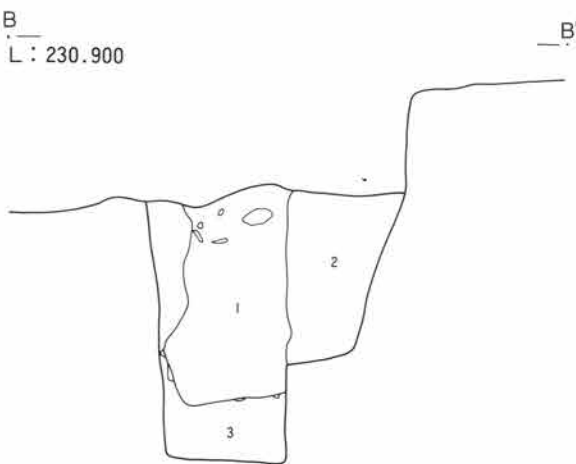
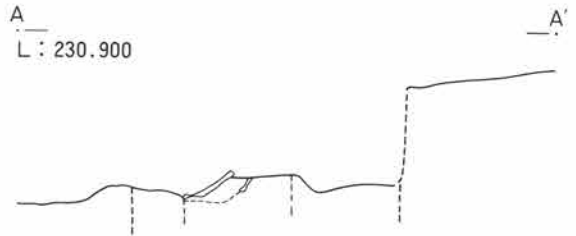
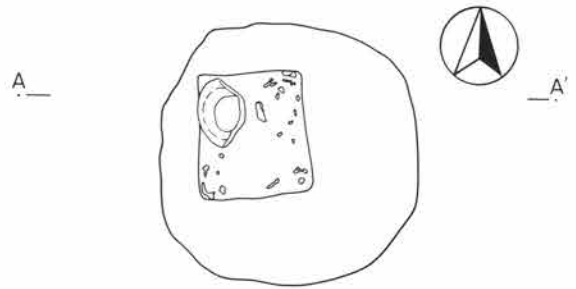
土坑は二重の掘り方を持っており、外側掘り方は平面円形で、鍋底形の断面を持つ。これに対して、内側掘り方は平面がかなり整然とした方形を呈しており、そのままの形で底部まで至る。所謂角柱形の掘り方をもっている。この内側掘り方の壁面には、壁面に接する形で函状のものが残存していたが、恐らくこの函状のものを据える形で、ことさら整然として角柱状の掘り方になったものと思われる。

角柱状掘り方の部分は炭化物を多く含む灰白色土によって埋められており、函状のものが一部炭化したものと推定される。

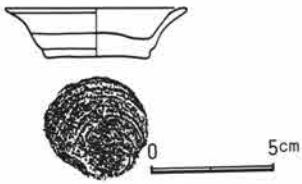
また、遺構確認面で、角柱状掘り方に納まる形でかわらけが出土している。



- 1 暗褐色土層 炭化物、灰白色土、黄色土を多量に含む。やゝ汚れた感じの土。
- 2 淡茶褐色粘質土層 粒子が比較的細かく均質で粘性の強い土。
- 3 暗茶褐色粘質土層



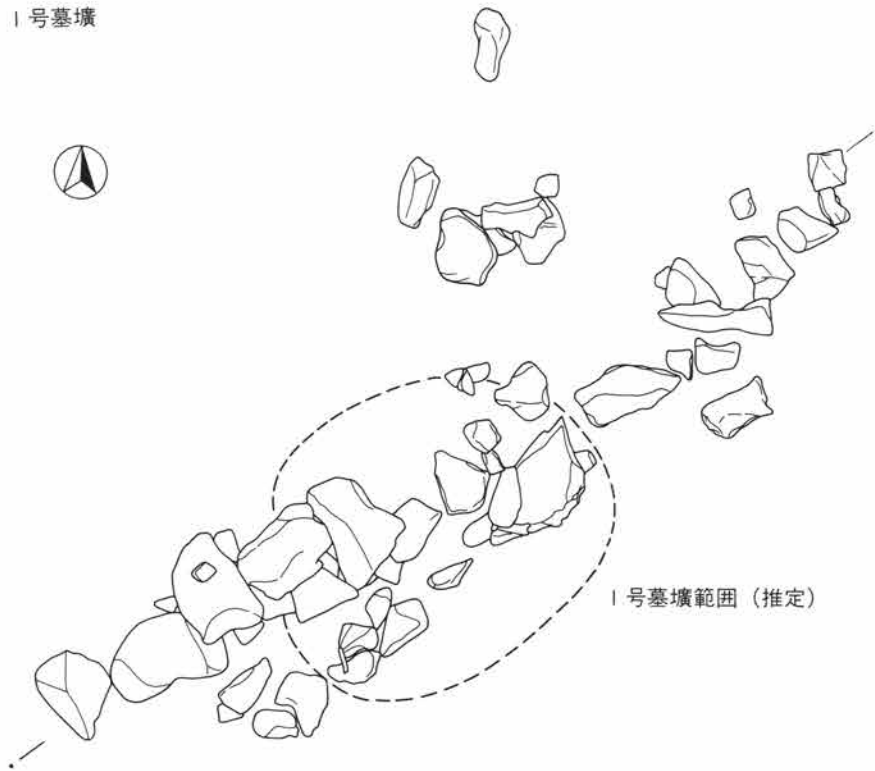
第33図 1号土坑



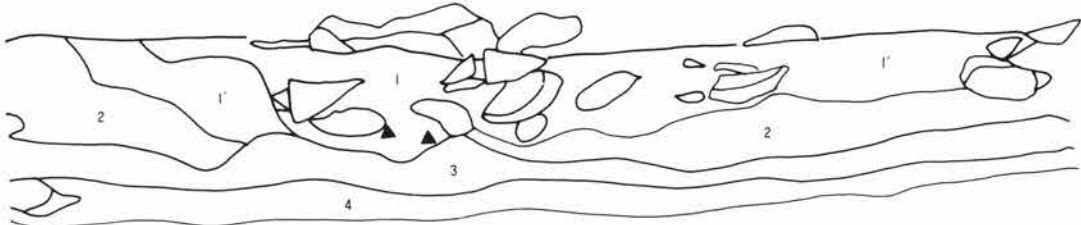
内外面共に横ナデが施され、底部には回転糸切り痕（左回転）をとどめる。
胎土中に石英粒を多量に含み、焼成は甘い。におい橙色を呈す。
口径7.3cm。底部4.2cm。器高1.9cm。

第34図 1号土坑出土かわらけ実測図

1号墓壙



— L : 227,000

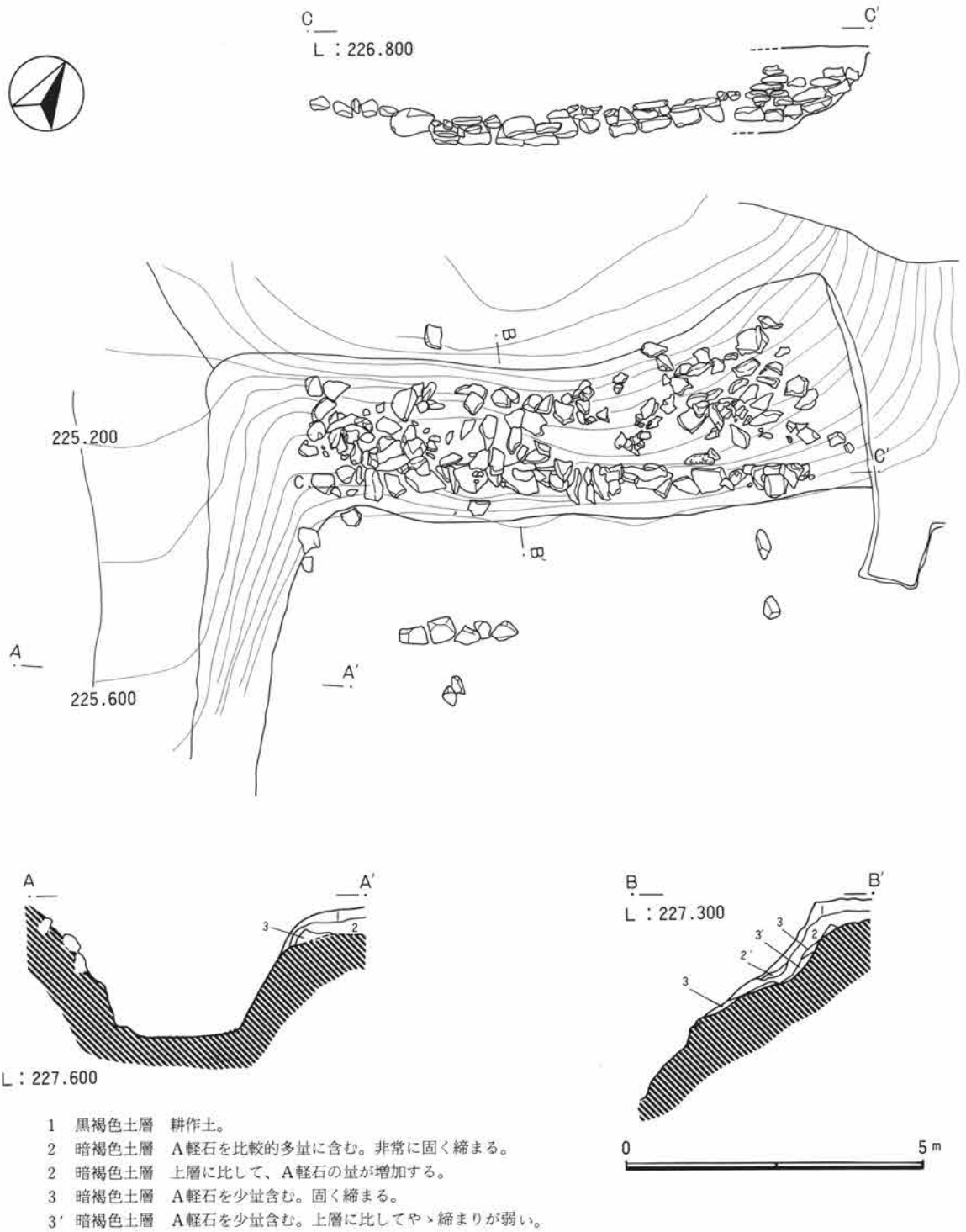


- 1 層：黄色土粒、赤褐色土粒を若干含む暗褐色土。
- 1' 層：1に近似する暗黒褐色土。
- 2 層：1に泥岩が多量に混入する。
- 3) 層：大溝埋土。
- 4) 層：大溝埋土。

▲印 骨片出土位置

0 2 m

第35図 1号墓壙

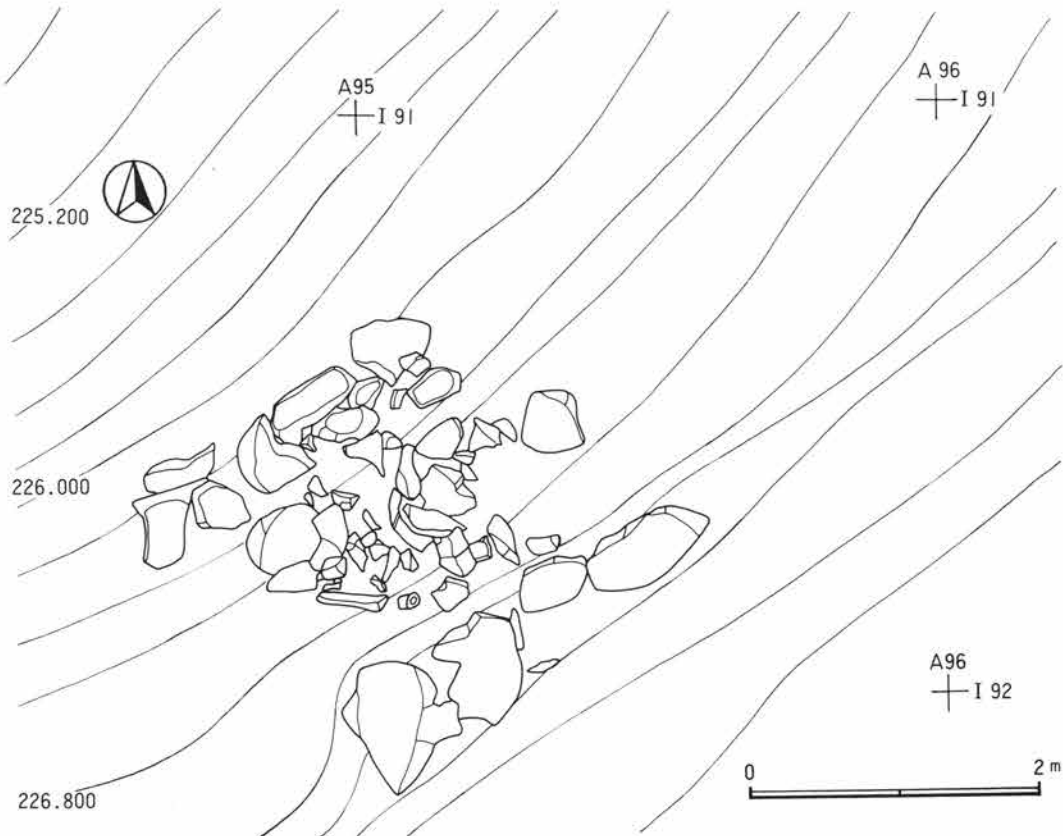


第36図 テラス③虎口遺構

1号墓壙 テラス③の北側部分より、1号墓壙が検出された。テラス③には前述したように古代に属する大溝が所在しているが、この大溝が殆ど埋まった状態で北側部分には意識的な配石が見られた。1号墓壙はこの配石の下に認められたものであるが、この配石も1号墓壙に伴うものでなく、後述するようにテラス③の「虎口」としての機能を高めるために置かれたと考えられるものであり、1号墓壙としての独自の配石を示すものではなかった。また掘り方も明確には存在せず、恐らく、1号墓壙が置かれた当時にはまだ若干のくぼみを持っていたと思われる大溝を利用して、ここに墓壙を設定したものと考えられる。骨片の広がりから、1号墓壙の範囲は東西1.40m、南北1.15mと推定されるが副葬品は全く認められず、また骨の特徴も動物に共通する性質を持つことから、1号墓壙は馬などの動物を葬った墓壙であったと考えられる。時期的には、大島上城の「虎口」が整備される頃か、あるいはこれを若干遡る時期が推定される。

テラス③ テラス③は平面台形を呈する平坦地である。特にテラス④、および西側農道との境界において、直線ラインを顕著に確認することができ、北および西側ラインの人為的な造作を推定させる。

テラス④との境界すなわち、北側ラインは斜面に大ぶりの石を貼りつけて斜面を固めているのがわかり、特にそれは斜面の肩の部分において、直線的な石の配列を見ることができる。また農道との境界、すなわち西側ラインについては、北側ラインのような配石は認められなかったものの、テラス③の北西隅から5m程のところ農道を狭んで両側に石を置いてあるのを確認することができた(第36図参照)。更に、平坦面にも集中して石を出すところがあり(1号集石)、テラス③の養生の一部と推定される。いずれにしてもテラス③は全てのテラスの中で、最もめりはりのきいた平面形を有しており、北から大島上城に入る、進入路(大手)の最初の曲輪、すなわち「虎口」と考えられる。従って、ここに石を配置して、テラス③の斜面の補強を図っ

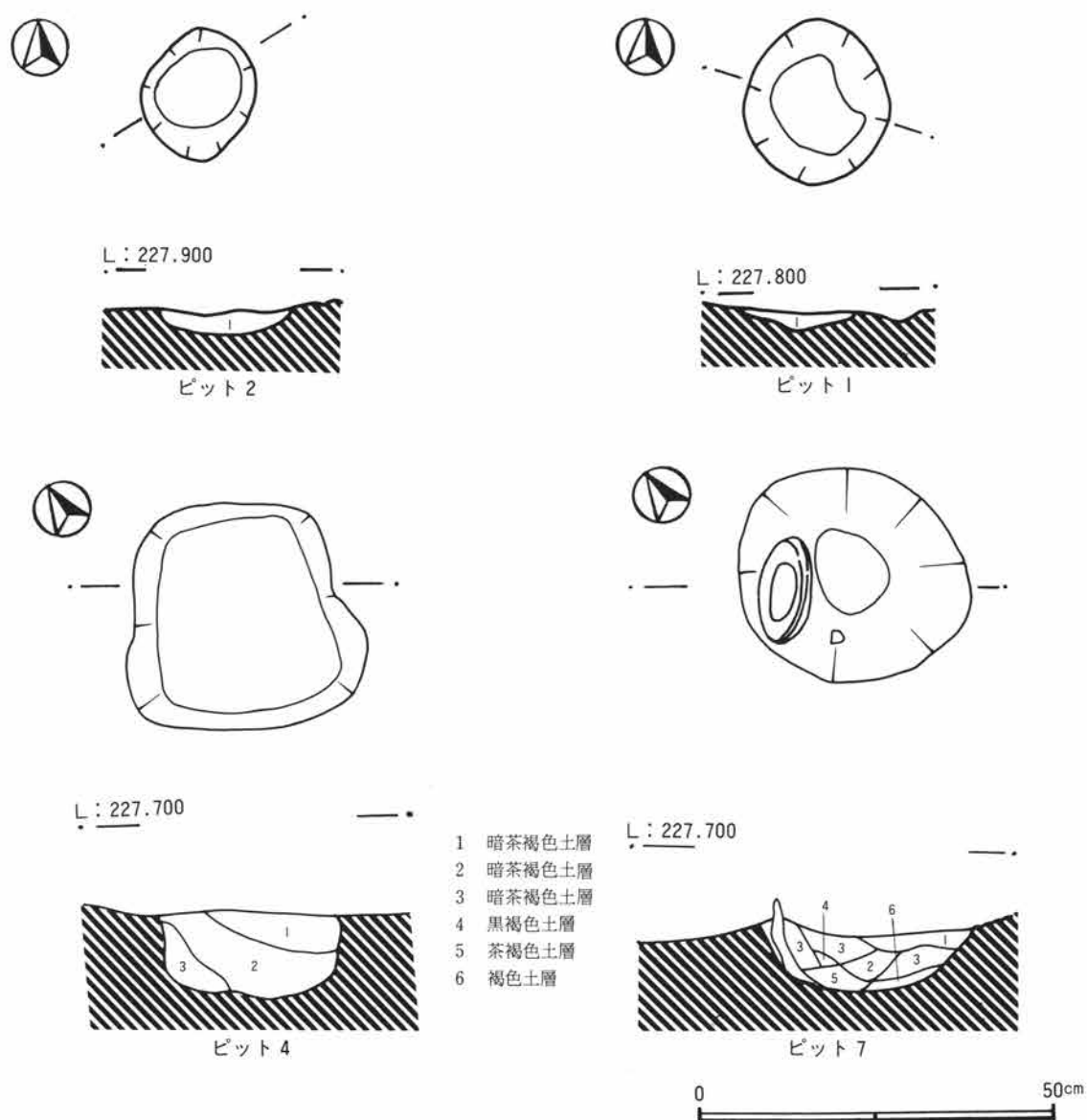


第37図 1号集石

第II章 大島上城遺跡

ことは、当然のことであり、また西側ラインにおいて見られた配石は大手を固めるための木戸遺構の一部と推定することができよう。

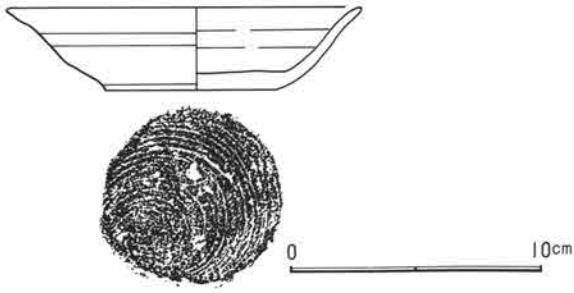
テラス③内からは、テラス⑩やテラス①に見られるような柱穴列は検出できなかったが中世に属すると思われるいくつかのピットを検出し得た（第38図参照）。



第38図 ピット1、2、4、7

第10表 テラス③内ピット1、2、4、7計測表

ピット番号	長 径×短 径	深 さ	底 面 標 高	備 考
1	35cm×33cm	7 cm	227.68m	
2	45cm×40cm	8 cm	227.71m	
4	34cm×30cm	13cm	229.29m	
7	32cm×28cm	11.5cm	228.51m	かわらけがほぼ完形で出土している。

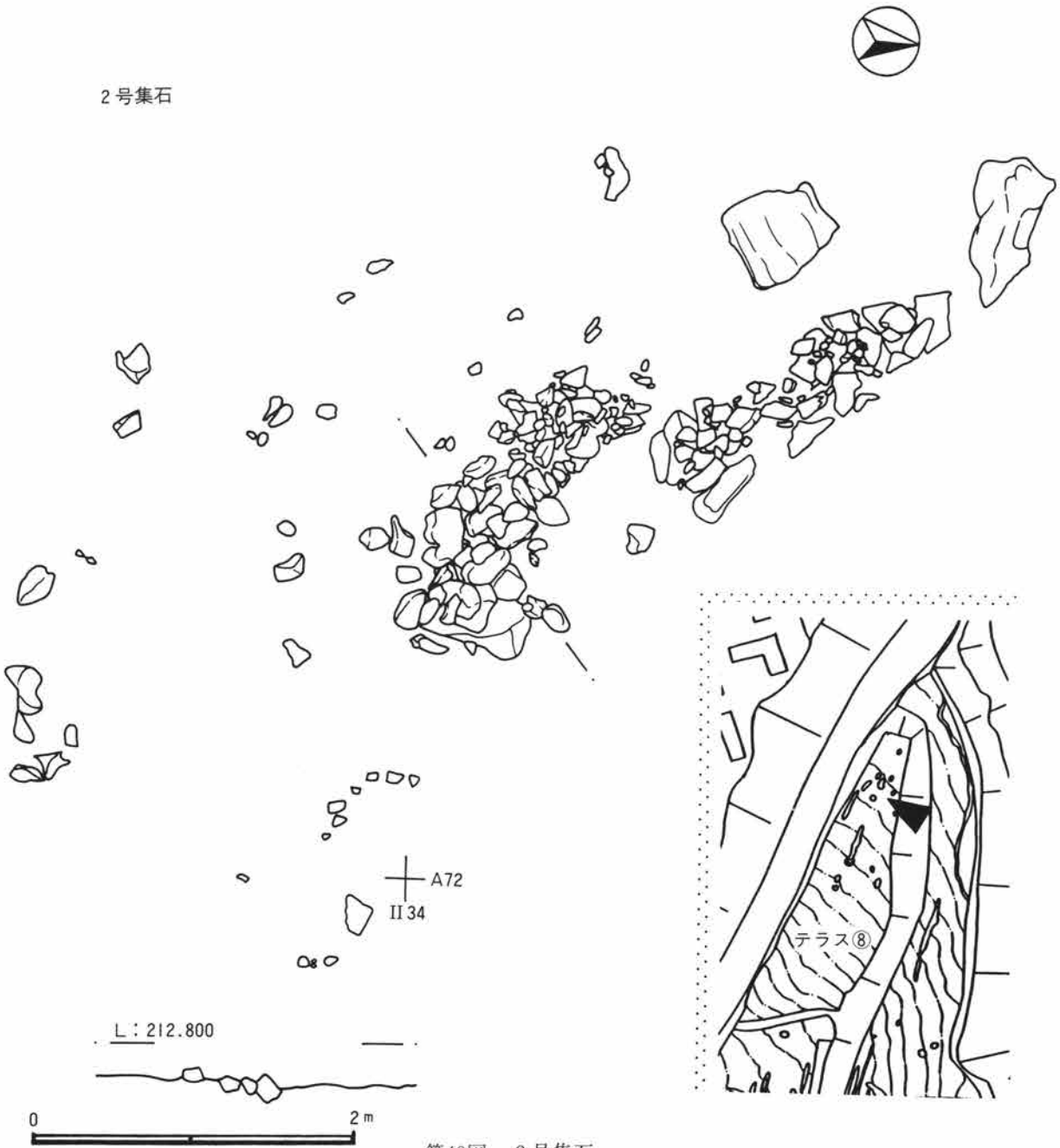


内外面共に横ナデが施され、底部に回転糸切り痕（左回転）をとどめる。

胎土中に多量の石英粒、黒色土粒を含み、にぶい橙色を呈す。
口径14.5cm。底径6.9cm。器高3.25cm。

第39図 ピット7 出土かわらけ実測図

2号集石

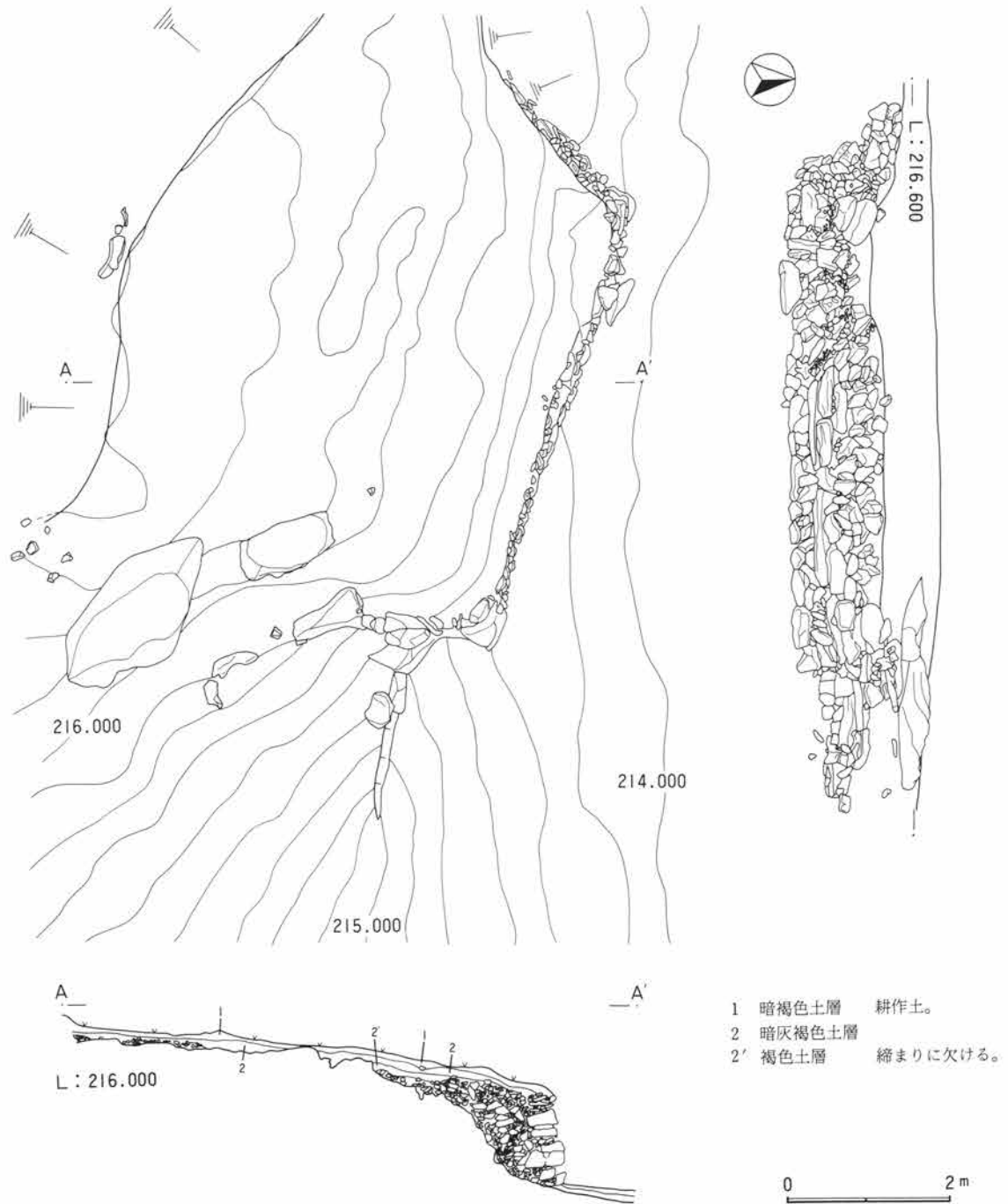


第40図 2号集石

第II章 大島上城遺跡

2号集石 テラス⑧の西部分より2号集石が検出された。本地域の基盤層である泥岩質礫岩が集中しているため、人為的な造作を推定させる。テラス⑧自体は大島上城との関連の薄いテラスと思われるが、テラス③において、1号集石が検出されたことを想起すると、この2号集石も大島上城と何らかの関連をもつ遺構と思われる。

2号集石は下層に向かって、何層かの堆積状況を示していたが、完掘には至らなかった。



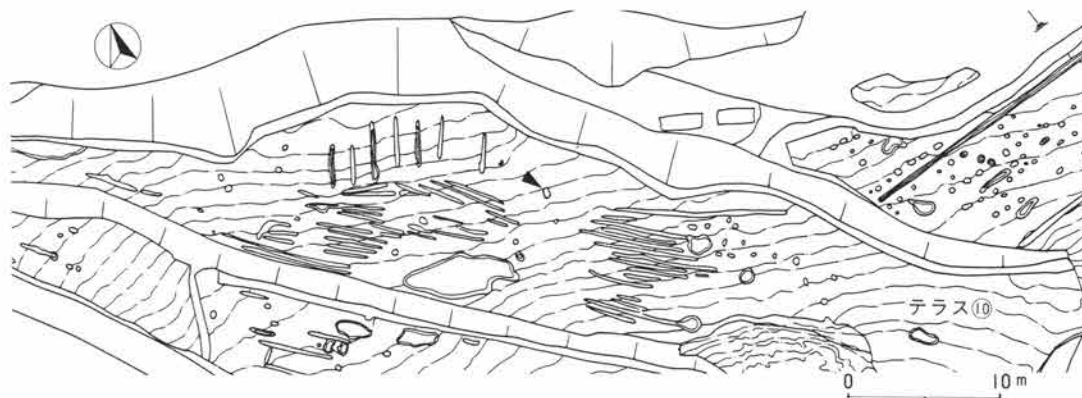
第41図 テラス⑨

テラス⑨ テラス⑨は北側面と西側面に整緻な石垣が見られた。これは近代の耕作時の手になるものであり、これ自体は大島上城に関係するものとは言えないが、この石垣をはずすと、非常に大きな岩盤が露出した。この岩盤はこの地域の基盤層である小幡層と称される、富岡層群の一つであるが、テラス⑨の殆どが、この小幡層からなる岩塊であった。この岩塊自体には手の加えられた痕跡は認められなかったが、大島上城の麓からの大手口を考えた時、テラス⑨の東側から登るルートは大島上城と麓との位置関係から合理的の最短ルートと言える。また、東側にある岩塊が石段のように階段状になっており、斜面を登りやすい構造となっている。

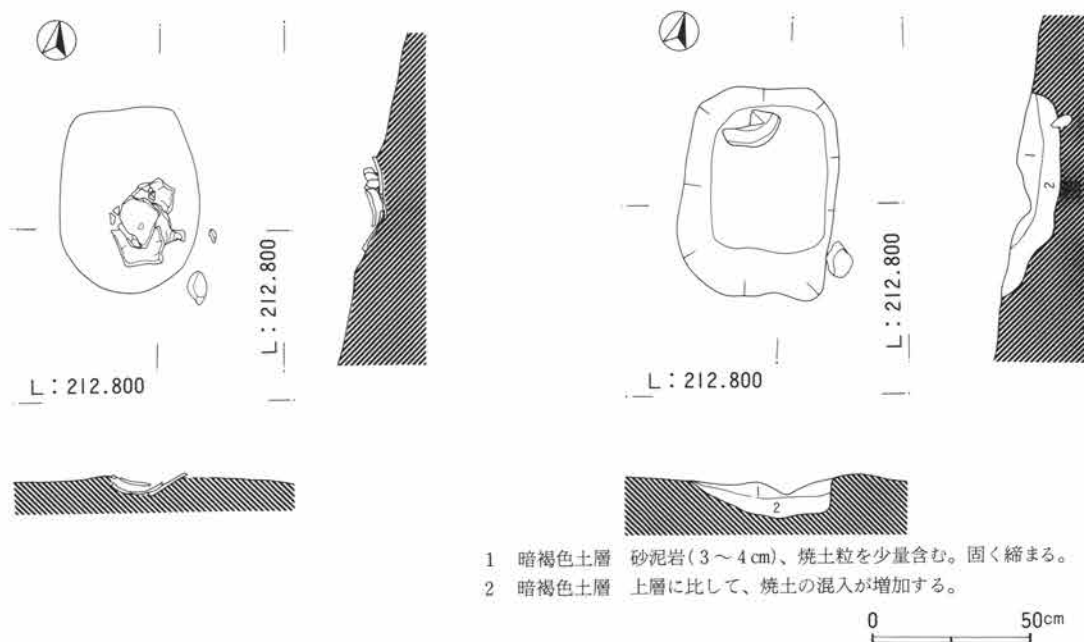
遺物の出土もなく、また遺構面からも大島上城との直接的関連は云々できないが、以上のような視点からテラス⑨を一応大手口の通過点として把握しておきたい。

2号土坑 テラス⑩内に所在する。テラス⑩自体は大島上城との関係を裏づける遺構の検出は見られなかったが、テラス⑩の中央やや北よりの箇所から土鍋を出土する土坑（2号土坑）が検出された。

土坑は隅丸方形のプランをもち、その東に偏した位置で土鍋が上から押しつぶされた形で出土した。特に土坑からは焼土等の出土はなかったが、大島上城に関する野営地との関連が推定される。

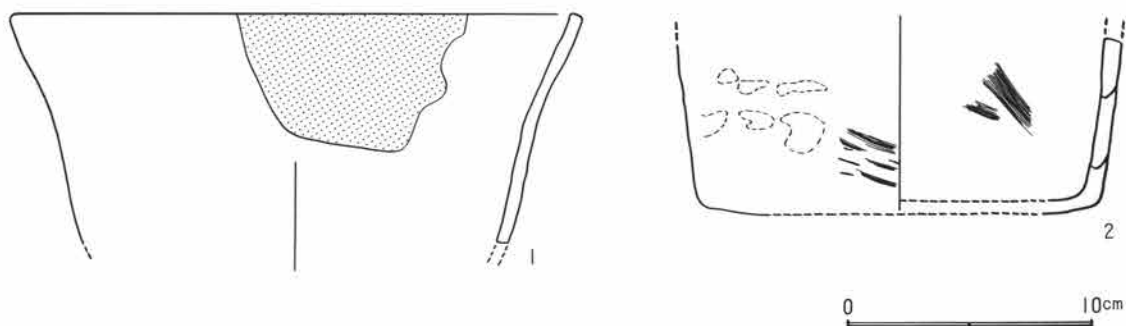


第42図 2号土坑位置図(矢印)



- 1 暗褐色土層 砂泥岩(3~4cm)、焼土粒を少量含む。固く締まる。
- 2 暗褐色土層 上層に比して、焼土の混入が増加する。

第43図 2号土坑(左：遺物出土状況 右：掘り方)

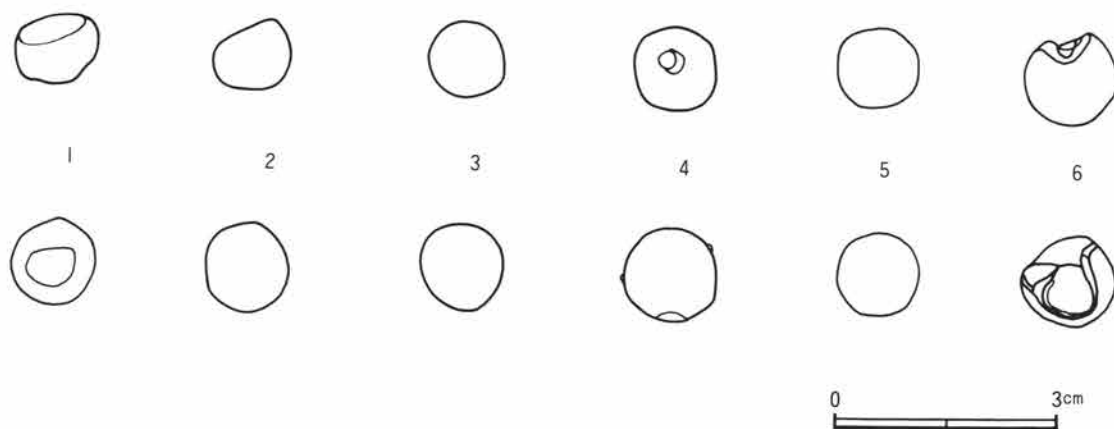


第44図 土鍋実測図

第11表 土鍋観察表

番号	器形	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
1	土鍋	テラス⑩ 2号土坑	口縁部～体部	①並 ②並 ③にふい彩褐色	外面には一面に煤が付着。ふきこぼれ痕(?)を残す。
2	//	//	底部～体部	①並 ②並 ③灰白色	外面には一面に煤が付着。

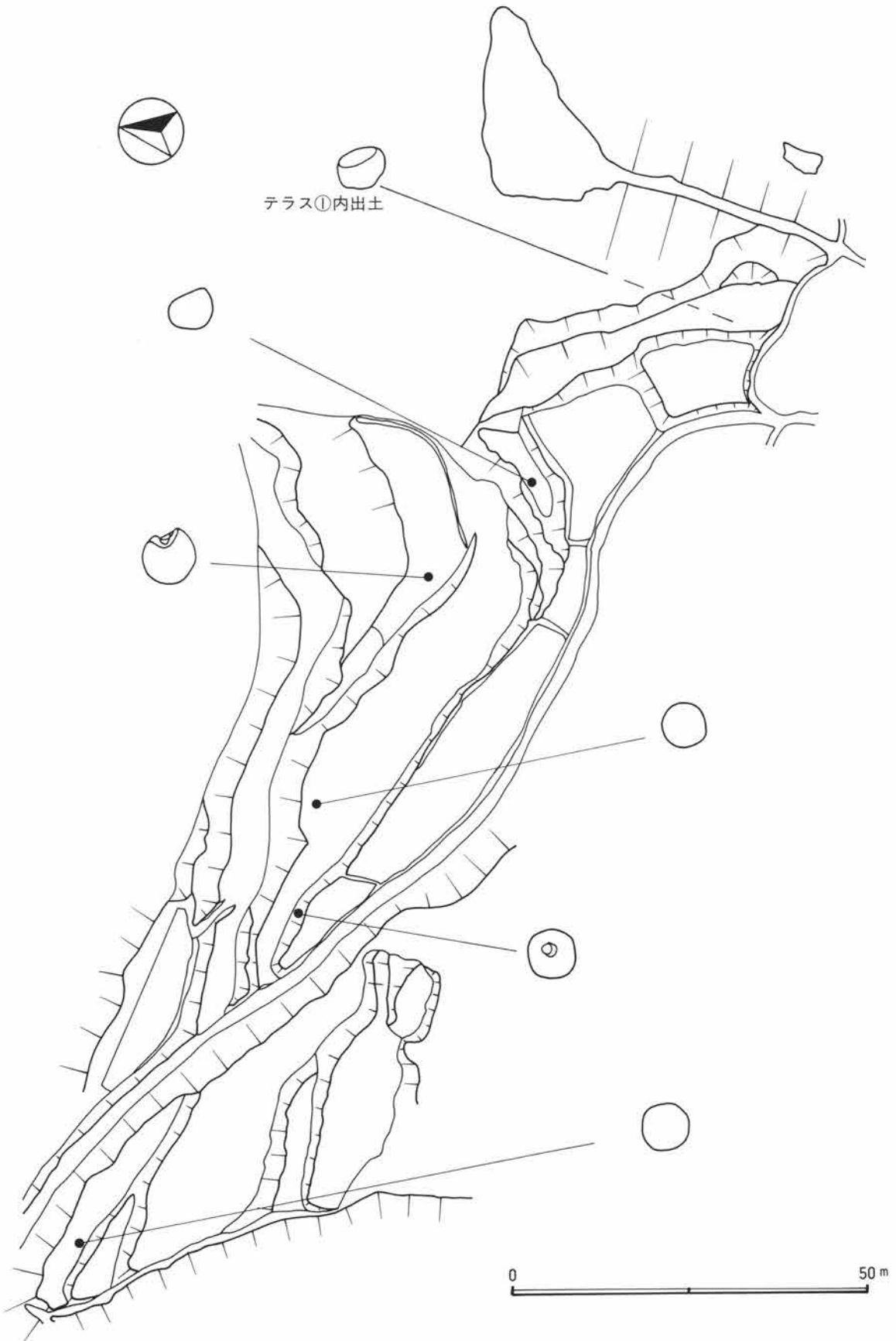
この他、大島上城に関する遺物として、鉄砲玉が6個体出土している。



第45図 鉄砲玉実測図

第12表 鉄砲玉観察表

番号	材質	出土地(遺物番号)	最大径	最小径	重量	備考
1	鉛	テラス① 排土	1.235cm	1.190cm	7.50g	片面が扁平につぶれる。
2	//	// ⑥ 第2層	1.215cm	1.170cm	7.80g	両面とも若干つぶれる。
3	//	// ⑩ No10	1.20 cm	1.18 cm	8.30g	ほぼ球状を呈す。錆化が著しい。
4	//	// ⑩ No20	1.40 cm	1.275cm	11.00g	ほぼ球状を呈す。6個体の中で径、重量とも最大。
5	//	// ⑳	1.21 cm	1.155cm	7.90g	ほぼ球状を呈す。
6	//	// ⑪内 2号墓墳	1.34 cm	1.25 cm	10.30g	一部が大きくくぼみ、その反動で両端の鉛がめくれあがる。

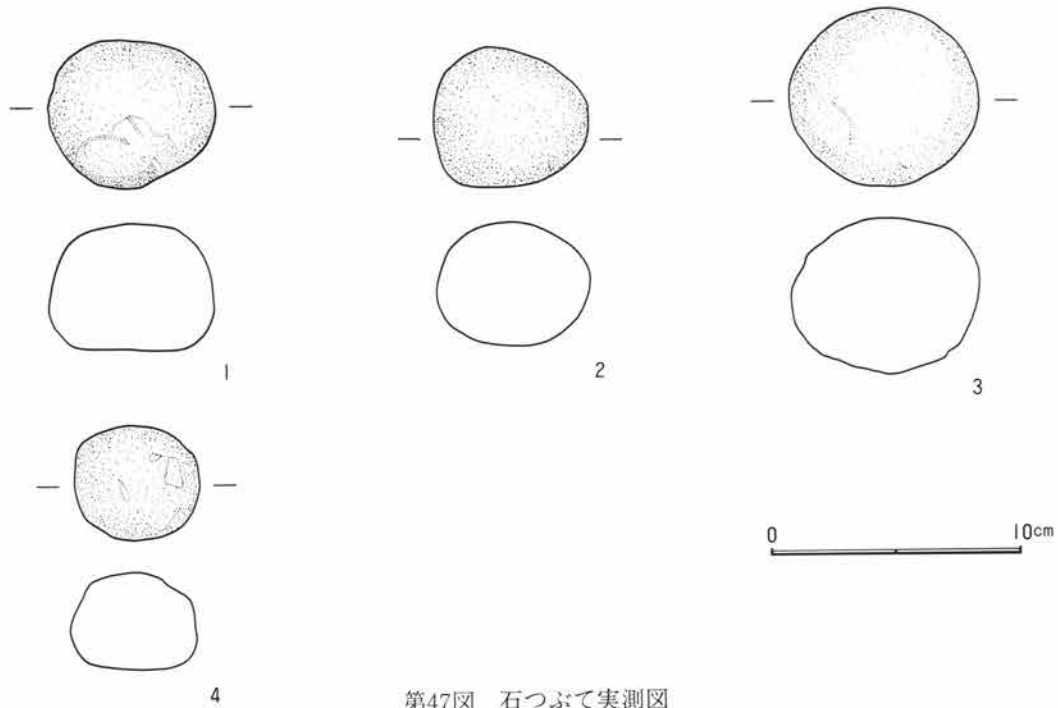


第46図 鉄砲玉出土位置図

第II章 大島上城遺跡

これら6個体の鉄砲玉は発掘調査区全面に散らばって出土しているかのようであり、特に出土状況からは顕著な傾向をつかめなかったが、テラス②の南西に広がる畑地から耕作中に10数個の鉄砲玉を表採していたという事実を考え合わせると、特に「虎口」部分に比較的多くの鉄砲玉が集中して残存していたとすることができる。

また石つぶてと推定される円礫が4個体出土している。



第47図 石つぶて実測図

第13表 石つぶて観察表

番号	出土地	材質	最大径	最小径	厚さ	重量	備考
1	テラス① 表採	角閃石安山岩	6.6cm	5.2cm	4.1cm	231g	
2	テラス④ 表採	〃	6.0cm	5.4cm	4.9cm	243g	
3	テラス① 表採	輝石安山岩	7.4cm	7.0cm	5.7cm	420g	最も大きく重量感がある。
4	テラス④ 表採	角閃石安山岩	5.0cm	4.5cm	3.7cm	105g	

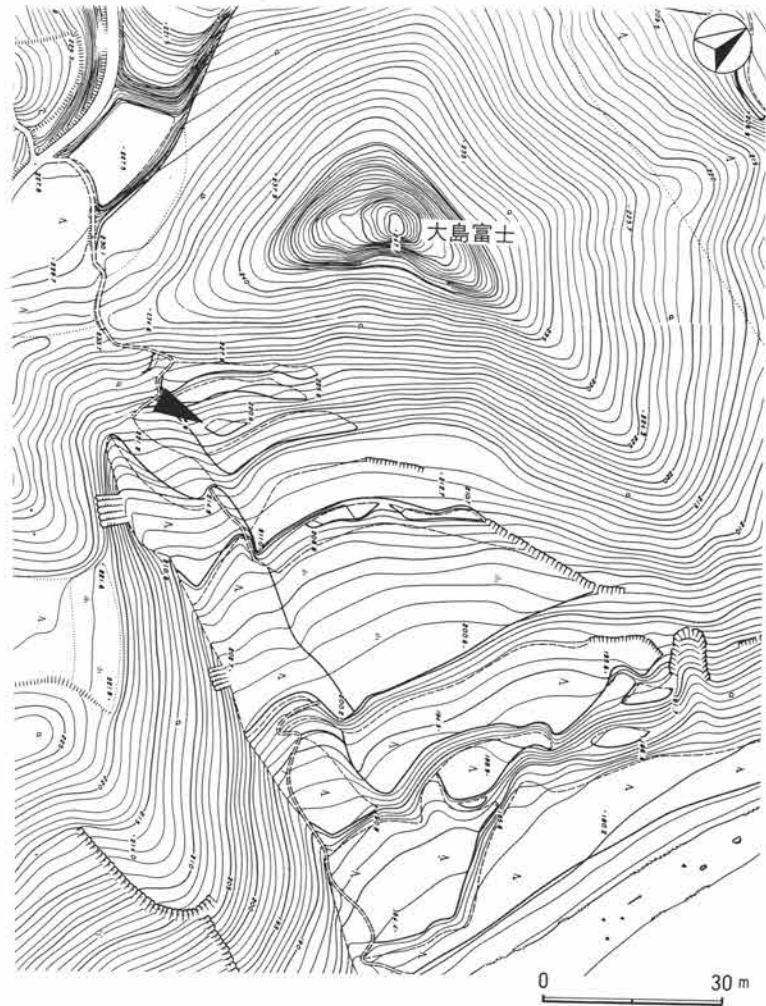
中世城郭の調査によって、石つぶてに利用された、あるいは利用されるであろう円礫が検出されることがある。上記した4個体の円礫も素材は安山岩であり、大島上城の占地する丘陵上からは採集されない材質であることから、戦闘に備えて他地域から運び上げたものであろう。

テラス③ 大島上城の北側に展開するテラスについては、全て調査の手が入り、大島上城との関連の有無を考察する上での調査資料を得ることができた。

しかし、北側においてテラスと呼称された平坦面と同じような遺構が大島富士の東側においても数面確認される。

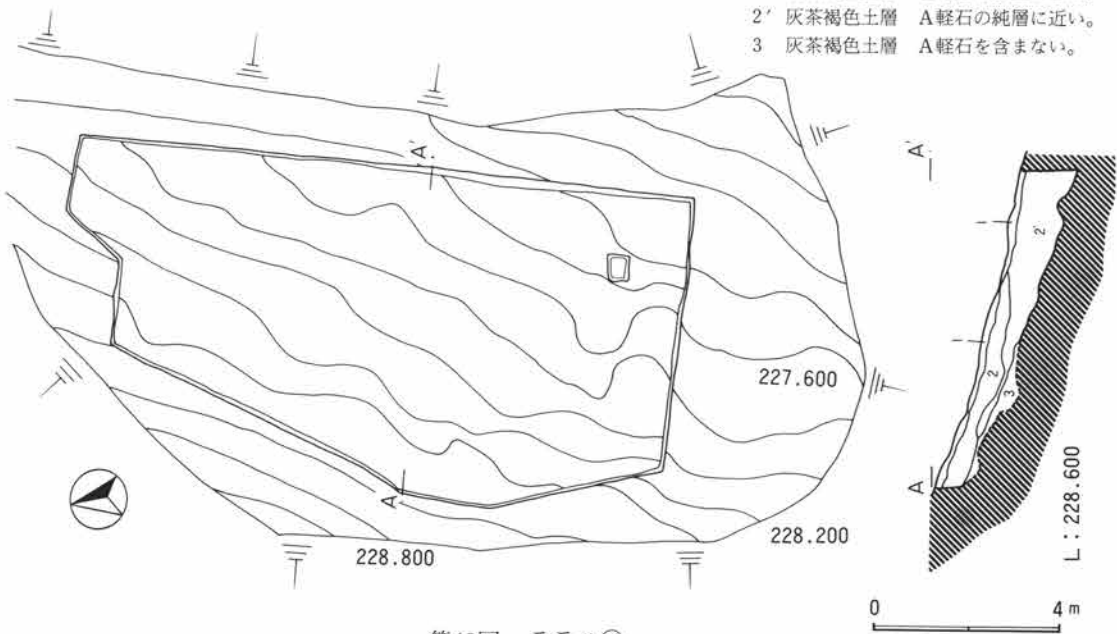
ここでは大島富士の東側のテラスをどこまで、大島上城と関連したものと考えられるかの観点から、テラス③を調査対象地として設定した。

テラス③は大島富士の東側に連なるテラスの中で、最も西側に位置するものであるが、調査の結果、ピットなど遺構の検出は認められず、また遺物の出土も皆無であった。このことから、大島上城の東側への広がりやテラス①までであり、それから東方向への展開はなかったものと推定されるに至った。



第48図 大島富士東側地形図(矢印がテラス③)

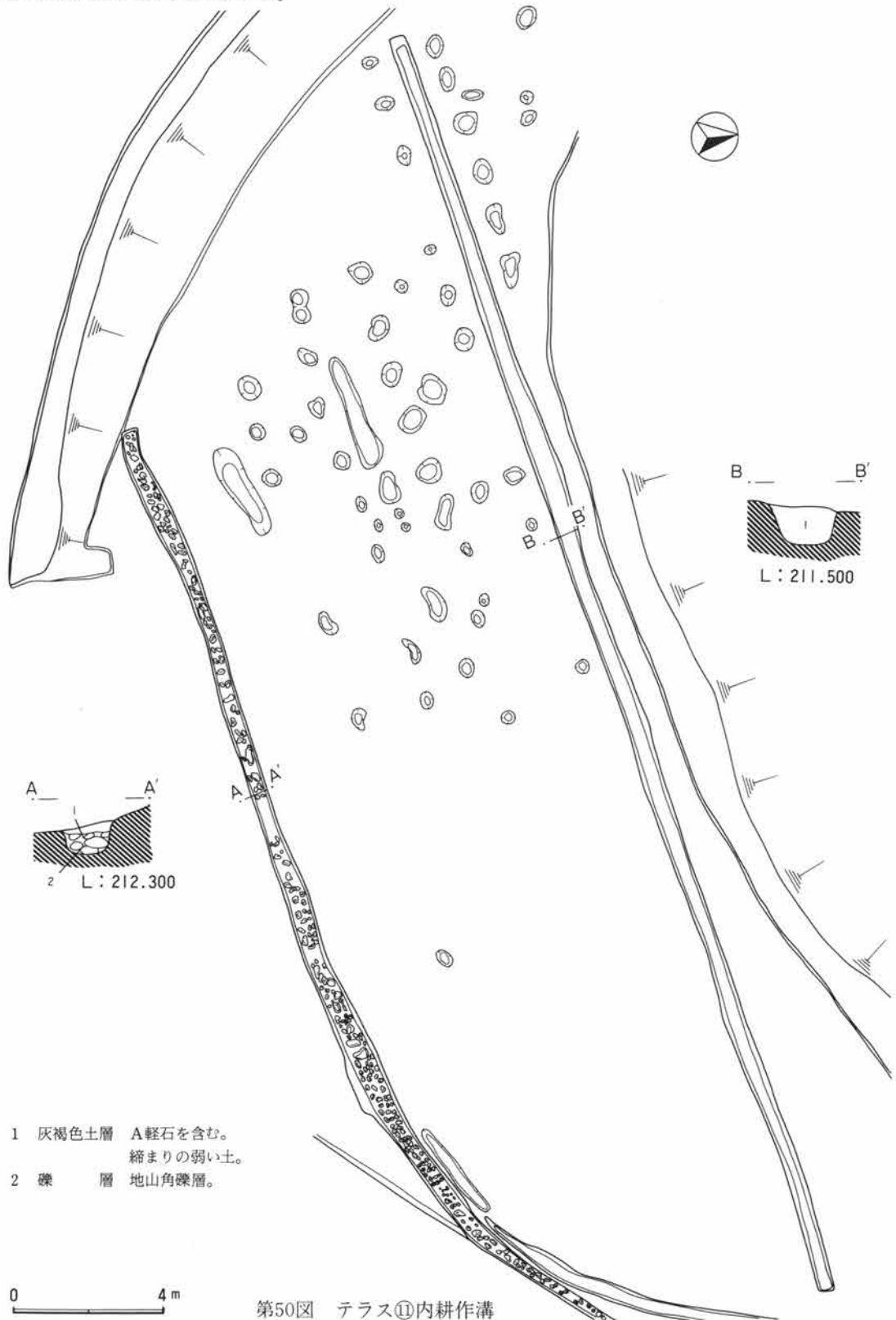
- 1 暗褐色土層 腐食土層。
- 2 灰茶褐色土層 A軽石を多量に含む。
- 2' 灰茶褐色土層 A軽石の純層に近い。
- 3 灰茶褐色土層 A軽石を含まない。



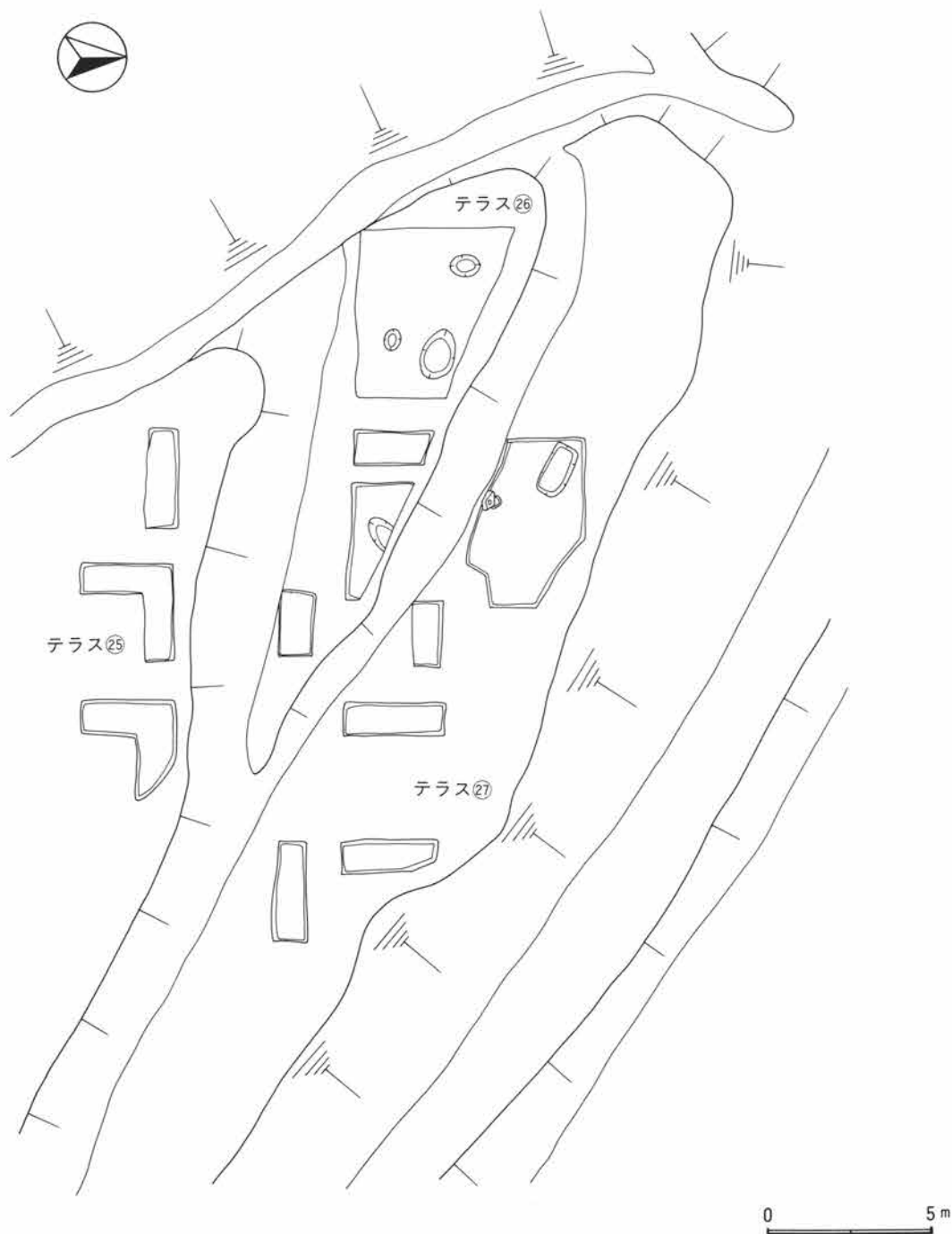
第49図 テラス③

第5節 近 世

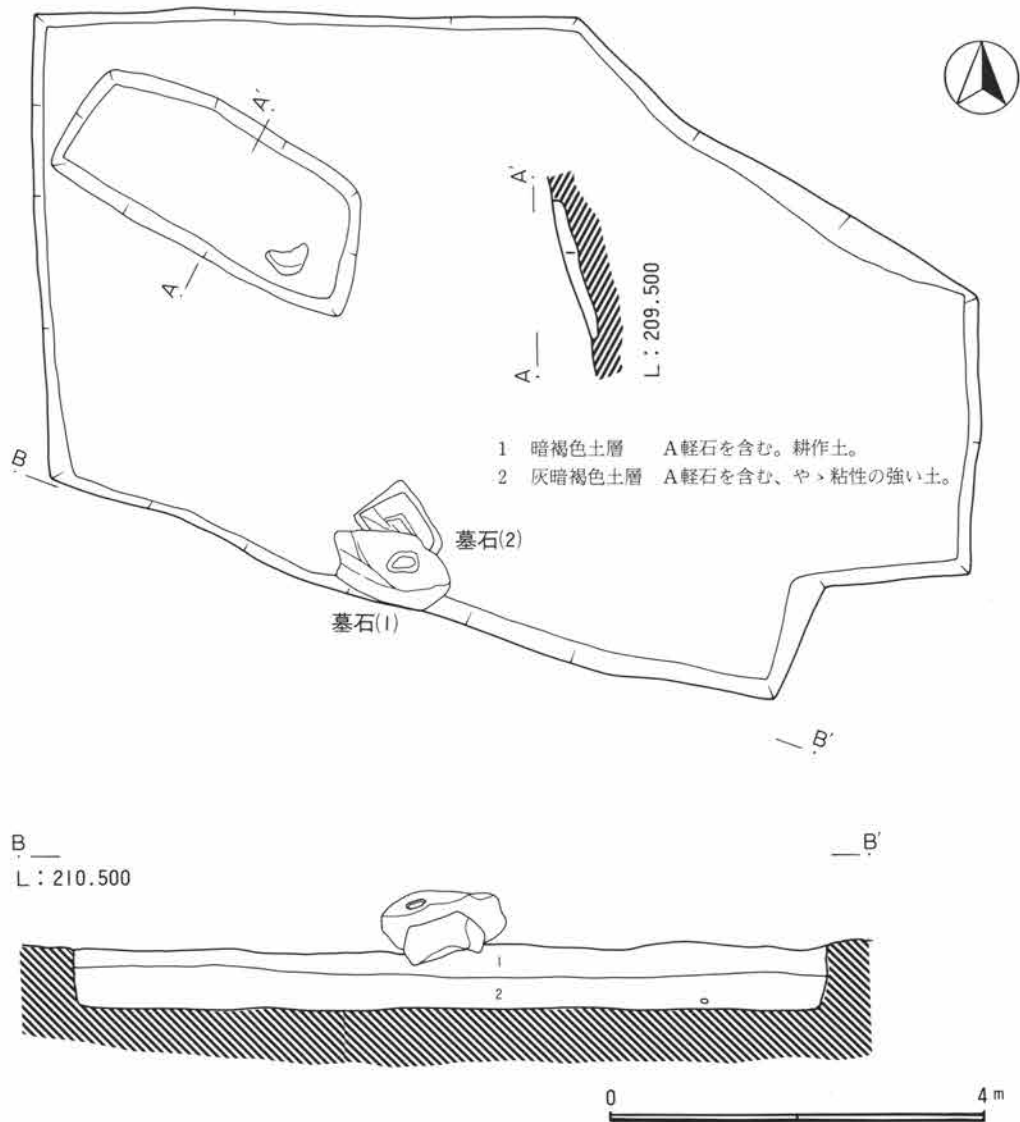
大島上城廃絶後、テラスは畑地として耕作され、近代に至ったものと思われる。耕作に伴うものと考えられる溝や近世陶磁器が出土している。



テラス⑪ ほぼ同じ走行を採り、2本の溝が検出されている。いずれも北東方向から南西方向に走るが、南溝は東端がゆるやかにカーブして収束する。断面箱形の掘り方をもつが溝の中には礫が一面に詰めこまれていたことから、暗渠状の性質をもったものと考えられる。また北の溝は直線のまま走り、南溝同様、断面箱形のしっかりした掘り方をもっていた。いずれも近世の畑作に関連する耕作溝と考えられる。



第51図 テラス⑫⑬⑭



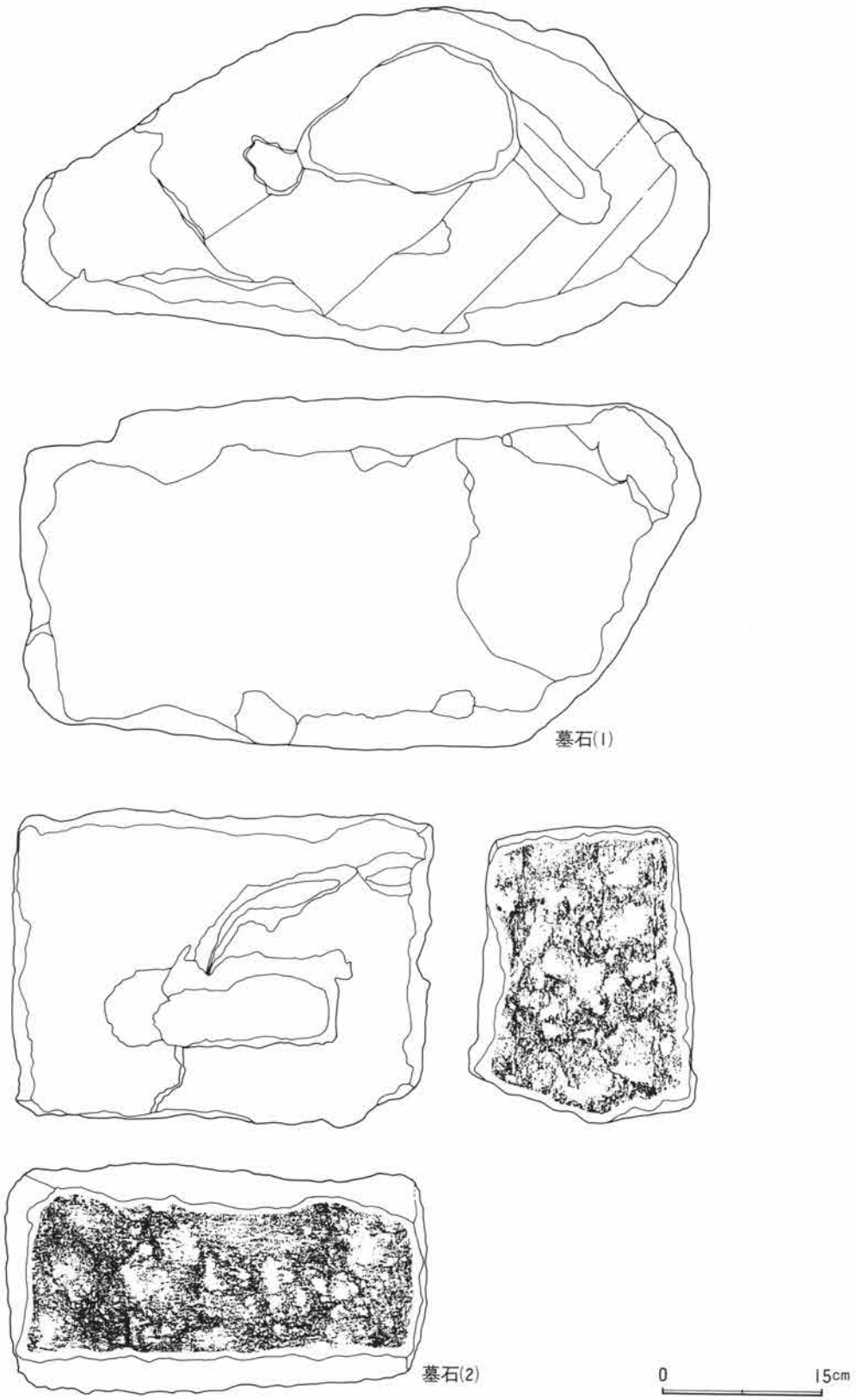
第52図 テラス⑳

テラス⑳ 近世に至っての土地利用は耕地としてだけでなく、墓地としての利用もあったものと考えられる。テラス⑳からは墓石とともに数個のピットが検出された。

墓石は2個体がほぼ接する形で出土したが、この下にピットなどの墓石に関係すると思われる遺構は存在しなかった。北に近接して、長方形の掘り方をもったピットが検出できたが、積極的に墓壇と推定するような資料は得られなかった。しかし、テラス⑳において墓石が検出されたことは、この近辺にかつて墓が存在したことを物語るものであり、検出されたピットも何らかの形で墓に関連するものと推定することができよう。

第14表 墓石実測図

番号	材質	形状	長辺	短辺	厚さ	重量	備考
1	安山岩	茄子形	62cm	31cm	31cm	67.2kg	上面に不定形の凹が穿たれている。 凹の長辺13.5cm。短辺20.5cm。深さ4cm。
2	〃	矩形	37cm	26cm	21cm	33.0kg	上面にくずれた矩形の凹が穿たれている。 凹の長辺21cm。短辺8cm。深さ2cm。



第53図 墓石実測図

第II章 大島上城遺跡

2号墓壙 テラス①の西に偏した位置より2号墓壙が検出された。墓壙は長径1.03m、短径0.9mの偏円形のプランをもち、深さ25cmで鍋底状の掘り方を呈していた。人骨の残りは非常に良好で、軟骨以外の骨は殆ど残存していた。また、遺体は膝を折り抱える様にして掘り方のほぼ中央部に埋葬されており、棺に入れずに直葬したものと思われる。また、頭部の後ろには、遺体が後に倒れるのを防ぐためであろうか、自然礫が数個置かれていた。さらに、2号墓壙の場所より北へ数mの所から平面円形を呈した泥岩質の石が検出されており、これが2号墓壙の蓋石的な役割を担ったものと推定される。

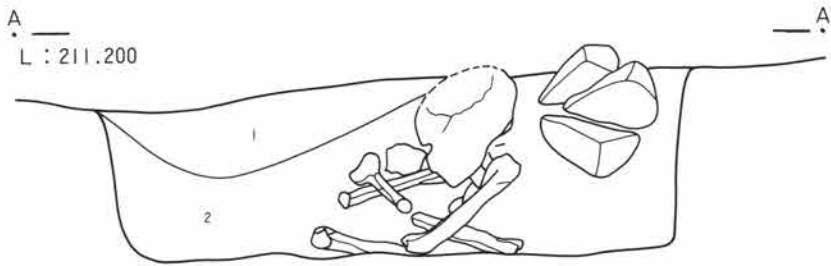
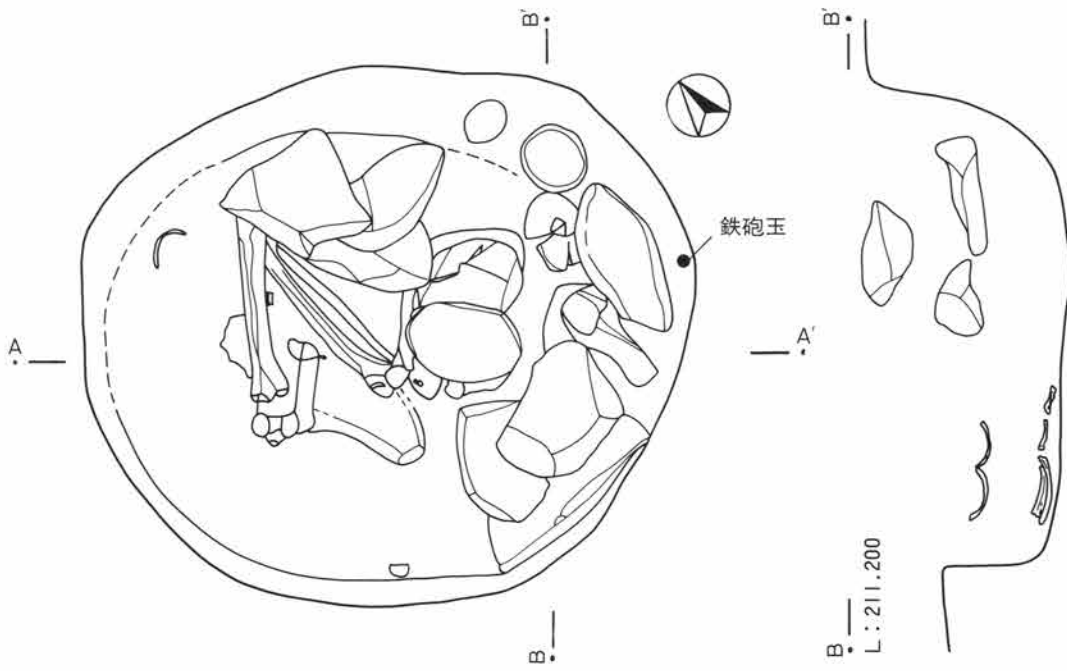
副葬品として、古銭(寛永通宝)、陶器皿、漆器椀、鈴が出土している。古銭は合計11枚で全て寛永通宝であり、いずれも殆ど使用による摩耗が見られず、非常に鮮やかに銭銘が読み取れる。しかも、鑄造年代は寛永13年(1636年)から寛永14年(1637年)～寛永17年(1640年)という非常に限られた年代に集中していることから、2号墓壙の年代は寛永年間の後半を隔たらない時期ということができよう。

また、2号墓壙を特徴的に示す副葬品として、鈴があげられるが、これは生前愛用したものを遺体と共に納めて埋葬する主旨から言えば、墓壙の主は恐らく、鈴を通常使用し得た人、すなわち、神事に携わる可能性のある人物とすることができるのではないだろうか。

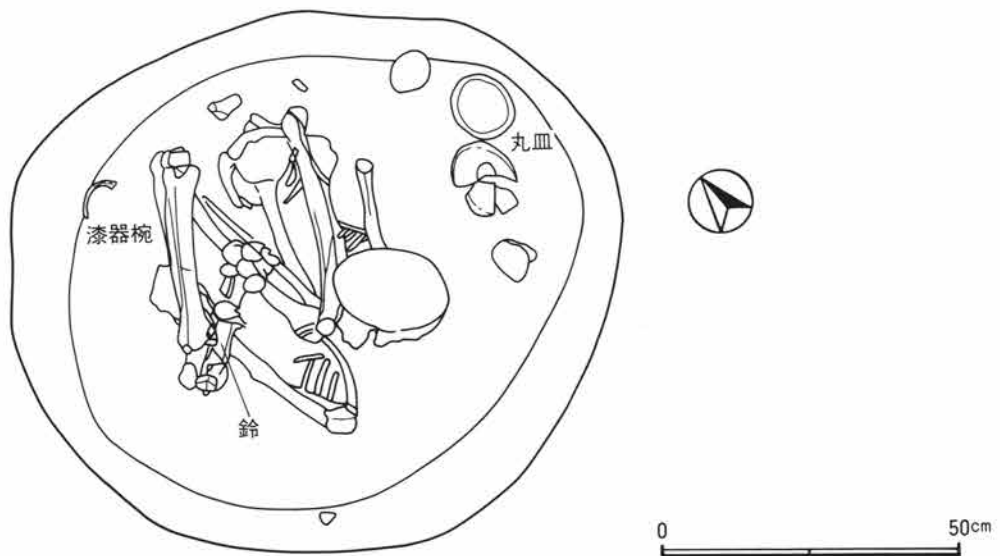
この他、墓壙埋土上面から鉄砲玉が1個体出土しているが、これは、中世に使用された鉄砲玉が流れこんだと考えられるものである。



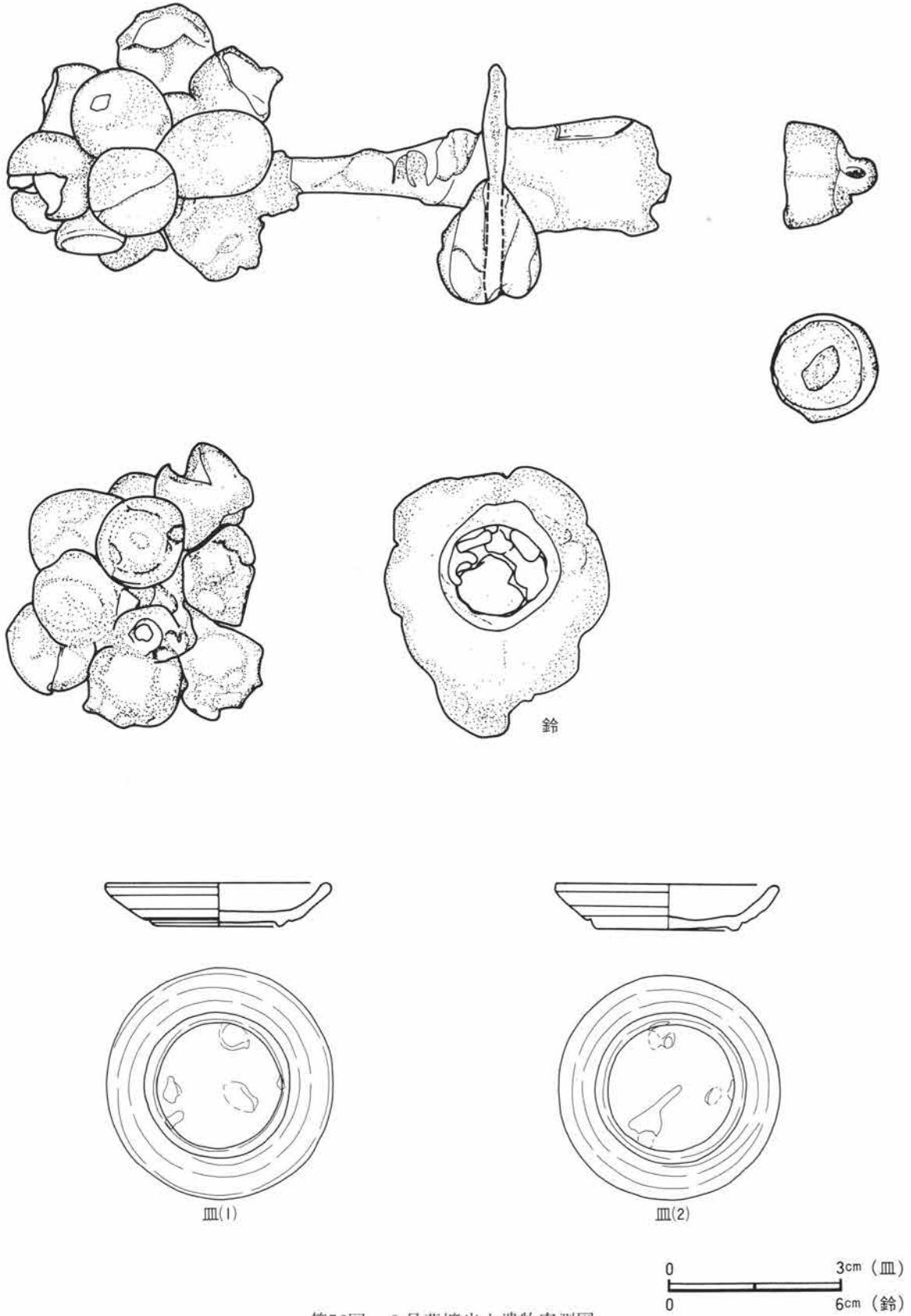
第54図 2号墓壙位置図(矢印)



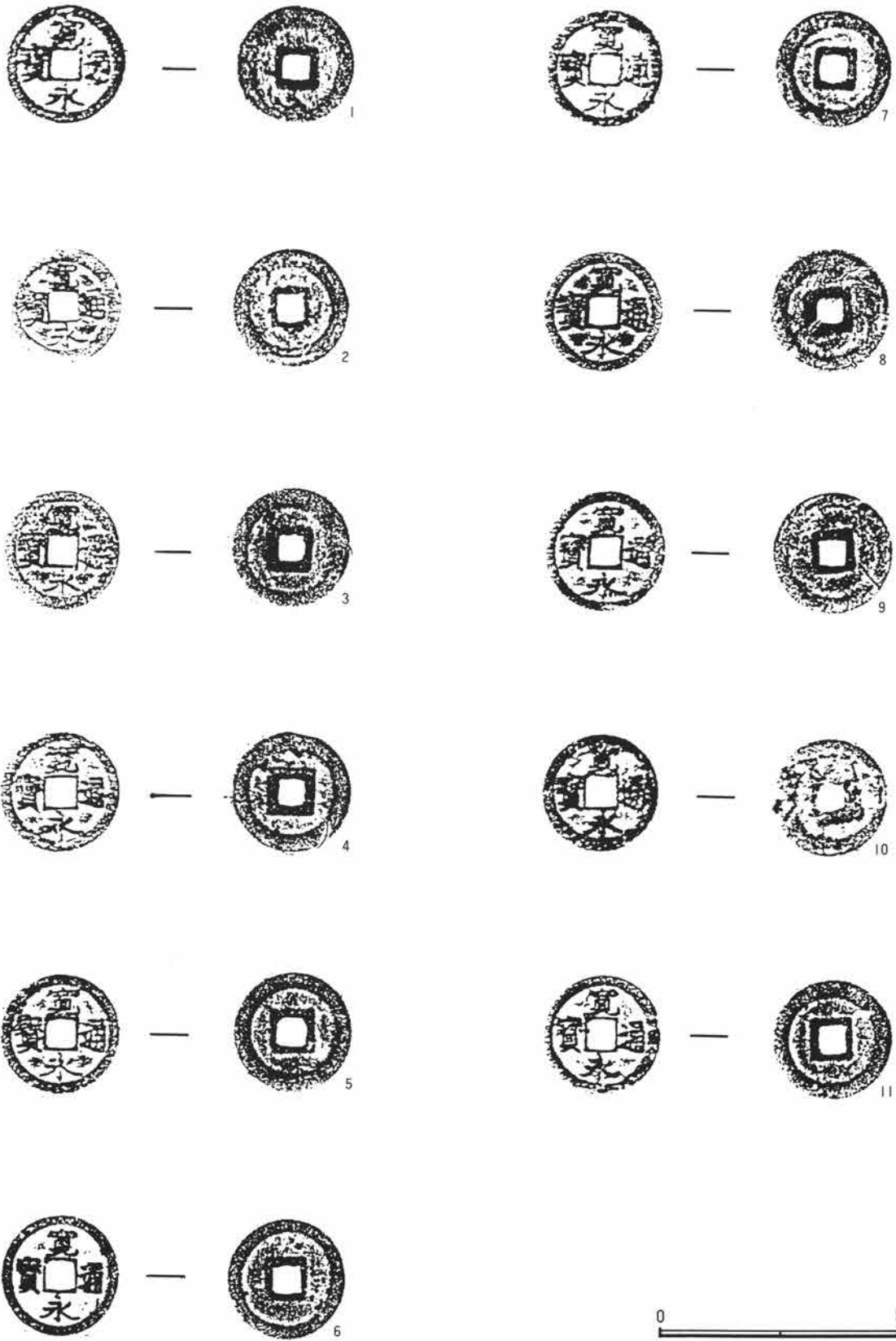
- 1 茶褐色土層
- 2 黒褐色土層 茶褐色土と地山の混合土。
(掘り上げた土をそのまま埋め戻す)



第55図 2号墓墳



第56図 2号墓壙出土遺物実測図



第57図 2号墓壙出土古銭

第II章 大島上城遺跡

第15表 2号墓墳出土古銭観察表

番号	銭貨銘	読順	裏	法 量(cm)		重量 (g)	材質	銭 種 (铸造年及び铸造所)	特 徴
				径	孔 (タテ×ヨコ)				
1	寛永通宝	↻		2.43	6.0×6.0	2.90	銅	寛永13年6月(1636) 武蔵国江戸芝網縄手鑄	二草点手大字(「通」と「永」の点が草書となり、文字が大)。
2	寛永通宝	↻		2.41	6.0×6.0	3.50	銅	寛永14年8月(1637) 陸前国仙台鑄	潤字高頭通(文字が潤達で「通」の字のマ画が高くなる)。
3	寛永通宝	↻		2.43	5.0×6.0	2.70	銅	寛永14年(1637) 常陸国水戸鑄	長永(「永」字が左右に長くのびて書かれている)。
4	寛永通宝	↻		2.43	5.5×5.5	3.70	銅	寛永14年(1637) 豊後国直入郡竹田古町鑄	斜宝深冠(「宝」字が傾斜し、「寛」字の冠が深い)。
5	寛永通宝	↻		2.45	6.0×6.0	3.30	銅	寛永13年6月(1636) 武蔵国江戸芝網縄手鑄	不草点(「通」字と「永」字の点が草書でない)。
6	寛永通宝	↻		2.46	6.0×6.0	3.50	銅	寛永14年12月(1637) 備前国岡山鑄	俯永手(「永」字が俯しててる書体に似ている)。
7	寛永通宝	↻		2.39	6.0×6.0	3.10	銅	寛永14年(1637) 三河国吉田(豊橋)鑄	欠画通刮貝。(通)字のマ画と「寶」字の貝画が他と異なる)。
8	寛永通宝	↻		2.48	5.5×5.5	3.70	銅	寛永13年6月(1636) 武蔵国江戸芝網縄手鑄	不草点(「通」字「永」字の点が草書でない)。
9	寛永通宝	↻		2.47	5.5×5.5	3.50	銅	寛永14年8月(1637) 陸前国仙台鑄	跛寶昂通(「宝」字の足が均等でなく「通」字があがる)。
10	寛永通宝	↻		2.40	5.5×5.5	3.10	銅	寛永14~17年(1637~1640) 常陸国水戸鑄	長永。
11	寛永通宝	↻		2.43	6.0×5.5	2.80	銅	寛永14~17年(1637~1640) 常陸国水戸鑄	宏足寛(「寛」字の足が広い)。

第16表 2号墓墳出土陶磁器観察表

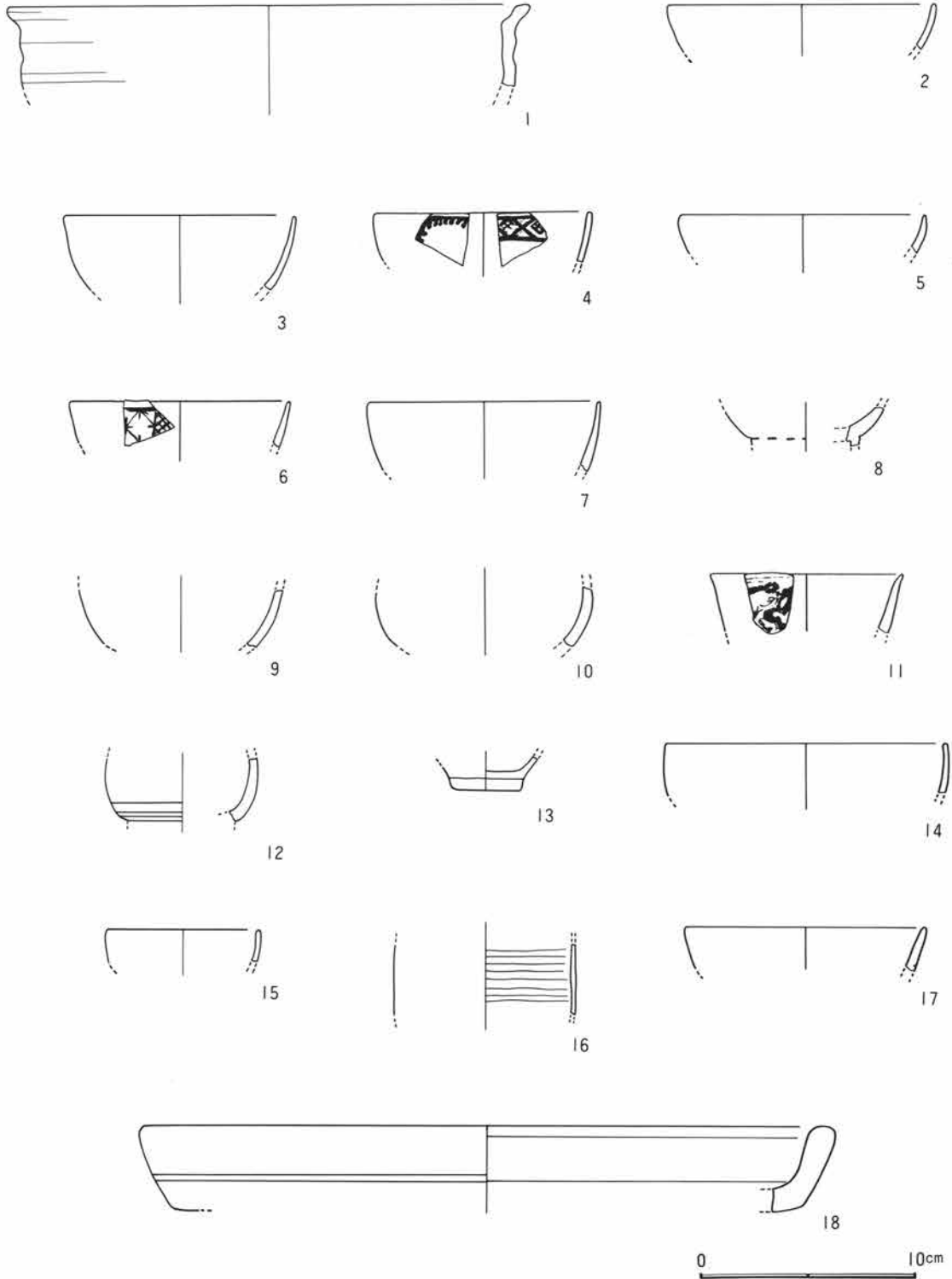
番号	器 種	出土位置	量 目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考
1	陶 器 皿	2号墓墳	完 器	①並 ②並 ③長石	高台は、削出高台。底面にトチン痕あり。釉は石英分が強く乳濁する。	美濃焼 16、17C
2	陶 器 皿	2号墓墳	完 器	①並 ②並 ③長石	高台は、削出高台。底面にトチン痕あり。釉は石英分が強く乳濁する。	美濃焼 16、17C

鈴 12個の小鈴をもつ、握り鈴と考えられる。小鈴の中には小石を入れて鳴り物としての機能をもたせており、所謂、ガラガラ系統の鈴に属するものである。小鈴は中心に向かって槐状に取り付けられているものであり、5cm弱の距離をおいて鏝に至る。鏝は径6cmを測り、縁は蓮弁状をなす(6弁か?)。鏝から下は握り易くするために肥大しており(径3cm弱)、木質のつなぎを狭んで把尻がつく。把尻には房をつけたであろうと推定される突起が残在する。木質は腐敗しており、長さは確定できないが、出土位置より鈴の全長25cm前後が推定できる。神楽の採物であろう。

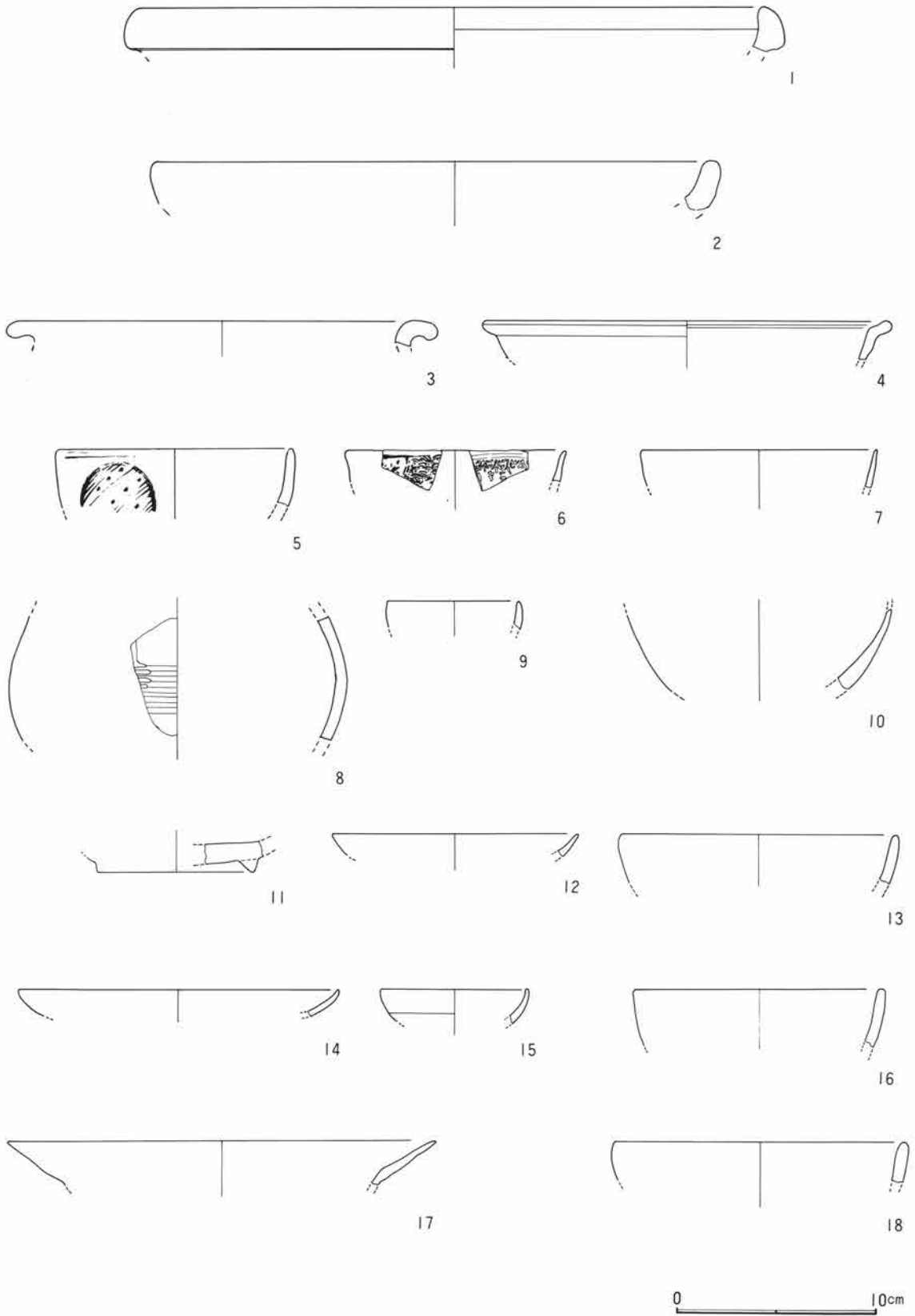
参考文献『日本民俗事典』大塚民俗学会編 1978

陶磁器を中心とした出土遺物

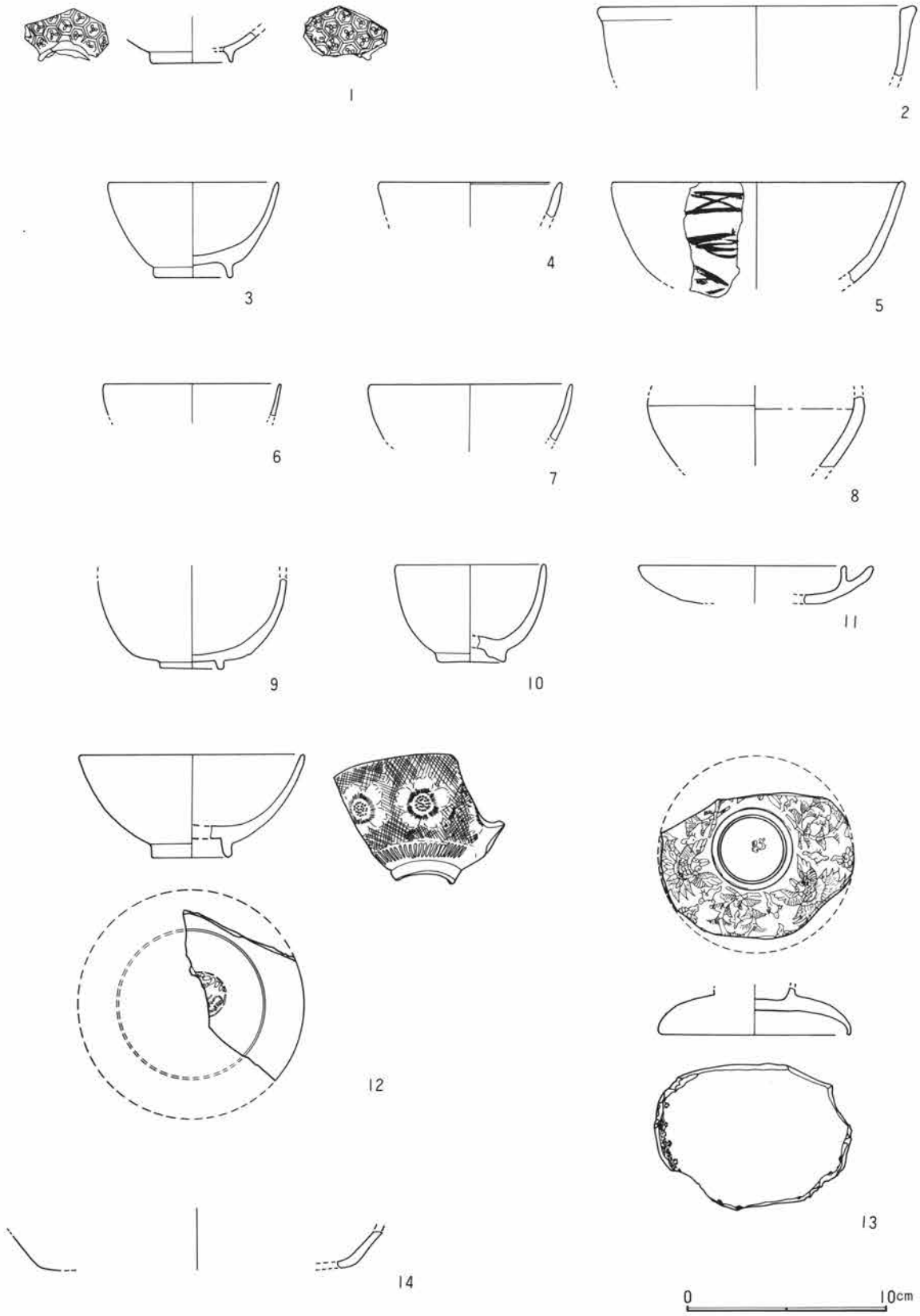
調査区域内より多数の近世陶磁器片が出土している。これらの遺物を総体的に見ると、18世紀後半から遺物量が増大する傾向にある。いずれも、二次的廃棄の所産であると考えられるが器種として香炉、大皿が少なく、また産地として唐津系のものが余り含まれないという特徴を有している。



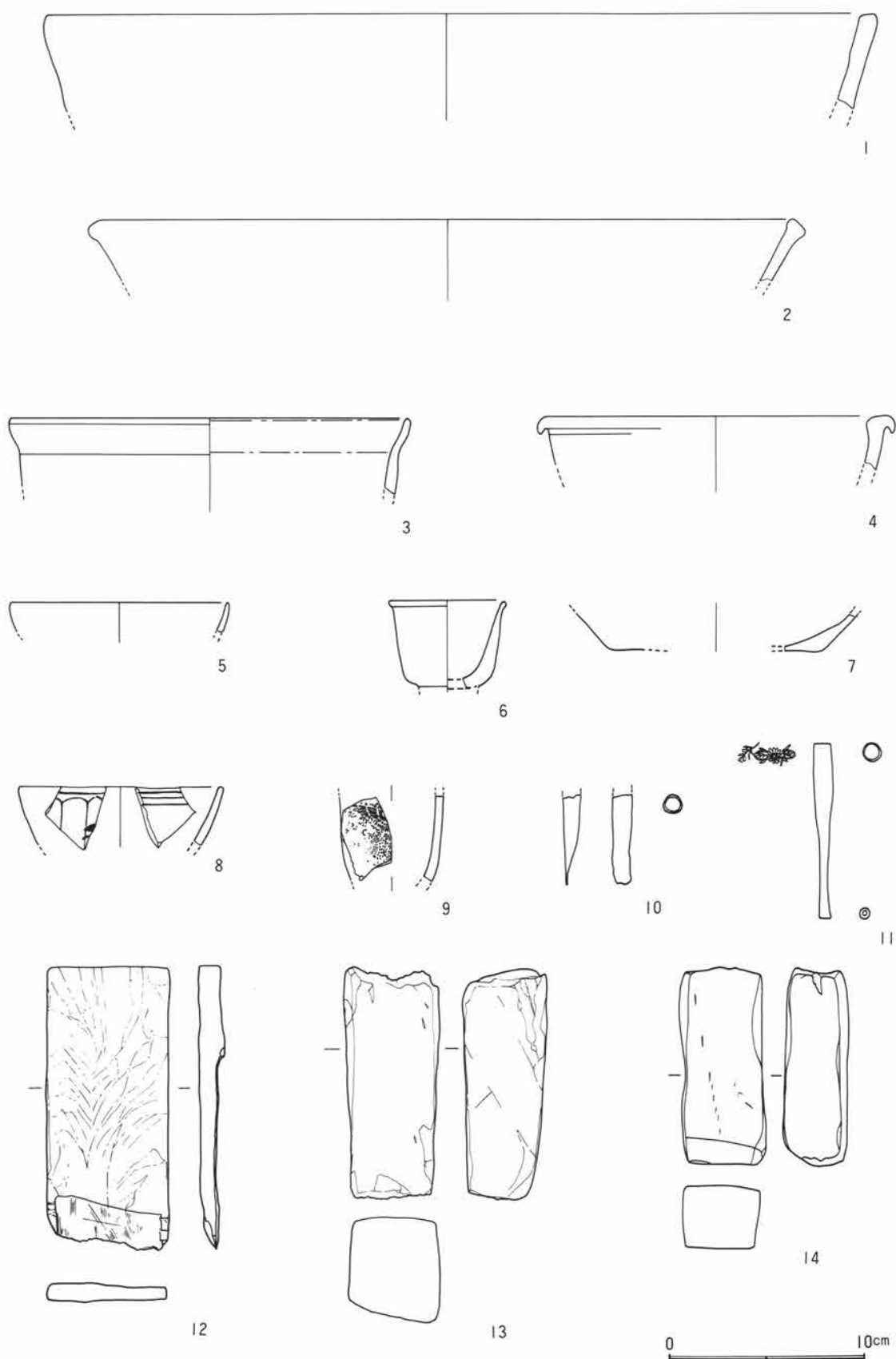
第58図 大島上城遺跡出土陶磁器実測図(1)



第59図 大島上城遺跡出土陶磁器実測図(2)



第60図 大島上城遺跡出土陶磁器実測図(3)



第61図 大島上城遺跡出土陶磁器実測図(4)、石製品実測図

第17表 大島上城遺跡出土陶磁器観察表

番号	器 種	出土位置	量 目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考	図版番号
1	陶 器 播 鉢	テラス① No.2	体 部 片	①並 ②並 ③鉄	内外面に錆色の鉄釉が施され内面に5+αを単位とする節目あり。	美濃焼 17~19C	
2	陶 器 鉢	テラス① No.3	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、鉄絵	端反の口縁部片で、内面に鉄の絵、内外面に長石釉が施される。	唐津系 17、18C	58-1
3	陶 器 灯 火 皿	テラス① 排土	口縁部~ 底部片	①密 ②硬 ③鉄	体部外面下方が露胎となり、他は鉄釉が施される。	不詳 18、19C	
4	陶 器 皿	テラス① 排土	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、銅	内面に淡深緑色の銅釉が、外面に長石釉が施される。	唐津系 17、18C	59-12
5	陶 器 小 碗	テラス③ No.2	口縁部片	①密 ②並 ③長石	内外面に施釉される。	不詳 18C	58-3
6	磁 器 小 碗	テラス③ No.9	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	外面に染付施文あり。	伊万里系 18、19C	58-4
7	陶 器 小 碗	テラス③ A96192グリッド	口縁部片	①並 ②並 ③長石	内外面に長石が施される。	不詳 17~19C	
8	磁 器 小 碗	テラス③	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	外面に染付施文あり。	伊万里系 18C後半	
9	磁 器 小 碗	テラス③	体 部 片	①密 ②硬 ③透明、呉須	内面に染付施文あり。	伊万里系 18C後半	58-10
10	磁 器 小 碗	テラス③ I92B2グリッド	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	外面に染付施文あり。	伊万里系 18C後半	58-2
11	磁 器 小 碗	テラス③ No.1	口縁部片	①密 ②硬 ③透明	白磁片。割れ口に細かい欠割の面取りがある。円形加工の二次製品か？。	伊万里系 19C	58-7
12	磁 器 小 碗	テラス③ No.1	口縁部片	①密 ②硬 ③クローム、鉄色	外面を、クローム青磁とし、鉄色の絵付けあり。内面白磁。	伊万里系 19、20C	58-5
13	磁 器 碗	テラス③ No.25	底 部 片	①密 ②並 ③長石、呉須	内外面に染付施文あり。	伊万里系 17、18C	58-8
14	磁 器 小 環	テラス④ No.8	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	外面に銅版刷絵による、染付施文あり。呉須はベロ藍。	伊万里系 19C後半	58-11
15	陶 器 徳 利	テラス④	体 部 片	①密 ②硬 ③長石	内面にコテの成形痕あり。内外面に施釉。	不詳 19C	58-16
16	磁 器 小 碗	テラス⑥ No.3	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	外面に菊花の染付施文あり。	伊万里系 18C	
17	磁 器 小 碗	テラス⑥	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、鉄	内外面に透明釉が施される。口錆施釉あり。	伊万里系 19、20C	58-14
18	陶 器 小 碗	テラス⑦	口縁部片	①密 ②硬 ③鉄	内外面に茶褐色の鉄釉が施される。	不詳 17~19C	
19	陶 器 皿	テラス⑦ No.3	口縁部片	①粗 ②並 ③長石	内外面に施釉。	美濃焼 17、18C	
20	陶 器 小 碗	テラス⑦	体 部 片	①密 ②硬 ③鉄	内外面に施釉。	不詳 17~19C	
21	陶 器 鉢	テラス⑨ No.3	口縁部片	①並 ②並 ③灰、鉄	大形の片口鉢か、こね鉢片で、外面の一部に鉄釉で小斑を施文。	不詳 18~20C	59-1

第II章 大島上城遺跡

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考	図版番号
22	磁器碗 小	テラス⑨ No 4	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	外面に丸文を染付。呉須は山呉須。	伊万里系 18C	59-5
23	陶器鉢 小	テラス⑩ No 2	口縁部片	①密 ②軟 ③灰	内外面に施釉。口縁は反折となる。	美濃、瀬戸 16、17C	59-4
24	陶器皿 小	テラス⑩ No11	高台部片	①並 ②並 ③灰、鉄	内面に鉄絵あり。高台端部を除き、灰釉を施す。	美濃焼 17C	59-11
25	磁器碗 小	テラス⑩ No18	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	内外面に型紙刷絵の染付あり。呉須はペロ藍。	伊万里系 19C	59-6
26	磁器碗 小	テラス⑩ No21	口縁部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	内外面に染付施文あり。	伊万里系 18、19C	
27	磁器 不詳	テラス⑩ No22	体部片	①密 ②硬 ③透明、呉須	外面に染付施文あり。呉須は山呉須。	伊万里系 18C	
28	陶器 不詳	テラス⑩ No25	口縁部片	①並 ②硬 ③長石	内外面に施釉。	不詳 18、19C	
29	陶器 小型甕	テラス⑩ No36	体部片	①密 ②硬 ③鉄	内外面に施釉。	不詳 19、20C	59-8
30	陶器皿 小	テラス⑪ No 4	口縁部片	①並 ②軟 ③白土	外面下半は露胎となり、他は白土掛けされる。	不詳 18、19C	59-15
31	磁器碗	テラス⑪ No 7	体部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	外面に銅版刷絵による施文あり。	伊万里系 19、20C	
32	陶器碗	テラス⑪ No 9	口縁部片	①並 ②並 ③長石、呉須	外面に染付施文あり。	唐津系 18C	
33	磁器皿	テラス⑪ No10	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	内面に染付施文あり。	伊万里系 17、18C	59-14
34	磁器碗 小	テラス⑪ No18	高台部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	内外面に印判刷絵による染付施文あり。	伊万里系 19、20C	60-1
35	陶器碗	テラス⑪ No21	口縁部片	①並 ②並 ③透明、呉須	外面に染付施文あり。	唐津系 18C	59-16
36	陶器炉 香	テラス⑪ No34	口縁部片	①並 ②並 ③胎釉	内面下半を除き施釉。	美濃焼 17、18C	60-2
37	磁器碗	テラス⑪ No38	高台部片	①密 ②硬 ③長石、灰色、桃色	外面に灰色。桃色釉の施文あり。高台端部を除き施釉。	伊万里系 20C	60-3
38	陶器 洋食器皿	テラス⑪ No40	口縁部片	①密 ②軟 ③長石、緑、赤、紫	内面に施文あり。	不詳 20C	
39	磁器蓋	テラス⑪ No44	% 個体	①密 ②硬 ③長石、呉須	蓋付碗の蓋。外面に鳥花文の刷絵染付あり。内面に環珞文が施される。	伊万里系 19、20C	60-13
40	陶器碗	テラス⑪	口縁部片	①並 ②硬 ③長石、呉須	外面に染付施文あり。	唐津系 17、18C	60-5
41	陶器碗	テラス⑪ No46	口縁部片	①並 ②軟 ③長石	内外面に施釉される。	美濃焼 18C	
42	磁器碗 小	テラス⑪	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、呉須	全体的に淡い瑠璃釉調を呈す。	伊万里系 19C	

番号	器 種	出土位置	量 目	胎土・焼成・釉調	特 徴	備 考	図版番号
43	磁 器 小 碗	テラス⑪ No47	口縁部片	①密 ②硬 ③長石	内外面に白磁釉が施される。	伊万里系 19、20C	60-7
44	磁 器 徳 利	テラス⑪ No48	体 部 片	①密 ②硬 ③長石、呉須	外面に型紙刷絵による染付あり。内面は無釉。	伊万里系 19C	61-9
45	陶 器 碗	テラス⑪ No50	口縁部片	①並 ②並 ③長石、呉須	外面に染付施文あり。	唐津系 17、18C	59-18
46	陶 器 皿	テラス⑪ No54	底 部 片	①並 ②並 ③長石	底面を除き内外施釉。	不詳 18~20C	
47	陶 器 碗	テラス⑪	体 部 片	①並 ②硬 ③鉄	体部外面下方に露胎部あり。釉は黒色を呈し施釉は薄い。	美濃、瀬戸 17C	
48	陶 器 小 碗	テラス⑪ No36	½ 個 体	①並 ②並 ③灰、赤絵	高台部を除き施釉。外面に上絵付の赤絵が施される。	美濃焼 18C	60-9
49	磁 器 碗	テラス⑫ Bトレンチ	¼ 個 体	①密 ②硬 ③長石、呉須	外面に染付施文あり。ペロ藍。	伊万里系 19C	60-12
50	磁 器 小 杯	テラス⑫ Bトレンチ	口縁～ 底部	①密 ②硬 ③長石、呉須	内外面に染付施文あり。ペロ藍。	伊万里系 19、20C	60-10
51	陶 器 小 鉢	テラス⑬ No 1	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、白土	外面に白土の刷毛掛あり。	京焼系 18、19C	61-3
52	陶 器 片 口 鉢	テラス⑬ No 3	口縁部片	①密 ②硬 ③灰	口縁部を折り返す。内外面に施釉。	不詳 17、18C	61-4
53	軟質陶器 鍋	テラス⑬ No 2	口縁部片	①並 ②並 ③無釉	胎土中に雲母粒を含む。全体的に器肉は薄作り。小泉焼（邑楽郡）か。	在地 18、19C	61-2
54	磁 器 小 碗	テラス⑭ No 2	体 部 片	①密 ②硬 ③長石、赤絵	外面に上絵で赤絵が施される。	伊万里系 18、19C	
55	磁 器 小 碗	テラス⑮	口縁部片	①密 ②硬 ③長石、赤絵	内面に上絵で赤絵が施される。	伊万里系 18、19C	61-5

第18表 吸口観察表

図版番号	器 種	法 量			特 徴
		長 さ	径	重 量	
61-10	吸 口	8.6cm	0.6cm	4.0g	端部に菊花をあしらった刻文が施される。
61-11	//	4.4cm+α	0.9cm	11.5g	吸口側の片側をつぶす。

第19表 石製品観察表

図版番号	器種	材質	法 量			特 徴
			長 さ	幅	厚 さ	
61-12	硯	粘板岩	13.9cm+α	6 cm	1.2cm+α	陸部は剥離しており、海部も欠損が著しい。
61-13	砥石	砂 岩	11cm	4.4cm	3.9cm	長側面4面全てに使用痕が確認される。
61-14	//	//	9.2cm	4.0cm	2.9cm	長側面4面と短側面1面に使用痕が認められる。短側面欠損。

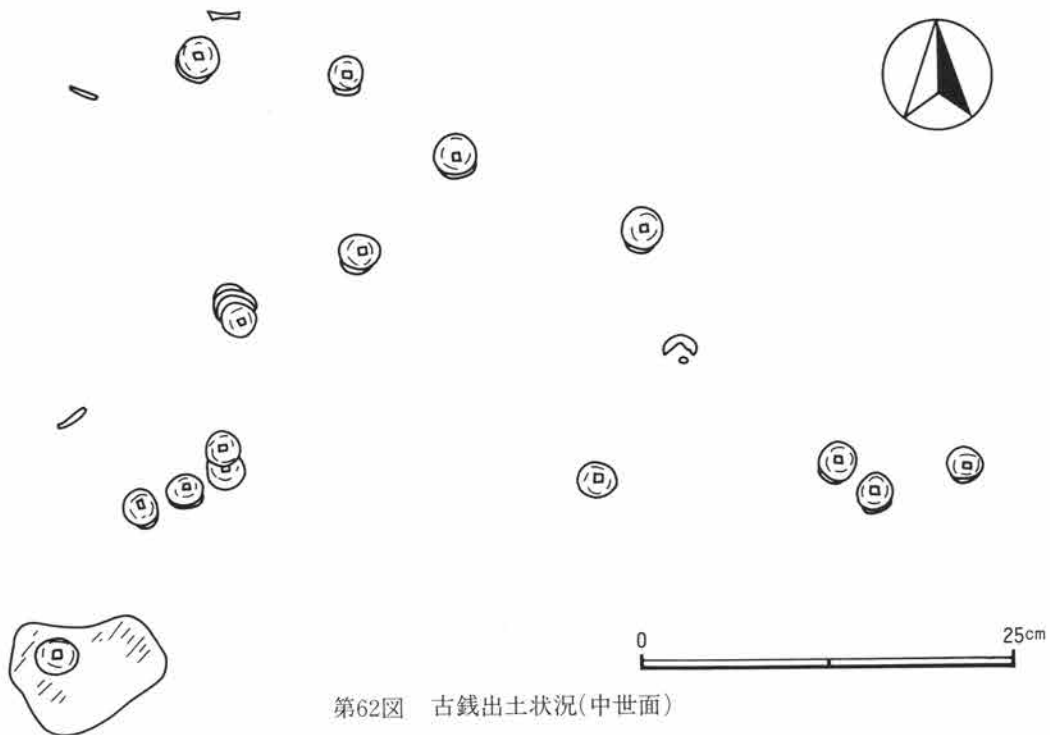
第II章 大島上城遺跡

大島富士 大島上城の主郭が立地する丘陵の東に接して、大島富士が存在する。本丘陵と大島富士の間には大きな谷が入り、大島富士自体、単独丘陵の様相を呈する。特に、その傾向は北からの眺めにおいて顕著であり、北に位置する大島地区からはまさしく富士山のようにきれいなシルエットを見ることができる。

大島富士は当初、その立地から大島上城の物見台としての可能性が想定され、調査に着手したが、物見台としての機能を積極的に裏づける遺構、遺物の検出を見ることはできなかった。

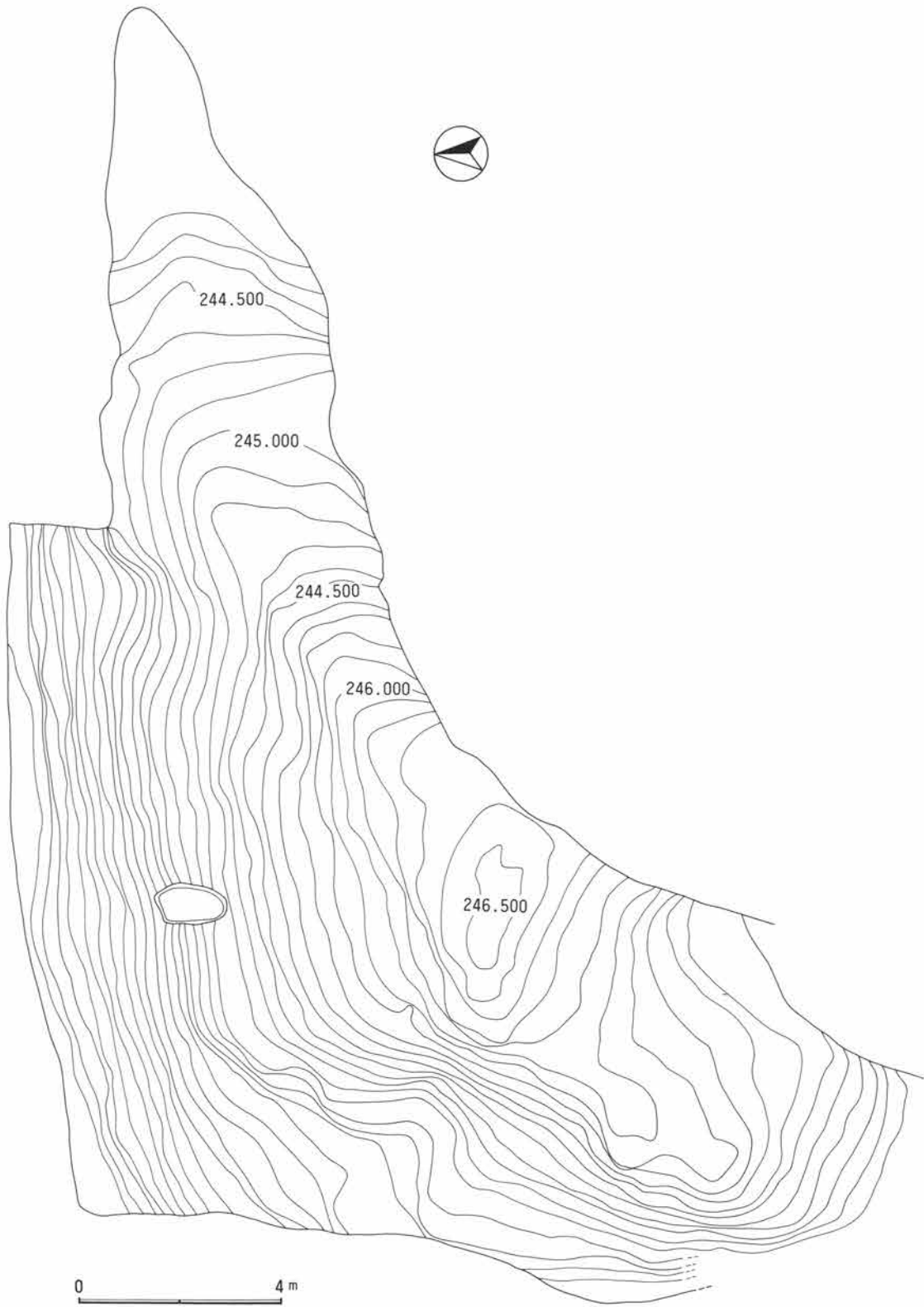
大島上城との関連は薄らいだものの、大島富士の信仰の山として性格を裏づける遺構、遺物を検出することができた。

大島富士は縄文時代にピットが数基存在したことは既述の通りであるが、ピット確認面より数cm上面において古銭の出土を見た。不規則に散りばめられて、合計34枚の古銭が出土しているが、内No42の古銭は桐の函状のものに納められていた痕跡を滞っていた。

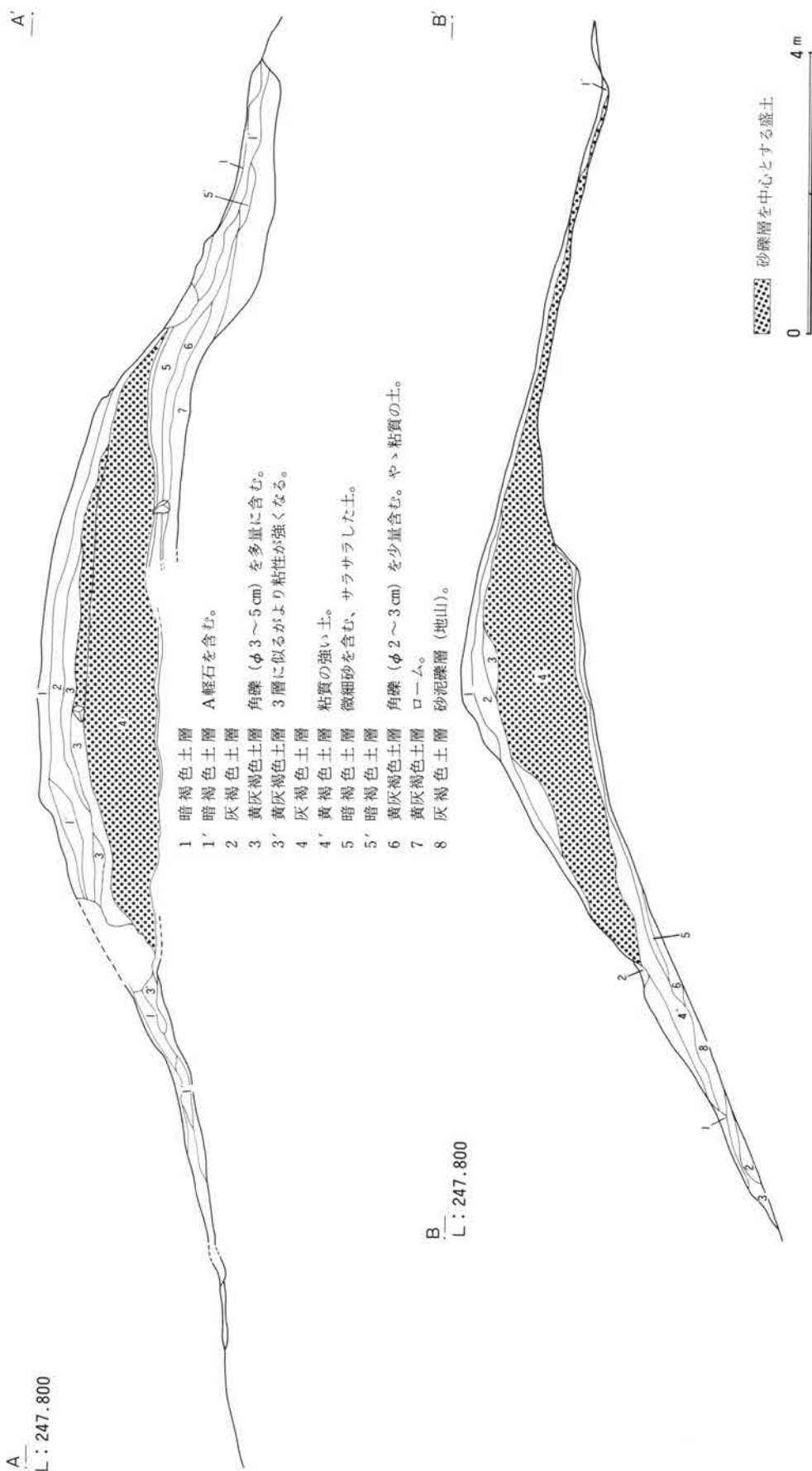


第62図 古銭出土状況(中世面)

この古銭の上には泥岩質の礫岩を主体とする礫層が大島富士の頂部に乗る形で中心部において約1mの厚さで堆積していた。これは大島富士の縁辺をカットし、この時に出土した土を盛りあげたものであり、明らかに人為的な地形と推定されるものである。礫層の下に見られた34枚の古銭は土地の神に対して、奉納されたものと考えることができよう。また、その時期についてはここから出土した34枚の古銭が開元通宝(西暦621年)2枚、宋通元宝(968年)1枚、淳化元宝(990年)1枚、景德元宝(1005年)1枚、祥符元宝(1008年)3枚、天禧通宝(1018年)1枚、天聖元宝(1023年)1枚、皇宋通宝(1039年)2枚、禧祐元宝(1057年)1枚、熙寧元宝(1068年)2枚、元豊通宝(1078年)2枚、元祐通宝(1093年)5枚、紹聖元宝(1094年)2枚、元符通宝(1098年)1枚、聖宋元宝(1101年)1枚、政和通宝(1111年)1枚、永樂通宝(1368年)7枚という内訳であることから、古銭の鑄造年代がそのまま遺跡の年代同定に延用出来ないという前提はあるものの、最も新しいものでも永樂通宝(1368年)までであるという事実から、中世でも前半の時期を考慮することができそうである。すなわち、大島富士はおそくとも中世の前半以降に信仰対象となり、これに伴って古銭の奉納及び土盛りが成されたものと推定することができる。



第63図 大島富士(中世面)



第64図 大島富士地層断面図

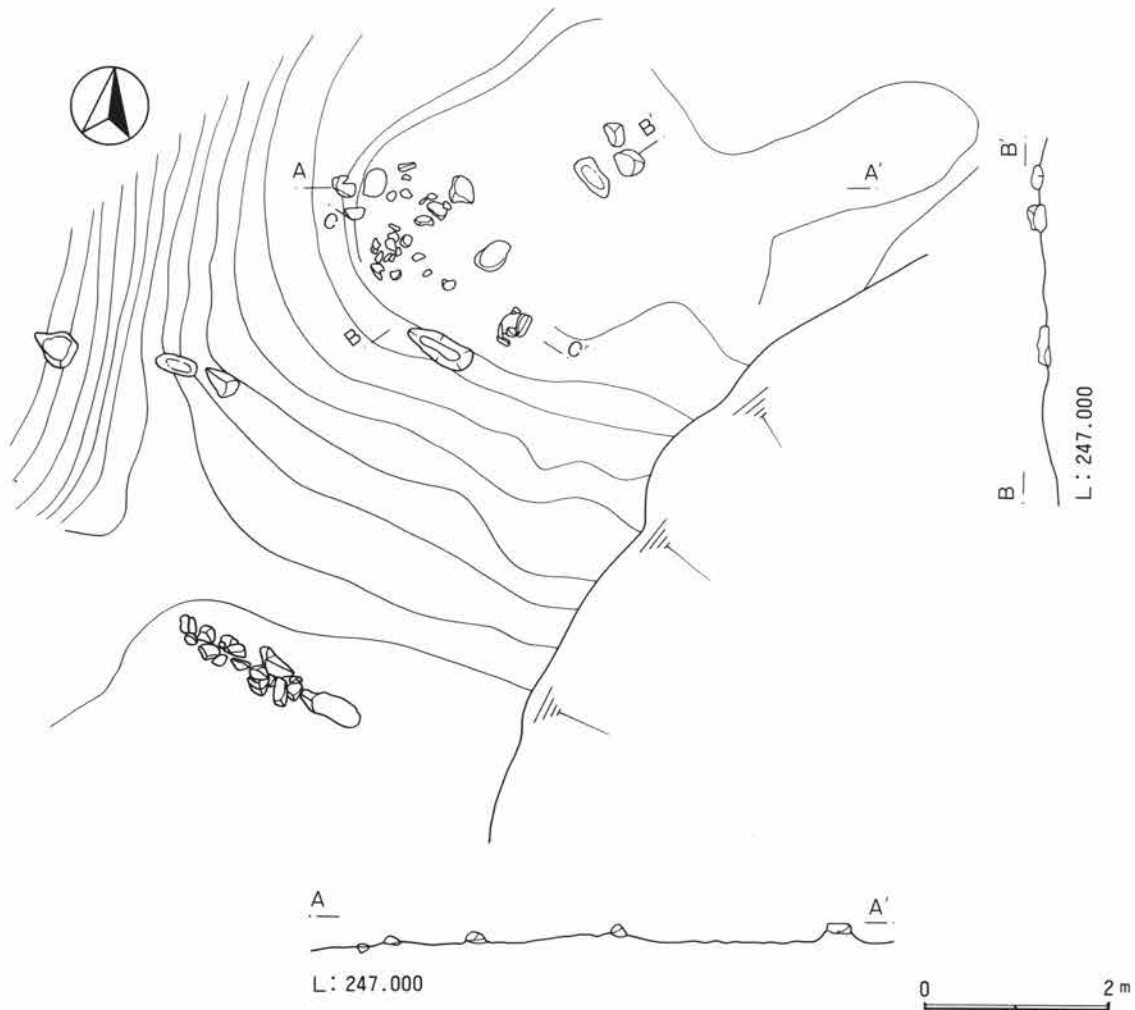
信仰の山としての大島富士は近世まで引き継がれる。前述した角礫層の上に若干の間層を置いて、また古銭が出土する面がある。これはA軽石（浅間山を供給源として1783年噴火）の除去によって姿を現したもので、30枚の古銭が検出された（第20表No1～No30）。これら30枚のうち、19枚が寛永通宝であり、この面が江戸中期以前に位置することは、埋土と古銭の面から首肯できよう。

更に、この江戸中期以前の面からは直線的に並ぶ配石と共に、柱穴が検出された。柱穴を結ぶラインは直線的な配石に平行するもので、これは同時に南から大島富士に登る、登坂路にほぼ直行するラインであると言える。

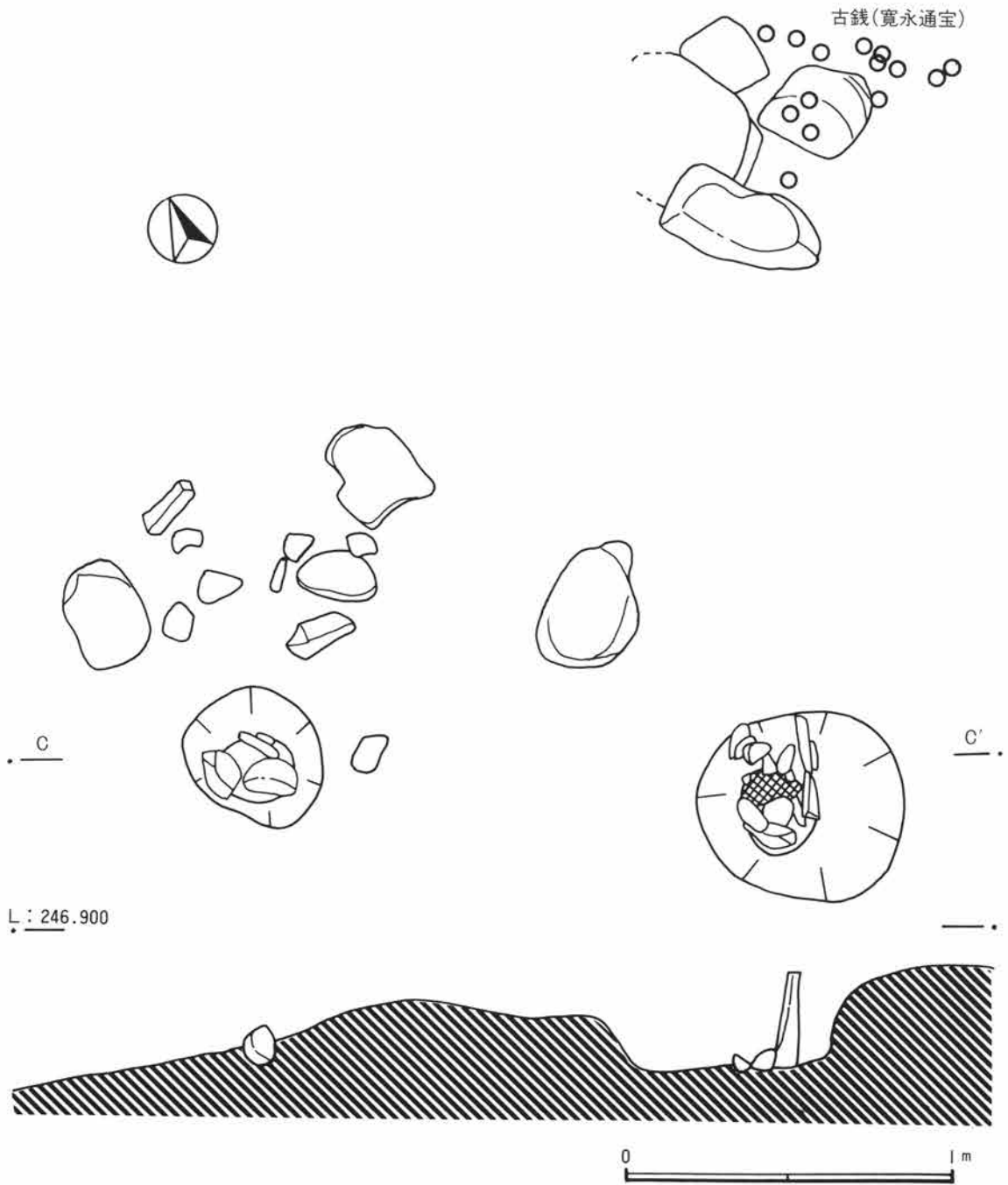
柱穴は北西から南東方向に並ぶもので、大小2つのピットから成る。いずれも、栗石と思われる根固め石を据えており、特に東のピットからは木質片が立った状態で検出された。ピット間の距離は心々で1.62mを測り、円形の掘り方プランを有していた。立地状況から鳥居状の構造物がここに建っていたものと推定される。

また、先述したNo 1 からNo30の古銭はこの柱穴ラインから北東方向に、約2mの距離を置いて検出された礫の周辺から出土しており、賽銭として大島富士に納められたものと考えられる。

大島富士の頂部は鳥居状構造物と推定されるピット及び古銭の出土した箇所からさらに北東方向に伸びており、ここが最も安定した平坦面となることから、この平坦面に、所謂、浅間信仰にまつわる木造建造物(社)が存在していたものであろう。



第65図 大島富士遺構位置図

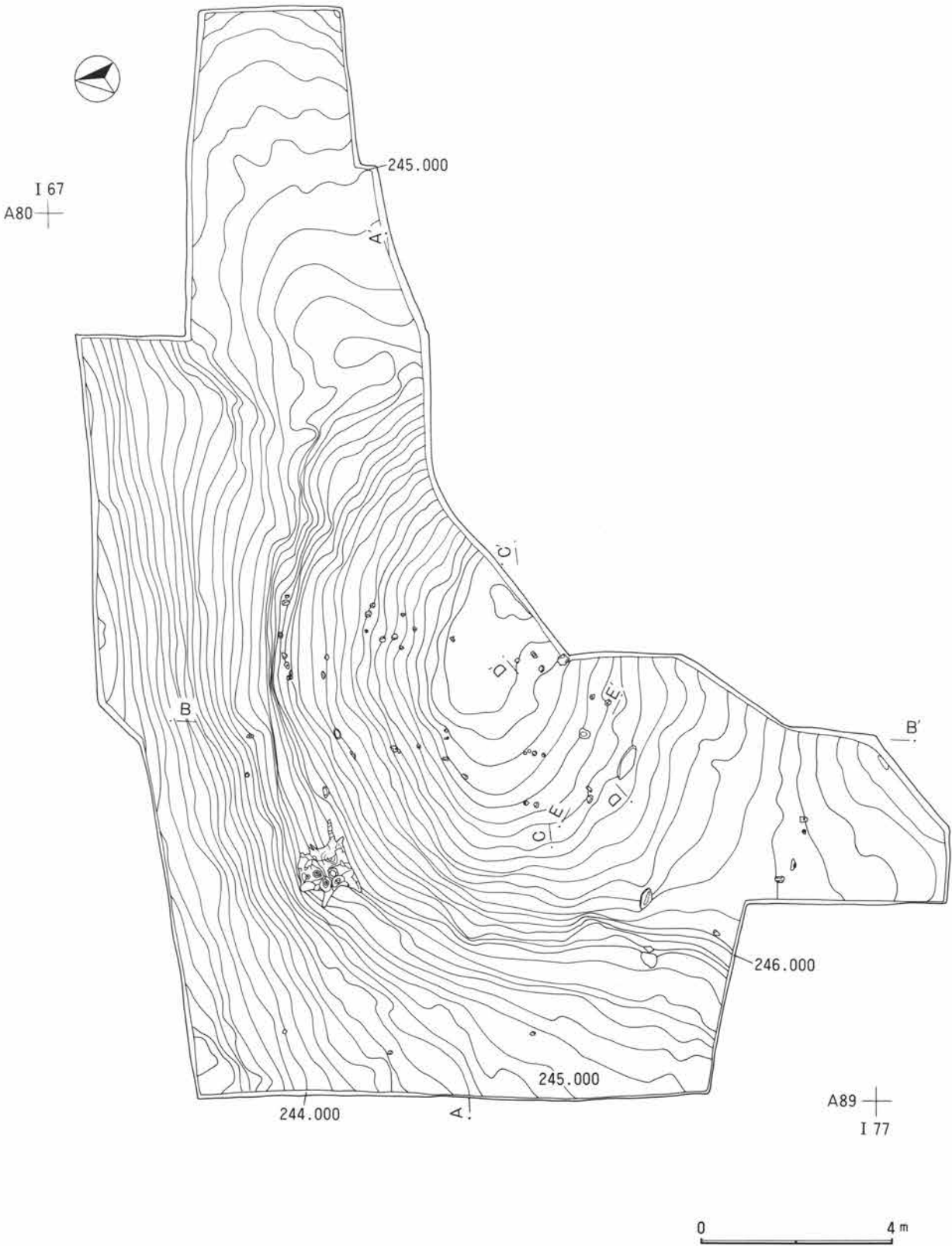


第66図 大島富士頂部柱穴周辺図

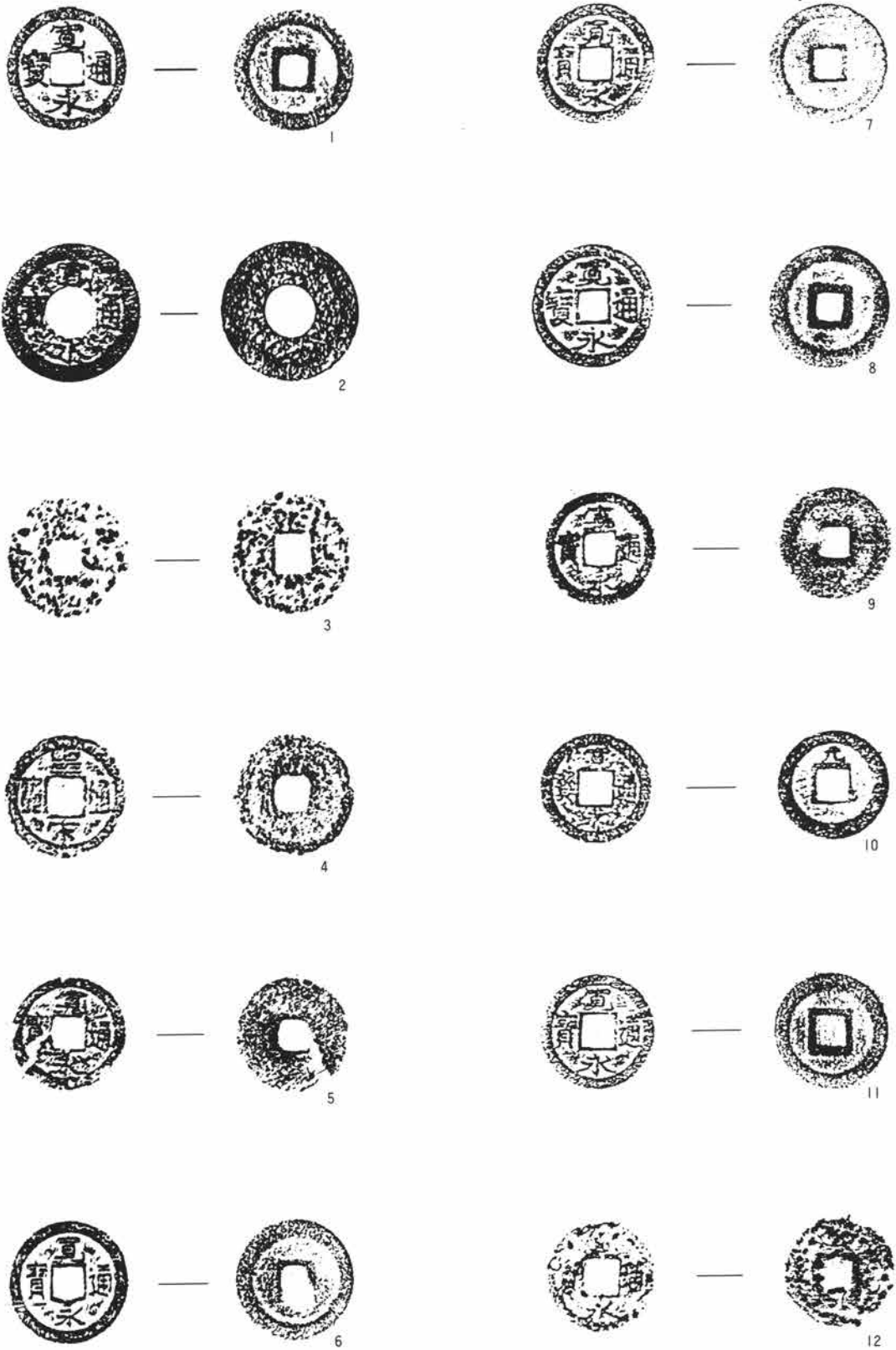
富士山を背景に成立した浅間神社は、中世富士信仰の普及と共に、各地に浅間塚を伴いつつ、勧請された。大島富士に見られた中世から近世にかけての遺構、遺物の検出はまさしく、この信仰の例証となるものと考えられる。

また大島富士の頂部には浅間様を祀る石宮が最近まであったという。恐らく、近世の中期以降、木造建造物から石宮に変わったものであろうがこの浅間様は後、麓の八幡宮の中に鎮火、菅原、稻荷、大山祇社と共に合祀された時に石宮も取り払われたということである。

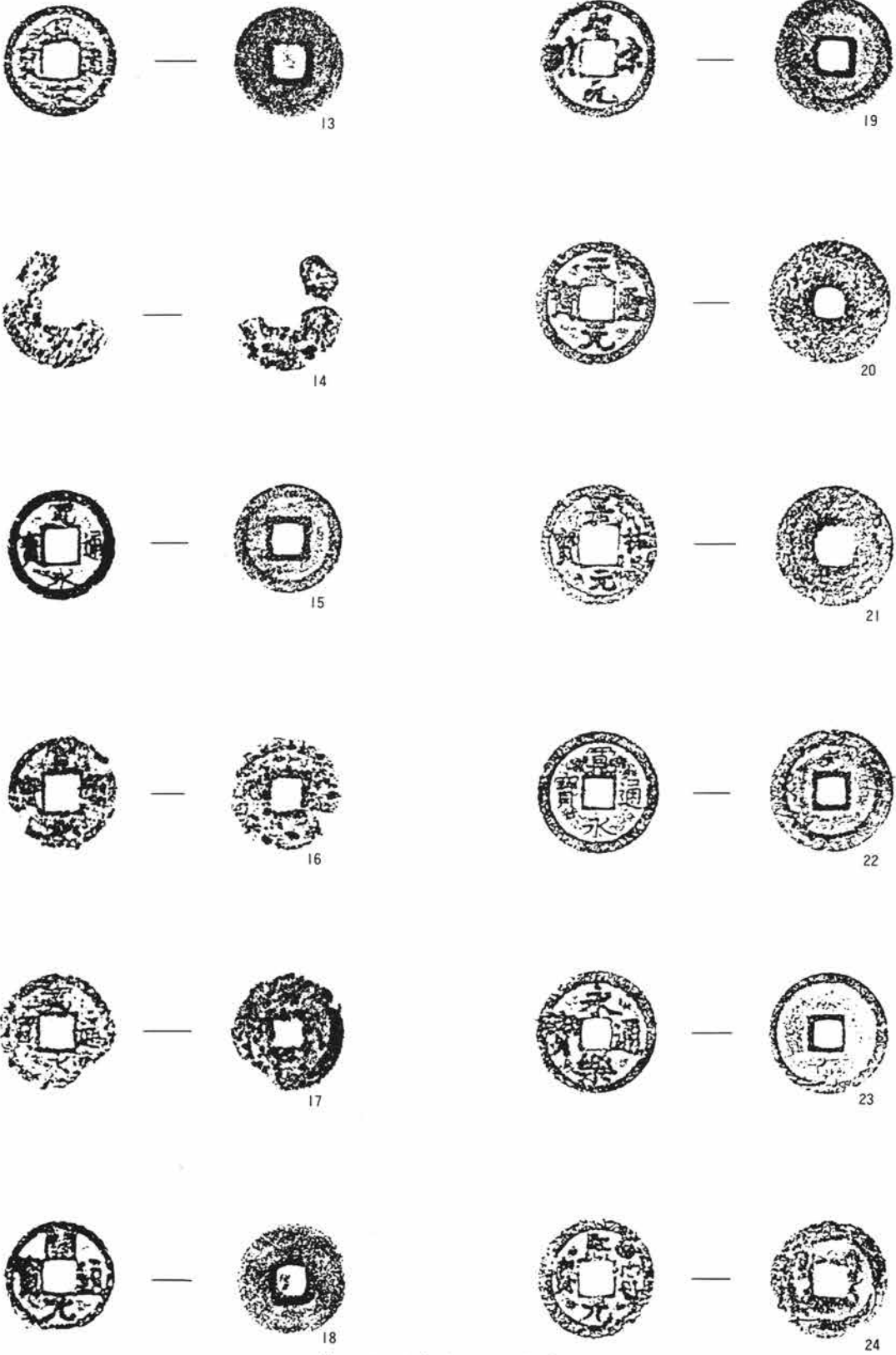
しかし、大島富士という名称が残り、東を流れる野上川との境を浅間淵と呼ぶなど、大島地区の人々の間では信仰の一部が今でも続いていると言えよう。



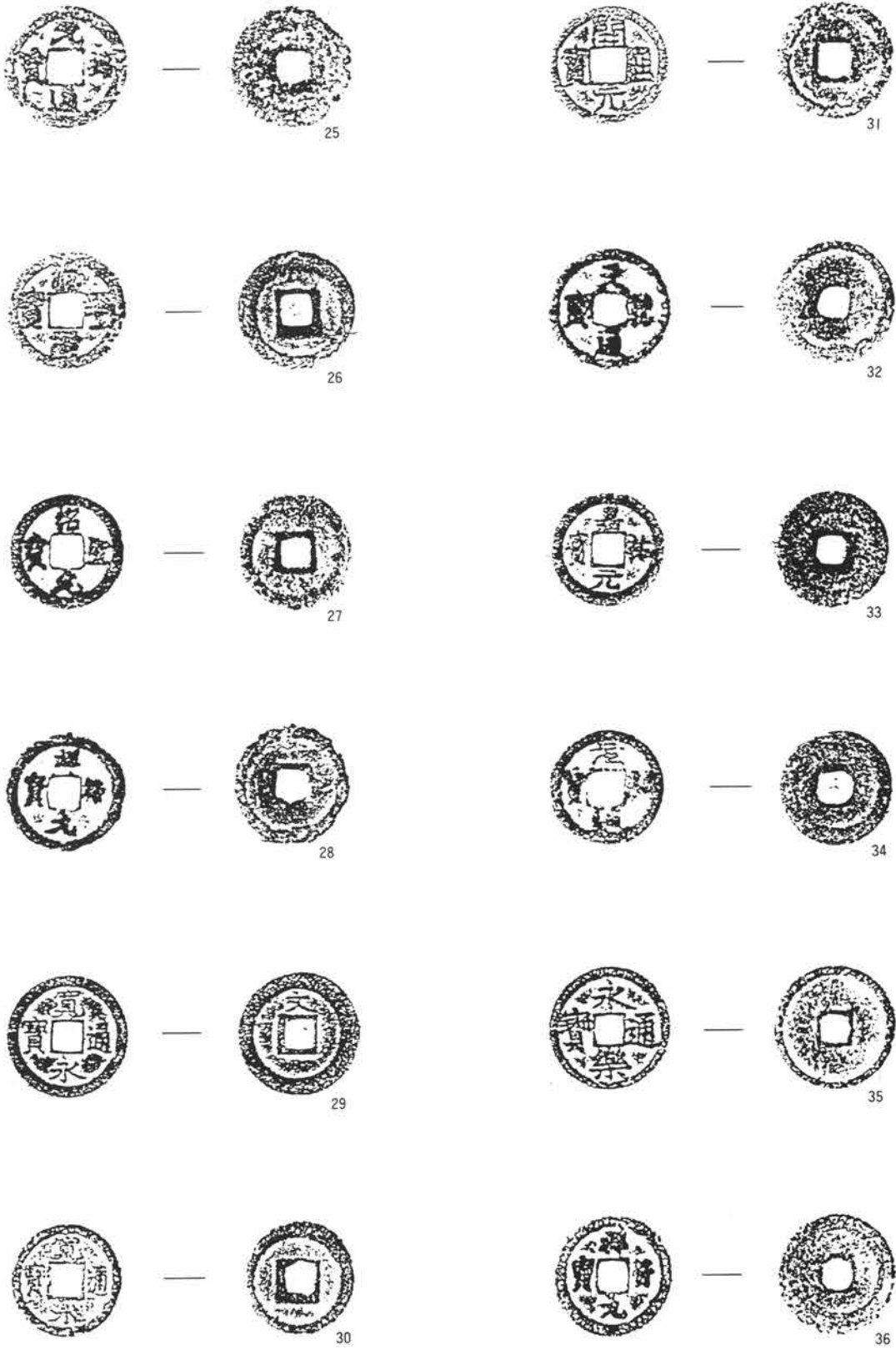
第67図 大島富士現況図



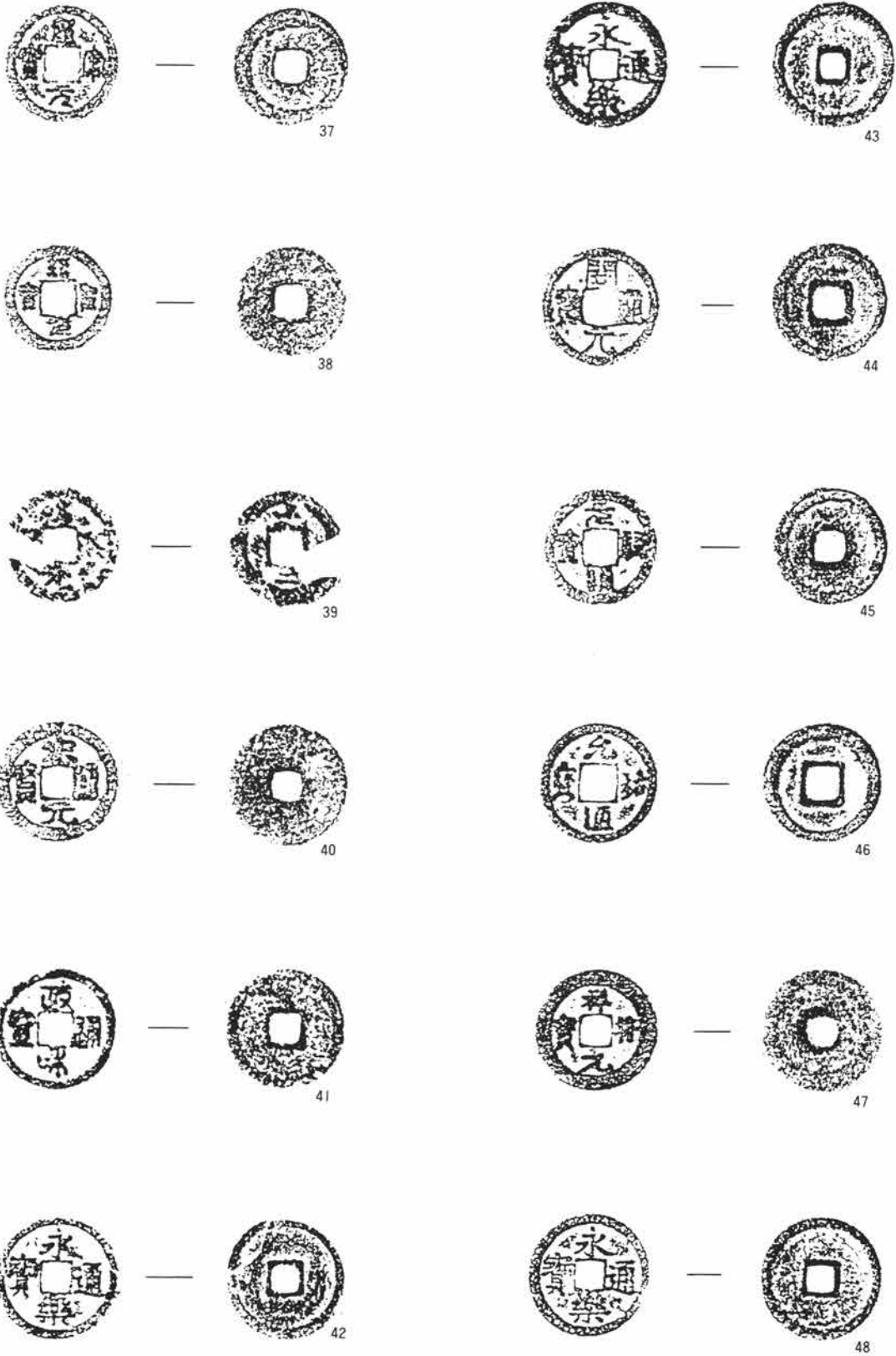
第68図 大島富士出土古銭(1)



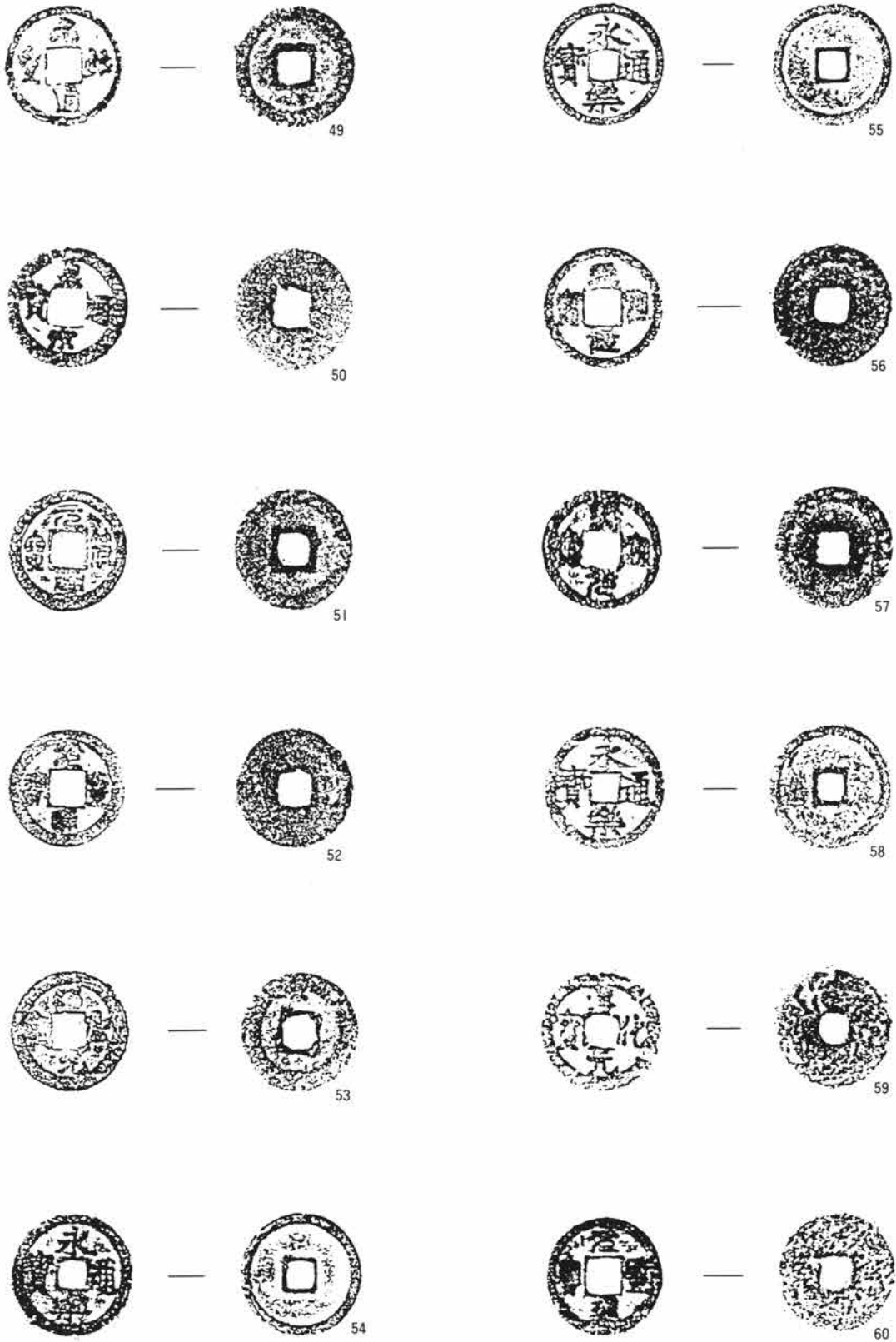
第69図 大島富士出土古銭(2)



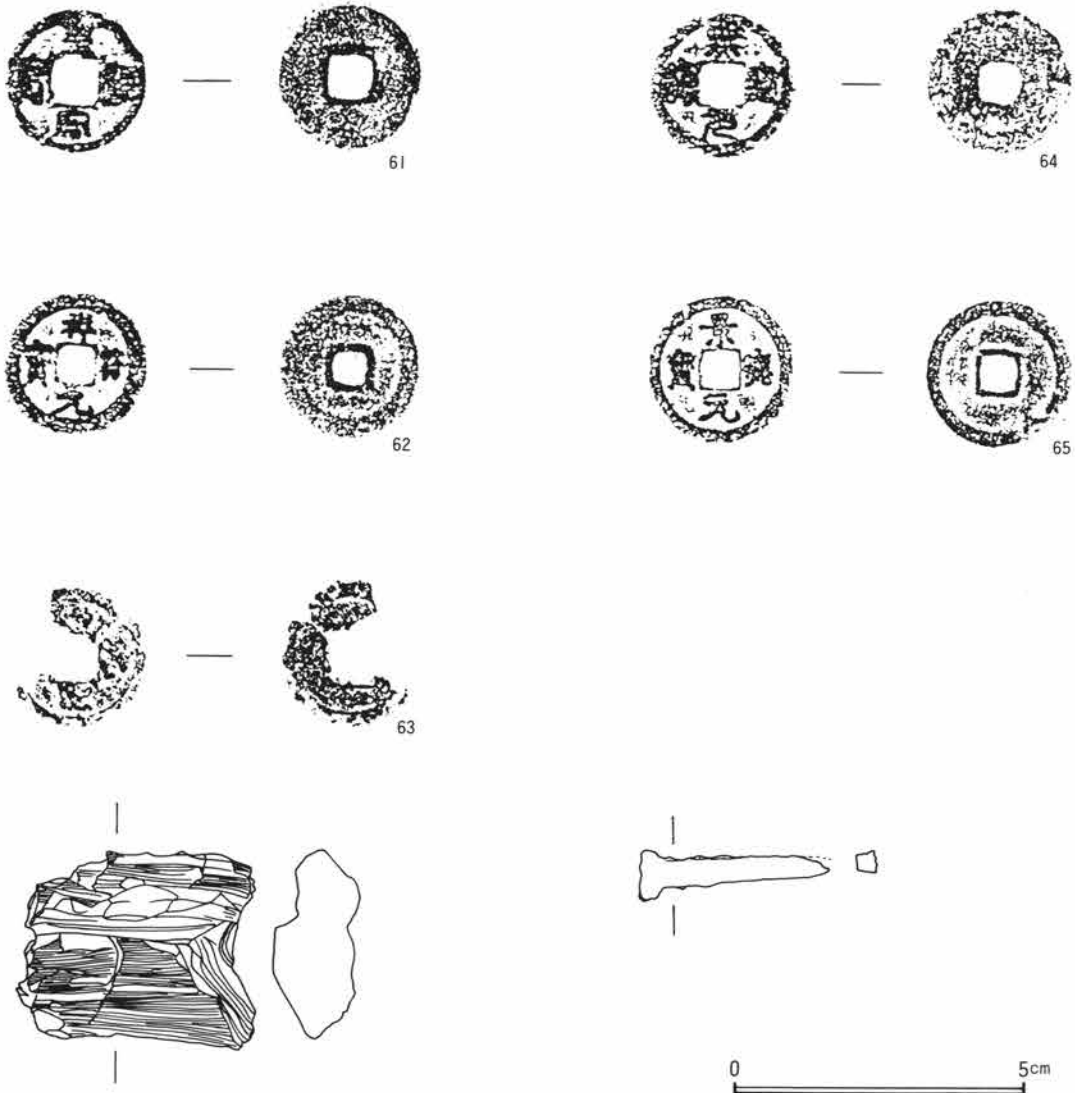
第70図 大島富士出土古銭(3)



第71図 大島富士出土古銭(4)



第72図 大島富士出土古銭(5)



第73図 大島富士出土古銭(6)他

第20表 大島富士出土古銭観察表

番号	銭貨銘	読順	裏	法 量 (cm)		重量 (g)	材質	銭 種 (鑄造年及び鑄造所)	特 徴
				径	孔 (タテ×ヨコ)				
1	寛永通宝	◇		2.48	0.6×0.6	2.85	銅	明暦2年(1656) 駿河国有渡郡沓谷村鑄	小字(類似品中で文字が小さく書かれている)。
2	寛永通宝 四文銭	〃		2.83	1.0×1.0	3.80	銅	明和6年5月(1769) 武蔵国江戸深川千田新田鑄	小字。当初、方穿であったものが、円穿に細工されている。
3	寛永通宝	〃					鉄	明和2年9月(1765) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	小様(銭径が小さい)。
4	皇宋通宝	十		2.44	0.7×0.7	2.80	銅	寶元2年(1039)	長通<真>(類似品中で「通」の字が細長く表現されている)。
5	寛永通宝	◇		2.31	0.7×0.7	1.80	銅	元文4年6月(1739) 武蔵国江戸深川平野新田鑄	虎之尾寛(「寛」の字の末尾が虎之尾状に上に跳ね上がる)。
6	寛永通宝	〃		2.46	0.7×0.6	3.10	銅	享保13年1月(1728) 陸前国牡鹿郡石巻(仙台)鑄	異書低寛(字体が整わず、「寛」の字が低く書かれている)。
7	寛永通宝	〃		2.47	0.6×0.6	2.90	銅	享保13年1月(1728) 陸前国牡鹿郡石巻(仙台)鑄	同 上

第II章 大島上城遺跡

番号	銭貨銘	読順	裏	法 量(cm)		重量 (g)	材質	銭 種 (铸造年及び铸造所)	特 徴
				径	孔 (テテ×ヨコ)				
8	寛永通宝	↻		2.51	0.6×0.6	3.50	銅	明暦2年(1656) 駿河国有渡郡沓谷村鑄	正足宝(類似品中、「寛」の字の足が正しく書かれている)。
9	寛永通宝	//		2.28	0.6×0.6	2.00	銅	元文4年6月(1739) 武蔵国江戸深川平野新田鑄	虎之尾寛。
10	寛永通宝	//	元	2.27	0.7×0.7	2.25	銅	寛保元年3月(1741) 摂津国大阪高津新地鑄	細字背元(銭銘が全体に細字で裏面に元の字をもつ)。
11	寛永通宝	//		2.35	0.6×0.7	2.85	銅	元禄10年7月(1697) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	〈四ツ宝〉跳永(「永」の字が跳ねている)。
12	寛永通宝	//		2.27	0.6×0.6	3.40	銅	明和5年(1768) 陸前国牡鹿郡石巻(仙台)鑄	小字〈背千?〉(裏面に千の字をもつ?)。
13	寛永通宝	//		2.28	0.7×0.7	2.00	銅	宝永5年11月(1708) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	〈四ツ宝〉細字。
14	寛永通宝 (?)	//					銅		
15	寛永通宝	//		2.26	0.6×0.6	2.60	銅	寶永5年11月(1708) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	〈四ツ宝〉織字(類似品中、文字が一層細く書かれている)。
16	寛永通宝	//					鉄	明和5年(1768) 陸前国牡鹿郡石巻鑄	小字背千(?)。 鉄銭。
17	寛永通宝	//		2.42	0.5×0.6	3.20	銅	安永3年4月(1774) 常陸国久慈郡太田村木崎鑄	背久二(裏面に方穿を挟んで、上下に久二の字を配す)。
18	開元通宝	⊥		2.28	0.7×0.6	1.60	銅	武徳4年(621)～	潤元(類似品中、「元」の字が骨太で大きい)。
19	聖宋元宝	↻		2.49	0.7×0.6	3.80	銅	建中靖国元年(1101)	垂露<真>(草から露がたれ落ちるような書体で書かれる)。
20	天聖元宝	//		2.54	0.6×0.6	3.45 +α	銅	天聖元年(1023)	細郭<真>(表の内郭が細い)。
21	嘉祐元宝	//		2.49	0.8×0.8	3.30	銅	嘉祐2年(1057)	広穿<真>(類似品中で内郭が広く穿たれる)。
22	寛永通宝	//		2.54	0.5×0.6	3.30	銅	寛文8年5月(1668) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	細字小文(文字が細く「文」の字が小さい)。
23	永楽通宝	⊥		2.49	0.6×0.6	3.50	銅	永楽6年(1368)	正様(類似品中、文字が一番整っている)。
24	熙寧元宝	↻		2.45	0.7×0.7	3.10	銅	熙寧元年(1068)	面背四出<真>(面と背の内郭が突出している)。
25	元祐通宝	⊥		2.52	0.6×0.6	2.60	銅	元祐8年(1093)	遒勁<真>(文字が鋭く、荒々しい)。
26	治平元宝	↻		3.45	0.7×0.7	2.50	銅	治平元年(1068)	背反郭<篆>(背の郭が反っている)。
27	紹聖元宝	//		2.38	0.6×0.6	3.20	銅	紹聖元年(1094)	陰郭<真>(内郭がはっきりしない)。
28	祥符元宝	//		2.51	0.6×0.6	3.00	銅	大中祥符元年(1008)	離郭(銭文が内郭より離れている)。
29	寛永通宝	//	文	2.52	0.6×0.6	3.45	銅	寛文8年5月(1668) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	細字背文(銭銘が全体に細字で背面に文の字をもつ)。
30	寛永通宝	//		2.32	0.6×0.6	3.00	銅	元禄10年7月(1697) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	〈四ツ宝〉跳足寛(寛の字の末尾が跳ねている)。
31	開元通宝	⊥		2.43	0.7×0.7	2.85	銅	武徳4年(621)～	平頭通(「通」の字のマ画上部が平に書かれている)。
32	天禧通宝	↻		2.53	0.6×0.6	2.80	銅	天禧2年(1018)	隔輪(銭文が輪より離れ内郭に近づいている)。
33	嘉祐元宝	//		2.38	0.6×0.6	3.80	銅	嘉祐2年(1057)	狭穿<真>(内郭が狭く穿たれている)。
34	元祐通宝	//		2.37	0.7×0.7	3.90	銅	元祐8年(1093)	小字長宝<篆>(文字が小さく「寶」の字が細長い)。
35	永楽通宝	⊥		2.53	0.6×0.6	2.65	銅	永楽6年(1368)	正様。
36	祥符元宝	↻		2.44	0.6×0.6	3.50	銅	大中祥符元年(1008)	隔輪。
37	聖宋元宝	⊥		2.41	0.6×0.7	3.40	銅	建中靖国元年(1101)	細郭<篆>(類似品中、内郭が細く穿たれている)。
38	紹聖元宝	↻		2.50	0.7×0.7	1.90	銅	紹聖元年(1094)	背文の類小様<篆>(背に日文や星文を置く類の小型品)。
39	寛永通宝 (?)						銅		
40	宋通元宝	//		2.49	0.6×0.6	2.35	銅	興国2年(968)	平蜀銭(意味不詳)。

番号	銭貨銘	読順	裏	法 量(cm)		重量 (g)	材質	銭 種 (鑄造年及び鑄造所)	特 徴
				径	孔 (テテ×ヨコ)				
41	政和通宝 (?)	→		2.49	0.6×0.6	3.20	銅	政和元年(1111)	大字中禾(篆)(字が大きく「和」の字の禾が内郭の中心に位置する)。
42	永楽通宝	//		2.50	0.6×0.6	2.00	銅	永楽6年(1368)	大水(類似品中、「永」の字の水画が大きい)。
43	永楽通宝	//		2.57	0.5×0.5	3.50	銅	永楽6年(1368)	窄白(「楽」の字の白画が両側から削られ細くなっている)。
44	開元通宝	//		2.43	0.7×0.7	3.50	銅	武徳4年(621)～	低頭通(類似品中、「通」の字のマ画が低く書かれている)。
45	元祐通宝	↻		2.41	0.7×0.7	3.80	銅	元祐8年(1093)	星無背大字(篆)(背に星文を置く類で星文がなく文字が大きい)。
46	元祐通宝	//		2.44	0.7×0.7	3.45	銅	元祐8年(1093)	広穿(真)。
47	祥符元宝	//		2.51	0.6×0.6	3.40	銅	大中祥符元年(1008)	大元(類似品中、「元」の字が大きい)。
48	永楽通宝	→		2.52	0.6×0.6	2.80	銅	永楽6年(1368)	正様。
49	元祐通宝	↻		2.50	0.6×0.6	3.55	銅	元祐8年(1093)	大様(真)(銭径が大きく、文字も大きい)。
50	皇宋通宝	→		2.49	0.9×0.7	2.30	銅	寶元2年(1039)	陰郭(真)。
51	元符通宝	↻		2.46	0.7×0.7	3.45	銅	元符元年(1098)	平頭元(篆)。
52	元豊通宝	//		2.45	0.7×0.7	3.30	銅	元豊元年(1078)	広穿(篆)。
53	紹聖元宝	//		2.47	0.7×0.7	3.60	銅	紹聖元年(1094)	陰郭肥字(真)(内郭がはっきりせず、文字が肥えている)。
54	永楽通宝	→		2.51	0.6×0.6	3.40	銅	永楽6年(1368)	肥字。
55	永楽通宝	//		2.50	0.6×0.6	4.30	銅	永楽6年(1368)	正様。
56	天聖元宝	↻		2.50	0.7×0.7	3.05	銅	天聖元年(1023)	細郭(篆)。
57	熙寧元宝	//		2.50	0.7×0.7	2.80	銅	熙寧元年(1068)	大字(篆)。
58	永楽通宝	→		2.52	0.5×0.5	3.00	銅	永楽6年(1368)	正様。
59	淳化元宝	↻		2.41	0.6×0.6	2.70	銅	淳化元年(990)	背細郭(真)。
60	元豊通宝	//		2.45	0.7×0.7	3.80	銅	元豊元年(1078)	四出(篆)。
61	皇宋通宝	→		2.45	0.7×0.7	2.60	銅	寶元2年(1039)	広穿四出(篆)。
62	祥符元宝	↻		2.45	0.6×0.6	2.15	銅	大中祥符元年(1008)	大元。
63	元祐通宝 (?)						銅		
64	熙寧元宝	//		2.50	0.7×0.7	2.60	銅	熙寧元年(1068)	大字(篆)。
65	寛永通宝	//		2.54	0.6×0.6	3.20	銅	寛文8年5月(1068) 武蔵国江戸深川亀戸村鑄	細字小文。

これら古銭に混じって、大島富士からは、鳥居に使用されたと推定される木材片と神社建物に使用されたであろう角釘が出土している。

第6節 考 察

1. 大 島 上 城

群馬県文化財保護審議会委員（中世城郭研究家） 山崎 一

富岡市の鐮川以南には、東西方向をとる断層谷が数条並走する。それらの最北側のものは、岡本一野上の谷で、離山と、西平、塩之入北側の丘陵が谷の北縁を形成する。谷の西半を東流する野上川は丘陵の中央を破って北に貫流し鐮川に注ぐ。そこに形成された隘路を抑えて西平の山城が築かれ、北麓の鐮川と野上川とに挟まれた平坦地に大島下城がある。西城の距離は700m程である。

大島の下城に対し、西平城を上城とも呼び、要害城と里城の関係にある。しかし西平城は、岩染城、塩之入城等と共に、野上地域城（藤田城とも呼ぶ）の堡塁として、南北期既に築かれていたと推定される（構造は塩之入城、茶白山、浅香入城程度だったことであろう）。

西平城は西からのびてきた標高300m、比高100m内外の丘の末端が、野上川、鐮川の間で、東と北と西南に向う三稜を派出する小峰に本郭を据えている。

本郭は、東西35m、南北17m程の北に弧を描く半月状を呈し、南縁一帯の低土居は東端が北に3m程曲って戸口の南角を構成する。本郭西端にも戸口があり北側にも短い低土居があつて、東戸口と同様、喰い違い構造を示す。

本郭から西の尾根つづきは二筋の堀切で断たれ、西堀切の間に、東北—西南30m、幅数mの一郭（第二郭と仮称）を挟む。第二郭は本郭より2m低く、西の堀切底より5m高い。各堀切の両端は短い竪堀となる。西の堀切には北寄りに低い土橋があり、外縁は底からの高さ1mにすぎないが、その小土堆は、更に西につづく瘦尾根より3mも高い。つまり、本郭面は、その尾根の鞍部より8m高いこととなる。

第二郭は西半部が1m高く、西端近くにある石宮には「寛延二酉二月吉日」と刻まれている。1749年建立のものである。この郭の西南端の南約10m下には跳り場状の袖郭があり、更に10m下にも同様の袖郭が認められ、それらを伝って小尾根（陵）を下る小径が搦手で、野上川を渡って西平の根小屋に達する。これらの袖郭をめぐる竪堀状の地隙が錯綜し、陵の東側を北に下る。古い通路の侵食された跡かとも思われる。本郭から北に向かう陵と、東に向う陵は、それぞれの直距離100mの所までは平均傾斜二分の一（30度）で変わらないのだが、本郭外縁からの直距離50mのところまでとなると、東陵は十分の六、北陵は十分の四であつて北陵がはるかに緩傾斜である。このことが両者の築城様相を全く変える結果となった。既に北陵は上部程郭面の広い階段状に築かれ、北陵は堀切につづく帯郭の重複で構成されるようになったのである。

北陵には七段の袖郭が設けられているが、本郭直下のものが東西25m、南北13mと最大で東部は腰郭状となり、そこに下段からの登路を受け、東陵最上段武者屯に登る竪堀状通路を起こす。郭面は腰郭状の部分との間に締まりも設けることができ、ある程度の独立性も付与されていたようである。

北陵にあるその他の袖郭も追手から本丸の通路に直接当たっているものがないのが通常の尾根式築城とは異なっているといえよう。

東陵には、三ヶ所の堀切があり、上段のものは、武者屯となり、中段のものは下方に長さ30mの腰郭が設けられ、下段のものは北端が長さ20mの腰郭につづく。このように差異のあるのは地形の広狭が巧みに利用された結果である。この陵の下方には、腰郭やそれらしい部分も認められるが最下方のものは後代、或は近年畑地として開発利用されたものがその跡である。

追手は東北麓の鞍部付近におかれ、鞍部には大島から西平に越える要路が通る。東西、南北とも50m程の部

分に、やや複雑な構造が認められるが、その間の上端下端の高度差は30mに及ぶ。

鞍部から本郭に向かう現通路は、尾根面のような高所線を辿り、三段の袖郭状の小平坦部がのこつている。追手戸口と思われる所はその北側下方に認められ、西側を塹堀で限られ、東上段が横矢となって出入りを援護する。更に、上段の、径5mばかりの平坦部は武者屯であろう。

現通路の南下方には、南北20m、最大幅10m程の弧目状腰郭があり、前面の平底谷とそこを通過して西平に向かう道に、強力な矢払いとなる。塹堀の西にも二段の腰郭があって追手通路の北側を掩護する。

追手の東北に鞍部より30mあまり高い孤丘があり、その頂が二段に削平されている。本郭面に比べれば40mも低い、北に突出している、離山北面や鍋川上流も通視でき、物見をかね、のろし台が設けられていたことであろう。今次の発掘調査に当たり、西麓から三個の鉛製鉄砲玉が発見され、それらには発射された形跡が認められた。

大島に下る道は、鞍部から西北に向い斜めに山脚を過ぎるが、200mの所で、南から流下する沢を渡る。西平城西端の堀切から起った塹堀はこの沢底に達し、城の西限を画する。

本郭から数段の袖郭を重ねて下る北陵の末端部は、上部よりも急な斜面で、例年の夏日、そこで火祭りの火文字が焚かれる名所となっている。南廻りの関越道は、のろし台の丘を削り、祭り場の裾を払って西走することとなっている。

大島下城東側の野上川は、大きく東西に湾曲をくり返し、10m以上の弧形の断崖がつづき、舟川の別称があり、舟川橋だけで東の上高瀬に通じている。もっとも近年300m上流の鉱泉付近に榊野橋も架けられた。鍋川の河崖は更に高く、直線的で、大島城のある付近では舟川河岸との距離が最も狭く、80m程となり、そこが掘り切られている。堀切の西端部は不明だが、更に北170mの鍋川断崖上は、東より二乃至2.5m高い台で、北90mの所に、長さ30m、深さ1.5mの堀切があるので、南端の最大幅が60m一郭のあったことが考えられる。堀切の余土は北側に盛られ、高さ0.5mの低土居となっていて、そこにも、南北75m、最大幅25mの長三角形小郭が想定される。南の郭より0.5m程高い。

本丸と思われる部分は舟橋に近い聚落の部分で、鍋川側に長さ50mの鍵形の堀が深く窄たれ、土橋があるが、東半は不明で、それを南面の堀とした、東西、南北とも75mの郭面をもつ。西から北にわたって塹風折の高さ3m土居をめぐらし、中央部にある櫓台らしい所は古墳を利用したもので、近年土がとられ、玄室の大石が露出している。

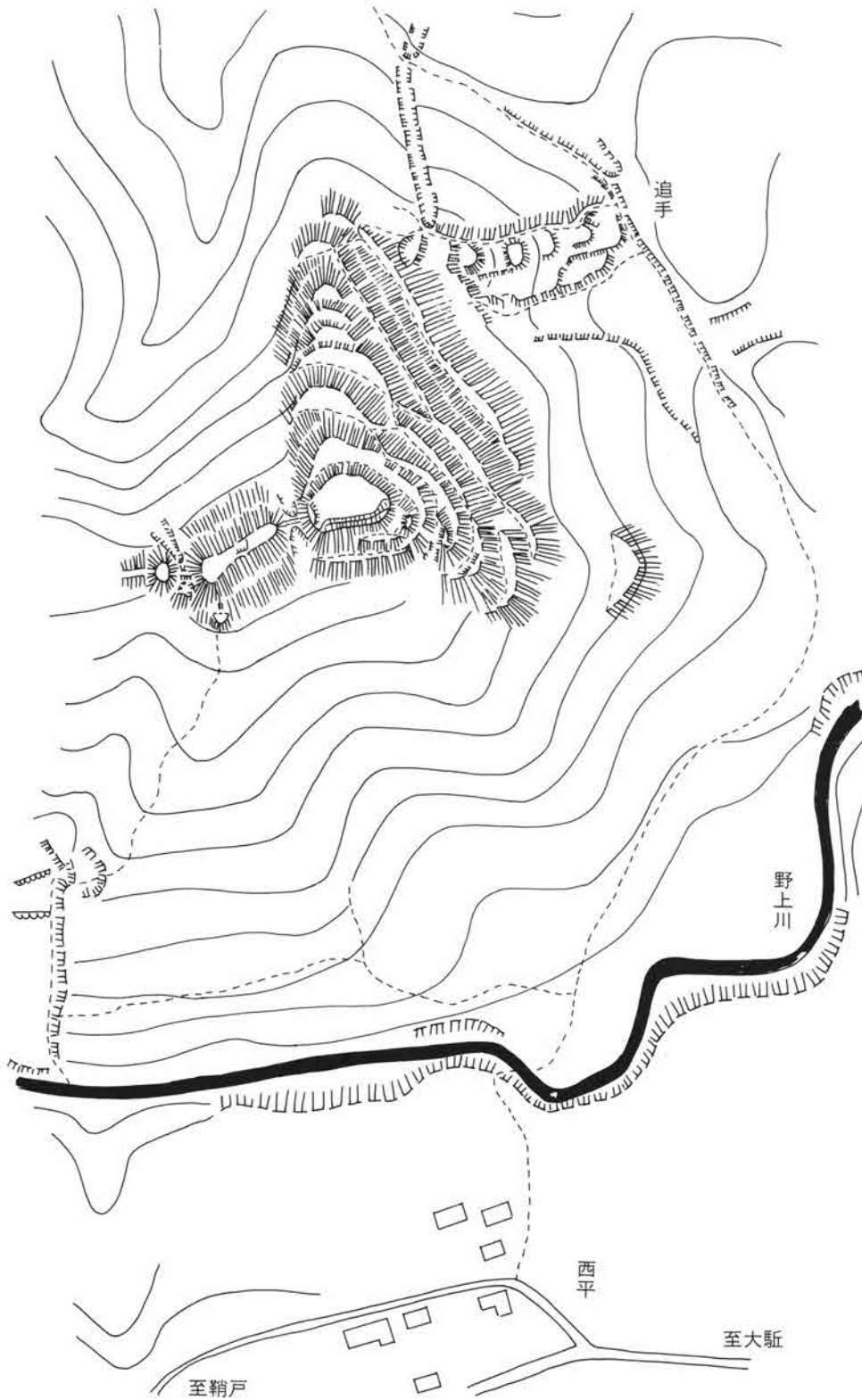
城主は、現住している小間(高麗)氏と伝えられるが、発掘調査で発見された鉄砲の玉は、天正十八年(1590)小田原の役に北国勢が国峯城を攻勢した際のもので推定する。それ以外には可能性の考えられる戦闘はない。

慶安二年(1649)頃、夏目定房が松井田城攻めに引きつづき各地に転戦した、父定吉の物語りを集録した『管窺武鑑』には、宮崎城戦だけで国峯城攻撃については記されていないが、定吉が属していた藤田信吉が永井右衛門尉信実を扶けて多比良城(吉井町)を落し、『右衛門大夫をば同道、藤田能登守三ツ山を立ち、木部(きべ)河原まで押出し、景勝公の御備を待ち請け其より先へ押行なり。』と記している、信吉勢は宮崎攻略後甘楽谷を東進し、甘楽郡、多野郡を裁定し、高崎市の木部で箕輪から南下した上杉勢に合流したのであって、その間に国峯城攻略が当然果されていねばならない。

『上州治乱記』は一般の戦記であって史料価値は不十分だが、その中には『宮崎の城主小幡左衛門息彦三郎支へんと思えとも目に余る大軍故、父を捨てて降人に出づる、依之北国勢国峰の城へ押寄せ鯨波を揚くと等しく鉄砲を打ち射かけ大軍嘆き叫んで攻め立つる。抑此国峰の城といふは西は岩染、後箇、高瀬、野上、岡本迄何さま屏風を立てた如くなる嶮山云々……』と国峰城の外郭が鍋川の線であったことをあげている。戦

第II章 大島上城遺跡

術的に西平城、大島下城で、戦闘が起こるであろうことが肯ける。



第74図 大島上城繩張り図(山崎原図)

1 : 2,500

2. 大島上城の縄張りについて

田口正美

大島上城については、前述のように遺跡を包括する範囲について500分の1地形図を作成した(付図参照)。その際、奈良女子大学助教授村田修三氏に現地踏査を依頼し、同行し得たので、そこで指摘された点を中心に、大島上城の縄張りについて、簡単にまとめておきたい(尚、山崎一氏の原稿と重複する部分のあることを御容赦願いたい)。

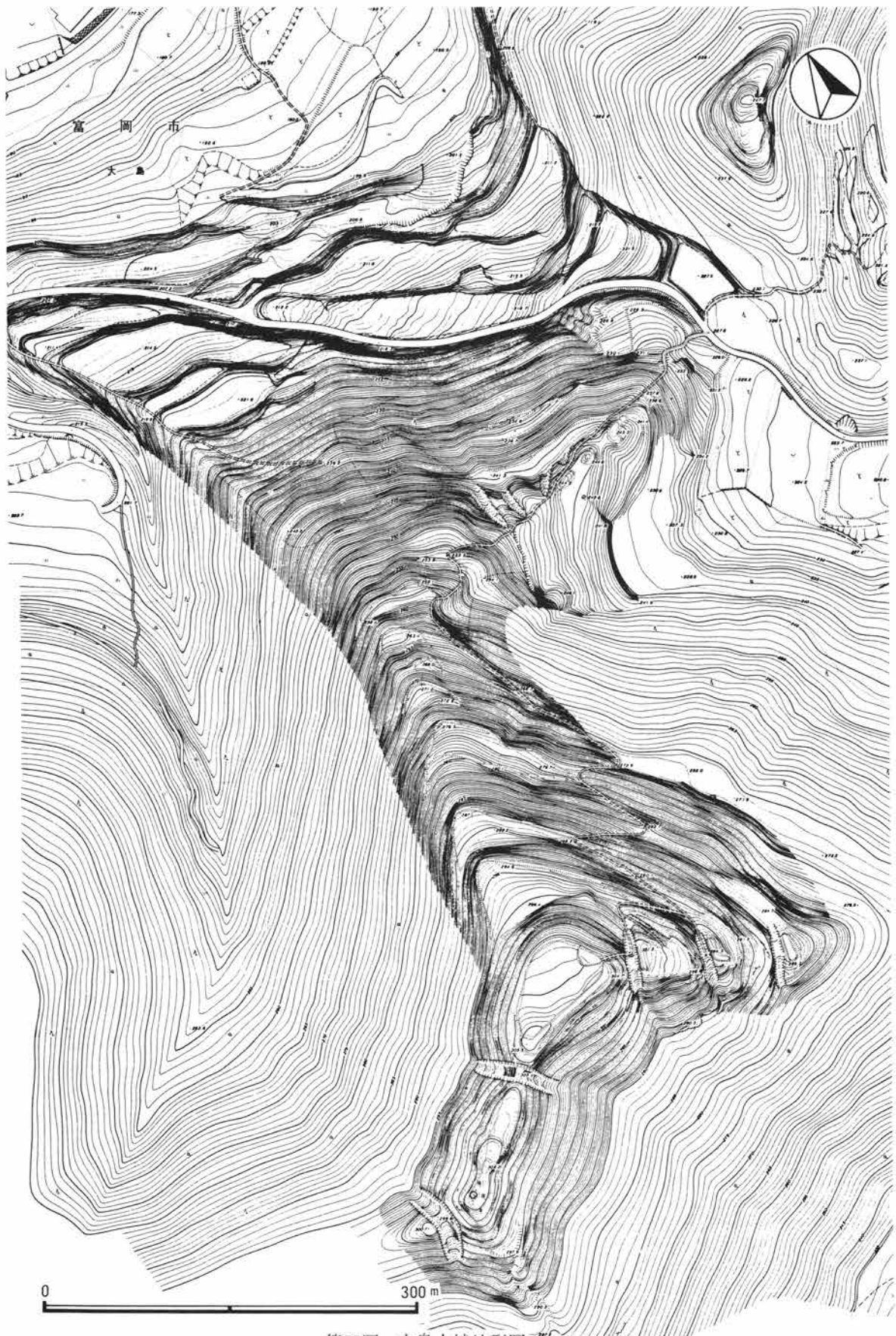
①**大手筋** 大島上城の大手口は北方向にある。現在まで、虎口遺構と推定されるテラス③と西側丘陵との間に南東方向から北西方向に伸びる幅2m程度の農道が存在しているが、これは近世～近代にかけての耕地開発に伴う農道と考えられるもので、直接大島上城に関連するものではない。恐らく、テラス③と大島鉾泉を結ぶライン状近辺に、数面の平坦地を利用した大手筋があったものと考えられる。その際、テラス⑨はその通過点の一つとして、把握推定することができそうである。

②**虎口** 大手をかためる最初の遺構として、テラス③が存在する。テラス③の西側と北側の縁辺はエッジをきかせて、めりはりのきいた遺構となっている。調査では検出できなかったが、このテラス上には縁辺部に逆茂木等の防禦施設が構えられ、大手を守ったものと考えられる。テラス①からは、かわらけを納めたものと推定されるピットが出土しているが、これは大島上城構築の際の地鎮祭祀に関係するものであろうか、今後の課題としたい。

③**曲輪** 虎口を通過すると、大手は右手に直角に折れ、丘陵を登る。ここには、道筋に沿って比高差2～3mの小マウンドが4箇所確認されるが、これは大手を登ろうとする攻撃軍を迎え撃つ為の施設と考えられる。大手を登りつめようとする攻撃軍は、ここで小マウンドを利用して伏せている防禦側の迎撃を受ける。大手はこの後、北々東に連なる曲輪を右手に見ながら進む。テラス⑩はその最北端に位置しており、大手を通過する攻撃軍に上方より、あるいは横より攻撃を加えることができるよう巧みに配置されている。4度大きく方向を変えた大手はいよいよ主郭部分に近づく。ここで大手は比高2～3mの曲輪の直下を通過する。大手はダイレクトに主郭に連結せず主郭を取り囲むように大きく敵に迂回することになり、攻撃軍に直上からの攻撃を浴びせかけられるよう設計されている。曲輪は合計で7面あり、地形に相応する形で南から北へ扇形に張り出す形態をとる。基本的には地形を削平して平坦部を構成しており、中心部から離れるに従い、面積は狭小化する傾向にある。

④**主郭** 主郭部分の入口である柵形は「く」の字を呈する。主郭の南辺には低土居が設けられ、東西両端は北へ折れて鍵の手状を呈する。土居は現状で50cm程度であり、旧状を良く伝えている。また、主郭の西には堀切を挟んで第二郭が南西から北東方向へ細長く続く。第二郭には土居は見られない。

⑤**堀切** 尾根伝いの、あるいは丘陵上での自由な往還を防げるために堀切が数本構えられている。その内、最も西に位置する堀切は西へ続く尾根との連絡を断つために設けられているものであり、他に比してより広く、深く掘られている。



第75図 大島上城地形図

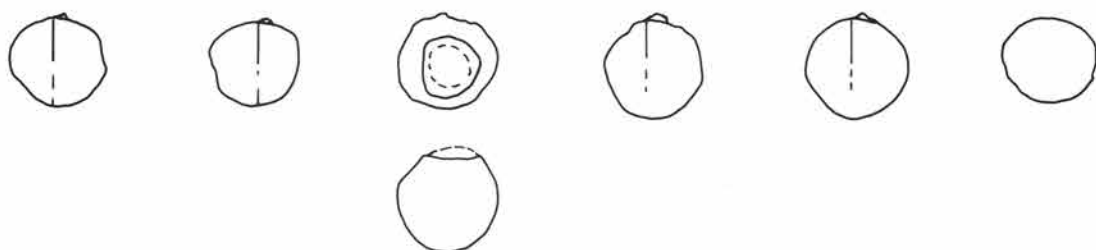
3. 中世城郭出土の鉄砲玉

田口正美

今回の調査で合計6個体の鉄砲玉が検出されている。これら個々の鉄砲玉の詳細な記述については、既に第2章第4節で触れているので、ここでは鉄砲玉の持つ意味について若干の考察を加えておきたい。

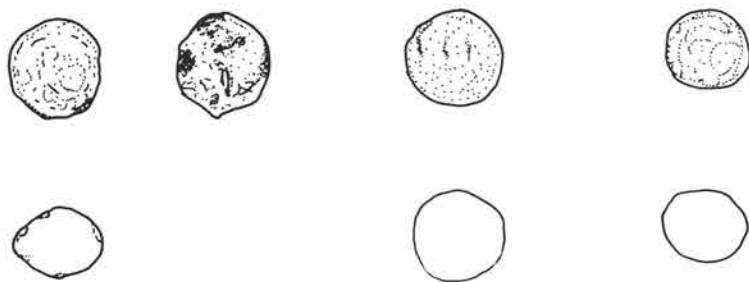
県内における城郭関係の発掘調査は、面積の広狭にこだわらなければ、現在までに（昭和63年9月現在）70例以上に及んでいる⁽¹⁾。この中には近世に降るものも含まれているので、城郭の時期を中世に限定したとき、その調査例は若干減少するものと思われる。

ところで、これら中世城郭の調査では、遺物として、土器類が多く取り上げられるのみで、中世の一時期を端的に表す鉄砲玉については全くと言っていいほど、報告書の中で触れられていないのが実情であった。県内においては、管見では、利根郡月夜野町所在の名胡桃城を知るのみである。ここでは、第76図に示すように、6個体に及ぶ鉄砲玉を実測図をつけて紹介している。



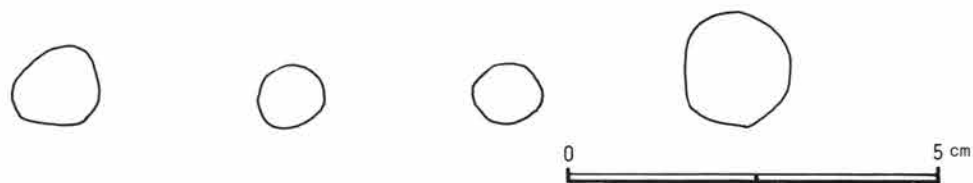
第76図 名胡桃城出土鉄砲玉

また、近隣の例では、茨城県真壁町所在真壁城出土の鉄砲玉が4個体紹介されている⁽³⁾。



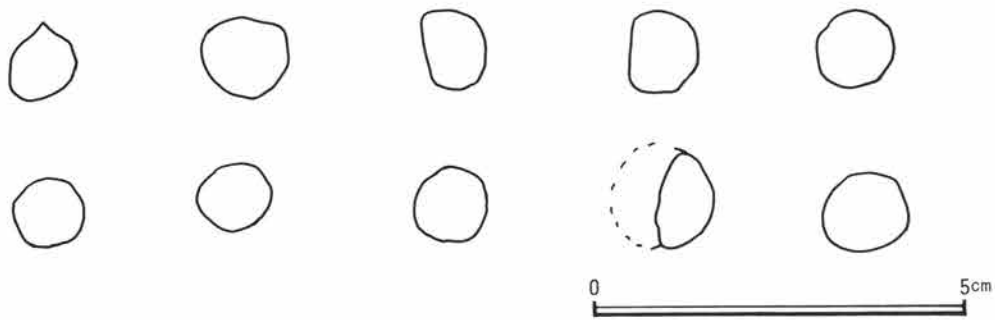
第77図 真壁城出土鉄砲玉

更に、千葉県一宮町所在一之宮城跡では4個体の鉄砲玉の出土があったとしている⁽⁴⁾。ここでは、鉄砲玉製造に関係したと思われる樹枝状の鉛製品が出土しており、担当者は、弾丸製造の際の残品であろうとしている。



第78図 一之宮城出土鉄砲玉(1)

第II章 大島上城遺跡



第79図 一之宮城出土鉄砲玉(2)

これらの鉄砲玉に共通することは、鉄砲玉の径が1.3cm前後のものが圧倒的に多いという事実である。この傾向については、筆者は内匠城、大島上城、名胡桃城出土の鉄砲玉の比較から、既に指摘⁽⁵⁾済みであるが、該記の径を持つ鉄砲玉の出土が最も多いことは1.3cm前後(所謂、3匁玉)の鉄砲玉の使用頻度が一般的であったことを示すものであろう。

第22表 玉割表

玉目	鉛弾径(mm)	銃口径(mm)	玉目	鉛弾径(mm)	銃口径(mm)
1分玉	3.94	4.03	8匁	17.0	17.3
5分玉	6.7	6.89	9匁	17.7	18.0
8分玉	7.9	8.0	10匁	18.3	18.7
1匁玉	8.5	8.6	15匁	21.0	21.4
1匁5分	9.5	9.9	20匁	23.1	23.5
2匁	10.7	10.9	50匁	31.3	33.0
3匁	12.28	12.5	100匁	39.5	40.3
4匁	13.5	13.7	500匁	67.5	68.5
5匁	14.5	14.8	1貫目	84.1	84.8
6匁	15.4	15.7	2貫目	107.3	109.4
7匁	16.1	16.6			

ところが、大島上城出土の鉄砲玉の中に明らかに他に比べて大きいものが1個体含まれていた。これは、所謂、4匁玉に相当するもので、大島上城の攻防をめぐる、少なくとも3匁玉と4匁玉の2種類の鉄砲玉があったことが理解される。それは、当然のことながら、発射装置である火縄銃にも最低2つ種類があったことを示すものである。それが攻める側と守る側の持ち得た火縄銃の相違に根ざすものか、あるいは当時の西上州の時代の特徴に拠るものか、今後の資料の増加を待って考察を加えていきたいと考えている。

尚、遺跡からは城郭に明らかに関係すると思われる鉄砲玉の他に、多くの鉄砲玉が検出されることがある。「端気II遺跡調査報告書」(前橋市教育委員会)では、1個体の鉄砲玉を表彩資料として収録しているが、これを近世の獵師鉄砲に関するものと想定している。実際、火縄銃は我が国で国産化が始まってから明治に至るまで、からくり部の改良以外は殆ど形態的には大きな変化がなく推移しており、従って、鉄砲玉そのものについても形態上、大きな変化はなかったものと推定される。江戸時代を通して農民からは火縄銃を初めとする武器一切は権力者の手によって取り上げられたが、しかし、実際には狩猟を業とする獵師には火縄銃の所有が許可されていたし、また、農民自身に一年のうち、時期を限って火縄銃の使用を許可していた事実がある。

「甘楽町史」では次のような史料を掲載している。

奉差上鉄砲証文之事

上州甘楽郡小幡村

一、鉄砲(砲) 壹挺 預り主 佐 吉

玉目 三匁 五人組 喜 七

一、同 壹挺 預り主 政五朗

玉目 三匁 五人組 作右衛門

一、同 壹挺 預り主 組頭

玉目 三匁 郷右衛門

右ハ当村之儀猪 鹿 猿多く出作物荒シ候ニ付御貸附鉄砲奉願
上候処御公儀様江被仰立当午二月十三日より同十一月廿日迄書
面之通り御貸附被成下有難仕合ニ奉存候

右日数之内毎月八日 十日 十二日 十四日 十七日 廿日

廿二日 廿四日 廿六日 晦日ハ堅く打ち申す間敷候旨被仰渡

奉畏候

且ツ又右鉄砲ニ而 畜類威ニ事寄せ悪事仕出シ候類 外之殺生

仕り候ハ、何分之曲事ニ茂 可被仰付候 尤も預り主之外縦親

子兄弟たりとも一切貸し申す間敷候 後免日数之内作毛荒シ候

畜類打留め候ハ、其員数御注進可申上候

右鉄砲当辰十一月廿日急度差上げ可申候

為後日仍而如件

右村

文化七年三月十三日

百姓代 署名印

御代官三名御名(名を欠く)

組頭 (二名)

名主

これらの事実からすれば、近世を通じて相当数の鉄砲玉が発射されたことは容易に想像できることであり、それが城郭の近辺において検出されたなら、中世と近世の鉄砲玉の類別を行うことは極めて困難であると言える。しかし、鉄砲玉の使用は城郭の時期を考察する上で重要な資料となり得るものであり、執拗に鉄砲玉の中世と近世の別を追求していくことが必要であると考えられる。従って、鉄砲玉の更なる資料の増加を待つて、成分分析を行い、成分の比較から中・近世の鉄砲玉の差異の比較を試みたり、原料たりえた鉛鉱山の同定⁶⁾から、鉱山の開削年代と関連づけて鉄砲玉の時代性を考察していくことが必要であろう。

註(1) 津金沢吉茂氏の御教示による。詳細については『群馬県埋蔵文化財調査事業団十周年記念論集』1988 城館址の研究動向を参照されたい。

(2) 『城平遺跡、諏訪遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

この中で、大江正行氏は「鉛製玉は一般の狩猟等に常用されるが、銅製玉は戦時体勢における製作と考えられる」としている。

(3) 『真壁城跡』(茨城県真壁城跡発掘調査会) 1983

出土した鉄砲玉の観察だけでなく、耐弾試験を試みており、弾丸重量、発射薬量、射撃距離を変えて、6通りの耐弾結果を掲載している。

(4) 『一宮城跡城之内遺跡』(山武考古学研究所) 1984

(5) 田口正美「上州に於ける鉄砲鍛冶について」『群馬県埋蔵文化財調査事業団十周年記念論集』1988

(6) 馬淵久夫「鉛同位体比測定による火縄銃関係資料の原料産地推定」『朝倉氏遺跡資料館紀要』1985(朝倉県立朝倉氏遺跡資料館)同書において、産地同定が試みられている。馬淵氏によれば、国内の鉛鉱山の成分分析は殆ど資料化が終了しており、鉛製品の同定が可能であるとのことである。従って、同定された鉛鉱山の開削年代が判明していれば、それによって鉄砲玉の使用時期を科学的視点から推定できるものと考えられる。

付載 2号墓墳出土の人骨について

群馬県警察本部刑事部科学捜査研究所
法医主任 緑川 順

第1 現地調査

1 年月日時

昭和62年3月13日(金)午後1時30分から、同日午後5時までの間。

2 場 所

富岡市大島上城遺跡、人骨発掘現場

3 調査事項

- (1) 性 別
- (2) 年 齢
- (3) 身 長
- (4) その他参考事項

4 経 過

(1) 外観所見

ア 全体所見

資料は約1体分の人骨である(以下資料骨と記載する)。但し胸腹部及び右上肢は土中に没しており、調査時の状態は頭部を南方、足先を北方に向け、屈んだ姿勢である。資料骨の周囲には、頭蓋骨の後方、及び側方、右体側腰部に石が置かれている。

容易に判別出来る骨部位は、

頭蓋骨(Ossa curanium) 左鎖骨(L, Clavicula) 左上腕骨(L, Humerus) 左大腿骨(L, Femur) 左下腿骨(L, Ossa cururis) 右大腿骨(R, Femur) 右膝蓋骨(R, Patella) 右下腿骨(R, Ossa cururis) である。

資料骨の色調は、白色、乳白色、及び土中の深層部に至るほど黄色を呈している。硬度は指圧において容易に碎き得る程度で、各部位の脱落、及び破損する辺縁部ほど脆くなっている。

臭気は、検査するも土臭を発生し、資料骨自体は無臭と思われる。

イ 頭蓋骨所見

頭蓋骨は、頭頂を体の右後方に向け、頭蓋冠の約3分の1程度は土圧の為か粉碎され骨片となり残存しているが、他はほぼ原型をとどめ、矢状方向に扁平し変形している。

更に骨部位を判別すると

前頭骨(Os Frontale) 右頭頂骨(R, Os parietale)の一部、右側頭骨(R, Os temporale)の一部、右眼窩部(R, Pars orbitalis) 鼻骨(Os nasale) 1片、上顎骨(Maxilla)の左齒槽突起(L, Processus alveolaris)の一部、左側頭骨(L, Os temporale)の外耳孔(L, Foramen acusticum externum) 乳様突起(L, Processus mastoideus) 左頬骨弓(L, Arcus zygomaticus)の一部、後頭骨(Os occipitale)と、その外後頭隆起(Protuberantia occipitalis externa) 大後頭孔(foramen magnum)の後縁があり、また、それらの結合する縫合線の全体、あるいは一部が見られるが人字縫合(Sutura lambdoidea)の後方では、更に一条の縫合線様のものが見られる。

上歯列弓 (Arcus dentalis superior) の歯槽 (Alveoli dentales) は脱落し、海綿質 (Substantia spongiosa) が露出している。左臼歯部に歯牙2本を認め、白色を呈している。

下顎骨 (Mandibla) は中央のオトガイ三角より右側が土中に没している。歯槽は上顎と同様脱落し海綿質を露出、槽間中隔 (Septa interalveolaria) 及び根間中隔 (Septa interradicularia) は明瞭でない。また歯牙は認められず、生前、死後の脱落は判明しない。

◎性別判定に関する観察

頭蓋骨は前記のとおり、頭蓋冠が圧平され確実な観察を得ないが、前頭骨は、やや緩やかな傾斜を示すものと感じられる。また乳様突起、外後頭隆起、及び上項線の発達は中等度と思われ、さらに下顎骨は枝、及び体とも強靱な感じを受ける。

◎年齢推定に関する観察

縫合の癒着度を検査するも土砂の付着から判定は困難であるが、頭蓋骨の三大縫合である、

冠状縫合 (Sutura coronalis) の右約3分の1、矢状縫合 (Sutura sagittalis) の後方の一部、人字縫合 (Sutura lambdoidea) の右側

が観察され、各々の縫合線が肉眼で追跡出来る状態であるが土圧による分離が判明しない。また、右鱗状縫合 (Sutura Squamosa) の後方約3分の1も同様であり、更に下顎枝角の角度は目測するも角度【小】(100度程度)と思われる。

ウ 長管骨所見

- 左鎖骨 (L, Clavicla) は、肩峰端 (Extremitas acromialis) から約3分の1で破断して残存し、髄空、及び海綿質が露出している。
- 左上腕骨 (L, Humerus) は、近位端の上腕骨頭 (Caput humeri) の一部を残し、大結節 (Tuberculum majus) が脱落欠損し、遠位端の内側上顆 (Epicondylus medialis) 付近が土中に没しているがほぼ全体が残る。また骨頭は遊離せず、結合線は見られない。
- 左大腿骨 (L, Femur) は近位端から約半分程度、右大腿骨 (R, Femur) は近位端から約3分の1程度、土中、又は石の下に没している。左右大腿骨とも骨体 (Corpus femoris) の表面は土砂が付着するも、ほぼ滑面で、ある程度の硬度を保っているものと思われる。しかし内側上顆 (Epicondylus medialis) 及び外側上顆 (Epicondylus lateralis) 外側顆 (Condylus lateralis) 付近の遠位端は一部緻密質が剥離し、海綿質が露出している。
- 右膝蓋骨 (R, Ptella) は、土砂が付着するも栗の実状の形状は明瞭である、また位置の転位は見られない。(＊膝蓋骨は偏平骨であるが、下肢骨の一部として長管骨に含ませた。)
- 左脛骨 (L, Tibia) は、ほぼ全体が発掘されているが、近位端の部分は折れており、緻密質が剥離し海綿質が露出、また遠位端も同様に海綿質が露出している。右脛骨は、遠位端が土中に没し直近の体の一部が緻密質を剥離し残る。また近位端は左脛骨とほぼ同様の状態である。左右脛骨とも骨体表面はある程度の硬度を保っていると思われる。
- 左右腓骨 (L, R, Fibula) ともほぼ全体が発掘されているが、右腓骨は遠位端から約3分の1程度が折れている。左右腓骨とも骨体はある程度の硬度を保っていると思われるが、大腿骨と同様に遠・近位端は海綿質を露出している。

(2) 計測検査

資料骨の計測可能な部位について検査したところ次のとおりである。

第II章 大島上城遺跡

ア 頭蓋骨

頭蓋最大長	g-op	178.5mm
頭蓋最大幅	eu-eu	140.0mm
頭蓋底長	n-ba	94.0mm
最大後頭幅	ast-ast	112.0mm
顔長	ba-pr	81.0mm
上顔高	n-pr	51.0mm
眼窩幅	mf-ek	(R) 40.0mm
眼窩高		(R) 32.0mm
下顎枝高		64.0mm
頤高		29.0mm

イ 上腕骨

中央最小幅		(L) 17.0mm
骨体矢状径		(L) 19.0mm

ウ 大腿骨

上顆幅		(R) 72.0mm
-----	--	------------

エ 脛骨

全長		(R) 317.0mm
上幅		(L) 63.5mm
		(R) 65.0mm
最大下端幅		(L) 46.0mm

オ 腓骨

最大長		(L) 305.0mm
		(R) 310.0mm

5 考察

(1) 性別の推定

外観所見から前頭の傾斜、外後頭隆起、乳様突起の発達状態は男女の中間に属し、下顎骨の発達状態は男性傾向を示した。また計測検査においては、計測点の不足および欠損のため十分な判定結果が得られず、これをもって性別判定をすることは危険であるが、現時点までの検査結果は若干男性傾向が強いものと思われた。

(2) 年齢の推定

歯牙咬耗度を検査出来ないため明確な年齢幅は判明しないが、上腕骨の骨頭結合線の消失、頭蓋骨の三大縫合の検査結果から少なくとも成人（現代人の20～30歳）を越え、老年（現代人の60～70歳）に近い年齢ではないかと考えられる。

(3) 身長推定

現代人に使用されている一般的身長推定式

○脛骨

$$4.792 \times \text{骨長} = \text{身長} \dots\dots\dots(A)$$

○腓骨

(L) $4.812 \times \text{骨長} = \text{身長}$ 長……………(B)

(R) $4.813 \times \text{骨長} = \text{身長}$ 長……………(C)

に前記計測値を代入したところ

(A) 149.9cm

(B) 144.7cm

(C) 147.2cm

である。なお、この算出値には長短5cm程の幅をみる必要があることから、約140cmから155cmの身長と推定される。

6 結 果

- (1) 性別 不明（現時点においては男性傾向が若干強いものと考えられるが、更に資料骨の総合的検査を必要とする。）
- (2) 年齢 少なくとも30歳以上で、老年期（現代人の60歳から70歳）に近いものと推定される。
- (3) 身長 140から155cm位と推定される。
- (4) その他参考事項
ア 後頭骨に縫合線様のものが1条みられ、縫合線であればインカ骨の形成ではないかと思われる。



第80図 現地調査時における資料骨（頭蓋骨）

第II章 大島上城遺跡

第2 総合検査

現地調査により得られた結果（性別・年齢・身長）を更に明確にするため、次のとおり総合的な検査を行った。

1 期 間

昭和63年5月12日から昭和63年10月10日までの間

2 場 所

群馬県警察本部刑事部科学捜査研究所

3 経 過

(1) 資料骨の洗浄

資料骨には発掘現場の粘性土砂が固着していたため、資料全体を水に浸し、土砂に水分を吸収させ、脆くなったところで資料骨を抽出し、更に乾燥の後表面を毛筆、刷毛等により払拭し洗浄した。

(2) 外観検査・資料骨部位の判別

ア 全 体

資料骨の判別可能な部位及び保存状態は、

頭蓋骨(下顎骨及び歯牙5本を含む…詳細については後述)、左肩甲骨の肩峰、関節窩、及び肩甲切痕付近の一部、左鎖骨の肩峰端から3分の1、左上腕骨、右肩甲骨の肩峰、関節窩、及び肩甲切痕付近の一部、右上腕骨、右尺骨の肘頭から尺骨体の2分の1、左寛骨の腸骨耳状面、上前腸骨棘の一部と下前腸骨棘さらに弓状線から坐骨体の腸骨側へ至る一部、右寛骨の腸骨耳状面と弓状線から坐骨体の腸骨側へ至る一部が残り、左大腿骨、左脛骨、左腓骨、右大腿骨、右膝蓋骨、右脛骨、右腓骨、右踵骨、左距骨、右距骨のほぼ全体が残存し、その保存状態は、左上腕骨の骨顆部は遊離し滑車、小頭の中央部において二分、右上腕骨の解剖頸は欠損、左大腿骨は大転子の遠位、外側上顆、内転筋結節、及び内側上顆の一部を欠損し骨体の近位から5分の2付近において二分、左脛骨の脛骨粗面の周囲と内果前面を欠損、左腓骨の腓骨頭が欠損、右大腿骨の大腿骨頭、内側上顆、外側上顆のそれぞれ前面が欠損、右膝蓋骨の外側(端)を欠損、右脛骨の外側顆前面、内果を欠損し骨体中央部において二分、右腓骨の腓骨頭関節面下内側をやや欠損し全体に三分、右踵骨の立方骨関節面、踵骨隆起の一部が欠損、左距骨の内側半が欠損する状態で、硬度、色調、臭気についての検査結果は現地調査と同様である。なおこの他の付着土砂内から抽出した小骨片類(主に、脊椎骨、肋骨、手足指骨等)については部位不明のため検査対象外とした。



第81図 本調査時における資料骨(全体)

イ 頭蓋骨

頭蓋骨は骨片となり約6割が残存し、

前頭骨の頭頂縁の一部、側頭面、左眉弓の左側、及び頬骨突起を欠損、左頭頂骨の頭頂結節、後頭縁、前頭縁を欠損、右頭頂骨の側頭縁、頭頂結節付近の一部を欠損、左側頭骨の頬骨突起を欠損、右側頭骨の頬骨突起を欠損、左頬骨の側頭突起、及び下縁を欠損、右頬骨の側頭突起を欠損、左上顎骨の切歯、犬歯付近、及び右鼻骨がわずかに残存、下顎骨の左筋突起、左関節突起、右関節突起を欠損し、歯牙は

上顎の左第1小臼歯、左第2小臼歯、右犬歯、右第1小臼歯、右第2小臼歯が残存しており、頭蓋骨全体としては、右頭頂、右側頭から右後頭骨手前までの欠損が多い。硬度、色調、臭気の検査結果については現地調査と同様である。



第82図 頭蓋骨(正貌)

(3) 頭蓋骨の復元

前記頭蓋骨を構成する資料骨を接合復元し、欠損する部位については、石膏により補充した。

(4) 性別判定に関する検査

ア 頭蓋骨の形態学的検査

性別判定に関する頭蓋骨の形態学的検査を行ったところ、

前頭結節は中等度に発達、額鉛直型、眉弓の隆起は弱く、眉間の隆起は中等度に発達、乳様突起はやや強く発達、外後頭隆起はやや強く発達、上項線及び項平面は保存状態が悪く判定困難(やや強く発達するものと推定)、頬弓幅は検査部位欠損のため判定困難(やや狭いものと推定)、下顎角幅は検査部位欠損のため判定困難(やや狭いものと推定)、下顎体角は鈍角であり、全体に男女性差の中間位置に属するが、若干女性傾向が強いものと考えられた。



第83図 頭蓋骨(右側貌)

イ 頭蓋骨の人類学的計測検査

性別判定に関する資料頭蓋骨の計測可能(推定部位を含む)な人類学的計測検査を行ったところ、

対 象 値 (男性)

計測項目	計測点	資料骨計測値	対 象 値 (男性)		
			江戸時代人 (森山、川越)	鎌倉時代人 (鈴木他)	古墳時代人 (城)
頭蓋骨最大長	g-op	178.0mm	183.5mm	184.2mm	181.7mm
頭蓋骨最大幅	eu-eu	131.5mm	141.1mm	136.5mm	140.8mm
最小前頭幅	ft-ft	88.0mm	94.9mm	93.5mm	—
最大後頭幅	ast-ast	111.0mm	109.5mm	107.8mm	—
上 顔 幅	fmt-fmt	100.0mm	105.6mm	105.5mm	—
上 顔 高	n-pr	61.0mm	71.8mm	64.7mm	68.7mm
両 耳 幅	au-au	121.0mm	126.6mm	119.2mm	—

第II章 大島上城遺跡

両眼窩幅	ek-ek		92.0mm	99.9mm	100.0mm	—
眼窩幅	mf-ek	* (L)	36.0mm	43.3mm	43.1mm	43.0mm
		(R)	41.0mm	//	//	//
眼窩高		* (L)	34.0mm	35.1mm	33.7mm	34.7mm
		(R)	34.0mm	//	//	//
口蓋長(SBL)	ol-sta	*	46.0mm	46.2mm	46.3mm	47.4mm
口蓋幅		*	43.0mm	40.0mm	41.0mm	38.0mm
鼻高	n-ns		46.0mm	53.6mm	51.1mm	
鼻幅		*		28.0mm	25.1mm	26.6mm
下顎長		*	110.0mm	106.7mm	—	—
下顎体長		*	78.5mm	76.5mm	76.4mm	—
下顎枝高		*	60.0mm	68.2mm	59.7mm	60.7mm
下顎頭幅	kdl-kdl	*	121.5mm	127.5mm	123.0mm	128.0mm
下顎角幅	go-go	*	88.0mm	102.1mm	98.6mm	101.8mm
頤高	id-gn		23.0mm	34.5mm	32.7mm	34.7mm
下顎枝幅		(L)	38.0mm	35.3mm	36.6mm	34.1mm
		(R)	//	//	//	

*印は推定値を示す。

である。現地調査で記述したごとく、頭蓋冠は土圧のためか偏平、変形し矢状方向に長くなっており長径は長く幅径は短く計測される傾向が、また下顎骨歯槽縁に計測点を置くものは歯槽骨退縮のため短く計測されるという傾向が推察されるが、その誤差を概ね3~5mmの範囲内と考えてみても計測値が対象値より10mm近く下回るものが多い。よって、総合的には女性傾向が強いものと考えられる。



寛骨



右寛骨(大坐骨切痕近影)

第84図 右・左寛骨写真

ウ 寛骨(坐骨)の形態学的検査

残存する寛骨(坐骨)の大坐骨切痕について形態学的検査を行ったところ、

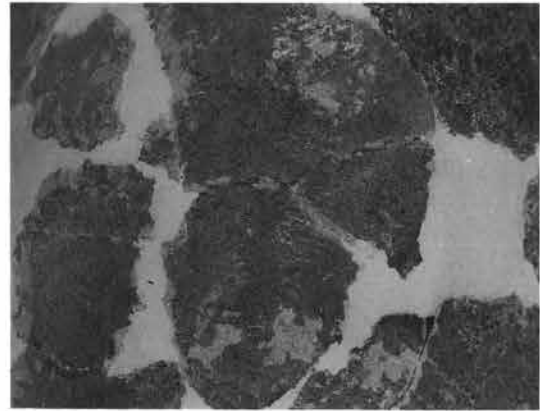
角度は75度、切痕の曲線形態は両辺がやや緩やかな曲線であり、頂点付近が急な曲線であった。一般に大坐骨切痕の開き具合(角度)が80度以上であれば女性、70度以下(多くは70度に達しない)であれば男性、また全体の曲線形態が円形に近ければ女性、楕円形に近ければ男性と言われている。これは直

立二足歩行の人類が抱えた産道確保（女性）に関する問題が骨盤形態に影響しているからである。よって大坐骨切痕がある程度大きな広がり呈している資料骨は女性傾向があるものと考えられる。

(5) 年齢推定に関する検査

ア 頭蓋縫合の癒着度検査

頭蓋縫合について癒着度の検査を行ったところ、冠状縫合、人字縫合は土圧により分離していたため詳細不明であるが縫合線の形状は確認できる状態で、矢状縫合は完全に癒合し縫合線を追跡することは困難である。また左右鱗状縫合は冠状、人字縫合と同様に土圧により分離し、さらに辺縁が欠落し検査することは困難の状態であった。現在、頭蓋縫合の癒着度と年齢推定に関して、両者は相関関係を有しているものの個人差が比較的大きいものと見られている。本資料骨のように保存状態のあまり良くない骨体については特に判断を誤る率が大いと思われるが、資料骨の矢状縫合に見られるような強度の癒合（完全に癒着し縫合線を消失）については一般的に高齢者によく見られる所見である。よって資料骨についても高齢者ではないかと考えられる。

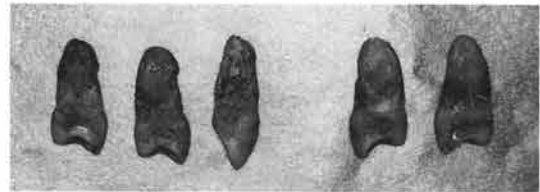


第85図 矢状縫合近影(完全)

イ 歯牙咬耗状態（及び病変）についての検査

残存する歯牙について咬耗状態の検査を行ったところ、

上顎右犬歯がエナメル質の面状咬耗、上顎左第1小白歯、第2小白歯、上顎右第1小白歯、第2小白歯については象牙質に至る面状咬耗であった。年齢



第86図 歯牙 (左から上顎右第2小白歯、右第1小白歯、右犬歯、左第1小白歯、左第2小白歯)

と最も相関関係が高いと言われている歯牙は切歯であるが、残存する本資料歯牙の犬歯、小白歯の咬耗状態の所見だけでも長期の咀嚼期間を経過したことが推察される。さらに小白歯の歯頸部には強度のう蝕が認められ、やや黒変しており歯周症（歯槽膿漏等…高齢者に発生率が多い）を患っていたことから、総合して資料骨の年齢は高齢者と推定される。

ウ 上下顎歯槽骨退縮状態についての検査

右上顎には犬歯、第1小白歯、第2小白歯、左上顎の一部には犬歯の歯槽が見られ、他の歯槽については強度に吸収し歯槽骨自体が鈍縁となっている。残存する前記歯牙を歯槽に装着すると歯槽縁は歯根の3分の1程度にしか至らず、しかも歯根の唇側面は露出状態である。下顎骨は左小白歯部、右小白歯部、右第3大臼歯において歯槽があり、近位方向に傾斜している。また他の歯槽は吸収、あるいは歯槽内に骨梁が形成して歯牙脱落后の長期間を示唆している。特に、下顎骨の歯槽傾斜の所見は、隣接歯牙脱落によって生前に植立していた歯牙が、傾斜要因を有し長期咀嚼したものと推察される。よって資料骨の年齢は高齢者であるものと考えられる。*歯頸部の強度のう蝕、歯槽骨の強度の退縮の所見により、ただちに歯周症（歯槽膿漏）と言及することはできないが、歯頸部のう蝕による歯槽膿漏の発生、歯槽膿漏による歯槽骨退縮の促進という関係は比較的多く存在する。



上顎



下顎

第87図 上下顎歯列弓写真

(6) 身長推定に関する検査

現地における長管骨からの推定身長は140cmから155cmと幅が大であった。そこで長管骨の内、最も身長と相関関係が高いとされている下肢骨（資料骨では右大腿骨を選定）の長さをもとにする推定式

安藤の方法

大腿骨自然位全長（資料骨計測値361.5mm）×右3.840-2.0cm……………A

藤井の方法

大腿骨最大長（資料骨計測値365.5mm）×右2.47 +549.01mm ……B

工藤の方法

大腿骨長（資料骨計測値348.5mm）×右2.56 +56cm ……C

に資料骨（大腿骨）の計測値を代入したところ

A……………136.816 cm

B……………145.1795cm

C……………145.216 cm

であった。藤井、工藤の推定式からは約145cmの身長が推定され、安藤の推定式では約137cmの身長が推定された。現地調査における身長推定の幅は144.7cmから149.9cmで少なくとも140cmを越えており、安藤の推定式による140cm以下という数値は骨形態の個人的差異による算出結果ではないと思われる。よって、資料骨の身長は、現地調査及び本調査における推定身長の間値である145cm位と考えるのが妥当と思われる。

5 考 察

現地においての調査は、性別やや男性傾向、年齢30～70歳位、身長150cm位であった。しかしながら現地調査の資料骨の検査条件は発掘直後において資料骨の右半身が土中にあり、総合的な判定が不可能であったこと、また資料骨の変形、及び付着土砂により詳細な検査、判定が困難であり必ずしも明確な結果とは言えなかった。そこでさらに確実な判定を得るため現地調査と重複し、検査を行った。性別推定については頭蓋骨の形態学的検査、及び人類学的計測検査、寛骨（大坐骨切痕について）の形態学的検査を行ったところ、概ね女性傾向を示した。本来、白骨体の男女性別を判定するには骨盤形態を最優先するのが普通である。前記経過に記述のとおり、成人における男女性差の機能的違い（出産機能）が骨盤形態にあらわれるからで、仮に他の特徴が男性傾向であったとしても、骨盤形態が女性であるならば女性として判定するのが適正である。本資料骨は骨盤形態の内、残存する部位が大坐骨切痕のみであり、保存状態はかならずしも良いものとは言えず、検査基準とすべき縁、突端等が欠損していたが、比較的女性傾向を示した。また

頭蓋骨の性別に関する検査結果も女性傾向を示唆するものが多い。よって資料骨の性別は女性と考えられた。年齢推定については、頭蓋骨の縫合癒着状態の検査、歯牙咬耗状態の検査及び病変の検査、上下顎歯槽骨退縮状態について検査を行ったところ、頭蓋骨は各骨片が分離していたが、残存する頭頂骨の矢状縫合では完全癒合を示し、縫合線を追跡することが極めて困難な癒合状態で、資料骨が高年齢であることを強く示唆していた。また歯牙咬耗状態については残存歯牙5本について検査を行ったところ、強度の咬耗を有しており、特に小白歯は4本とも象牙質に至る面状咬耗で高年齢を示していた。さらに歯頸部においては強度のう蝕が見られ高齢者に多い歯周症も疑わせる。歯牙の検査と併せて行った上下顎歯槽骨についての検査では、上下顎とも強度の歯槽骨退縮を示し、また生前脱落と考えられる歯槽には骨梁が形成し歯槽弓は鈍縁（面は平坦）となっている。しかも、下顎歯槽はすべて近位方向に傾斜しており、生前に植立していた歯牙が隣接歯牙脱落后、長期間、不正な咀嚼力が加えられていたことを窺わせる。よって資料骨は高年齢に属し、現代人の年齢では60歳から70歳位に相当するものと考えられる。身長推定については、長管骨のうち身長と最も相関関係の良い大腿骨の長径を使用し推定式により算出し、現地調査結果とも比較して検討したところ、145cm位と考えられた。

6 結 果

- (1) 性別 女性
- (2) 年齢 高齢者（現代人の年齢では60歳から70歳位）
- (3) 身長 145cm位
- (4) その他参考事項

ア 歯周症の持主

イ インカ骨 (Os epactale laterale) の形成を有する。

* 日本人発生頻度……………2.0%（堀）、1.0%（赤堀）、4.5%（森田）、3.1%（須藤）



第88図 右後頭部インカ骨

7 参考文献

- 上條雍彦 『口腔解剖学 第1巻』（アナトーム社）昭和40
- 森 於菟他 分担 『解剖学1』改訂第11版 第3刷（金原出版）昭和59
- 金子丑之助 『日本人体解剖学』（南山堂）1965
- 鈴木 尚 『日本人の骨』（岩波書店）1963
- 鈴木 尚 『化石サルから日本人まで』（岩波書店）1971
- 江原昭善 『人類 ホモ・サピエンスへの道』（日本放送出版協会）昭和49
- 瀬田季茂他 『頭蓋骨の年齢推定のための解剖学的検討』（科学警察研究所報告 Vol.32 No.4）1979
- 黒田 直 『頭蓋冠縫合融合度と年齢』（科学警察研究所報告 Vol.29 No.4）1976
- 緒方義昌他 『白骨死体の法歯学的アプローチ』（日本犯罪学雑誌）1976

第3 復顔像作製

前記の結果をもとに、資料骨の生前顔貌を推定（復顔）した。

(1) 眼耳水平面基準による写真撮影

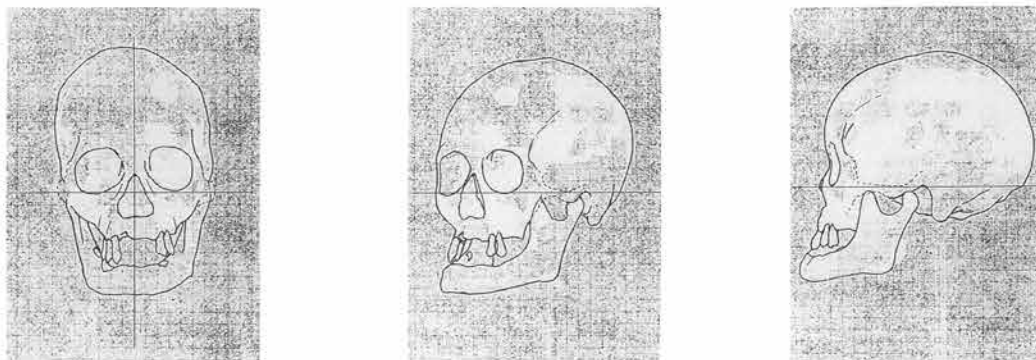
復元した頭蓋骨を眼耳水平面に固定し、正貌、斜側貌(右左とも矢状面に45度)、側貌について、70mmレンズ、撮影距離120cmにおいて撮影した。



第89図 頭蓋骨（復元写真）

(2) 頭蓋骨形態のトレース

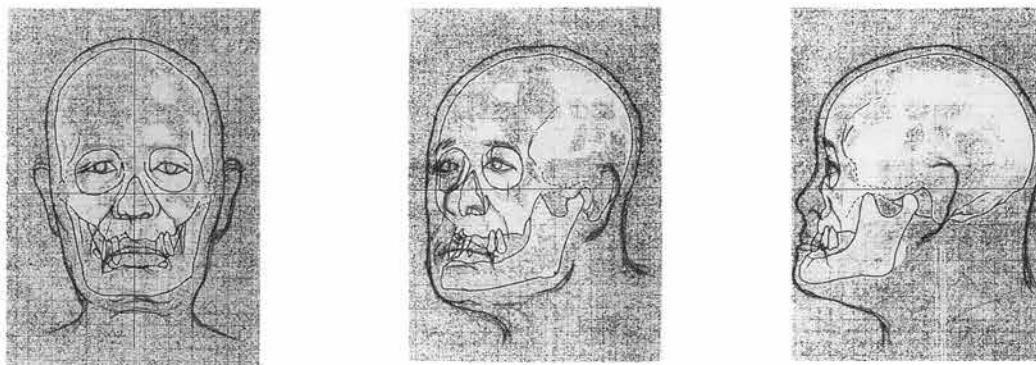
撮影した頭蓋骨の形態特徴を固定するため、実物の2分の1の大きさにプリントした写真を半透明方眼紙を使用してトレースした。



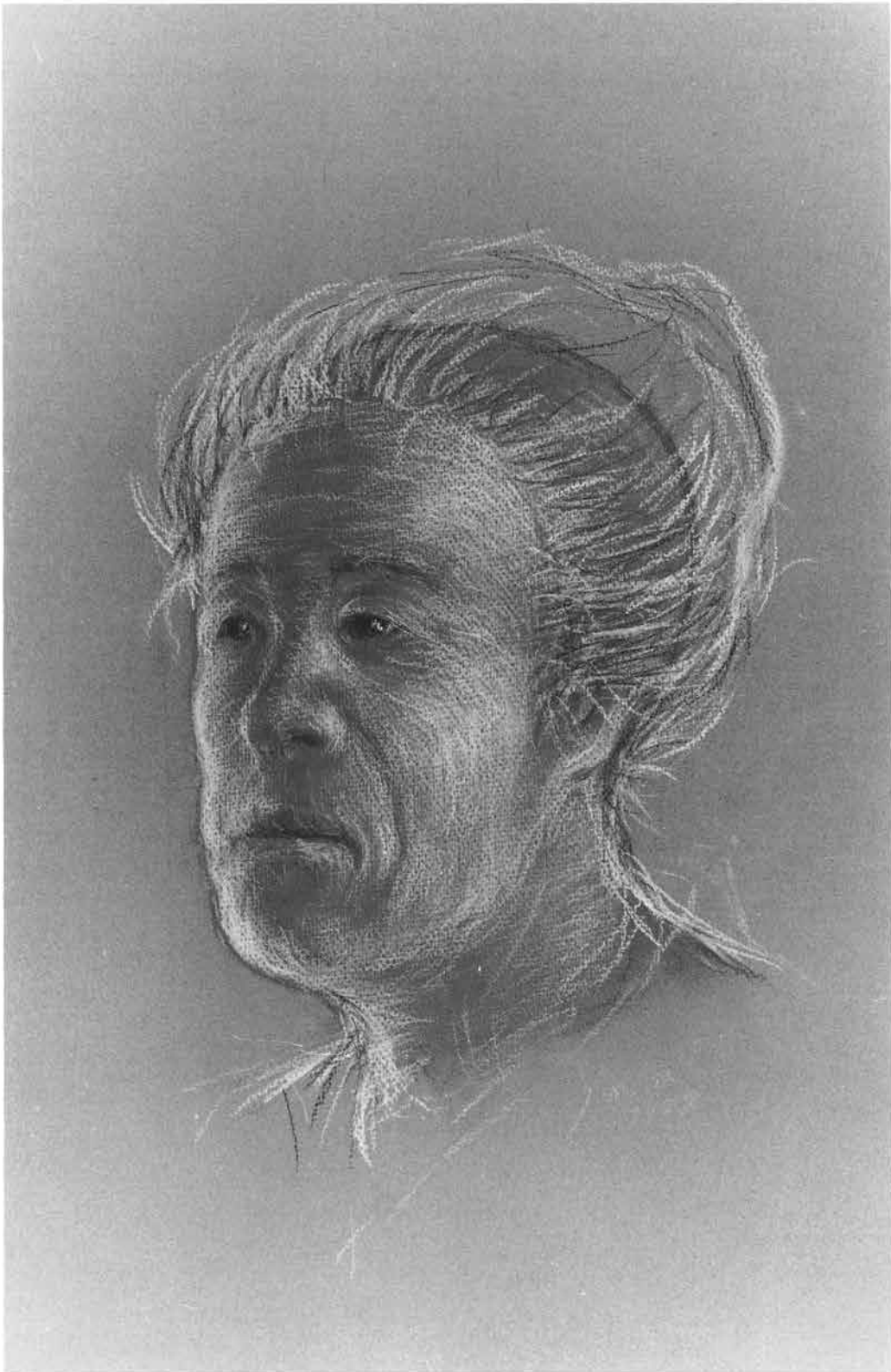
第90図 頭蓋骨トレース写真

(3) 平均的軟部組織の厚さによる輪郭線及び器官位置の推定

頭蓋骨のトレース図を基準に、平均的軟部組織の厚さから、生前の輪郭線及び各器官(目、鼻、口、耳)の位置、大きさを推定した。



第91図 平均的軟部組織による輪郭の推定



第92図 線描による復顔像

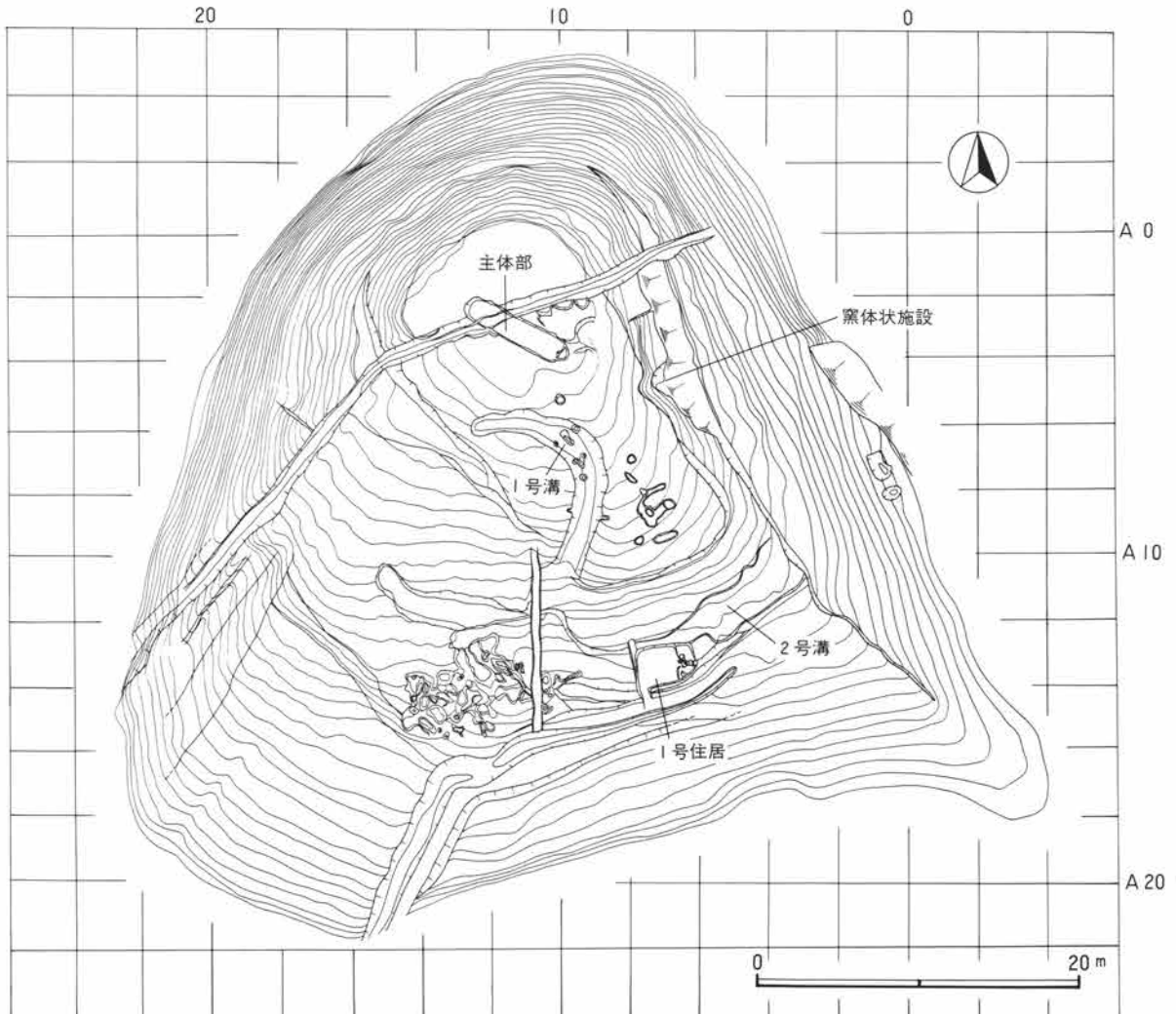
北山茶白山西古墳

第Ⅲ章 北山茶臼山西古墳

第1節 遺跡の概観

遺跡の概観 北山茶臼山西古墳からは該記の古墳の他、縄文時代に属すると思われるピット1基、平安時代の竪穴住居跡1軒、窯体状施設1基等が検出された。

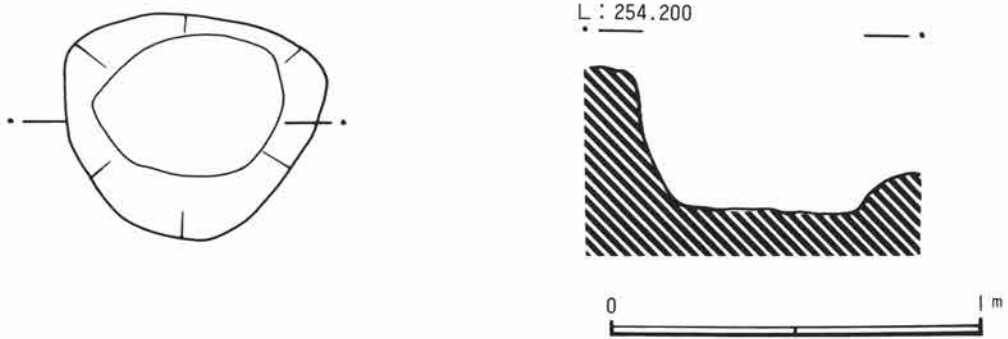
古墳は丘陵の頂部に占地しており、南東に伸びる尾根に沿う形で立地していた。前方後方形の墳丘形態をもつものと考えられる。主体部の残りは良好でなかったが、周辺から方格規矩鏡、鉄矛、刀子、鉄斧、ガラス小玉、木質片などが出土した。また竪穴住居跡は古墳の立地する南の平坦地に単独に存在するもので、窯体状施設との関連が指摘される。



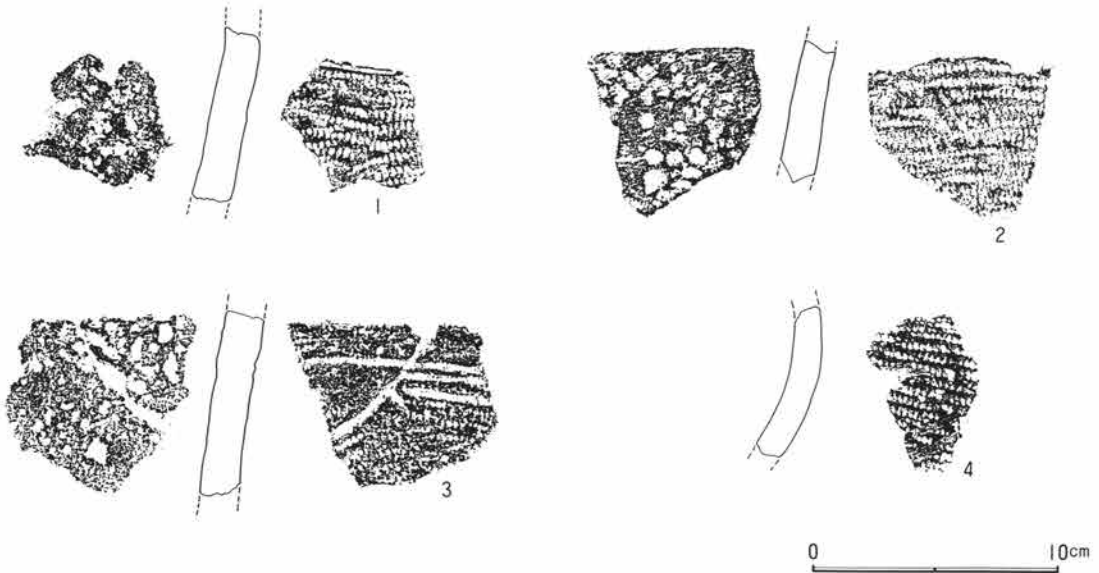
第93図 北山茶臼山西古墳遺構概念図

第2節 縄文時代

北山茶白山西古墳の墳丘下より縄文時代に属すると思われるピットが検出された。



第94図 縄文時代ピット



第95図 縄文土器片実測図

第22表 縄文土器観察一覧表

図版番号	土器種類 器形	①胎土②焼成③色調	文 様 の 特 徴	備 考
95-1	縄文土器 深 鉢	①黒色粒を多量に含む ②良 ③明黄褐色	R L縄文 内面に荒れが目立つ	中期（加曾利E2）
95-2	縄文土器 深 鉢	①黒色粒を多量に含む ②良 ③明黄褐色	R L縄文 内面に荒れが目立つ	中期（加曾利E2）
95-3	縄文土器 深 鉢	①黒色粒を多量に含む ②良 ③明黄褐色	R L縄文施文後、頸部に半截竹管の沈線が3 本、刻まれる	中期（加曾利E2）
95-4	縄文土器 深 鉢	①黒色粒を多量に含む ②良 ③明黄褐色	R L縄文 内面に荒れが目立つ	中期（加曾利E2）

第3節 古墳時代……北山茶白山古墳の調査

1 墳丘の調査

先述の通り、西古墳の立地する丘陵はその南部分が大きく、耕作の手によって削り取られていた。昭和30年代の初めに、ここを芋畑にすべく、削平したため、原形からの逸脱は大きいものがある。しかし、丘陵の北の一部については、殆ど手が入っておらず、墳丘構築当時の原形をかなりとどめているものと思われる。従って、調査の手順としては、まず削平によって露呈している東西方向の墳丘セクションの観察を第一義とし、残存の良好な北半分の墳丘は地層観察用のベルトを残しながら、上から順次はいでいった。

墳丘頂部は平坦面を有し、最高点では現状で255.3mを測る。周辺との比高差は北で65m、東で40m、西で45m、南で35mであり、特に北と東において、吃立傾向が顕著であり、独立丘陵的な色合が濃い。丘陵は馬蹄状に南西方向と南東方向に伸びているが、墳丘は南東方向に主軸を向ける形で構築されていた。墳丘盛土は旧地表面を削平して平坦面をつくった上に5～9層に及ぶ土を盛って構築されていた。

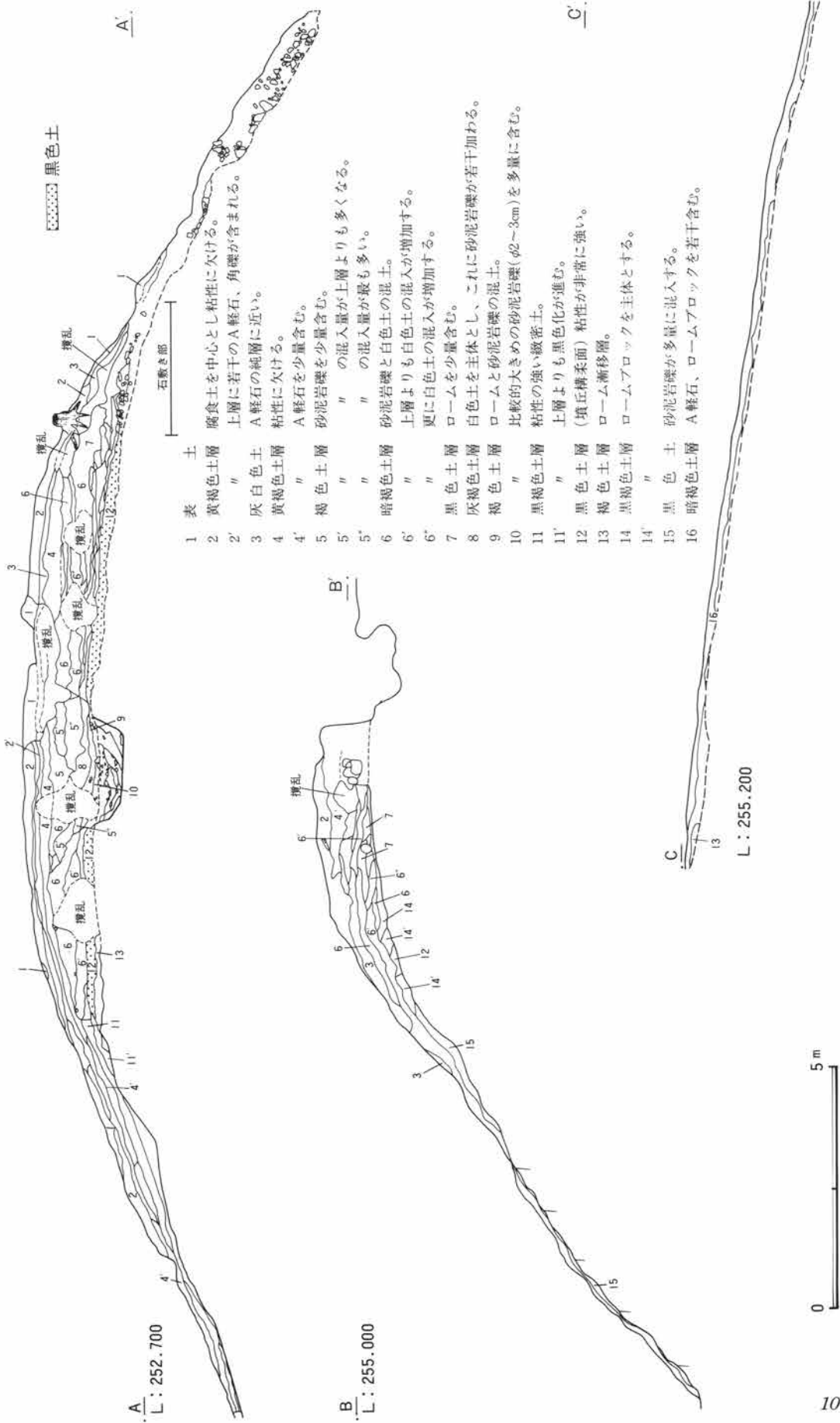
A軽石直下までの盛土は中心部において約1.20mであり、A軽石下において平坦面を有していた。盛土は10cm前後を単位として、5～6層に積み上げられた下半部と35cm前後を単位として、積み上げられた上半部とに分けられる。相対的に下半部の造作は丁寧であり、土の叩き締めも上半部に比してしっかりと行われている傾向が看取される。旧地表面は軽石を少量含む粘性の強い黒色土であるが（丘陵上では墳丘下でしか確認されなかった）、この面を前述した様にフラットに削平した上で、平坦面縁辺部に礫を敷く方法で地形が行なわれている。礫は丘陵一帯の基盤層たる泥岩質の岩盤を基本とするもので、これを墳丘縁端から幅約2mの範囲に敷きつめていた。墳丘が残存していた北側においてほぼ全面に亘って敷石が見られたが、東から西へ向かうに従って、礫の大きさは小さくなり、また、置かれた礫の量も減少する傾向にある。墳丘の削平されていた南側においては、礫を検出することはできなかったが、礫を抜き取ったと推定されるピットを部分的に検出することができた。恐らく、墳丘のかなり広い部分に亘って礫を敷きつめた地形が行われたものと考えられよう。地形のための礫は東西地層断面においても確認できたが、特に東部分に顕著な形で残存していた。それは一つには盛土の流失を防ぐ意味があったものと推定される。

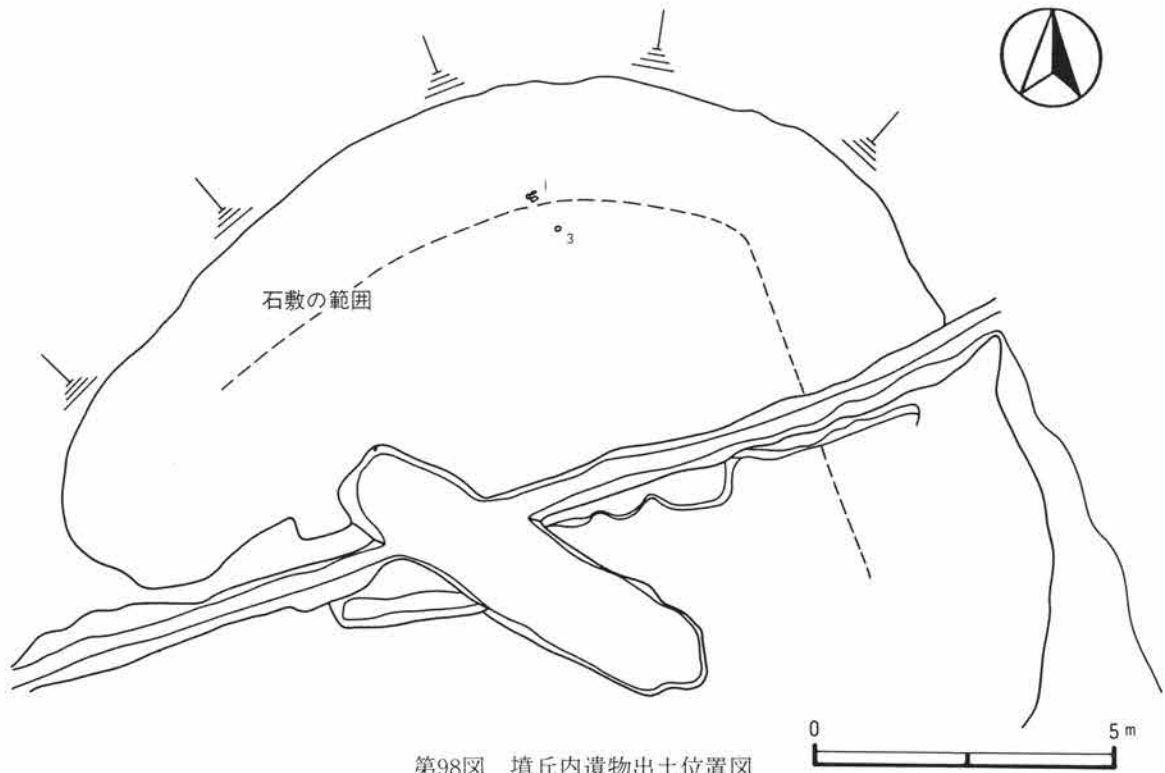
尚、敷石は既述の如く、縁辺部に施されていたが、その外郭ラインについては敷石が若干流れていることもあって顕著な傾向は見られなかったが、内郭ラインの北東コーナーにおいて直線的にくの字形に曲がるラインを看取することができた。また、地形図もコーナーを意識したことを推定させるようなラインをもっており、これらの点から方形を意識したプランを推定することができる。

また、盛土をはいでいく段階で、墳丘上より土器片が出土した。いずれもほぼ同レベルで、墳丘構築面より98～100cm上位の面よりの出土である。この面は墳丘の盛土の造作が上下に区分できる面に相当する部分であり、この面から遺物が出土したことは興味が深い。いずれも、小型甕や小型壺と思われる小品で、祭祀的な行為が行われた可能性を窺わせる。更に、これら土器片が出土する面は盛土の造作が変化する面に相当しており、盛土の様相の変化だけでなく時期差を推定させる。

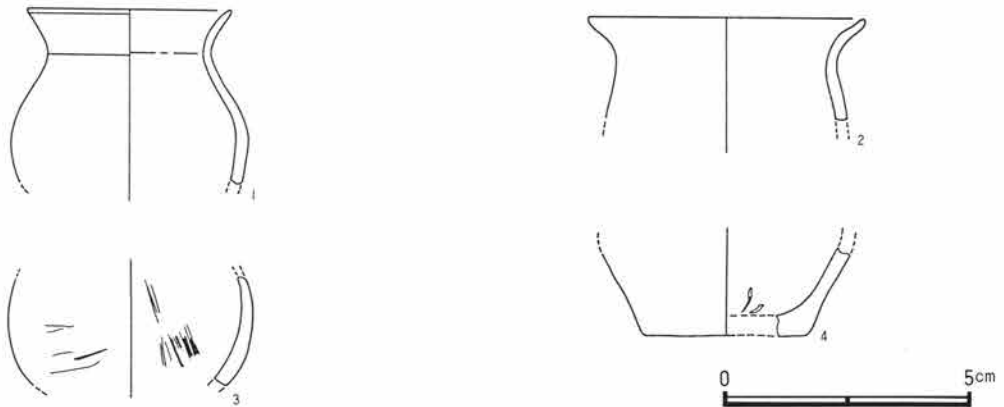


第96図 西古墳現況図及びびべルト位置図(白抜き)





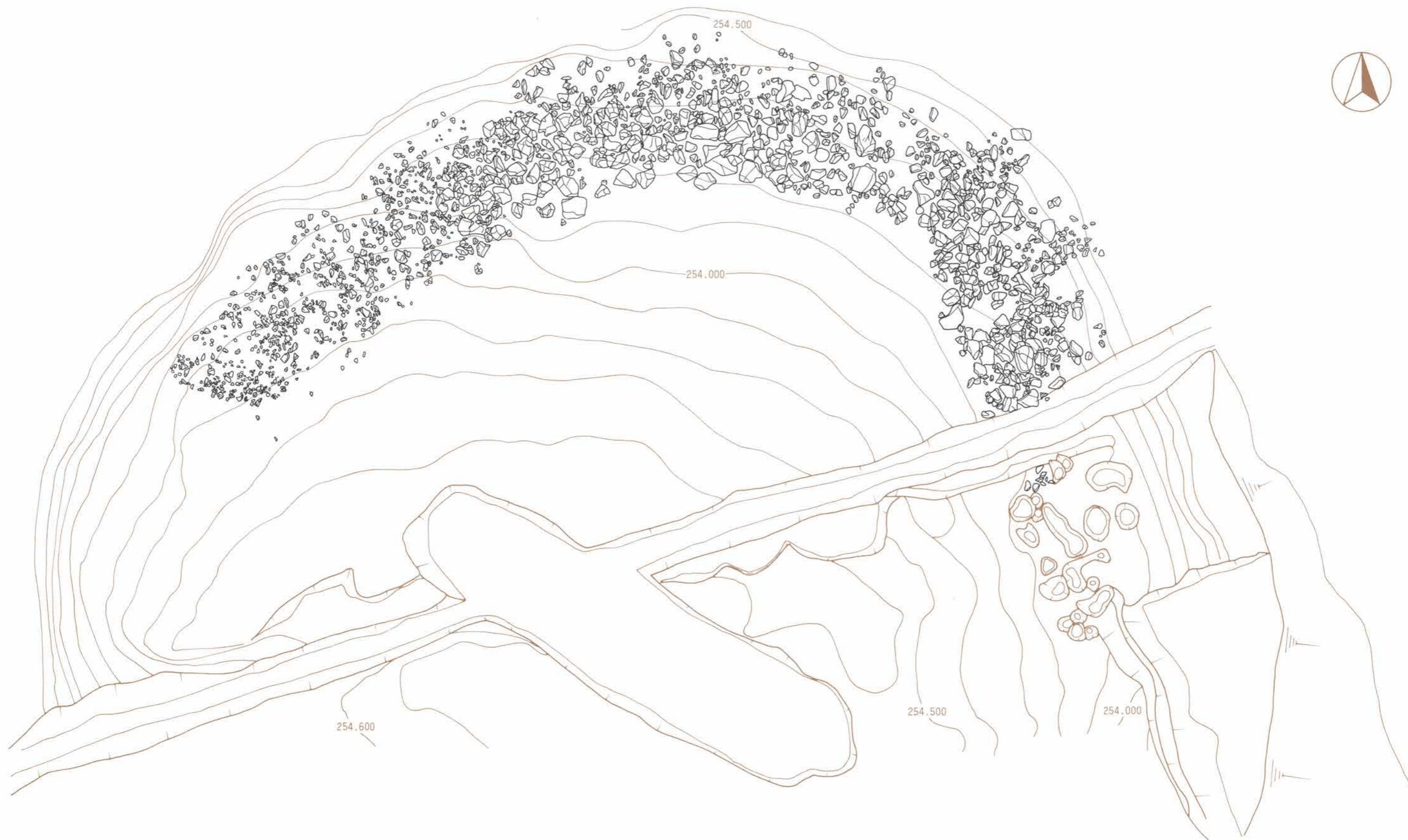
第98図 墳丘内遺物出土位置図



第99図 墳丘内遺物実測図

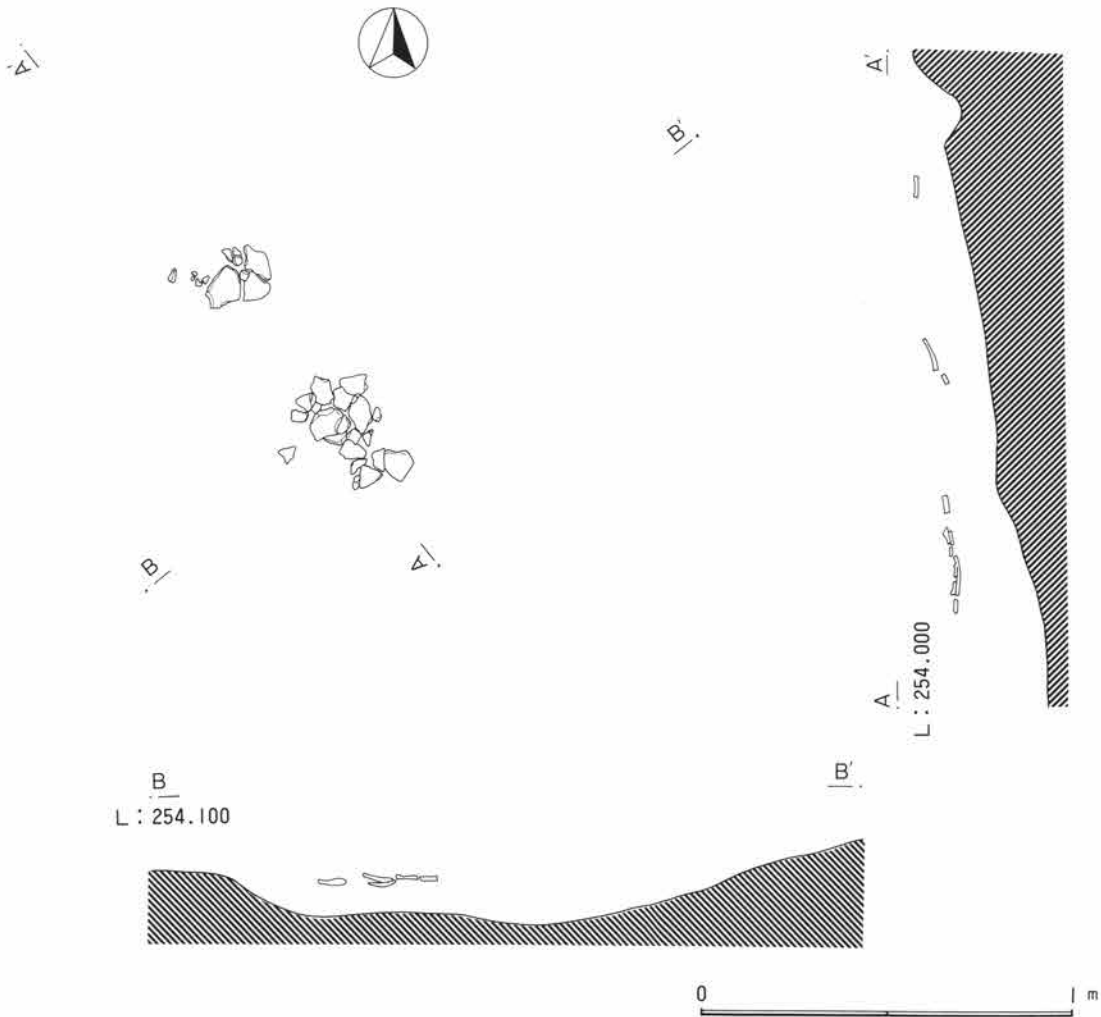
第23表 墳丘内出土遺物観察表

図版番号	土器種類 器形	量目		①胎土②焼成③色調	技法	備考
		口径・底径・器高	残存状況			
99-1	土師器 小型壺	(8.1cm) () ()	口縁～体部一部残存	①黒色土粒を多量に含む ②良 ③浅黄橙	内外面共に横ナデ。	
99-2	土師器 小型壺	(10.0cm) () ()	口縁～体部一部残存	①黒色土粒を少量含む ②良 ③外面：浅黄橙 内面：灰色	内外面共に横ナデ。	1よりも肩の張りが弱い。
99-3	土師器 小型壺	() () ()	体部一部残存	①黒色土粒をごく少量含む ②良 ③外面：浅黄橙 内面：灰色	内外面共に横ナデ。	
99-4	土師器 小型壺	() () ()	体～底部一部残存	①黒色土粒を若干含む ②良 ③浅黄橙	内外面共に縦方向のミガキが施される。	



第100図 西古墳構築面石組状況

0 4 m

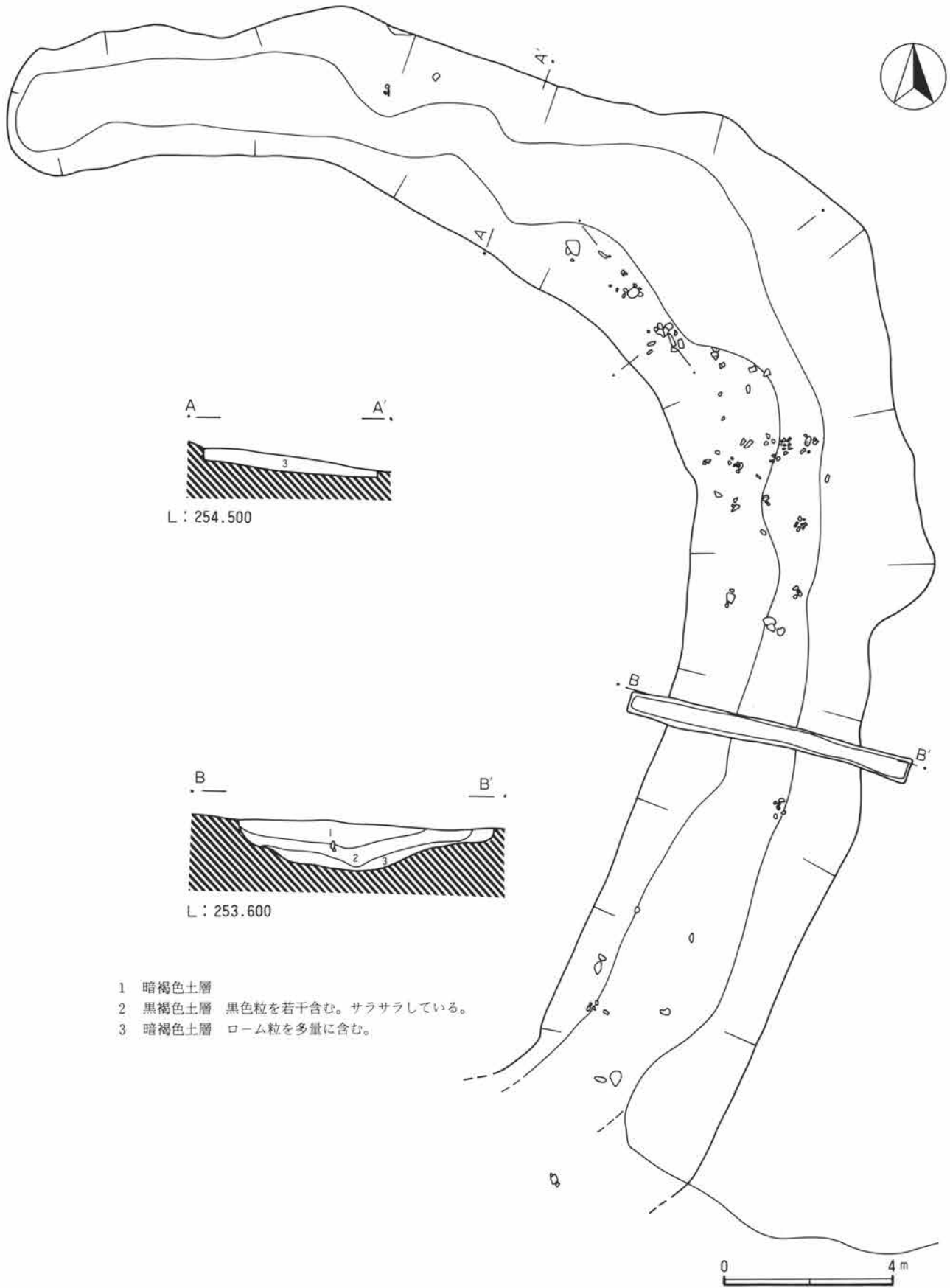


第101図 1号溝遺物出土状況

墳丘は南東方向に伸びているが、削平を受けている南部分においては盛土は一切確認できなかった。しかし、墳丘の周囲を巡る溝の検出によって、南部分の墳丘形態をおさえることができた。以下周溝の記述を通して墳丘形態に触れていきたい。

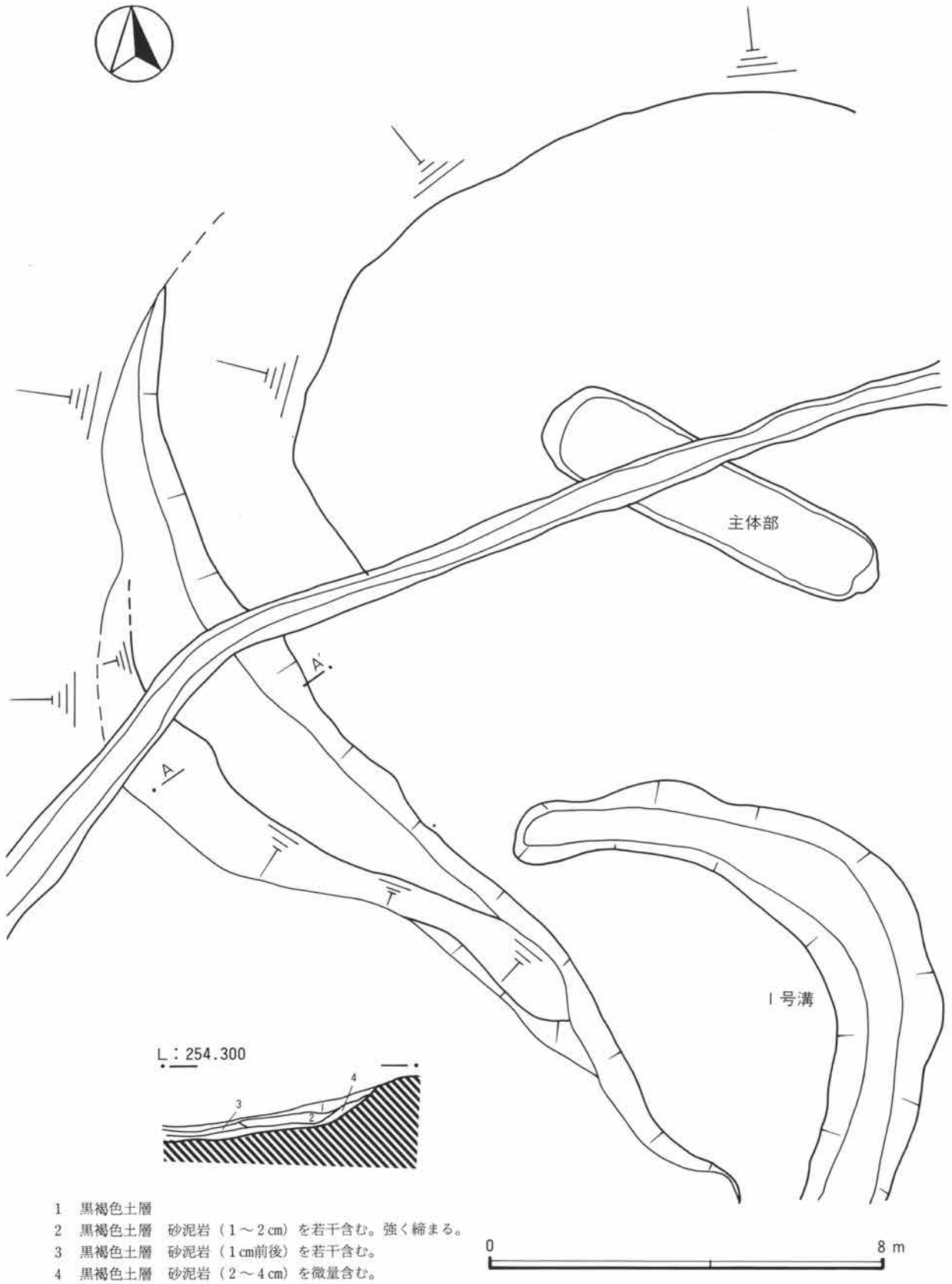
周溝は1号溝と2号溝に分けられる。1号溝は墳丘の西において検出されたもので、西に向かって開く弧状形態を呈する。所謂、くびれ部に相当する部分で、現状で上場13cm~23cm、下場8cm~11cmを測る。深さは最深部で30cm強を測り、北から南へ向かって徐々に深くなる傾向にある。また断面は傾斜のゆるやかなすり鉢状を呈している。1号溝は南限が分明ではなかったが、北限はゆるくカーブを描きながら、浅くなる傾向にあり、収束してしまう。しかし、この先、西に接近して地山を削り取った部分に連続する傾向が窺える。この地山を削り取った箇所は、墳丘の残存した部分の西端を取り囲むようにしてのびており、恐らく、1号溝に連続するものと思われる。削り取りによって墳丘を極立たせたものであろうか。

1号溝のくびれ部に相当する部分より土器が集中して出土している。いずれも、出土地点において、上から押しつぶされたような形で検出されたもので、本来、くびれ部に近い位置に据え置かれていた可能性が高い。



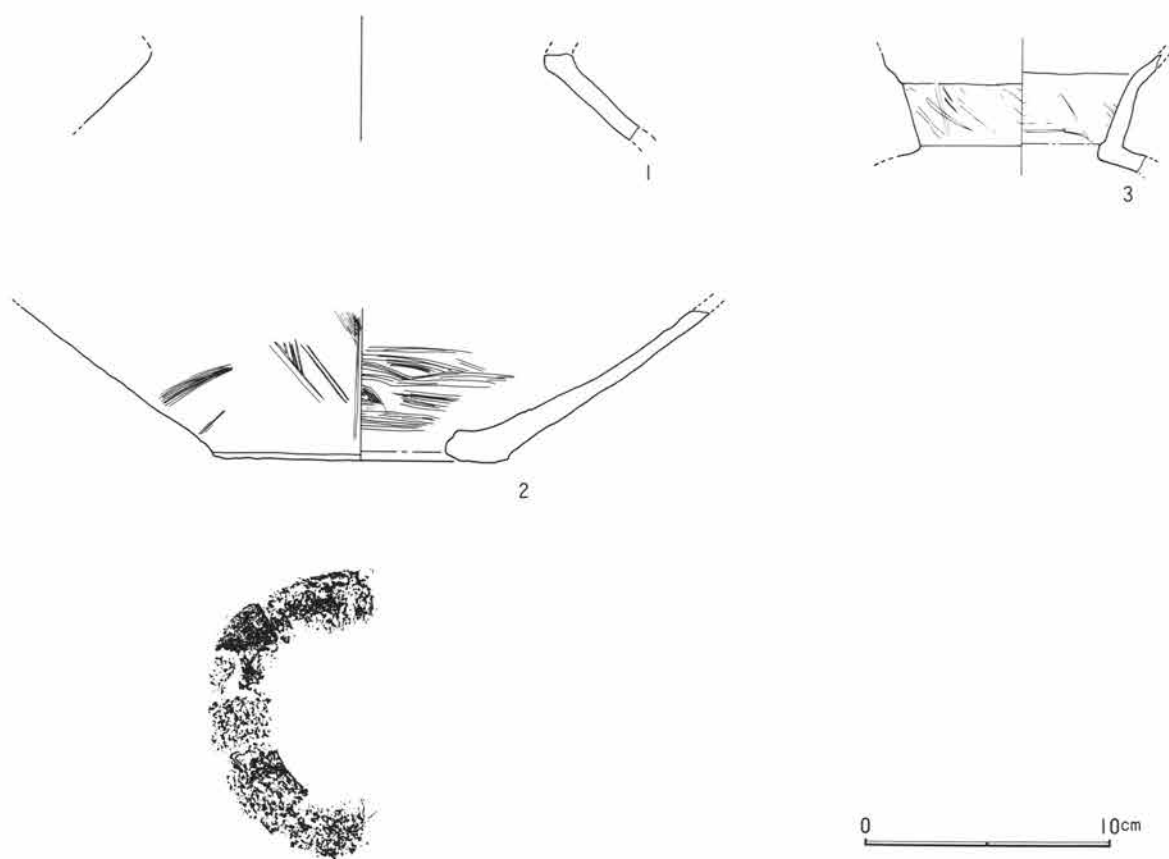
- 1 暗褐色土層
- 2 黒褐色土層 黒色粒を若干含む。サラサラしている。
- 3 暗褐色土層 ローム粒を多量に含む。

第102図 1号溝



- 1 黒褐色土層
- 2 黒褐色土層 砂泥岩 (1~2 cm) を若干含む。強く締まる。
- 3 黒褐色土層 砂泥岩 (1cm前後) を若干含む。
- 4 黒褐色土層 砂泥岩 (2~4 cm) を微量含む。

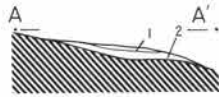
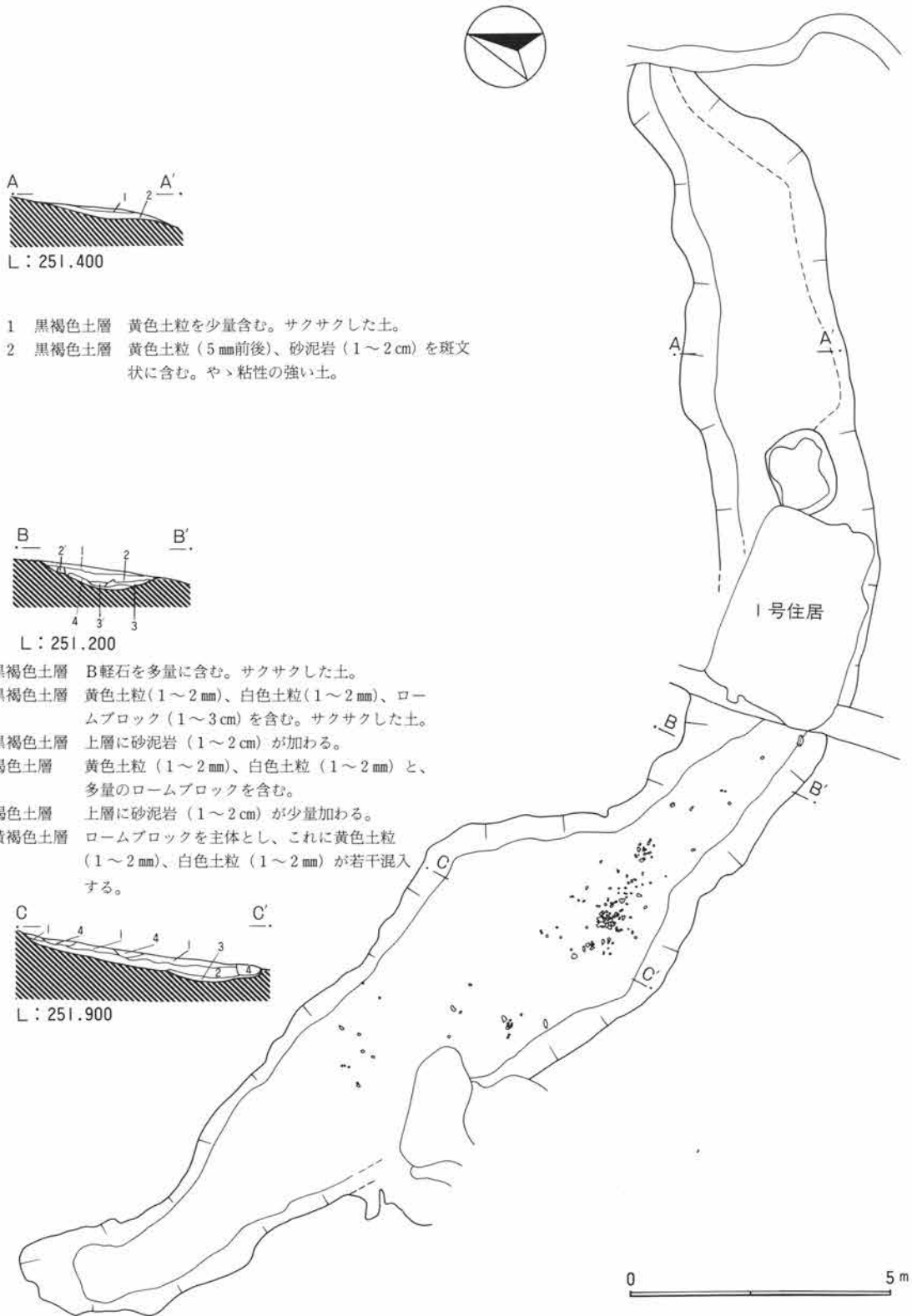
第103図 墳丘削り出し状況



第104図 1号溝出土遺物実測図

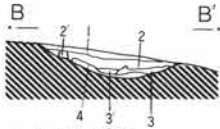
第24表 1号溝出土土器観察表

図版番号	土器種類 器形	量目		①胎土②焼成③色調	技 法	備 考
		口径・底径・器高	残存状況			
104-1	土師器 壺	() () ()	肩部のみ	①黒色微粒子が若干混入 ②普通 ③浅黄橙	内面に目の粗いハケメが斜め方向に施される。	底部穿孔二重口縁壺になるものと思われる。最大径を胴下位～中位にもつものか(?)。
104-2	土師器 壺	() (9.2cm) ()	底部を除いて欠損	①黒色微粒子を若干混入 ②普通 ③浅黄橙	内面には目の粗いハケメが斜め方向に、また外面には内面よりも更に目の粗いハケメが横方向に施される。底部は焼成前穿孔。	口縁部は二重口縁になるものと思われる。最大径を胴下位にもつ。
104-3	土師器 壺	() () ()	口縁の一部のみ	①黒色微粒子に加えて赤褐色微粒子が若干混入 ②堅緻 ③黄橙	内面には横方向のハケメが、外面には斜め方向のハケメが施される。	底部には穿孔が行われていると思われる。



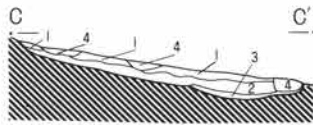
L : 251.400

- 1 黒褐色土層 黄色土粒を少量含む。サクサクした土。
- 2 黒褐色土層 黄色土粒 (5mm前後)、砂泥岩 (1~2cm) を斑文状に含む。やゝ粘性の強い土。



L : 251.200

- 1 黒褐色土層 B軽石を多量に含む。サクサクした土。
- 2 黒褐色土層 黄色土粒 (1~2mm)、白色土粒 (1~2mm)、ロームブロック (1~3cm) を含む。サクサクした土。
- 2 黒褐色土層 上層に砂泥岩 (1~2cm) が加わる。
- 3 褐色土層 黄色土粒 (1~2mm)、白色土粒 (1~2mm) と、多量のロームブロックを含む。
- 3 褐色土層 上層に砂泥岩 (1~2cm) が少量加わる。
- 4 黄褐色土層 ロームブロックを主体とし、これに黄色土粒 (1~2mm)、白色土粒 (1~2mm) が若干混入する。



L : 251.900

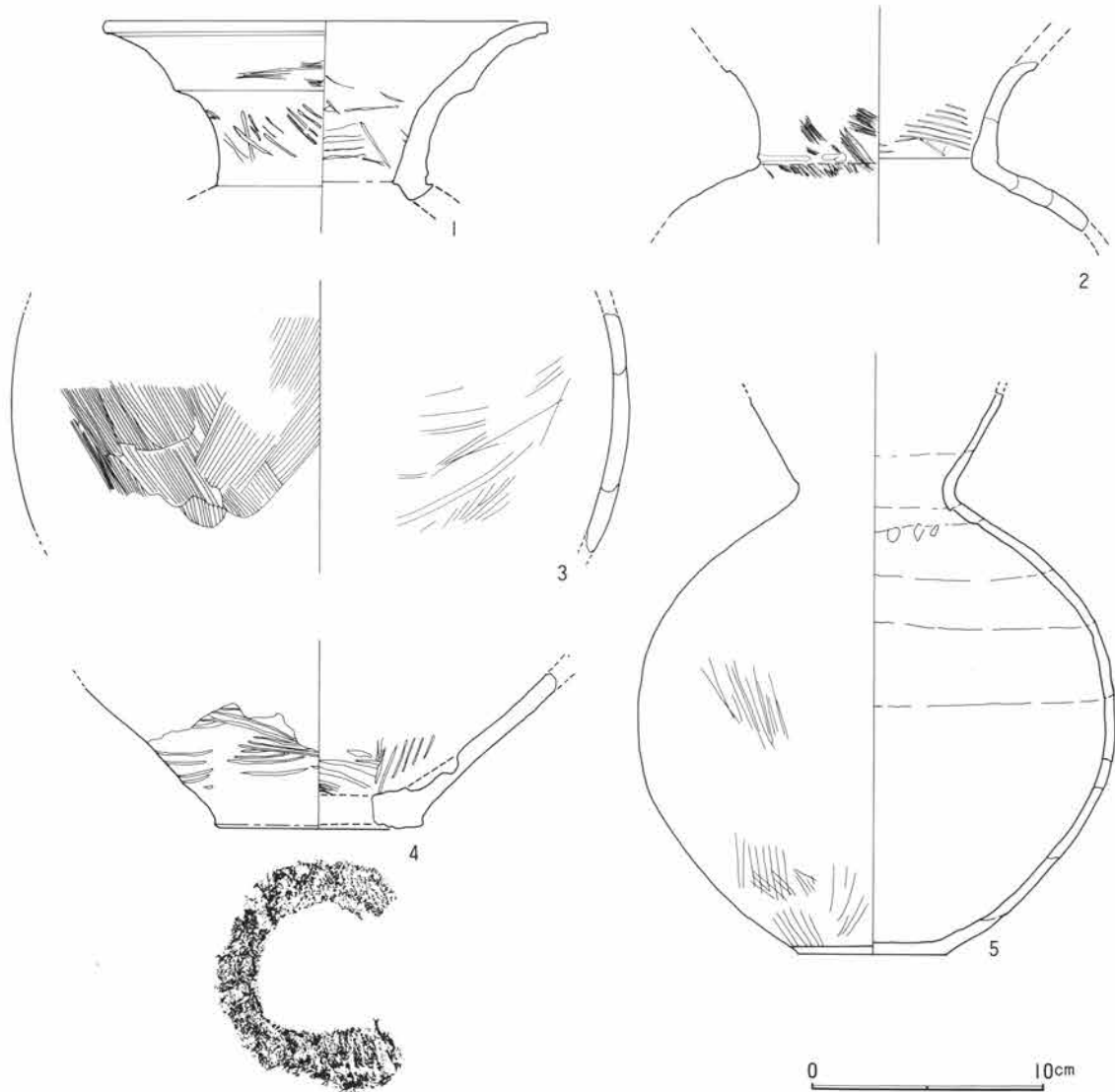
第105図 2号溝

2号溝は東西方向にゆるくカーブを描く溝で、東端は後世の耕作によってとんでおり、西端は徐々に浅くなりながら収束する。

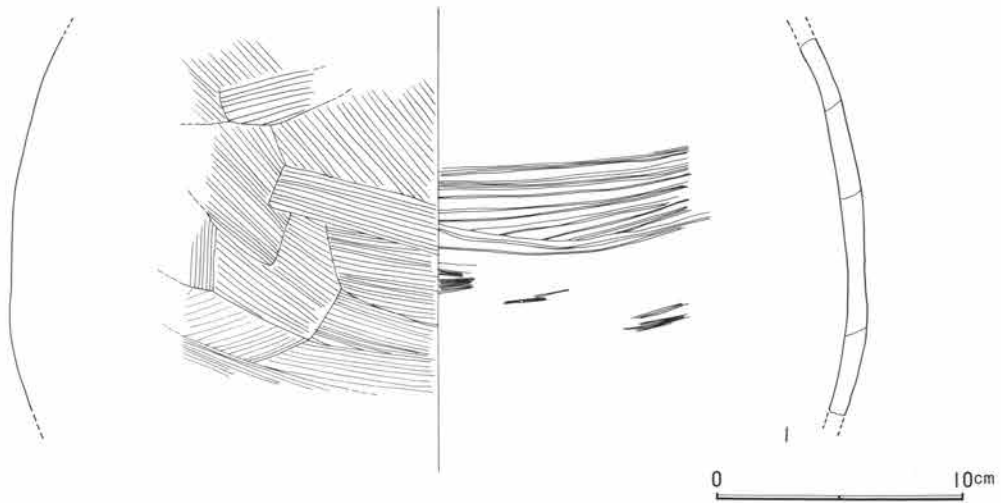
全体的に浅めの掘り方で、だらだらした感じを受けるが、基本的には墳形に沿う形でカーブを描いており、当初は、墳丘を極立せる為の更に深い掘り方をもったものと思われる。墳丘南端との間に2.4~3.6mの平坦面を有するが、墳丘南端が耕作によってカットされた可能性はなく、当初から墳丘と2号溝の間には何らかの形で平坦面が存在したものであろう。

2号溝からは現存する全長のほぼ中央部分より、1号溝同様、上から押しつぶされた形で多くの土器が集中して出土している。

以上、墳丘の構築方法や溝の形状を中心に記述してきたが、墳丘の南部分は撥形に開き、大きくくびれる形態をもった方形を呈し、北部分は地形と削り出しのラインから方形を成すものと考えられるに至った。すなわち、県内では、初出の丘陵上の前方後方墳ということができよう。また、後述する窯体状施設の箇所において、一部、窯体状施設と重複する形で墳丘くびれ部に相当すると思われる挟り込みが確認された。これは、1号溝のくびれ部に対応する位置にあるもので、前方部の東くびれ部に相当するものと考えられる。



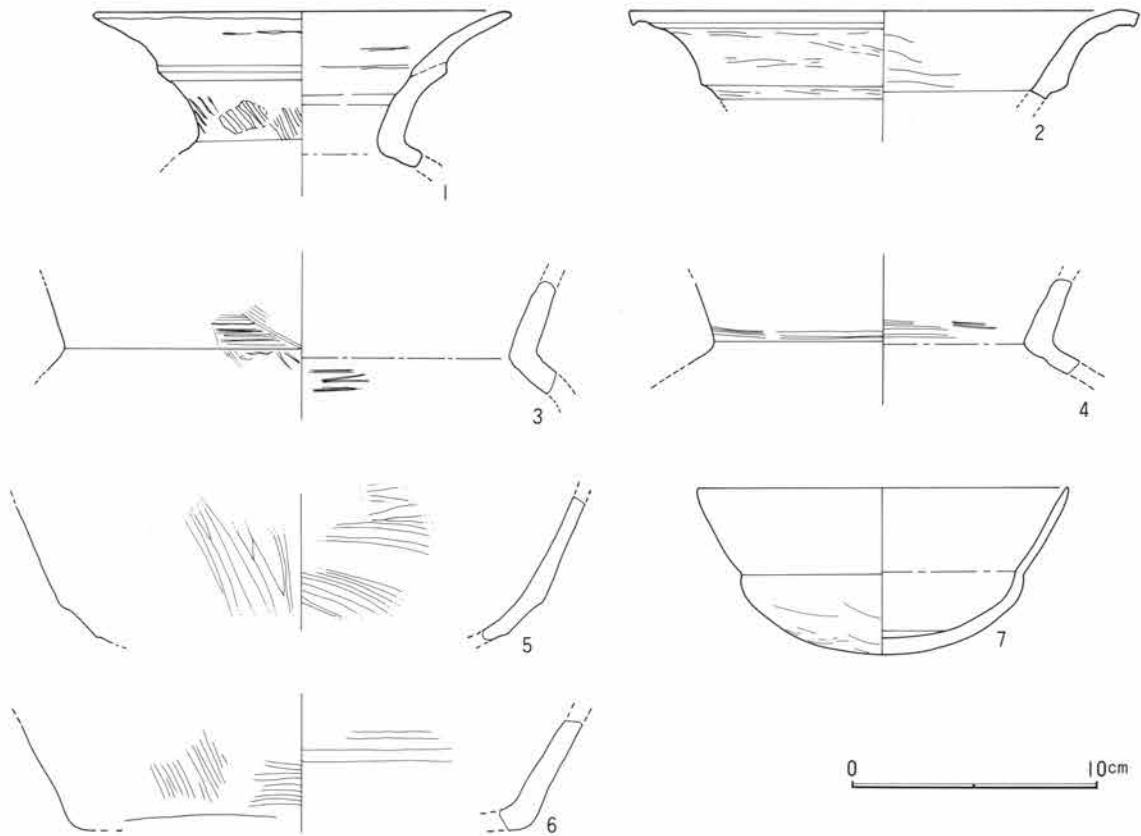
第106図 2号溝出土遺物実測図(1)



第107図 2号溝出土遺物実測図(2)

第25表 2号溝出土土器観察表

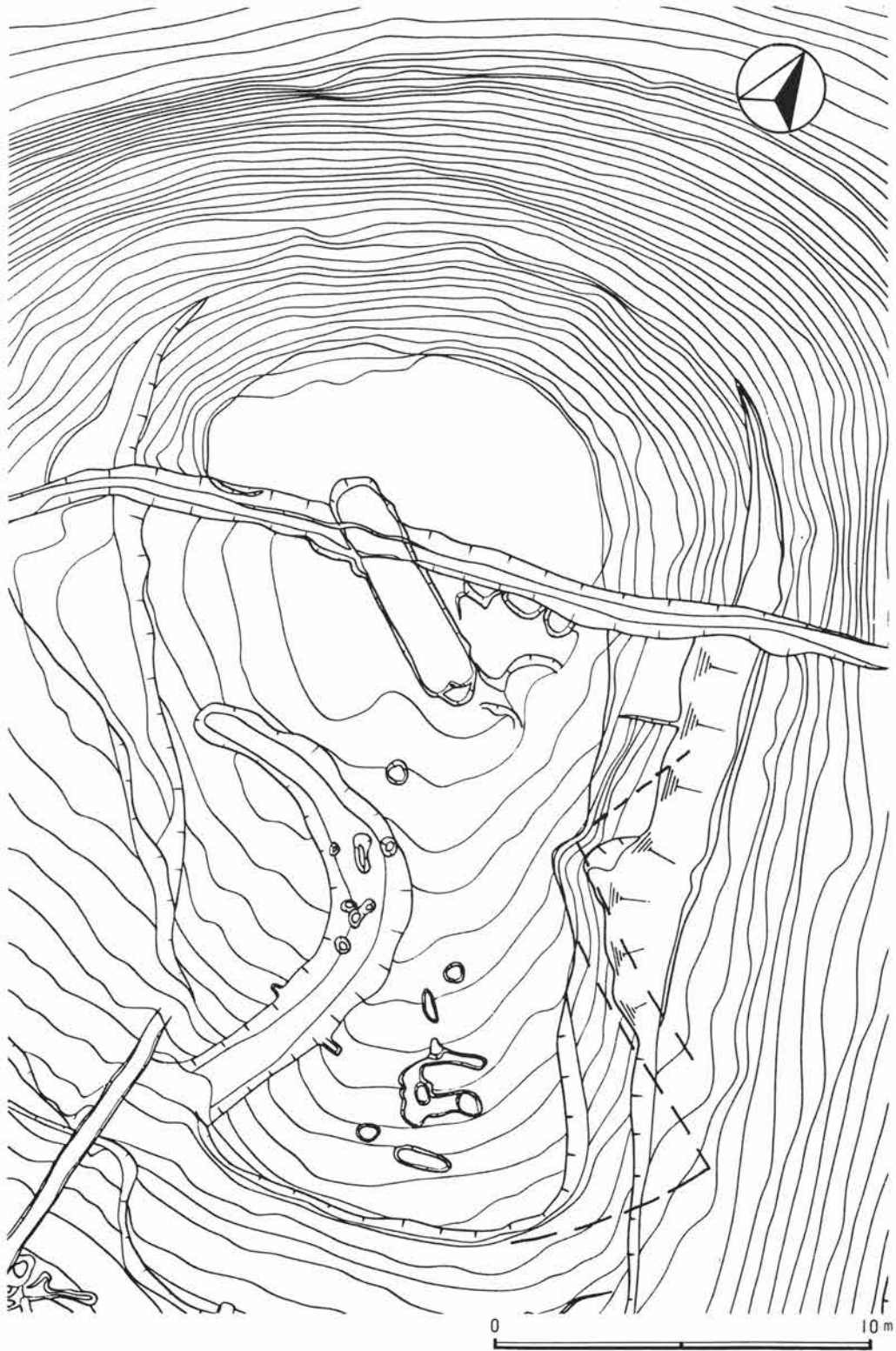
図版番号	土器種類 器形	量目		①胎土②焼成③色調	技 法	備 考
		口径・底径・器高	残存状況			
106-1	土師器 壺	(15.3cm)	() () 口縁部のみ	①黒色微粒子、赤褐色 微粒子を若干含む ②良 ③浅黄橙	口縁の上半は内外面とも横ナ デ、下半は内外面とも斜めハ ケが施される。	底部穿孔二重口縁壺の口縁 部に相当。
106-2	土師器 壺	() () ()	口縁～肩部にかけて一部残存	①黒色微粒子、赤褐色 微粒子を若干含む ②良 ③内面:浅黄橙、外面:橙	内面横ハケ、外面斜めハケが 施される。更に、その後口縁 の外側は横ナデが施される。	底部穿孔二重口縁壺の口縁 部に相当。
106-3	土師器 壺	() () ()	胴部の一部が残存	①黒色微粒子を若干含 む ②良 ③浅黄橙	内面は斜めハケの後、横ナデ、 外面は縦ハケが施される。	底部穿孔二重口縁の壺の胴 部に相当か(?)。
106-4	土師器 壺	() (9.3cm) ()	底部のみ残存	①黒色微粒子を若干含 む ②軟 ③浅黄橙	内面は斜めハケと横ハケが、 外面は粗い横ハケが施され る。焼成前穿孔。	胴部の中位に最大径がくる ものと思われる。
106-5	土師器 壺	(13cm+α) (6.5cm) ()	1/2残存 口唇部を欠く	①赤褐色粒子を若干含 む ②良 ③淡黄	内面は横ナデ、外面は縦方向 のヘラ磨きが施される。	底部の一部に2次焼成が見 られる。
107-1	土師器 壺	() () ()	胴部のみ残存	①赤褐色粒子を若干含 む ②良 ③淡黄	内面は横ハケが、外面は横か ら斜めのハケが施される。	底部穿孔二重口縁壺の胴部 に相当。胴部中位に最大 径を有する。



第108図 墳丘上出土遺物実測図

第26表 墳丘上出土土器観察表

図版番号	土器種類 器形	量目		①胎土②焼成③色調	技 法	備 考
		口径・底径・器高	残存状況			
108-1	土師器 壺	() () ()	口縁部のみ	①赤褐色土粒、黒色土粒を多量に含む ②良 ③浅黄橙	口縁部は内外面共に横ハケ、頸部は外面斜めハケ、内面は横ハケが施される。	底部穿孔二重口縁壺の口縁部に相当。
108-2	土師器 壺	(22.5cm) () ()	口縁部のみ	①赤褐色土粒、黒色土粒を多量に含む ②良 ③浅黄橙	口縁部上半は内外面とも横ナデ、下半内面には横ハケが残る。	底部穿孔二重口縁壺の口縁部に相当。
108-3	土師器 壺	() () ()	頸部～肩部一部残存	①黒色土粒を若干含む ②普通 ③灰色	外面は斜めハケ、肩部内面は横ハケが施される。	
108-4	土師器 壺	() () ()	頸部～肩部一部残存	①赤褐色土粒、白色土粒を若干含む ②普通 ③浅黄橙	内外面共に横ナデが施される。	底部穿孔二重口縁壺の肩部に相当。
108-5	土師器 高 坏	() () ()	坏部一部残存	①黒色土粒を若干含む ②良 ③浅黄橙	外面は斜めハケ、内面は横ハケが施される。	
108-6	土師器 高 坏	() () ()	坏部一部残存	①暗褐色土粒を微量含む ②良 ③灰色	外面は斜めハケと横ハケが、内面は横ハケが施される。	
108-7	土師器 小型丸底土器	(14.8cm) () (6.5cm)	口縁～体部残存	①黒色土粒を微量含む ②良 ③外面：にぶい橙 内面：浅黄橙	口縁部は内外面共に横ナデ、底部外面は不定方向ヘラ削りが施される。	



第109図 西古墳墳丘推定図

第27表 北山茶白山西古墳各部計測表

墳 丘	全 長	28.0m (推定)	溝 さ れる 範 圍 に よ っ て 区 画	全 長	33.6m (推定)
	後 方 部	幅 17.7m 高さ 1.1m (構築面よりA軽石直下まで)		後 方 部	幅 21.2m
	く び れ 部	幅 4.1m 高さ 不詳		く び れ 部	幅 8.2m (推定)
	前 方 部	幅 16.2m 高さ 不詳		前 方 部	幅 18.3m (推定)

調査の結果、北山茶白山西古墳は前方後方形の墳丘をもった古墳であるという結論を得るに至ったが、他の可能性が全くないというわけではない。その一つが、後方部だけの方墳と見る考え方である。その際、1号溝は古墳築造の際の事前祭祀に関する何らかの施設と考えられ、基本的に西古墳とは形態的に連なるものではないということになる。また、この立場に立脚すれば2号溝もそれに準ずるものとなろう。

しかし、東側が大きく削平されたとは言え、窠体状施設とほぼ重複する形でくびれ部と考えられる箇所が検出されたことは、1号溝との位置関係から考えて、1号溝との対で把えることがより妥当であると思われる。また、1号溝と、西側削り出しが現状で連続しないことは、後世の削平に起因し、本来的には最も顕著な形で連続していたものと考えたい。

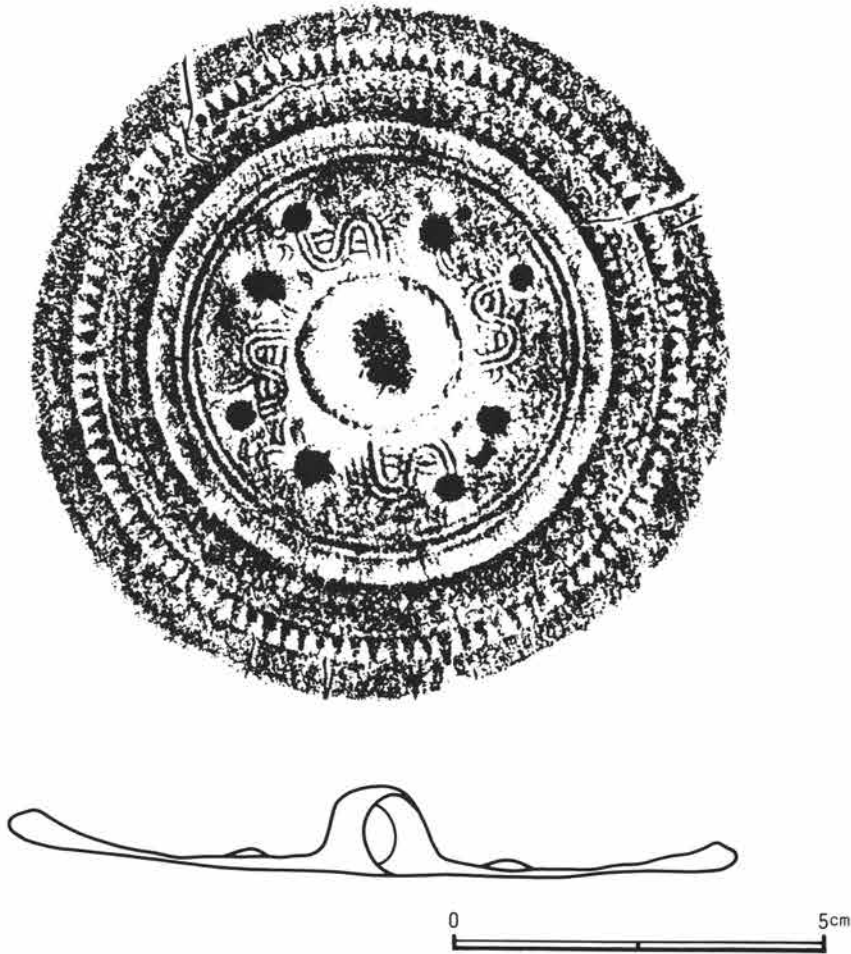
2号溝は前方部よりやや距離を置いて東西に走り、1号溝との連続性は確認できなかったが兆域を示すものとしての機能を推定しておきたい。かかる観点に立脚すれば2号溝がただ単に東西に走るだけでなく、西側において、北へ向かう兆候のあることは西側の兆域を画することを目途としたとすることができよう。いずれにしても、後方部は削り出しによって墳形を画定し、前方部は溝を掘ることによって墳形を画定したものと考えることができる。後方部が削り出し、前方部が溝という異なる方法に基づく墳形の策定は後方部が丘陵の頂部に位置し、前方部がそれから標高的に下がる場所に展開することに起因するものと思われる。

かかる様相から、前方後方墳として西古墳が構築されたことを重ねて確認するものである。

2 主体部の調査

調査前の経緯 西古墳の立地する丘陵は長く雑木林として存続していたが、昭和30年代の初めに、この丘陵にも耕作の手が加わった。雑木林を伐採し、土を南斜面へかきおとすことによって耕地の拡大を図ったため、墳丘の土盛は大きく崩された。また、丘陵頂部の平坦部北側はそのまま山林として残ったため、山林の根が耕地に侵入しないようにとの配慮から、根切りの溝を掘削し、耕地の囲繞を図った。

この時、後方部のほぼ中央部分を根切りの溝が東西に深く横断したのであり、これに伴って、変形四獣鏡一面の他、土師器壺、白玉等が数点出土した。また、礫も多数出土したが、これは後述する木口部分の礫の出土と呼応するものである。土師器壺や白玉は既に散逸してしまっ行って行方が知れないが、変形四獣鏡は昭和61年富岡市指定文化財とされ、現在に伝わる（第110図 写真図版31）。

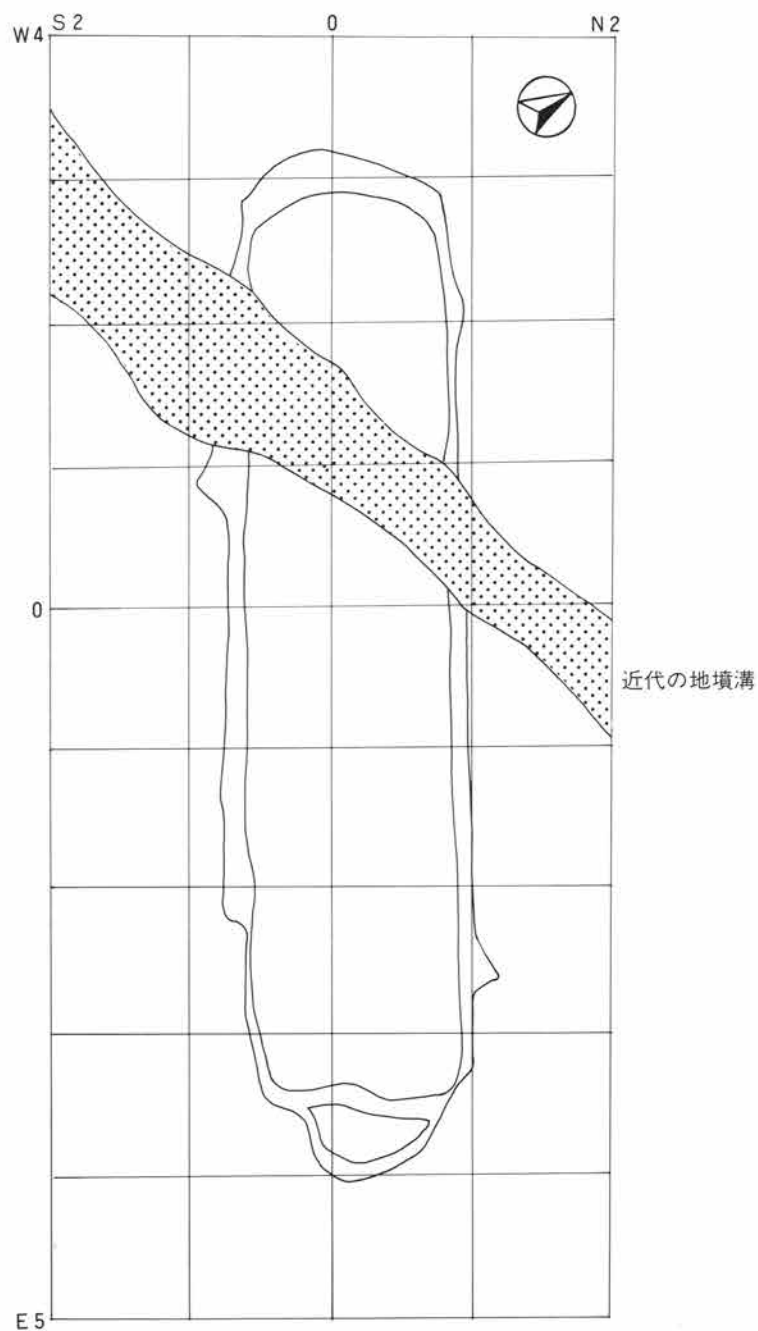


第110図 変形四獣鏡

変形四獣鏡 外区には外側から順に外向鋸歯文、二重山形文、外向鋸歯文が配され、内区の櫛歯文、二重圏線へと続く。櫛歯文は若干斜行傾向を有する。内区文様は乳をほぼ均等に4カ所に配し、その間に珠点が乳に近接して置かれる。乳は手足を持つ小動物の頭部と胴部を表し、珠点は竜の頭部を表現しているものと考えられる。竜は簡略化が進み、全て細線による線描表現を採る。主要文様は振文化する前の段階に位置し、二次的な仿製鏡と理解される。鈕は孔が大きく穿たれており、面ずれが顕著に残る。面径9.7cm。凸面鏡。平斜縁。

遣り方設定 墳丘を掘り下げていく過程で、古墳構築時の地表面である黒色土を切る形で、主体部のプランが姿を見せた。当初、複数の主体部の存在を推定し、他の主体部の検出を試みたが、結局、主体部は単体であることが確認されたため、遣り方を設定して、主体部の調査に着手した。

遣り方は主体部主軸ラインを設定し、これを軸線として、主軸に平行するライン及び直行するラインを1m間隔で割り付けた。ラインの名称は主体部主軸ラインを0とし、これに平行する北ラインをN1、N2、南ラインをS1、S2とした。また、主軸線のほぼ中央を0として、これに直行する西ラインをW1、W2、W3、東ラインをE1、E2、E3とした。

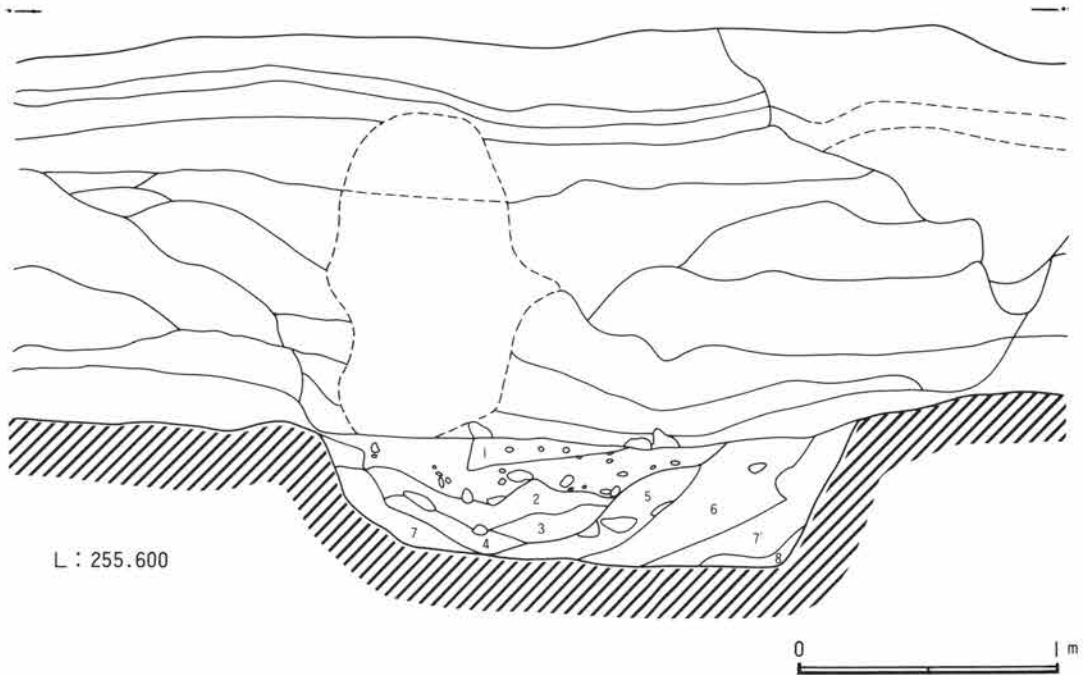


第111図 遣り方設定状況

主体部にも大きく攪乱の手が及んでおり、墳丘下のみ、かろうじて現状で残ったのみであり、他の部分については殆どの箇所では攪乱が行われていると言って良い。しかし部分的に現状を滞める箇所が残存しており、地層断面の観察は数箇所において可能であった。

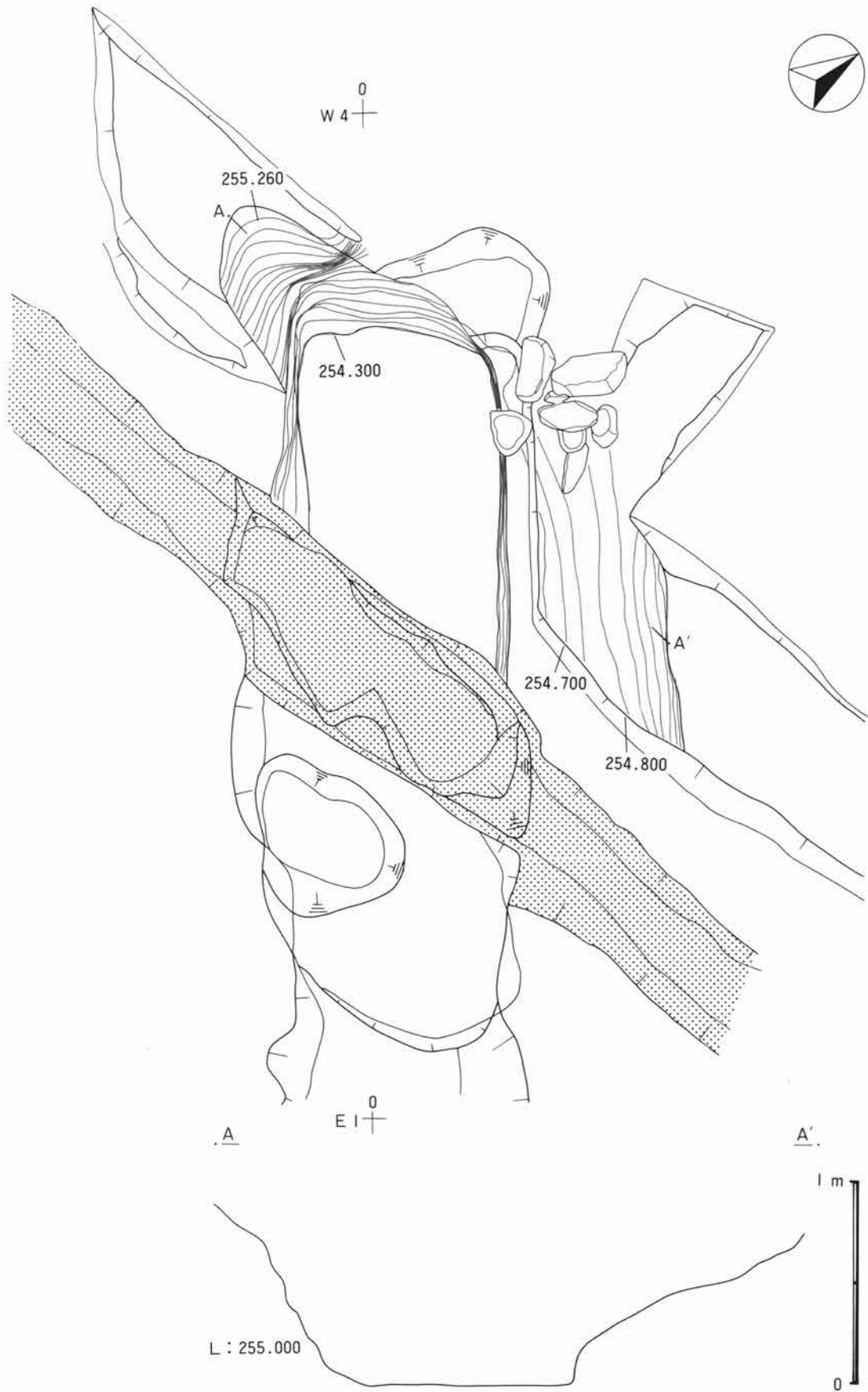
調査着手前は「粘土槨」との推定もあったが、調査の結果、木棺を直葬したものであったことが判明した。墓壇は盛土より掘り込められ、地山にまで及んでいる。盛土の掘り込みは、地山から95cm前後のレベルから確認されており、緩やかな斜面をもって盛土を掘り、地山の掘削はそれに比して、やゝ急な斜面となって、掘りこまれている。盛土の流失などを考え合わせた時、盛土中位からの掘り込みと推定される。尚、盛土部分の墓壇の掘り込み角度は一定ではなく、確認された西木口の北側は比較的緩やかであり、南西側では急な斜面であることが確認された。墓壇の規模は上面で長さ6.76~6.35m、幅1.66~1.48m、深さ(地山より)0.6m、底面で長さ6.21~6.29m、幅1.34~1.48mを測る。主軸方向は墳丘の方位と異なり、若干東に振れ、N 30°Eを測る。

各ラインにおける計測値は第28表の通りである。



- | | | | |
|---------|--|----------|--|
| 1 茶褐色土層 | 若干の黄褐色土粒(1~2mm)と大(5~10mm)小(3~5mm)の細長い河原石を不規則に含、サクサクした土。 | 5 茶褐色土層 | 黄褐色土粒(2~3mm)、砂泥岩(3~5mm)を少量と細長い河原石(5~10mm)を含む、サクサクした土。 |
| 2 茶褐色土層 | 黄褐色土粒(3~5mm)、砂泥岩粒(2~3mm)を少量含む、サクサクした土。第1層の中に見られる河原石を含まない。 | 6 茶褐色土層 | 黄褐色土粒(2~3mm)、砂泥岩(3~5mm)を少量と細長い河原石を(10cm前後)を含む、サクサクした土。 |
| 3 茶褐色土層 | 黄褐色土粒(1~2mm)をわずかに含む、サクサクした土。 | 7 暗褐色土層 | 黄褐色土粒(3~5mm)、砂泥岩(2~3mm)を比較的多く含む、締め気味の土。 |
| 4 茶褐色土層 | 黄褐色土粒(3~5mm)、灰褐色土粒(3~5mm)を斑点状に含む、サクサクした土。細長い河原石(3~5cm)を少量含む。 | 7' 暗褐色土層 | 黄褐色土粒(3~5mm)、砂泥岩(1~5mm)を少量含む、締め気味の土。 |
| | | 8 暗褐色土層 | 黄褐色土粒(1~2mm)を少量含む、締め気味の土。 |

第112図 主体部地層断面図



第113図 主体部掘り込み状況



第114図 西木口磯出土状況



第115図 東木口礫出土状況

第28表 墓壙各部計測表

		長 さ (長軸)		幅 (短軸)	
		上 面	底 面	上 面	底 面
W	2			1.48m	1.39m
W	1			1.50m	1.38m
EW	0			1.58m	1.34m
E	1			1.66m	1.40m
E	2			1.59m	1.46m
E	3			1.51m	1.48m
S	0.5	6.36m	6.21m		
NS	0	6.76m	6.24m		
N	0.5	6.35m	6.29m		

墓壙は茶褐色土層及び暗褐色土層によって埋められていたが、掘り方断面の観察から、壁面にそってタテ方向の地層ラインを各所で看取することができた。これは黄褐色土粒と砂質礫岩を含む締め気味の暗褐色土層によって埋められており、この面が木棺の両側面に相当するものと考えられた。しかし、木棺は腐食して姿をとどめておらず、資料の制約から木棺の形態を推察するには至らなかった。

また、棺の両木口にあたる部分には多数の礫が置かれていた。その殆どが西古墳の立地する丘陵の西を流れる野上川が供給源と考えられる片岩系河原石で、多くが5～7cm程度の小礫であった。これらの中には、面をそろえて並べられたようなものもあり、恐らく、位置からして木棺の両木口を押さえるためにほぼ現在の位置に置かれたものと考えられる。小礫は木棺を据え置くために最初に置かれた締め気味の暗褐色土層にまで及んでおらず、工程上、暗褐色土上に木棺を据え置いた後で、墓壙掘り方との間にできた間隔に小礫を充填し、木棺の分解防止のために両木口の押さえの機能を持たせたものとする事ができよう。尚、小礫は木棺側壁と墓壙掘り方との間には認められず、あくまで両木口に限定した使用がなされている。

また、東木口に近接して円形状のピットが検出された。これは攪乱に伴うものとは考えられず、墓壙の掘削の当初から設けられていた施設と推定される。

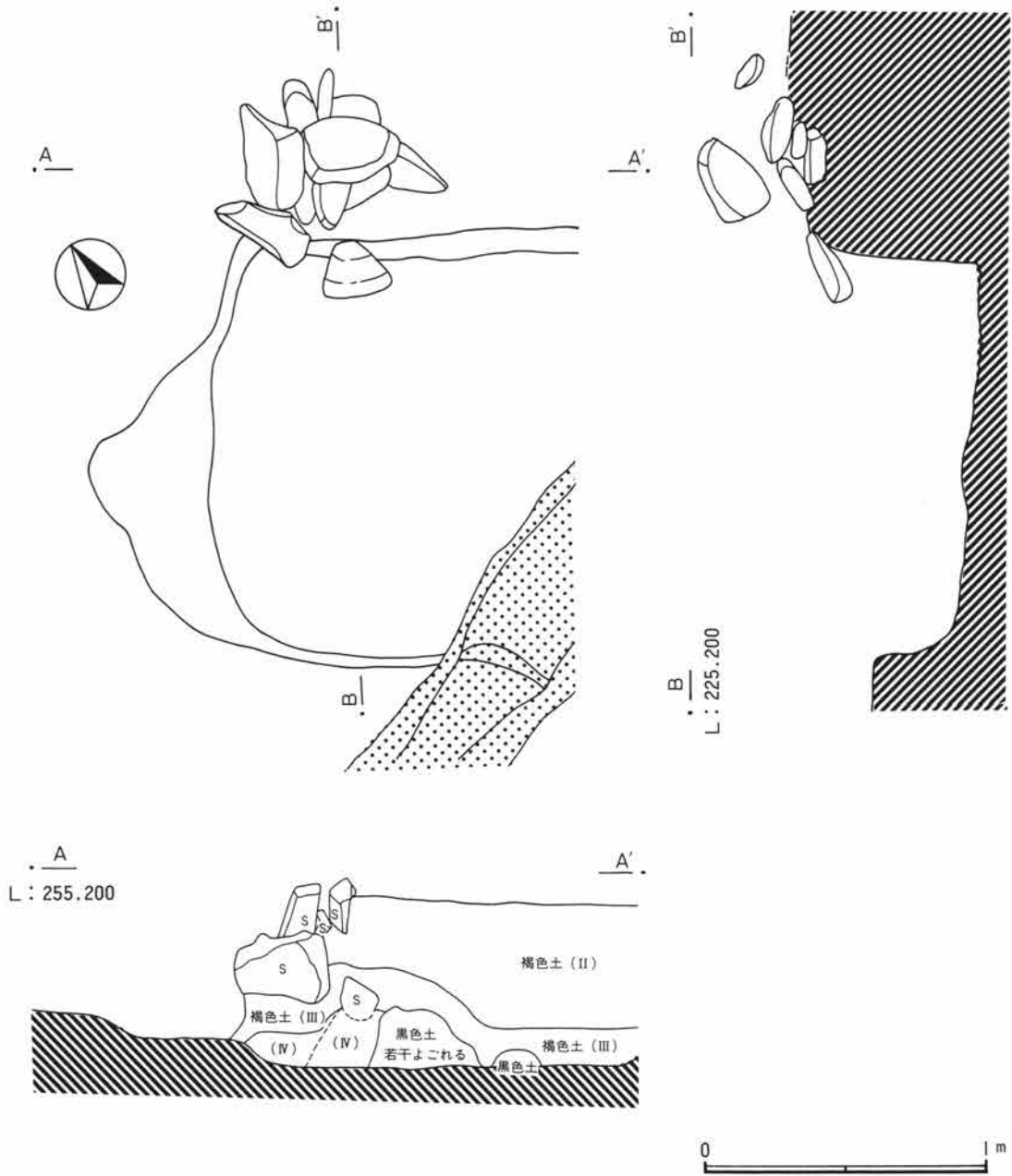
さらに、後述するように、出土した方格規矩鏡や木質片には赤色顔料が多量に付着していたが、墓壙自体からは一切検出されなかった。

この他、墓壙の北西隅から角礫が組み合わされた状態で検出された。

この礫は礫だけで立ち上がるのではなく、礫を置きながら土を盛ることによって、タテ方向に立ち上がっていったものである。従って、礫と礫の間には土が入りこみ、その間隙を埋めていることになる。礫の種類は、野上川を供給源とする片岩系礫岩と丘陵の地山に見られる砂質系礫岩に2大別される。礫は最下部に位置する礫を偏平な面を用いて水平に置き、地山に強い圧痕を残して据え置かれていた。また、下部に位置する一石は、墓壙掘り方にその半分程がかかっており、墓壙が掘られた以降にこれらの礫が置かれたことは分明である。いずれにしても、後世、経塚などに伴う施設として、墳丘を切って礫が組まれたものではないことは明白であり、地層断面の観察から墓壙と礫の同時代性とその関連を指摘せざるを得ない。

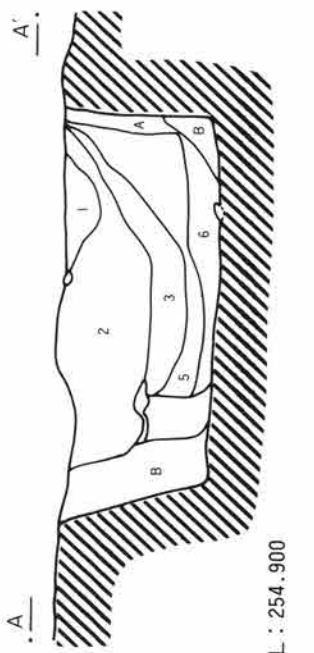
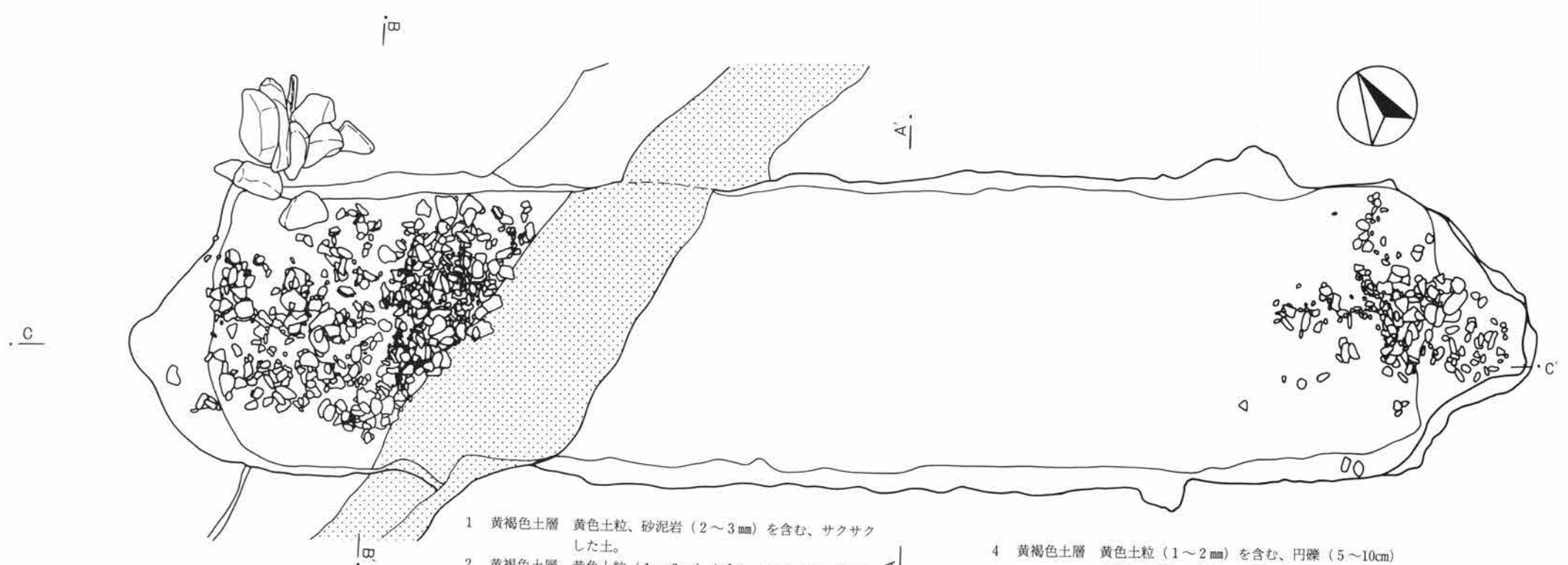
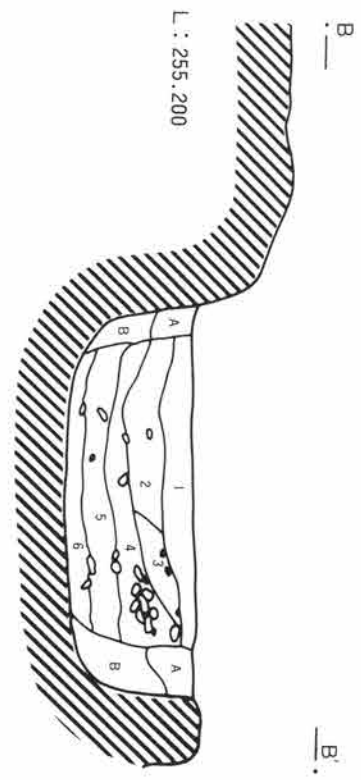
ここで、礫の組まれた時期については次のようなことが考えられる。

- ①墳丘を築く時に、その構築面に最下部に位置した礫を据え置き、順次、盛土作業を行う過程で礫を組み合わせていく。

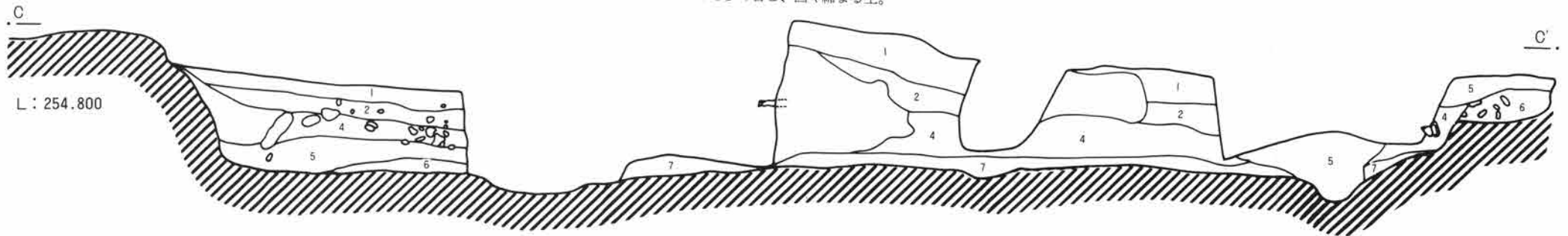


第116図 主体部北西隅礫出土状況

- ②盛土中位から墓壇を掘った時に、木棺を据え置いた後埋め戻していく過程で礫を組み合わせていく。
 また、これらの持つ性格については、
- ①は土地の神に対する祭祀的な意味合いを持つものと考えられるし、②は墓標的な様相を持つものと推定される。
- ①も②も地層断面の観察からはいずれもその可能性が推定される構築時期であり、性格である。しかし、①のような時期を考えた時、礫の組み合わされた場所と墓壇掘り方が偶然にすぎる程、対応しているのは不自然な様相を否めない。そこで、ここでは一応、②のような時期と性格、すなわち墓壇に伴う墓標としての性格づけを推定しておきたい。

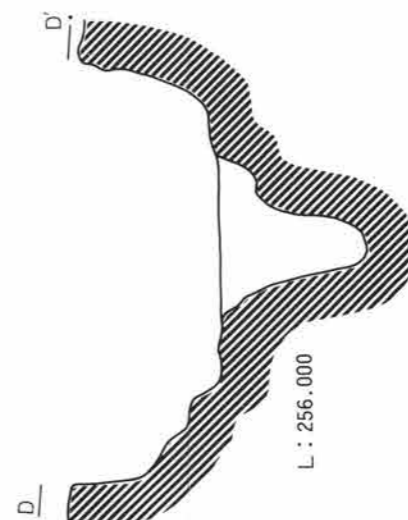
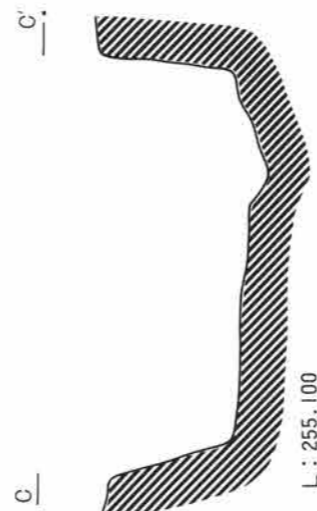
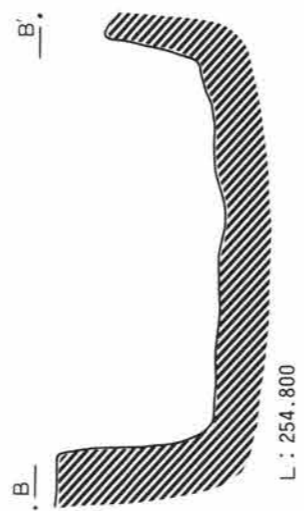
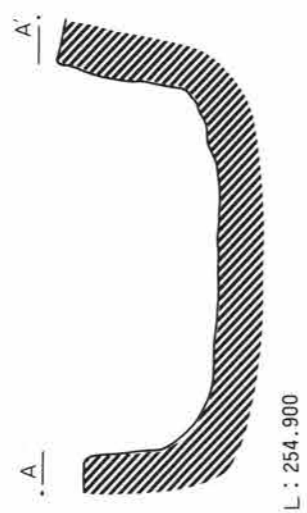
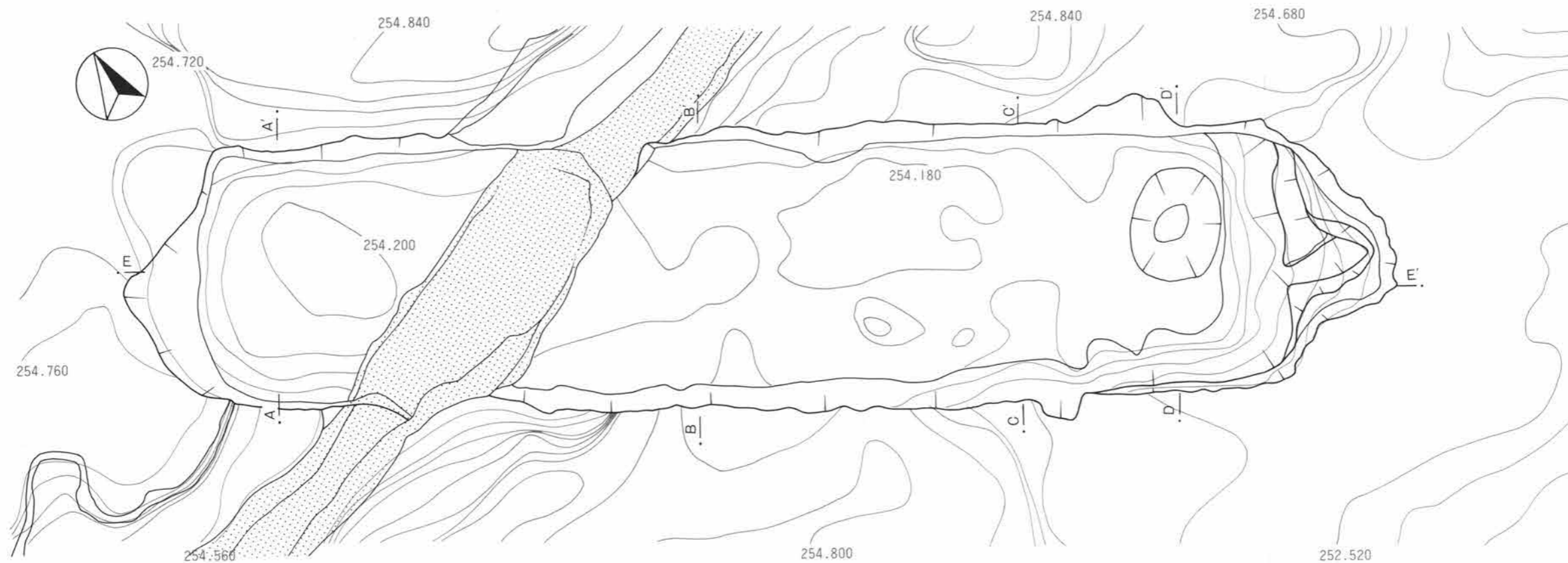


- 1 黄褐色土層 黄色土粒、砂泥岩(2~3mm)を含む、サクサクした土。
- 2 黄褐色土層 黄色土粒(1~2mm)を含む、サクサクした締まりの弱い土。小円礫(2~5cm)がまばらに含まれる。
- 3 黄褐色土層 第2層に比して小円礫がやゝ多目に含まれている。サクサクした締まりの弱い土。
- A 褐色土層 砂泥岩(0.5~2cm)を含む、やゝ締まり気味の土。
- B 黄褐色土層 砂泥岩(0.5~1cm)を多く含む、固く締まる土。
- 4 黄褐色土層 黄色土粒(1~2mm)を含む、円礫(5~10cm)を多量に含む、締まりの弱い土。
- 5 暗褐色土層 茶褐色土粒(1~2mm)を若干含む。
- 6 暗褐色土層 砂泥岩が若干混入し第5層に比べて粘性が強い。
- 7 茶褐色土層 砂泥岩を含んで、非常にかたく締まる。



第117図 主体部





第118図 主体部掘り方

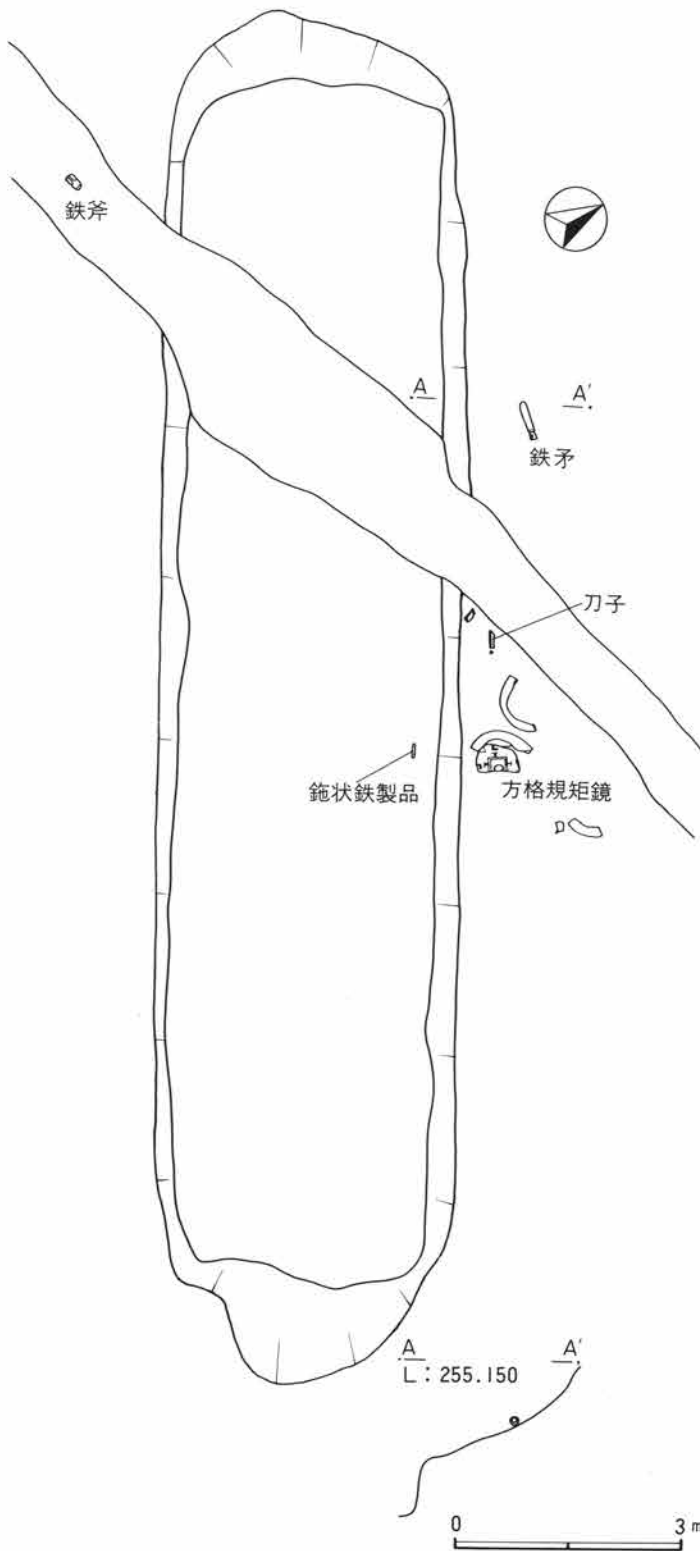


3 主体部内の遺物

主体部の調査により、次のような遺物が出土している。このうち、鉄矛と鉈状鉄製品が原位置から出土である他は全て、二次的な地点からの出土である。恐らく、昭和30年代初めの耕作の際に原位置より移動したものと考えられる。また、ガラス小玉は主体部埋土の10数日に及ぶ篩作業によって検出されたもので、出土位置は限定できない。

方格規矩鏡	1面
木質片	1片
鉄矛	1本
鉄斧	1個
刀子	1本
鉈状鉄製品	1本
ガラス小玉	2個

以下、それぞれの出土遺物について詳述する。(なお、方格規矩鏡、ガラス小玉の分析については群馬県工業試験場 花岡紘一、大山義一、小沢達樹の三氏に、木質片については金沢大学教養部助教授 鈴木三男氏にそれぞれ分析鑑定を依頼した。また、方格規矩鏡、変形四獣鏡、鉄矛についてはX線による透視を試みた)。

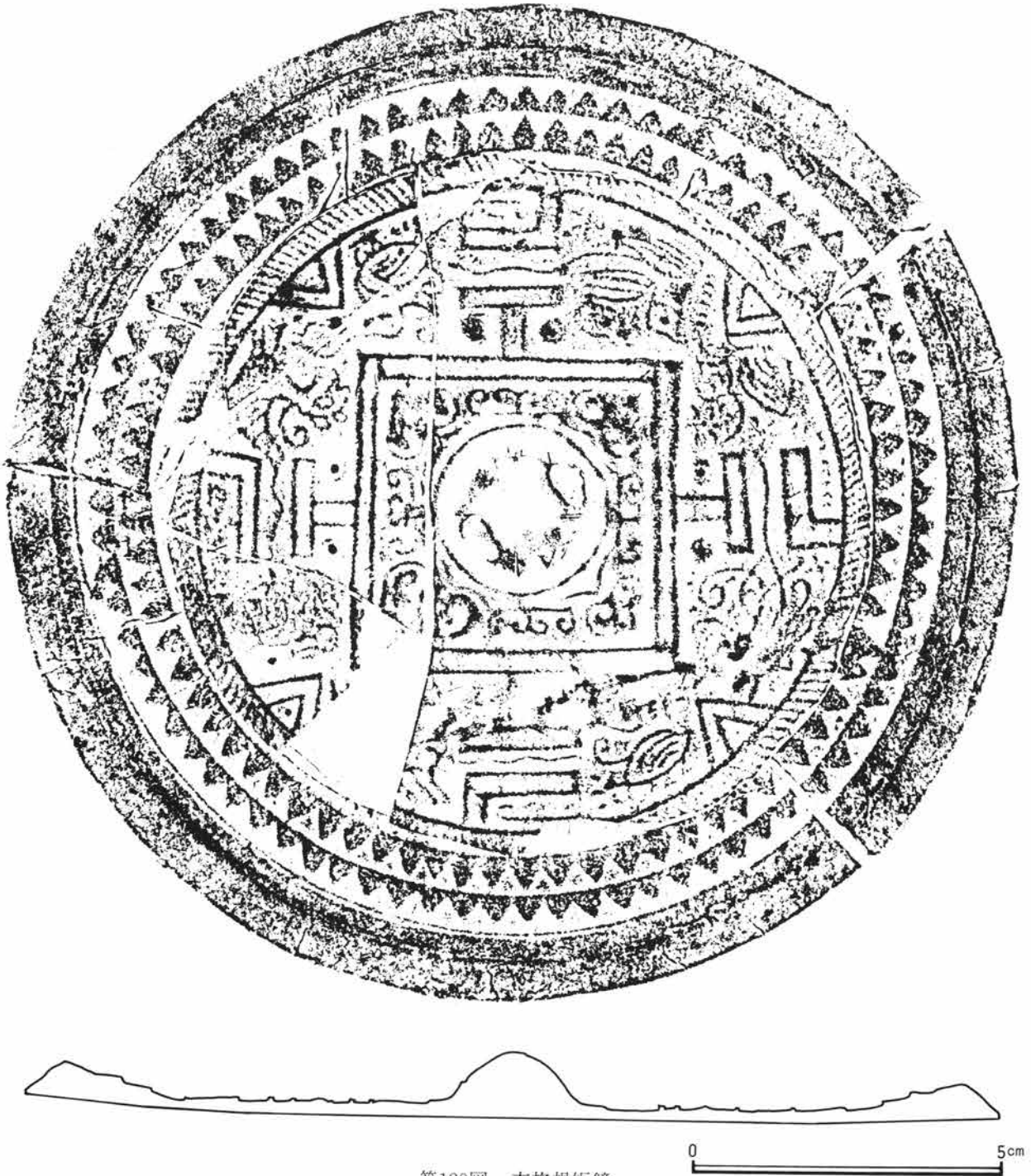


第119図 主体部遺物出土状況

(1) 方格規矩鏡

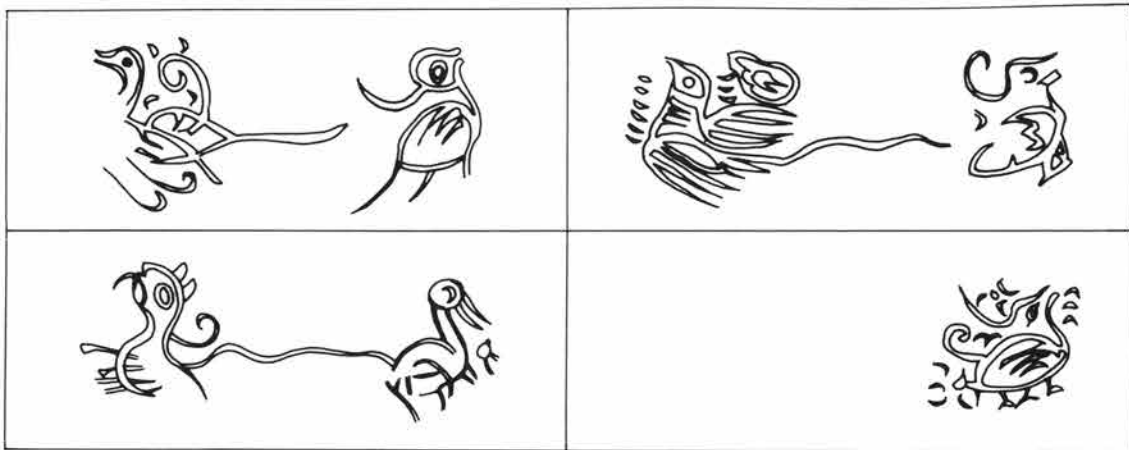
墓壇掘り方の北部分より出土している。合計8片に破碎されて出土したが、一部分欠損しているものの、9割近くが残存しており、原形を十分に推察しえる。鏡背には赤色顔料が多量に付着していた。

外区には二重の外向鋸歯文が、内区の外縁にはやゝ不揃いな斜行櫛歯文が巡らされており、内区の主要文様を飾る。方格文は台形状(5cm×5.3cm)に歪みが見られるが、内区外周径が10cm前後であることから、方格区の一辺は5cmを基本としたものと思われる。従って、内区10cmの円の中にその2分の1の長である5cmの方形を位置づけた割り付けを意図したものであろう。



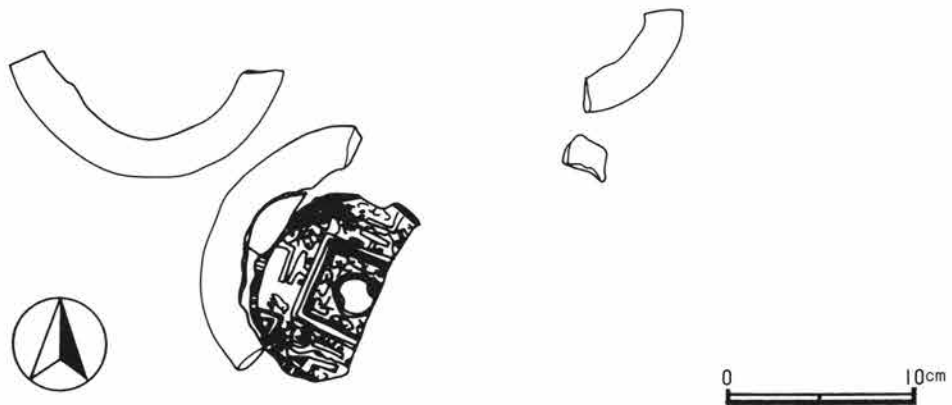
第120図 方格規矩鏡

鈕の孔には鋳バリが残っており、鈕自体も良好な鋳上がりとは言えない。鈕座ないし鈕外周文様帯と方格区との間の空間は、四葉座を簡略化した文様がほぼ忠実に表現されているが、これは、所謂、鈕外周文様帯と称されるものではなく、四葉座の発展形態として扱えられるものである。また、四葉の間を埋める部分は渦文状表現を採り、簡略化が著しい。T形文の棒の関係を見ると、横棒の中央に縦棒が位置するものは皆無であり、どちらかに偏している。L形文のなす角度は1箇所のみがほぼ直角である他は、鈍角気味に開く傾向にある。また、V形文の2辺にはいずれも方格の各辺に平行するものは希少であり、狭角傾向にある。従って、方格文、T形文、L形文、V形文の幾何学的な文様は全体的に統制が取れず、だれた感が強い。乳は8個が数えられるが、T形文の縦横の両脇に位置するという特徴を有する。



第121図 方格規矩鏡主要図像

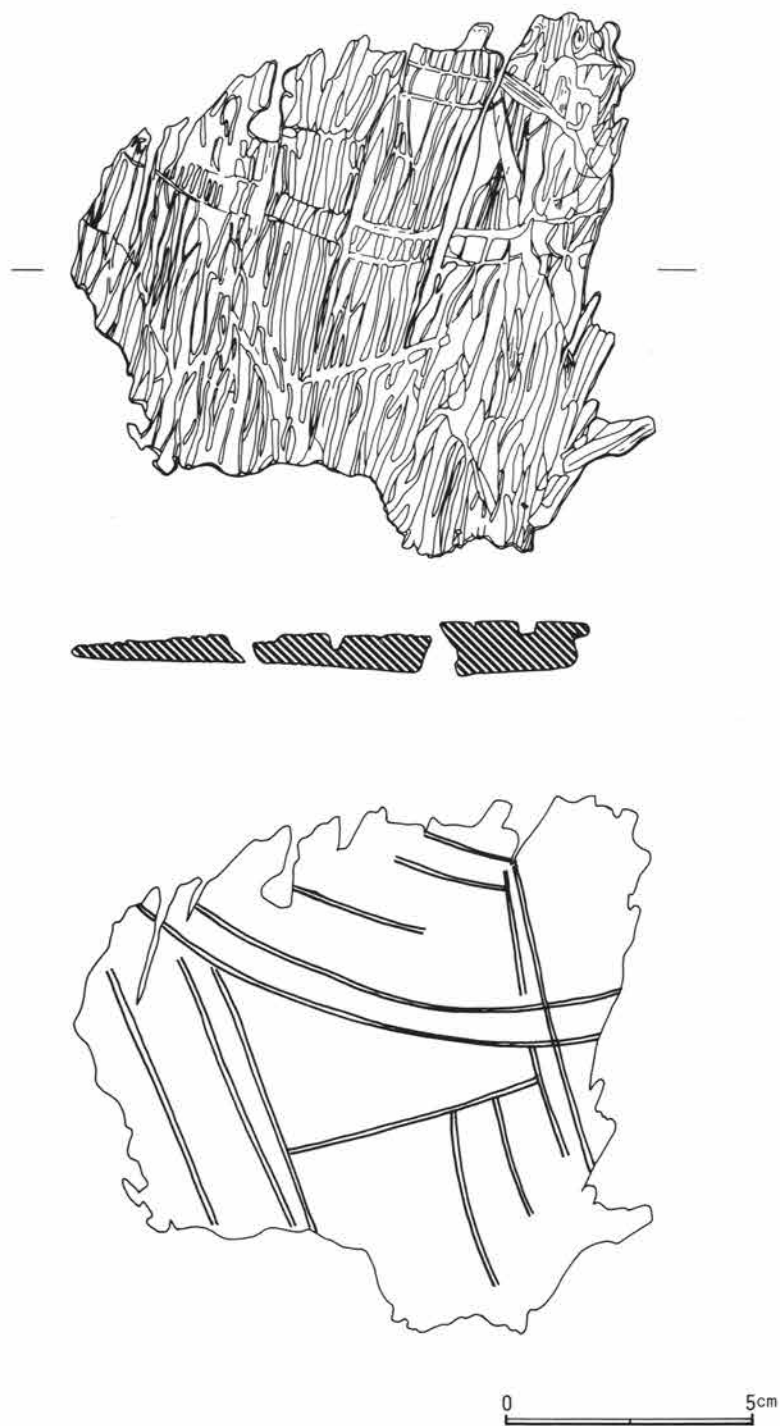
これら、T形文、L形文、V形文によってできた空間には8区画に主要図像が配される。1区画は残存しておらず判然としないが、残り7区画については第121図のような図像が線で表現されている。これらの主要図像を見ると7区画の内、6区画はそれぞれ形が異なるものの、鳥を意識した表現をとっていることがわかる。鳥は鶴のように首が長いものや、千鳥のように胸が大きいものなど同一意匠のものは全くなく、自由な意匠のもとに描かれている。6区画の図像には目がきちんと表現されており、翼も著しい省略方法をとらずで羽毛が表現されている。1区画は6区画の鳥表現のものとは大きく異なる表現をもっており、恐らく四神の内の青龍を表現したものと考えられる。これらを全体に眺めた時、鳥は四神の朱雀を表現したものと考えられ、また青龍の表現も看取されることから、少なくとも主要図像は基本的には四神表現にのっとった意匠とすることができよう。面径15.9cm。仿製鏡。平斜縁。凸面鏡。



第122図 方格規矩鏡出土状況

(2) 木質片

方格規矩鏡の鏡面内区に密着して出土した。広葉樹を使用し、全面に赤色顔料の付着が見られる他、内区と密着した面には直弧文状の文様が鮮明に線刻されている。現状で縦15.0cm、横15.4cm、厚さ1.5cmを測る。

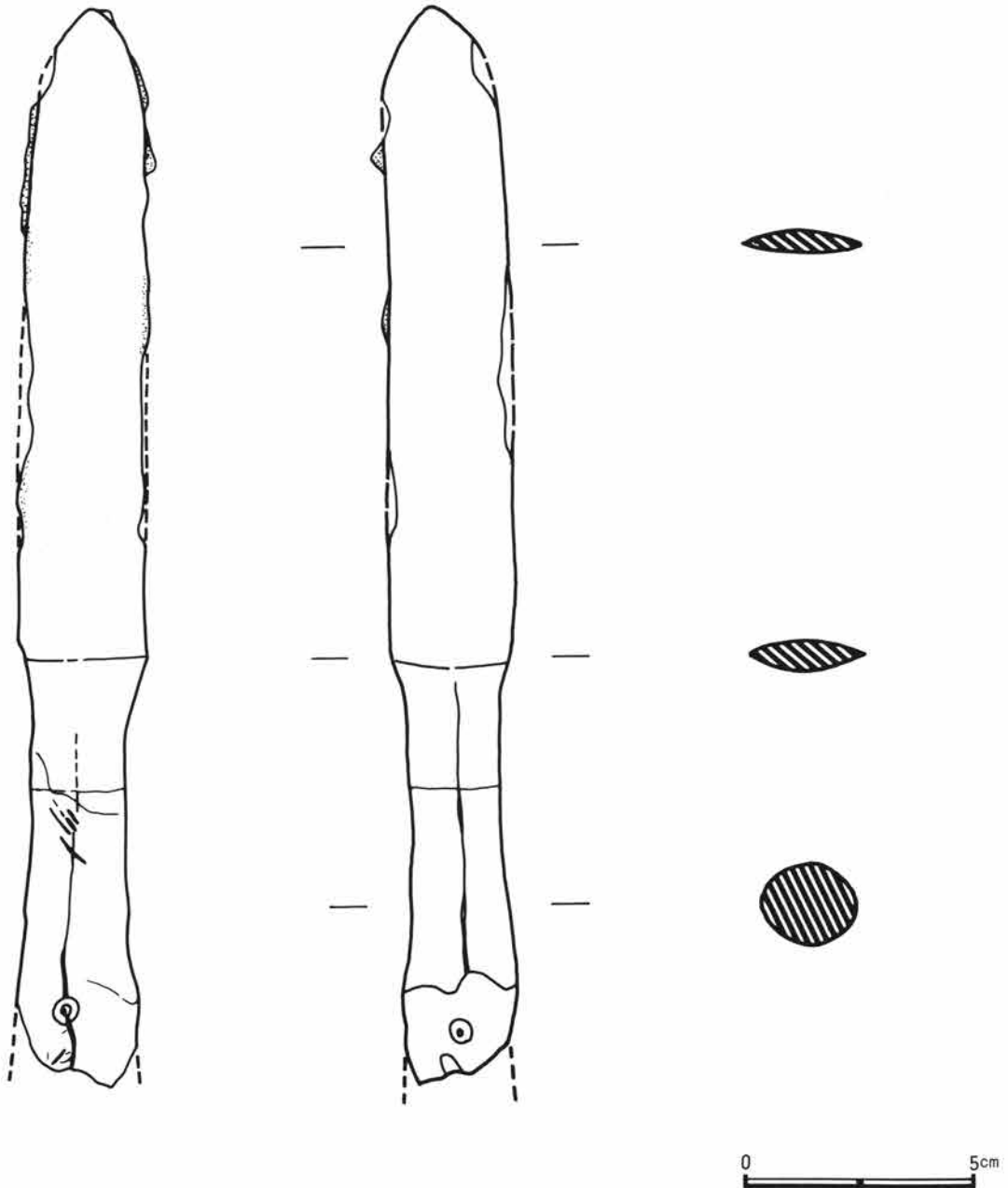


第123図 木質片(上：実測図、下：文様概念図)

(3) 鉄矛

墓壙掘り方の斜面に据えられた形で出土した。主体部とほぼ同一方向をとるが、石突等は残っておらず、全長は不明である。身部断面は扁平杏仁形で、広鋒の形態を有する。弱い関をもって袋部に移行し、袋部は断面円形をなす。袋部には挿入されていたと思われる木質が残存している。関より7.4cmのところに目釘穴をもつ。

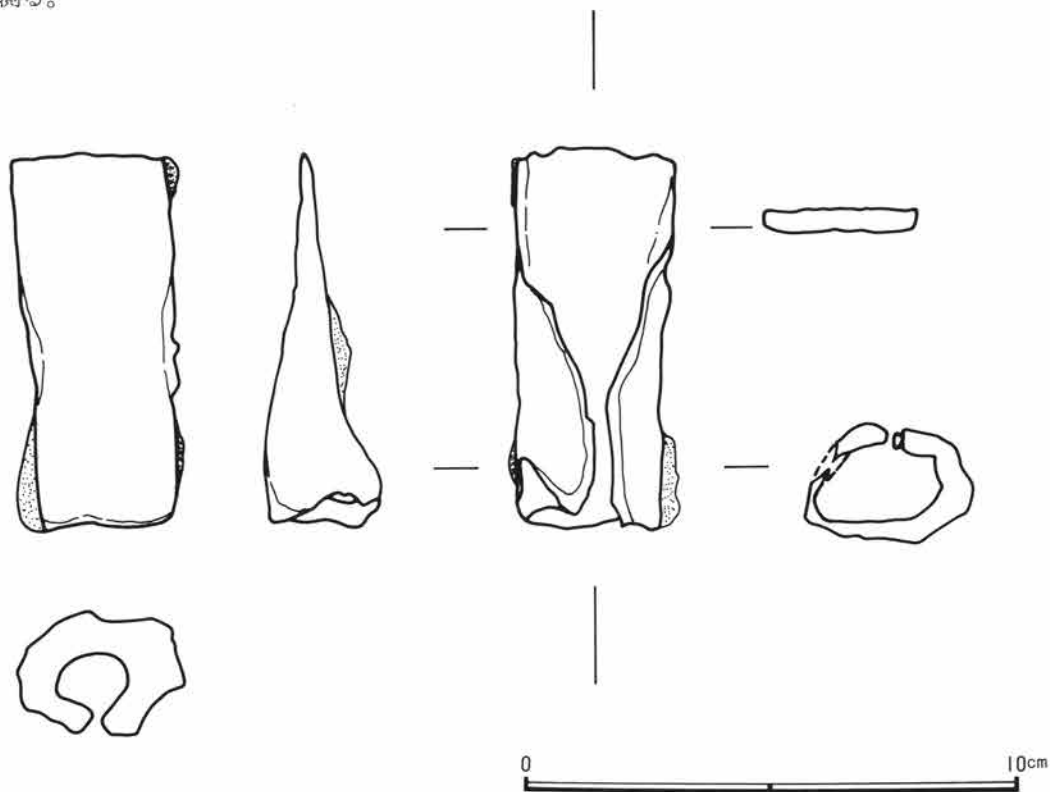
長さ22.8cm、身幅2.5cm、袋幅2.5cm、重量110gを測る。



第124図 鉄矛実測図

(4) 鉄斧

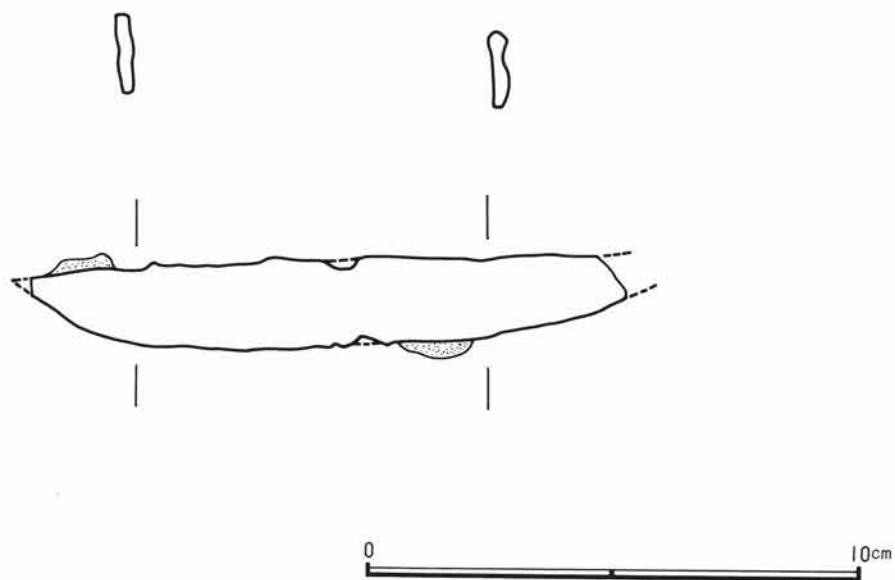
袋部をもつ、所謂、有袋鉄斧である。鍛造品で、鉄板を両側から折りまげて袋状にしているが、折りまげの部分がかなり長く、刃部近くまで及んでいる。袋部の中には木質が残存する。長さ7.5cm、幅3.2cm、重量70gを測る。



第125図 鉄斧実測図

(5) 刀子

鋒の一部と、茎の一部を欠く。現状で長さ11.5cm、幅、1.8cm、重量18.5gを測る。



第126図 刀子実測図

(6) 鉈状鉄製品

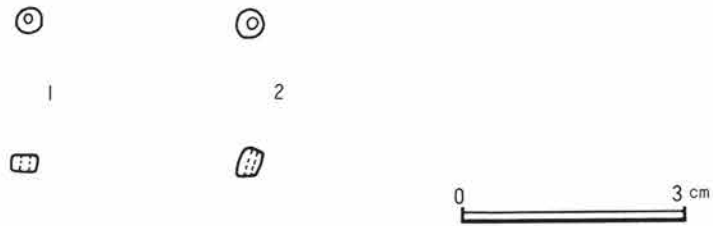
鉄矛と共に、原位置出土の遺物である。鉄矛は棺外遺物であったが、この鉈状鉄製品も棺外遺物として、副葬されたものと思われる。鉄身の形状は幅8.2mm、厚さ3.0mmの短形であるが、鋒部と身部の一部を残さず、全体の形状は不明である。



第127図 鉈状鉄製品実測図

(7) ガラス小玉

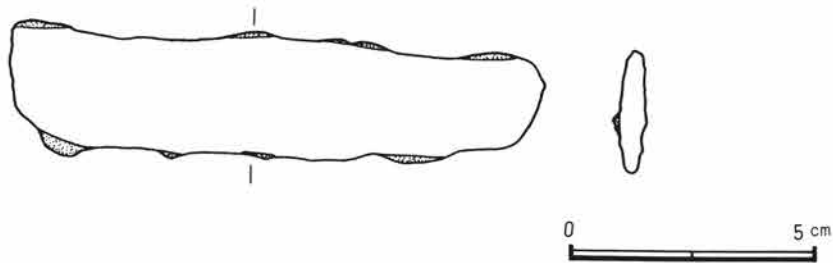
主体部埋土を篩にかけた結果、2個体のガラス小玉が検出された。1は淡青色で厚さ0.19mm、直径0.35~0.37mm、重量3.2mg。2は濃青色で厚さ0.34mm、直径0.34~0.36mm、重量5.7mgを測る。いずれもカットが直角に行われておらず、端面が斜めに立ち上がる。



第128図 ガラス小玉実測図

(8) その他の遺物

上記の他、鉄剣の一部と思われる鉄片が出土している。身は幅2.5cm、厚さ6mmを測る。



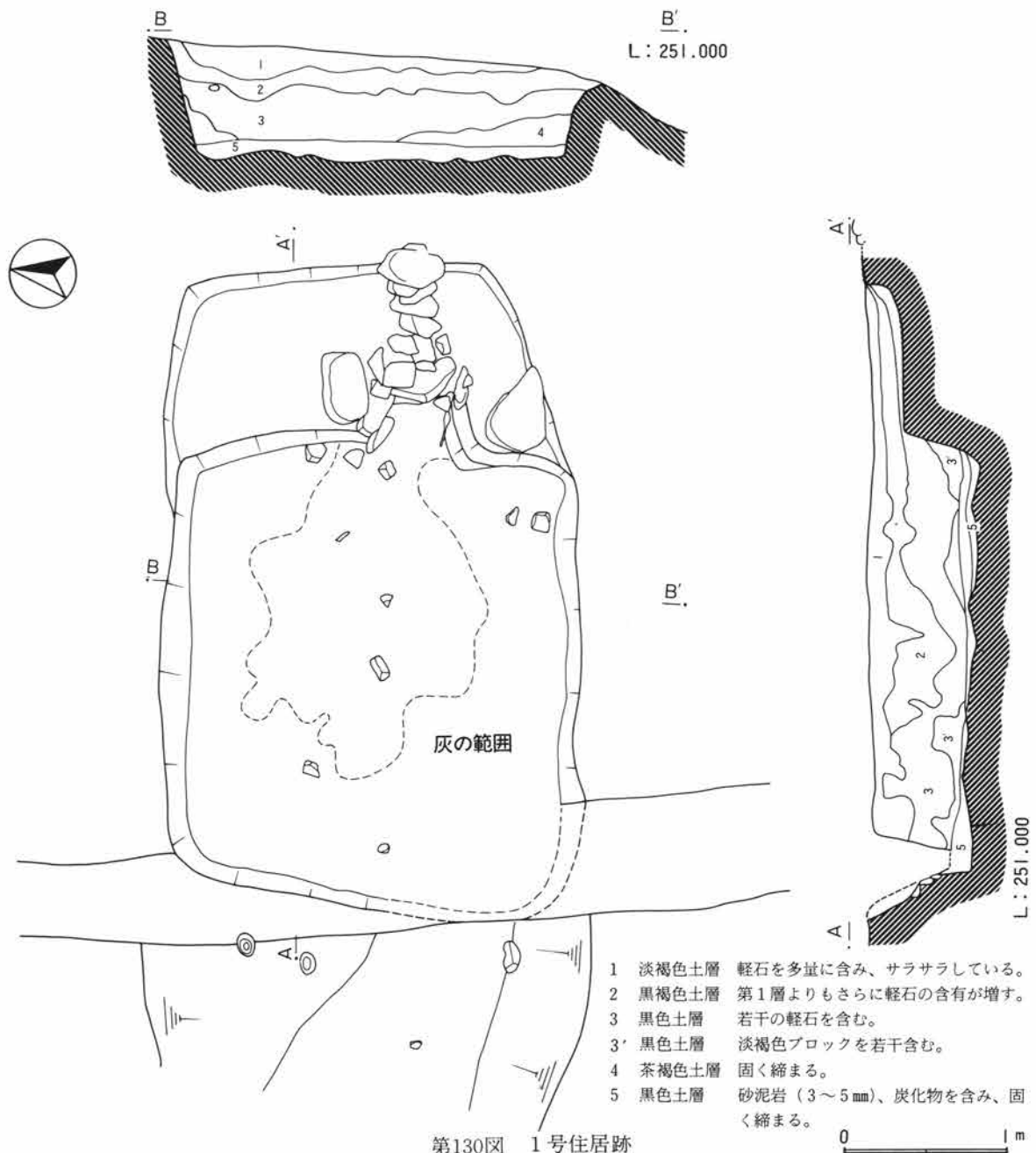
第129図 鉄剣(?)実測図

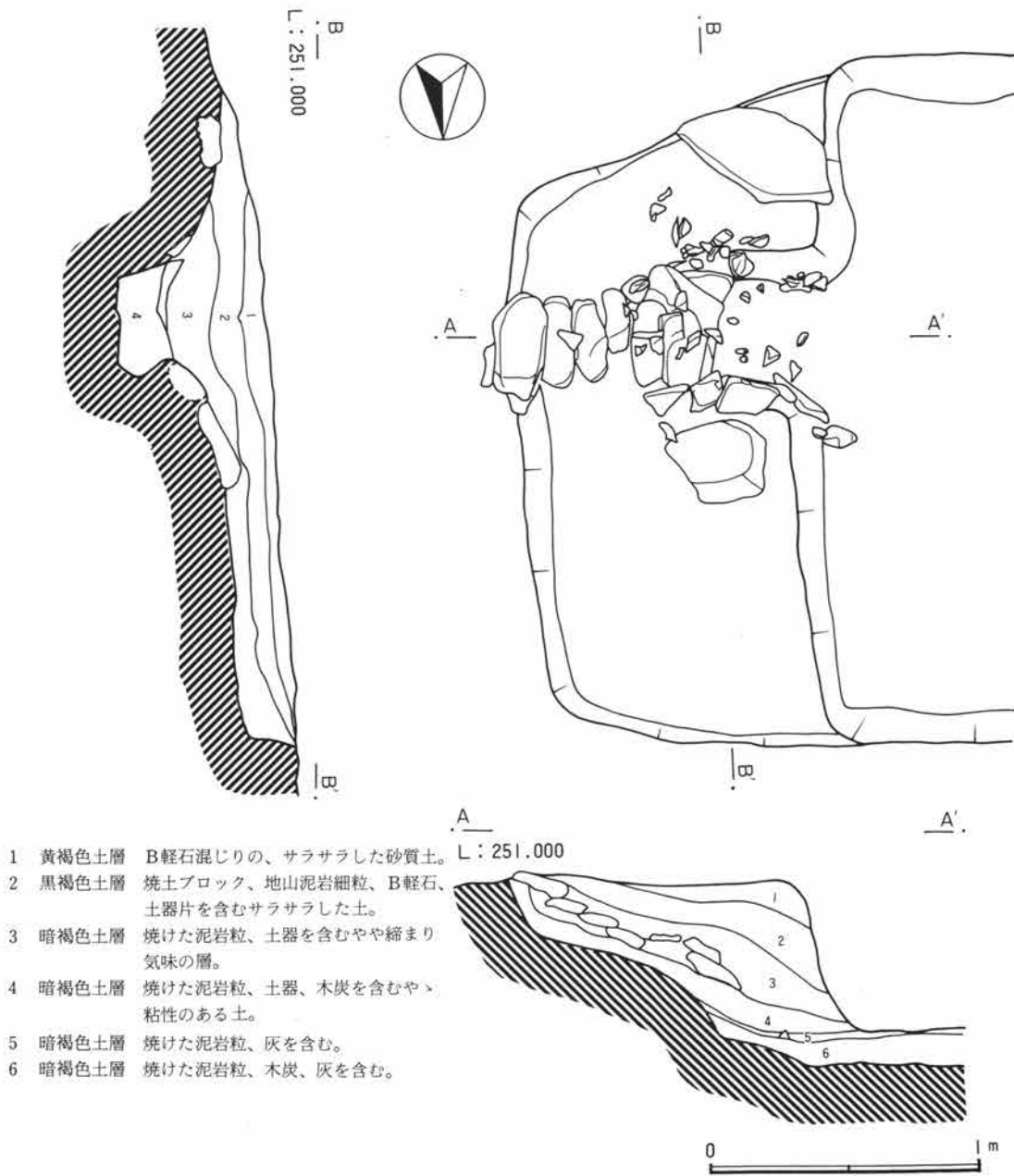
第4節 古 代

1号住居跡

北山茶臼山西古墳の立地する丘陵の南はテラス状の平坦地を形成する。このわずかな平坦地を利用して、平安時代の竪穴住居跡が単独で存在した。北山茶臼山西古墳の2号溝と重複し、前方部の前端より3.2mの距離にある。

東西長2.76m、南北長2.56mの東西に若干長い矩形を呈する。掘り方は地山である砂泥岩互層の井戸沢層まで及んでおり、現状で深さ62cmを測る。床面はこれに黒色土を入れて踏み固められており、床面上にはかまどを中心として広い範囲に灰の堆積が認められた。埋土には全てB軽石が含まれていたが、埋土上位程、B軽石の混入が多量になる傾向にある。





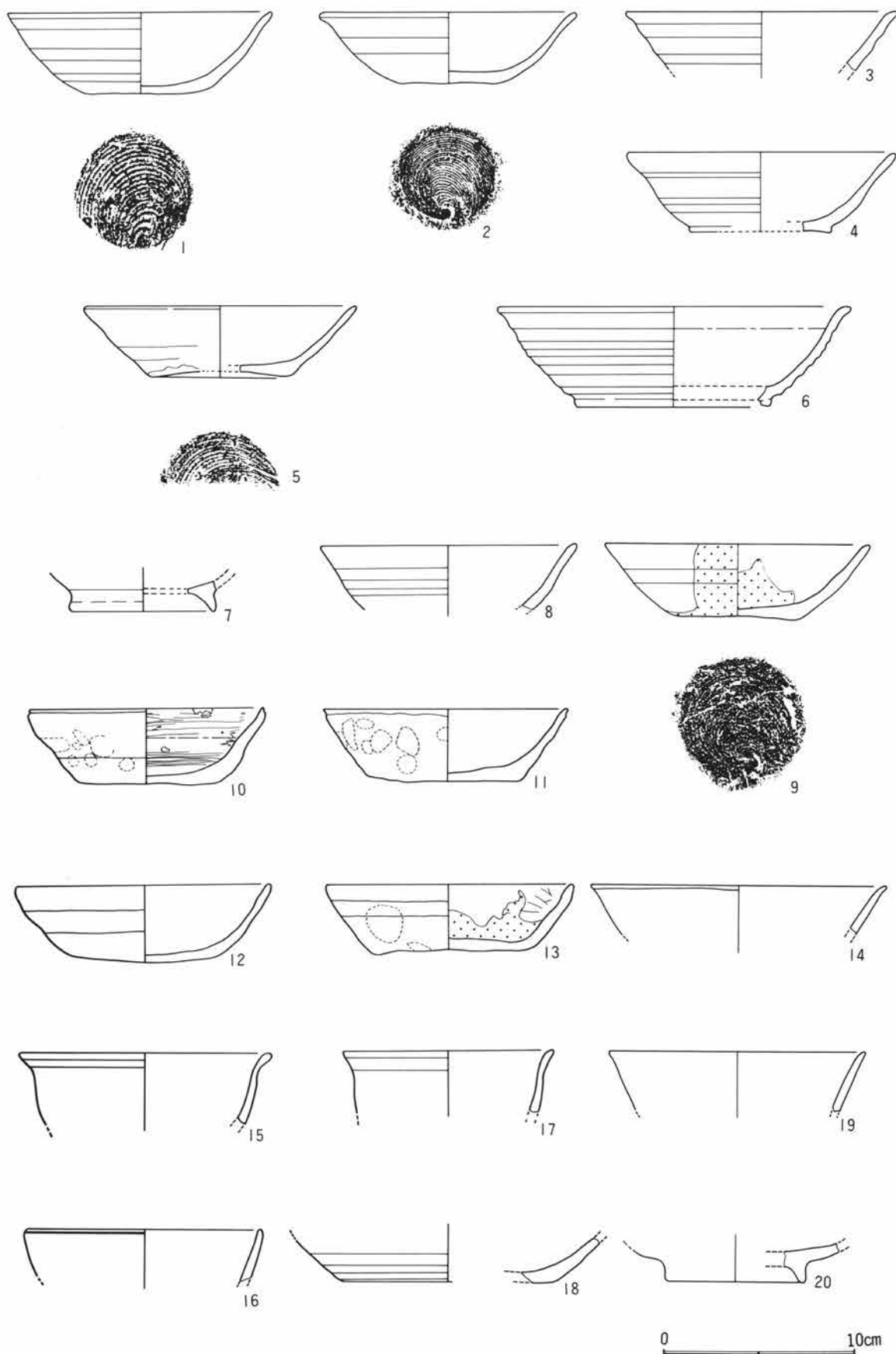
第131図 1号住居跡かまど部分

かまどは泥岩質系の角礫を天井部、煙道部及び左右袖に組んで構築しており、全長で2.6mを測る。角礫は煙道部に行くに従って、大ぶりになる傾向にあり、礫を若干かみ合わせながら組まれていた。

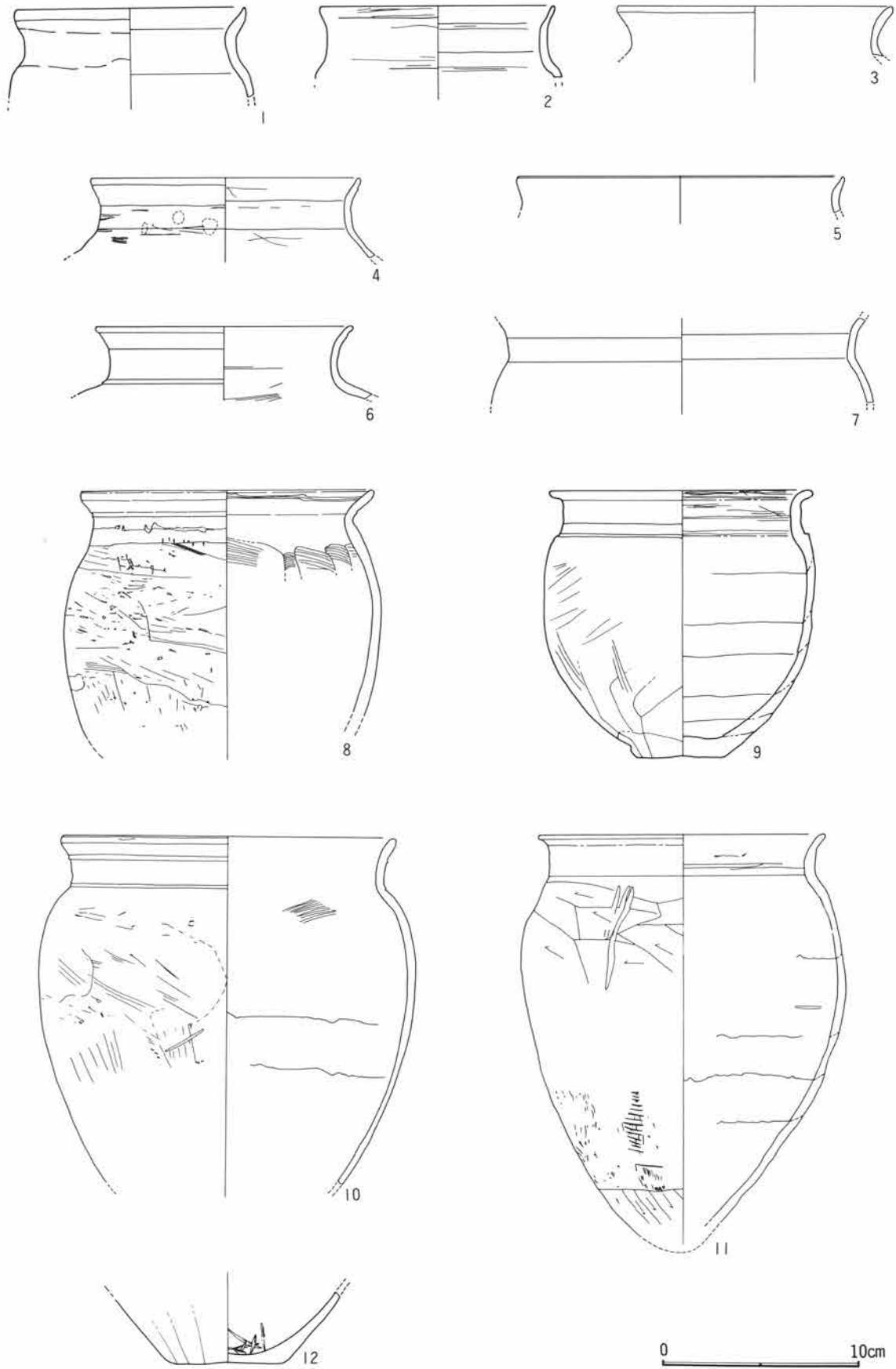
竪穴住居跡の東側はほぼかまどの全長に相応する形で、一段低く整形されており、テラス状を呈する。遺構確認面より15~20cm程度掘り下げてあり、かまどに関連する施設を目途としたものと考えられる。

また、住居の西側40cmのところからも坏を中心とする土師器が完形で出土しており、これが原位置と考えられることから、掘り方周辺のかなり広い部分を住居に取り込んでいたことが推定される。

尚、この丘陵上には前述したように本住居跡のみが存在するだけであり、所謂「離群住居」の範疇に入るものである。遺物は豊富であったが、特別な遺物は含まれておらず、遺物の面からは住居の特殊性は考えられない。9世紀第3四半期の時期が想定される。



第132図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



第133図 1号住居跡出土遺物実測図(2)

第29表 1号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	土器種類 器形	量目(cm) 口径、底径、器高	①胎土 ②焼成 ③色調	技 法
1	須恵器 坏	(13.8) (5.7) (4.2) 8割残存	①赤褐色土粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③浅黄色、内外面に煤付着	外面 轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り 内面 回転によるナデ ロクロ土師器
2	須恵器 坏	(13.2) (4.9) (3.7) ほぼ完存	①砂粒を少量含む ②良好、還元炎焼成 ③灰白色	外面 轆轤(右回転)、底部は回転糸切り 内面 回転によるナデ
3	須恵器 坏	() () () 口縁部～体部一部残存	①黒色砂粒を少量含む ②良好、還元炎焼成 ③浅黄色、内外面口唇部に油煙付着	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ ロクロ土師器
4	須恵器 坏	() () () 口縁部～体部一部残存	①黒色粒を微量含む ②良好、還元炎焼成 ③灰白色	外面 轆轤成形、回転糸切未調整 内面 回転によるナデ
5	須恵器 坏	() () () 口縁部～体部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、還元炎焼成 ③灰白色	外面 轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り 内面 回転によるナデ
6	須恵器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①黒色粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	外面 轆轤成形、高台欠損(付高台) 内面 回転によるナデ ロクロ土師器
7	須恵器 碗	() () () 底部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、還元炎焼成 ③灰白色	外面 轆轤成形、付高台 内面 回転によるナデ
8	須恵器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、還元炎焼成 ③灰白色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
9	土師器 坏	(13.6) (6.1) (3.6) ほぼ完存	①黒色粒を少量含む ②普通、酸化炎焼成 ③浅黄橙色、内外面に多量の油煙付着	外面 轆轤成形(右回転)、底部は回転糸切り 内面 回転によるナデ
10	土師器 坏	(12.1) (7.9) (3.6) 9割残存	①黒色砂粒を微量含む ②良好、酸化炎焼成 ③明褐色、口唇部に油煙付着	外面 轆轤成形、底部手持ち篋削り 砂じめの痕跡 内面 体～口縁部横ナデ
11	土師器 坏	(12.3) (7.4) (3.9) 8割残存	①石英粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	外面 轆轤成形、成形のための指頭痕を残す 底部手持ち篋削り 内面 横ナデ
12	土師器 坏	(13.2) (7.9) (4.0) 完形	①砂粒を微量含む ②良好、酸化炎焼成 ③鈍い褐色、内外面の口唇部に油煙付着	外面 轆轤成形、底部手持ち篋削り 内面 底部ナデ、体～口縁部横ナデ
13	土師器 坏	(12.8) (8.8) (3.5) 完形	①砂粒を含む ②良好、酸化炎焼成 ③鈍い橙色、内外面に煤付着	外面 轆轤成形、底部手持ち篋削り 内面 回転によるナデ、底部篋磨き
14	土師器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①砂粒を少量含む ②普通、酸化炎焼成 ③淡黄色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
15	土師器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①黒色粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
16	土師器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①砂粒を少量含む ②普通、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
17	土師器 碗	() () () 口縁部～体部一部残存	①石英を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
18	土師器 碗	() (7.0) () 底部一部残存	①砂粒を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③灰黄褐色	外面 轆轤成形、付高台 内面 回転によるナデ
19	土師器 碗	() () () 口縁部一部残存	①砂粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	外面 轆轤成形 内面 回転によるナデ
20	土師器 坏	() () () 口縁部一部残存	①砂粒を若干含む ②普通、酸化炎焼成 ③明黄褐色	外面 轆轤成形、付高台 内面 回転によるナデ

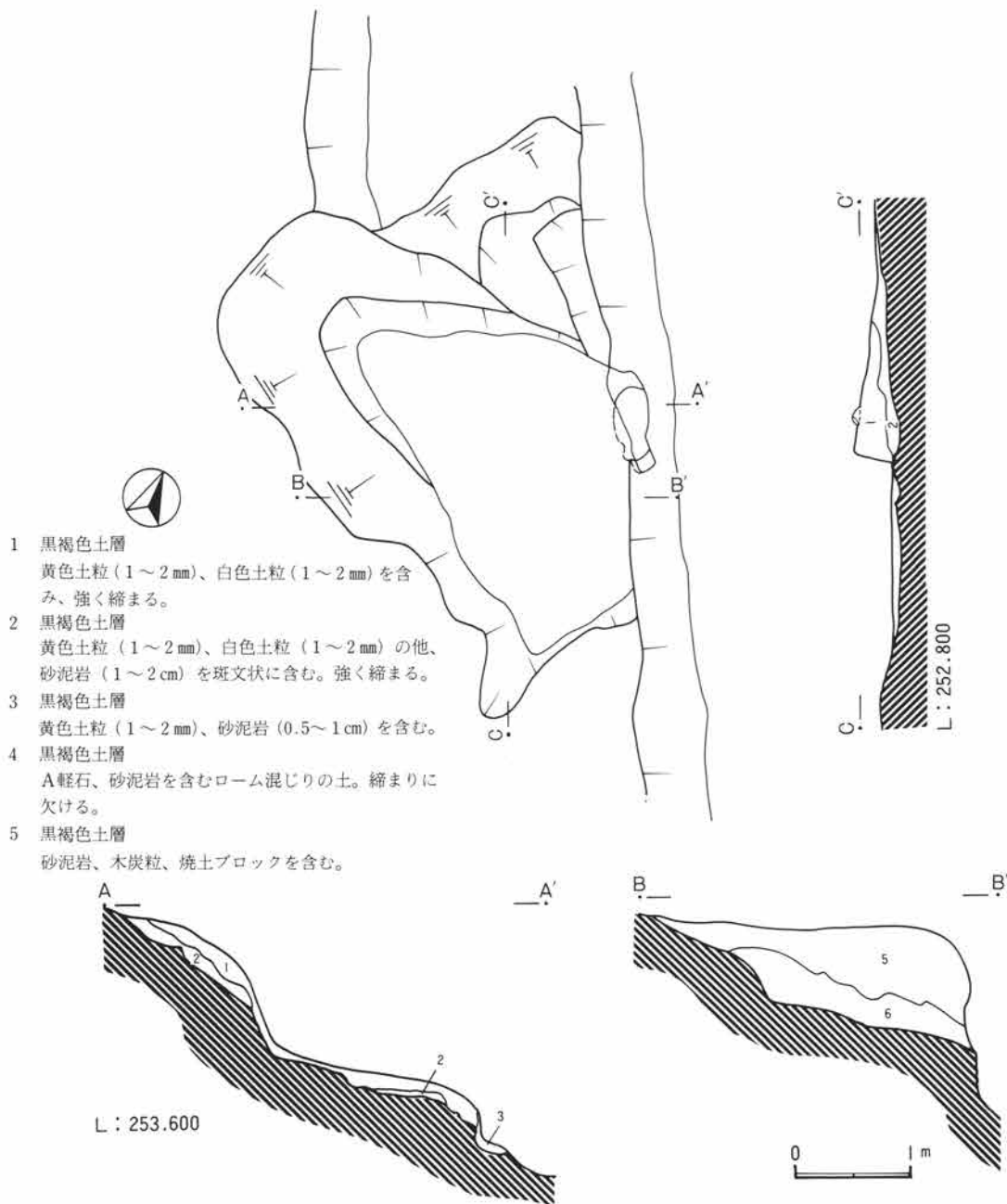
第29表 1号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	土器種類 器 形	量 目(cm) 口径、底径、器高	①胎土 ②焼成 ③色調	技 法
1	土師器 甕	() () () 口縁部一部残存	①大粒の黒色粒を少量含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い褐色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 口縁部は横ナデ 内面 口縁部～頸部横ナデ
2	土師器 甕	() () () 口縁部一部残存	①砂粒を若干含む ②良好、酸化炎焼成 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 口縁部は横ナデ 内面 口縁部～頸部横ナデ
3	土師器 甕	() () () 口縁部～頸部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	外面 横ナデ 内面 横ナデ
4	土師器 甕	() () () 口縁部～頸部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 口縁部は横ナデ 内面 口縁部横ナデ、頸部篋削り
5	土師器 壺	() () () 口縁部一部残存	①砂粒を若干含む ②良好、酸化炎焼成 ③浅黄橙色	外面 口縁部横ナデ 内面 口縁部横ナデ
6	土師器 甕	() () () 口縁部～頸部一部残存	①砂粒を微量含む ②良好、酸化炎焼成 ③橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 頸部は横ナデ
7	土師器 甕	() () () 頸部一部残存	①砂粒を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 頸部は横ナデ
8	土師器 甕	(19.2) () () 口縁部～胴部残存	①黒色砂粒を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 胴部は篋ナデ
9	土師器 壺	(13.4) (4.7) (13.6) ほぼ完存	①黒色砂粒を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 胴部は篋ナデ
10	土師器 甕	(21.5) () () 口縁部～胴部残存	①砂粒を少量含む ②普通、酸化炎焼成 ③橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 胴部は横ナデ
11	土師器 甕	(19.4) () () 口縁部～胴部残存	①黒色砂粒を微量含む ②普通、酸化炎焼成 ③鈍い橙色	「コ」の字状口縁、紐作り 外面 胴部は篋削り、口縁部は横ナデ 内面 胴部は篋ナデ後横ナデ
12	土師器 甕	() () () 底部一部残存	①黒色粒を少量含む ②良好、酸化炎焼成 ③明灰褐色	外面 体部縦方向篋削り 内面 ナデ、底部に篋押さえ痕あり

窯体状施設

前方部左くびれ部にかかる形で、窯体状施設が検出された。後世の耕作により、遺構そのものは大きくカットされており、旧状を知ることはできない。現状で南北長2.7m、東西長3.9mを測るが、旧状もこれを大きく逸脱するものではないと推定される。壁面の一部と底面が強く焼けており、ここで、焼成を伴う何らかの作業が行われたであろうことは、想像に難くない。遺物も出土せず時期は限定できないが、立地状況や規模等から鑑みて、炭焼窯に類する施設として扱っておくことが妥当であると考えられる。

先に記した「離群住居」の性格についてははっきりしないが、この窯体状施設との関連を位置関係から指摘しておきたい。



第134図 窯体状施設

第5節 考 察

1. 方格規矩鏡の方格文、T形文、L形文、V形文に見る変遷観

方格規矩四神鏡系倭鏡の変遷観については、既に田中 琢氏の論文「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」(『文化財論集』)がある。氏はこの論文の中で方格、T形文、L形文、V形文の間隙を埋める主要図像、その中でも特に四神の一つである白虎の変化に着目し、JA式からJF式に至る分類を試み、これを基礎として他の文様にもこの変遷観を波及させ、ほぼJA式からJF式に変化したであろうことを推定している。氏の展開する変遷観の根拠は複雑なものからより簡略なものへという多くの変遷過程に共通するものであり、そのともすれば観念論で終始してしまう恐れのある分野について他の要素の抽出によって理論的に強化している点で多くの者に示唆を与え、また、多くの者の共感を得る内容のものである。

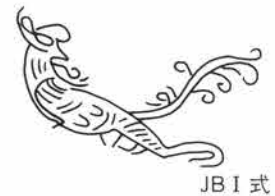
しかし、方格規矩鏡の本来的な要素であるはずの方格文、T形文、L形文、V形文の全体的な構成、割り付け及至各個の構成については触れることがなく、その点で食傷気味な感のあることは否めない。そこで、ここでは氏の主要図像を元にした変遷感をベースにそれと方格規矩の関連性を考え、ひいては方格規矩四神鏡倭鏡の盛行期についても若干考察を加えてみたい。

そこで、まず氏の分類の根拠になった白虎の変遷を跡づけておく。

JA式 獣像の前後肢、あるいは体軀の各部分がほぼ正確な位置に適切な大きさで表現されている。舶載された方格規矩四神鏡天獣の図像を四肢をもつ獣像の側面形として明確に認識し、それを写そうとする努力をはらった結果の作品とすることができる。



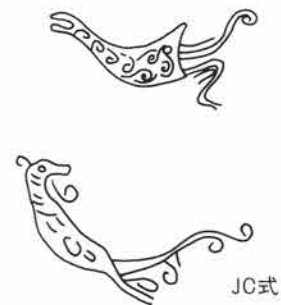
JB I式 前肢は欠落するか、あるいは痕跡的なものとなり、後肢のみ大きく表現する。その後肢も、体軀全体を側面形で描いた場合、後ろになって一部分しか見えない位置にある1肢は簡略化されることが多い。



JB II式 獣像全体の簡略化は前記JB I式と同様であるが、特に腰部と大腿部の区分が不明確で、あたかも大腿部が長く延びているかのように見える。後肢のうち側面形で後ろに位置する1肢は、表現されても多くはせいぜい短い2本の線にまで簡略化され、その位置も適切でない。



JC式 足部さらに下腿部の区別が明確でなかったり、それを欠いたりするものを含む1群。この獣像では、体部と後肢部とを連なりの曲線で表現し、各部位の境に明確な屈折点がないことが大きな特徴。前肢がわずかに痕跡的になり、後肢のうち、側面形で後ろになる1肢も表現されないことが多い。



第135図
主要図像の変遷(1)

- J D I 式 図像全体の高さが幅よりも大きい比率となったもので、あたかも後肢のみで体軀を支えているような形状をしめすI群をJ D式とし、その内で大腿部が比較的長く残存しているものをJ D I式とする。
- J D II式 J D I式と基本的には同じであるが、J D I式に比して大腿部が著しく短縮したものである。
- J E式 J D II式では体部下端に横U字形に付着した形状でかろうじて表現されていた下腿部と足部にあたる部分が消滅する。
- J F式 J E式に残っていた頭部が消失し、体部を渦文状表現のみにとどめたもの。簡略化の最も進んだものと言うことが出来る。



第136図
主要図像の変遷(2)

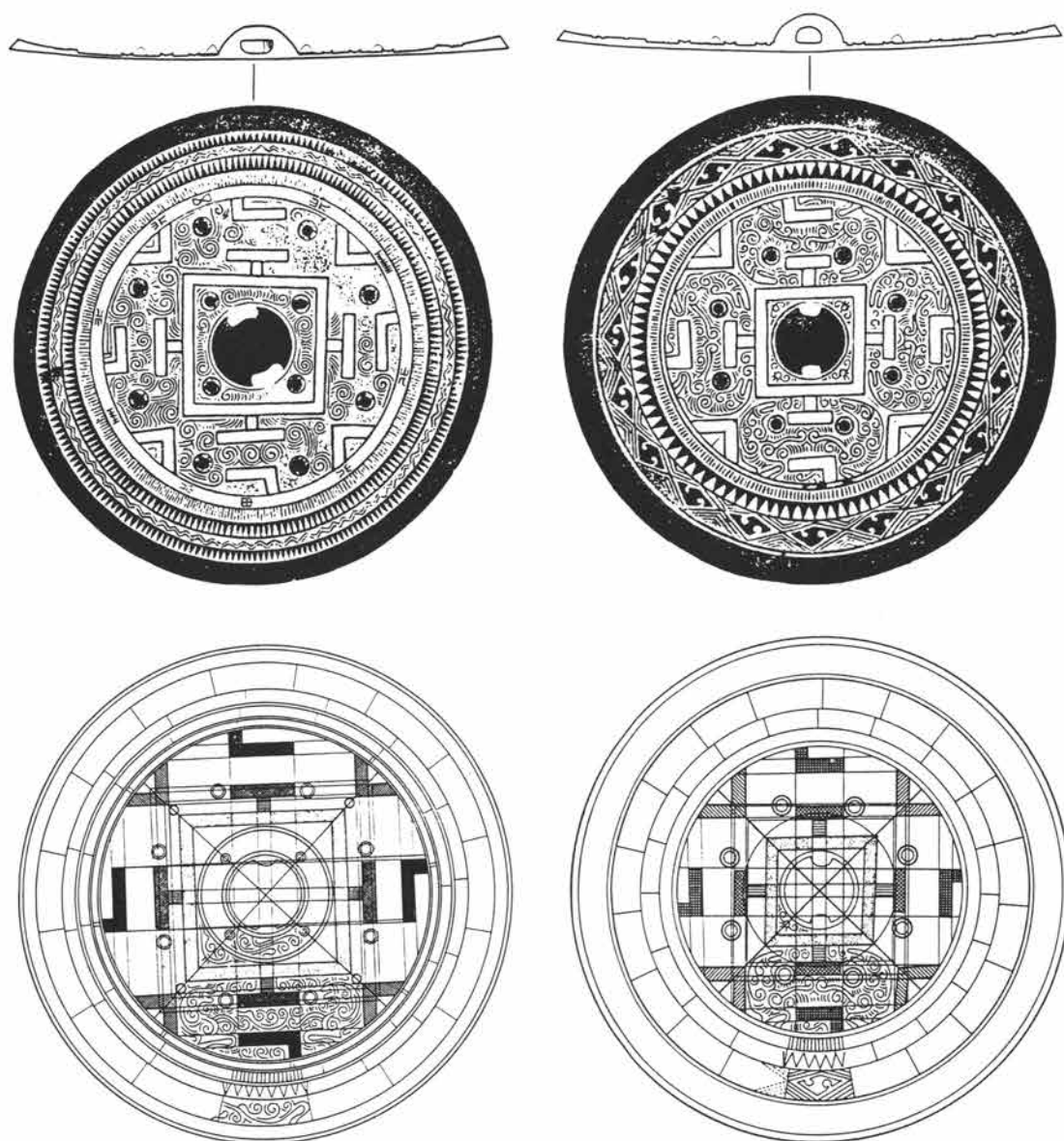
氏も指摘しているように、J C式はJ A式→J B式→J D式→J E式→J F式と変遷する流れの中では、「型式」的には異質の感を呈するものであるが、全体を眺めたときの『簡略化』という範疇で把えた時には、同じレベルで扱わざるを得ないものであるし、位置的にはJ B式とJ D式の間におくことが出来るものであろう。

さて、次にこの白虎の変遷観をベースに方格文、T形文、L形文、V形文の変遷を追ってみることにする。しかし、変遷を追ってみるといっても、そのいずれもが幾何学的文様であり、白虎(獣像)のように『簡略化』というレベルで把えることは困難である。そこで、ここでは方格文、T形文、L形文、V形文各個の歪みの有無、あるいはこれらの文様相互の割り付けの歪みの有無を中心として考察を進めていきたい。

(1) 舶載鏡に於ける方格文、T形文、L形文、V形文

そこで、最初に仿製鏡のモデルとなった中国鏡の方格文、T形文、L形文、V形文の有様について考えておきたい。付篇4で触れるように、国内から125面に及ぶ舶載の方格規矩鏡が発見されている。少なくとも、舶載鏡である限り、方格文、T形文、L形文、V形文の持つ本来の意味がどうであれ、それらの持つ意味を理解した上で、鏡を製作していたであろうことは容易に想像できることである。従って、方格規矩鏡の原図を製作する手順を考えれば、まずその中心を為す方格規矩文の割り付けから始めることが考えられる。その具体的方法については、仿製鏡例ではあるが、「続沖ノ島」(『宗像神社復興期成会』)における考察がある。17号遺跡出土の変形鳥文縁方格規矩鏡と変形菱雲文方格規矩鏡において、その原図作成に際して使用工具もからめて、詳細に検討を加えている。これを参考に考えれば、まず方格規矩の割り付けの基本線になる対角線を直交させることから着手するようである。方格の四隅はこの対角線上に円の中心から均等な距離を置いて配置されるし、同様にしてV形文の頂点も決めることが出来る。T形文は方格の各辺の中点を通るタテ棒を起し、ヨコ棒は方格の辺に平行して置かれる。L形文のヨコ棒はT形文のヨコ棒の長さに等しく置かれ、タテ棒はこの端部から内区外縁帯に向かって直角にひかれる。また、V形文は先の方法で決められた頂点を基準として、方格の各辺に平行して、L形文同様、内区外縁帯に向かって伸びていく。従って、V形文のなす角度は外郭も内郭も直角を呈する。このように見てくると、円の中心を通る対角線が全ての方格規

矩文の設計基本線になっていることがわかる。特に、変形菱雲文縁方格規矩鏡においては、当初の対角線がかなり明瞭に残っており、原図作成の方法を窺わせる。いずれも、直角を非常に強く意識して原図を作成したであろうことが推定される。上記したものは仿製鏡の原図作成の例証であるが、おそらく舶載鏡においても同じような方法がとられていたであろうことは想像に難くない。実際、国内出土の舶載鏡には佐賀県桜馬場遺跡出土の方格規矩渦文鏡や富岡謙蔵氏旧蔵になる四霊文方格TLV式鏡のように、対角線が残っているものがあり、原図作成の際の設計方法を裏づけている。また、守屋コレクションになる流雲文縁方格規矩四神新有尚方鏡には方格の各辺の中点を通る対角線が設計線として残っており、方格の四隅を通る対角線と並んで、方格の各辺の中点を通る対角線を使用した設計方法のあったことも推定できる。



第137図 沖ノ島17号遺跡出土鏡

上図のような割り付け方法で製作されたと考えられる舶載の方格規矩鏡の方格文、T形文、L形文、V形文の具体例を次に見ることにする。京都府椿井大塚山古墳の波紋方格規矩四神鏡は各文様が直角を意識した上で、かなり整備された形で割り付けられている様子を看取することができる。ただ、一箇所、V形文の頂

点と方格の隅が他に比して離れる他は殆ど設計上の歪みは認められない。佐賀県桜馬場遺跡出土の方格規矩渦文鏡は面径15.4cmと小振りで、主要文様も渦文化しているが、方格文、T形文、L形文、V形文の各文様はきちんと割り付けられている。また、京都国立博物館蔵の方格規矩渦文鏡は外区に流雲文を巡らし、内区外縁帯に銘文を持つ。桜馬場遺跡出土のものと同じく、主要文様は渦文表現をとるが、鋳上がりは非常に良好で、方格文、T形文、L形文、V形文は整然と並ぶ。

このように、舶載方格規矩鏡の方格文、T形文、L形文、V形文においては殆どのが直角を意識した上で歪みなく配置されている。方格規矩文の間を埋める主要図像が時代が下るに従って、渦文表現という簡略化の方向をとるにもかかわらず、方格規矩文がだれることなく、整然と配置されることは、方格規矩鏡に付帯する性質（というよりも、方格規矩鏡の本来持ちえた性質と言い換えたほうが妥当かも知れないが）を鏡製作工人が忘れずに、まず、方格規矩文の割り付けを第一義に置いていたであろうことを背景とするものと考えられる。

(2) 仿製鏡に於ける方格文、T形文、L形文、V形文

では、倭人の鏡工人によって作られた仿製方格規矩鏡の方格文、T形文、L形文、V形文の実態はどうであろうか。仿製方格規矩鏡の検出は現在までに101面に及んでいる。これらの方格規矩鏡全てについて検討を加えれば最善であろうが、資料収集の制約下から主だったものについて検討を加えたい。

①福岡県沖ノ島8号遺跡出土鏡（第138図一①）

方格文は2辺が平行であるが、残り2辺に狂いが生じており、台形状を呈する。T形文はタテ棒、ヨコ棒が、L形文はヨコ棒が歪みを持つ。V形文は3箇所については直角を意識して置かれるが、1箇所だけ鈍角状に大きく開き、115度を測る。全体的に簡略化が目立ち、主要図像は原型がわからない程、渦文化している。面径14.1cm。

②福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（変形鳥文縁方格規矩鏡）

主要図像は簡略化するものの、振り返った白虎の肢態をかるうじて観察することが出来る。方格、T形、L形、V形文に歪みは認められない。面径27.1cm。

③福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（変形半円方形帯方格規矩鏡）（第138図一③）

上述した変形鳥文縁方格規矩鏡に近似した白虎像を持つ。方格文の四隅を通る対角線が明瞭に残る。方格文の一部に線の歪みが認められるが、基本的には整然とした割り付けを持った鏡であると思われる。面径26.2cm。

④福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（擬銘帯方格規矩鏡）（第138図一④）

白虎像は②③と同様の意匠を持つが、強いて言えば、渦文の使用頻度が前2例に比して増加するため、少々うるさい印象を受ける。方格、T形、L形、V形文に殆ど歪みが認められない。面径22.1cm。

⑤福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（変形方格規矩鏡）（第138図一⑤）

渦文化が著しく進行しており、殆ど当初の意匠を残していない。方格文は正方形からはほど遠く、T形文、L形文もヨコ棒に長短が見られ、方格の各辺に平行しない。L形文、V形文のなす角度はまちまちで歪んだ印象を強く受ける。面径21.5cm。

⑥福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（変形菱文縁方格規矩鏡）（第138図一⑥）

方格文の四隅を通る対角線が明瞭に残る。方格、T形、L形、V形文の各文様に殆ど歪みが認められない。面径17.8cm。

⑦福岡県沖ノ島17号遺跡出土鏡（変形珠文帯方格規矩鏡）（第138図—⑦）

鳥文が8区画に置かれ、非常に鋭い二重鋸歯文を持つ。方格文を中心に歪みが目立つ。面径16.6cm。

⑧京都府寺戸大塚古墳出土鏡（第139図—⑧）

T形文、L形文、V形文を欠いているが、方格文は溝が幅広く、しっかりとした線で描かれている。8個の乳が均等に配置されており、その内4個の乳が方格の四隅に接して置かれる。また、方格の隅と乳の中心を通る対角線が看取される。面径15.8cm。

⑨京都府加悦丸山古墳出土鏡（第139図—⑨）

流麗な印象を強く受ける。殆ど歪みが認められないが、T形文のタテ棒が一部曲がる。面径28.8cm。

⑩京都府恵美須山古墳出土鏡（第139図—⑩）

外区が鏡面に及ぶという特徴を有する。方格文は大きく崩れ、一隅が突出する。T形文は比較的整った形で配置されるものの、L形文、V形文は歪みが著しい。L形文のなす角度は鈍角傾向を示し、V形文の角度もまちまちである。全体に冗長な感じを与える。面径23.9cm。

⑪京都府百々ヶ池古墳出土鏡（第139図—⑪）

全体に整った感じがし、殆ど歪みが認められないが、T形文のヨコ棒に若干歪みが見られる。面径22.7cm。

⑫京都府八幡西車塚古墳出土鏡（第139図—⑫）

8乳を中心とした渦文が良く発達している。方格文が台形状を呈し、L形文のタテ棒が部分的に曲がり、開き気味になる。面径21.8cm。

⑬京都府平尾城山古墳出土鏡（第139図—⑬）

方格文の四隅とV形文の頂点を通る対角線が僅かながら残っている。全体的に良く整理された割り付けの印象を受ける。面径16.7cm。

⑭京都府稲荷藤原古墳出土鏡（A鏡）（第140図—⑭）

方格、T形、L形文はかなり整備された割り付けとなっているものの、V形文の意匠はまちまちで角度が鋭角傾向を示すものから開いて鈍角を呈するものまで様々である。面径25.9cm。

⑮京都府稲荷藤原古墳出土鏡（B鏡）（第140図—⑮）

全体的に良く整備された割り付けと言える。面径23.6cm。

⑯奈良県日葉酢媛陵出土鏡（1号鏡）

方格文、T形文のヨコ棒、L形文のヨコ棒に若干の歪みが認められる。面径35cm。

⑰奈良県日葉酢媛陵出土鏡（2号鏡）（第140図—⑰）

外帯の唐草文の間にL形文が配置されるという特徴を持つ。方格、T形、L形、V形文に歪みは認められない。面径32.5cm。

⑱静岡県三池平古墳出土鏡（第140図—⑱）

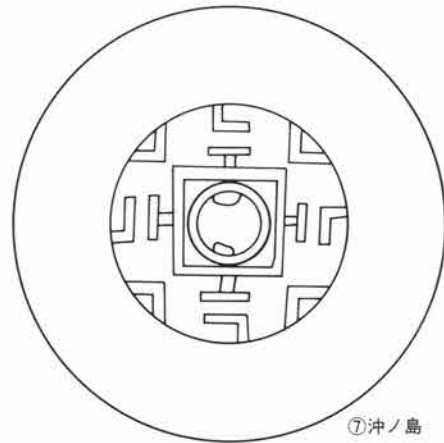
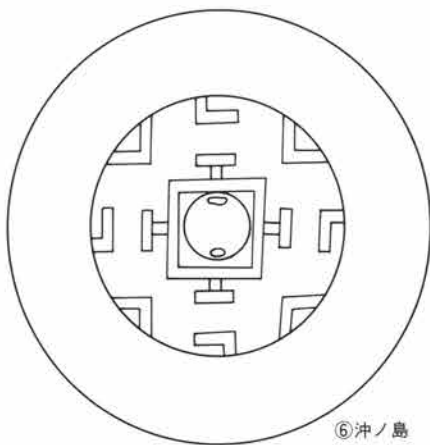
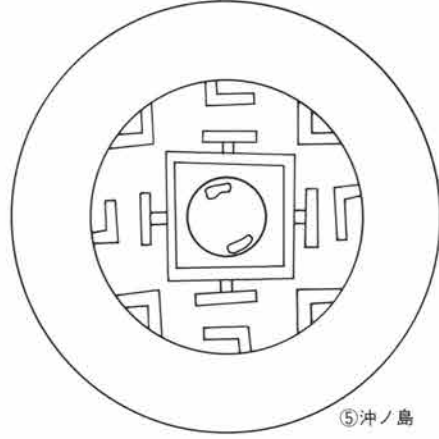
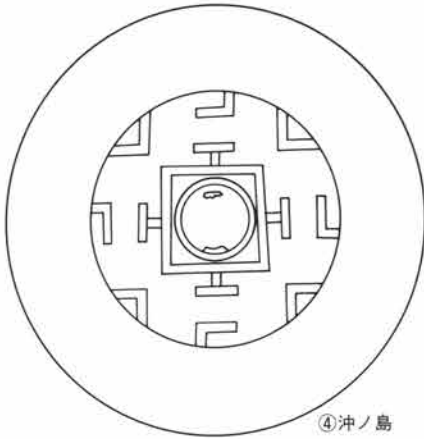
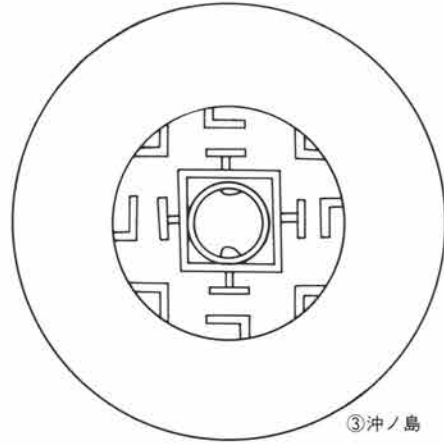
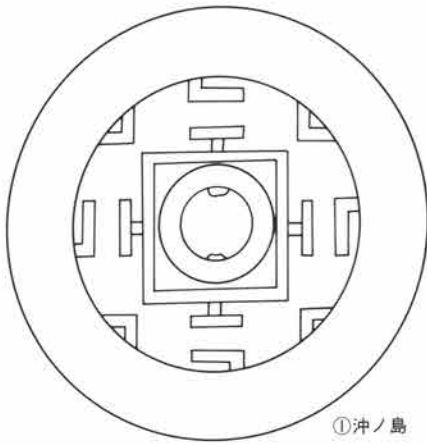
T形、L形、V形文の各部には歪みが認められないが、方格文が台形状を呈する。面径19.5cm。

⑲伝岡山県鶴山丸山古墳出土鏡（第140図—⑲）

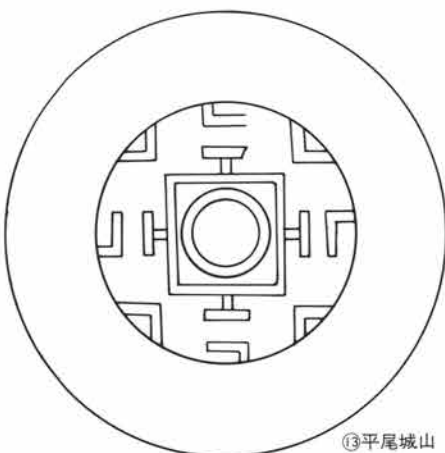
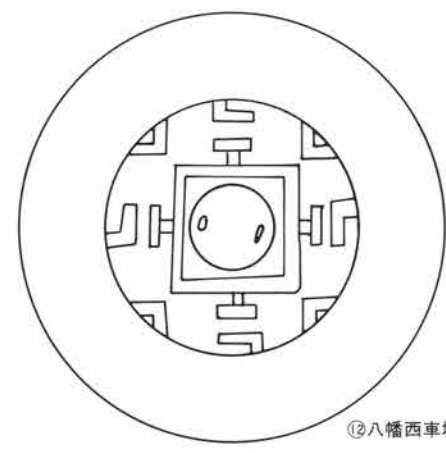
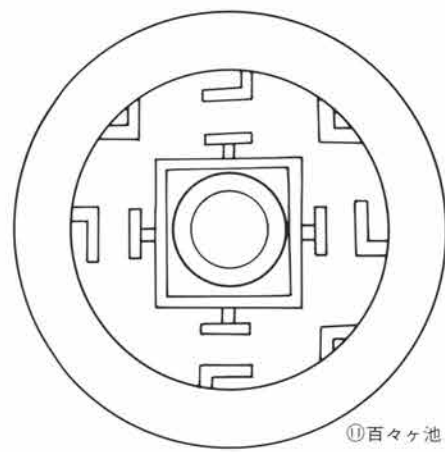
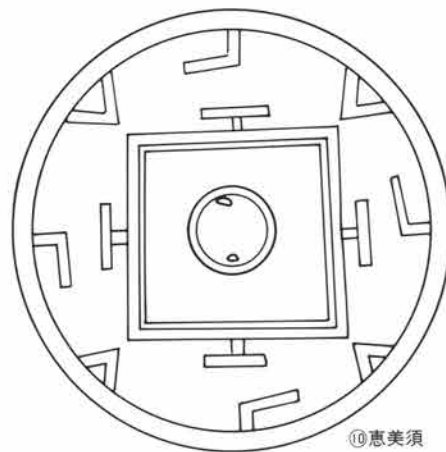
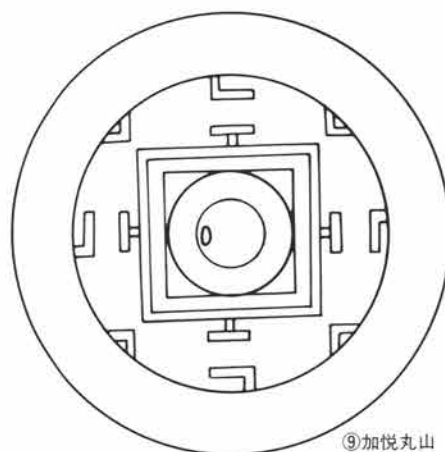
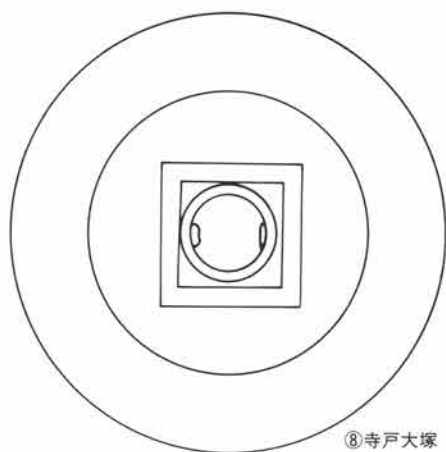
方格文の四隅とV形文の頂点を通る対角線が読み取れる。殆ど歪みが認められない。面径13cm。

⑳岡山県鶴山丸山古墳出土鏡（第140図—⑳）

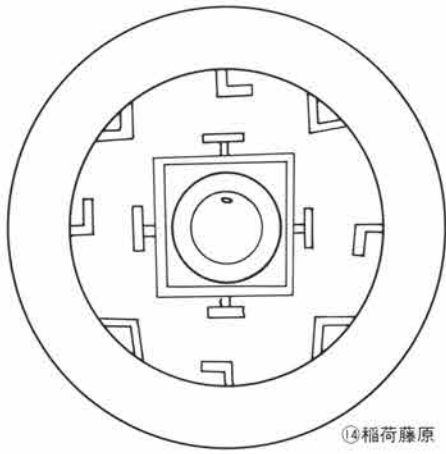
T形文を失い、本来T形文の位置すべき場所にL形文が置かれる。方格隅とV形文の頂点を通る対角線が1本認められるものの、各所において歪みが大きい。方格文は台形状に開き、V形文は鈍角気味に開くという特徴を持つ。面径16.7cm。



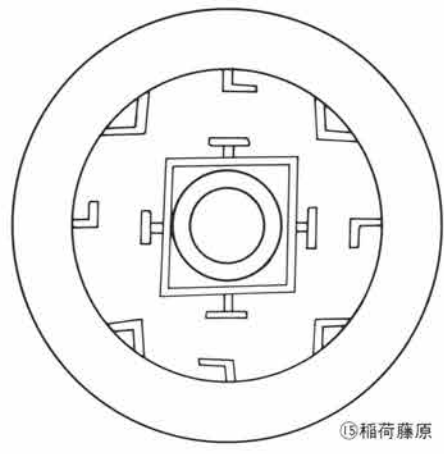
第138図 方格規矩鏡文様割り付け(1)



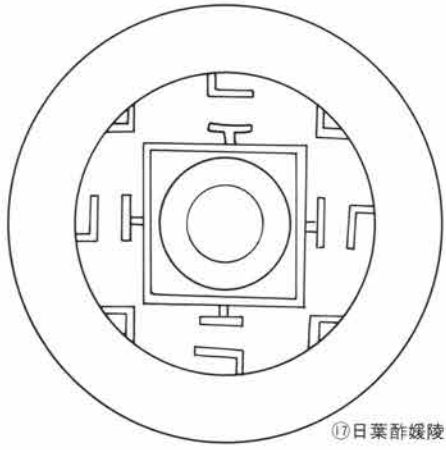
第139図 方格規矩鏡文様割り付け(2)



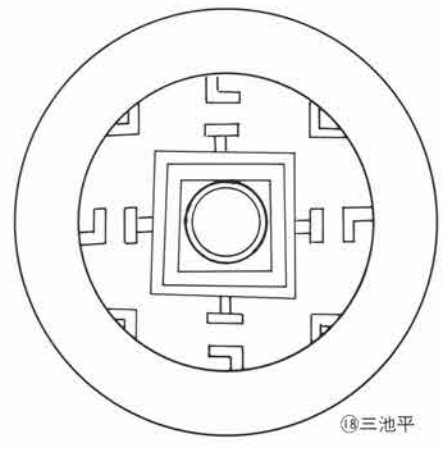
⑭ 稻荷藤原



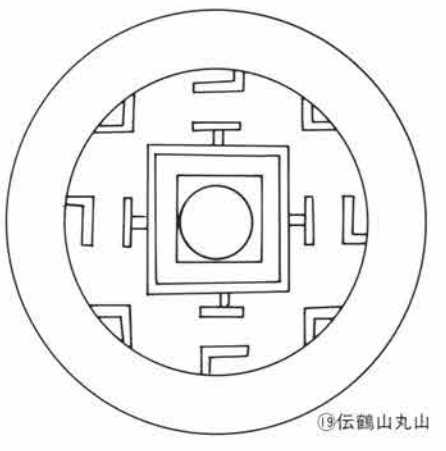
⑮ 稻荷藤原



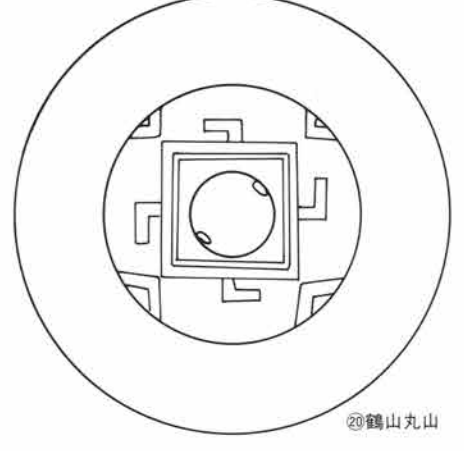
⑰ 日葉酢媛陵Ⅰ号鏡



⑱ 三池平



⑲ 伝鶴山丸山



⑳ 鶴山丸山

第140図 方格規矩鏡文様割り付け(3)

以上、仿製方格規矩鏡について方格文、T形文、L形文、V形文を中心に割り付けの歪みを検討してきた。この割り付けの実態と先に示した仿製方格規矩鏡の文様の変遷観との関係はどうであろうか。その関係を図示すると次のようになる。

第30表 文様割り付け一覧表（1）

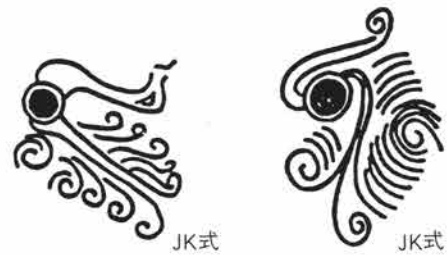
番号	出土遺構名	方格文	T形文	L形文	V形文	対角線の有無	型 式
①	沖ノ島8号	×	×	×	×	無	JK式
②	沖ノ島17号	○	○	○	○	無	JDII式
③	〃	△	○	○	○	無	〃
④	〃	○	○	○	○	無	〃
⑤	〃	×	×	×	×	無	JK式
⑥	〃	○	○	○	○	有	JDII式
⑦	〃	×	×	×	×	無	TO式
⑧	寺戸大塚古墳	○	欠	欠	欠	有	JDII式
⑨	加悦丸山古墳	○	△	○	○	無	JBII式
⑩	恵美須山古墳	×	○	×	×	無	JC式
⑪	百々ヶ池古墳	○	△	○	○	無	〃
⑫	西車塚古墳	×	○	△	○	無	JK式
⑬	平尾城山古墳	○	○	○	○	有	JDII式
⑭	稲荷藤原古墳	○	○	○	×	無	JA式
⑮	〃	○	○	○	○	無	JDII式
⑯	日葉酢媛陵	△	△	△	△	無	JB I式
⑰	〃	○	○	○	○	無	JDII式
⑱	三池平古墳	×	○	○	○	無	JB I式
⑲	鶴山丸山古墳	○	○	○	○	無	JB I式
⑳	〃	×	欠	×	×	有	JE式

注：○は文様に歪みのないことを、×は文様が歪んでいることを、△はどちらとも言えないことを示す。
 ；JK式は乳を中心とした渦文状図像を特徴的に持つものを表す。時期的にJD式に後出する可能性を持つ。



第141図 鳥像各型式

；TO式は渦文表現の鳥文を主要図像とするものを表す。TO式の他にTM式、TN式表現を採用するものがある。時期的にはJK式と同様、JD式に後出する。



第142図 JK式図像

(3) 方格文、T形文、L形文、V形文の割り付けと文様変遷との相関関係

そこで、次に文様の変遷観と方格、T形、L形、V形文の割り付けとの関係を分かり易く把握するために先に示した表を文様の型式観を軸に並びかえてみることにする。

第31表 文様割り付け一覧表(2)

型式	資料番号	方格文	T形文	L形文	V形文	対角線の有無
J A 式	⑭	○	○	○	×	無
J B I 式	⑯	×	○	○	○	無
	⑰	○	○	○	○	無
J B II 式	⑨	○	△	○	○	無
	⑮	△	△	△	△	無
J C 式	⑩	×	○	×	×	無
	⑪	○	△	○	○	無
J D I 式	⑰	○	○	○	○	無
J D II 式	②	○	○	○	○	無
	③	○	○	○	○	無
	④	△	○	○	○	無
	⑥	○	○	○	○	有
	⑧	○	欠	欠	欠	有
	⑬	○	○	○	○	有
	⑮	○	○	○	○	無
	⑰	○	○	○	○	無
T O 式	⑦	×	×	×	×	無
J K 式	①	×	×	×	×	無
	⑤	×	×	×	×	無
	⑫	×	○	△	○	無
J E 式	⑳	×	欠	×	×	有

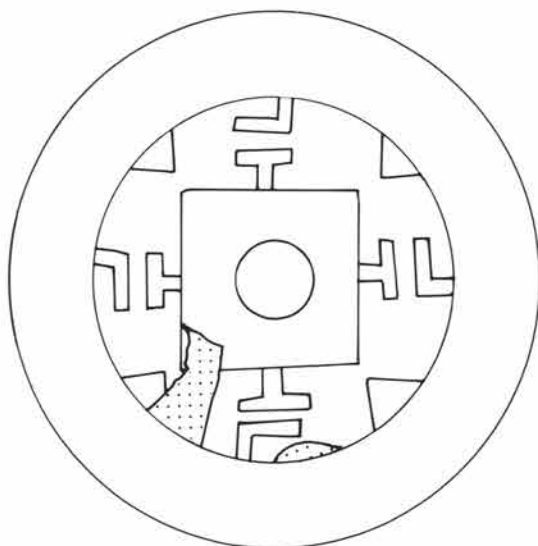
この表の結果から次のようないくつかの傾向を読み取ることができよう。

- ① 方格、T形、L形、V形文はJ D I 式、J D II 式の時期にはその割り付けに歪みが認められない。それに対して、J D 式期の前後において歪みが現れる点が指摘できる。その傾向は特に、J D 式期よりも後の時期において、より顕著な様である。その背景を推定するならば、J D 式期より以前は舶載鏡をモデルとして、少しでもそれに近づけようと鏡工人が努力をしていた時期であり、J D 式期に対角線を活用した割り付け法の使用により、方格、T形、L形、V形文が最も整ったとすることが出来よう。また、それ以降の大きなくずれば方格、T形、L形、V形文の写しとりに意義を見いださなくなった時期、即ち方格規矩鏡自体が退化していく時期としてとらえることが出来るであろう。換言すれば、J D 式期が仿製方格規矩鏡の盛行期として位置づけられる可能性を持つということである。
- ② 割り付けの際の基準線と考えられる対角線はJ D II 式期以降において散見される。それは方格、T形、L形、V形文の正確な割り付けと密接な関係にある。
- ③ T形、L形、V形文のいずれか、または全てを欠く現象はJ D II 式期以降において認められる。J D 式

期を盛行期と位置づけたが、早くもこの時期から文様の一部を欠くという簡略化が始まっているということが出来る。

(4) 北山茶臼山西古墳出土方格規矩鏡の位置づけ

以上の観察結果から把握できた傾向を元に北山茶臼山西古墳出土の方格規矩鏡の位置づけを次に考えてみたい。北山茶臼山西古墳出土方格規矩鏡の方格文、T形文、L形文、V形文の割り付けは第143図の様である。



第143図 西古墳出土方格規矩鏡文様割り付け

これを詳細に観察すると、まず方格文の各辺の中点を通る割り付け線がわずかであるが看取される。この点においては原図作成の際の設計の意志を読み取ることが出来るが、方格文自体が台形状に歪んでおり、残りの文様、即ちT形文、L形文、V形文にしてもそれぞれ歪みが認められる。これを今まで見てきた方格、T形、L形、V形文の変遷の中に位置づけた時、

- ①割り付け線が存在すること
- ②方格、T形、L形、V形文がそれぞれ歪みを持つこと

から、田中氏の分類のTO式、JK式、JE式期に概ね該当するということが出来よう。

また、主要図像の簡略化段階も、前述したように鳥の目を全てきちんと表現していること、羽毛を数本の曲線で表現していることから、TO式ないしはTO式に先行するものと考えられ、方格、T形、L形、V形文の変遷観と齟齬なく対応していると見ることが出来る。時期的には佐味田宝塚古墳出土の変形獣帯文方格鏡や細線式変形獣帯鏡に見られる鳥文と同時期、ないしは先行する時期が想定されそうであり、4世紀の後半という一応の時期を考えておきたい。換言すれば、北山茶臼山西古墳出土の方格規矩鏡を仿製方格規矩鏡の退行期に位置づけることが出来よう。



第144図 佐味田宝塚古墳出土鏡鳥文文様概念図

2. 鉄矛の位置づけ

鉄矛については既に児島隆人⁽¹⁾、小田富士雄⁽²⁾、小林行雄⁽³⁾氏等により形態の面から分類が試みられている。また、茂木雅博⁽⁴⁾氏は小林氏の形態上の4分類を受けて、これの細分化を試み、国内出土の鉄矛を集成する一方で、年代観についても考察を加えている。最近では臼杵⁽⁵⁾ 勲氏が鉄矛の分類、編年研究の確立が急務であるとして、I期からV期にわたる変遷観をうち立てている。

ここでは、これら諸氏の研究を受けて、県内出土の鉄矛について集成を試みると共に、合わせて鉄矛の位置づけについても若干の考察を加えてみたい。

(1) 県内出土の鉄矛

管見では、現在までに、16遺跡（内13遺跡は古墳）から22例に及ぶ鉄矛の出土を確認している。そこで、それぞれの古墳の概要を墳丘形態、規模、内部構造、副葬品及び年代観等を中心に書き出しておく。

①柴崎蟹沢古墳（高崎市柴崎町）

墳丘及び主体部とも不明な部分が多いが、円墳及至前方後円墳とする説が強い。径6～7間、高さ5～6尺前後と推定され、主体部は粘土棺とする。三角縁神獣鏡2面、内行花文鏡2面、短冊形鉄斧、鉄矛、石田川式期に比定される複合口縁壺とS字口縁をもつ台付甕が出土している。構築年代は4世紀後半～終末に位置づけられる。

②北山茶白山古墳（富岡市南後箇）

第三章でも触れたごとく、棺外から鉄矛が出土している。

③赤堀茶白山古墳（佐波郡赤堀町今井）

帆立貝形の墳丘形態を持ち、全長45.2m、墳丘頂部と周辺の低湿地との比高差は約15mを測る。大小2つの木炭塚があり、1号塚からは神獣鏡、石製刀子、石製勾玉、白玉、短甲、鉄鏃、斧頭、矛身と石突（先端間で2.6m）、刀剣が、2号塚からは内行花文鏡と刀身が出土している。5世紀中葉から後半期にかけての構築と推定される。

④蕨手塚古墳（佐波郡赤堀町五目牛）

径37m前後、高さ4m前後の円墳で、墳頂部から竪穴系の主体部が3箇所検出されている。その内、A構造は礫層を持つもので、白玉、勾玉、短剣、蕨手刀子、鉄矛、鉄斧、鉄鎌、鉄鏃、鍬など出土している。構築年代は5世紀後半頃と推定される。

⑤達磨山古墳（佐波郡赤堀町五目牛）

径35m、高さ5mの円墳で、墳丘の根元と頂上の周縁とに埴輪円筒列の痕跡が認められた。蕨手塚古墳同様、3箇所の竪穴系主体部が検出されており、A石室から鉄剣、大刀、鉄矛および石突、鉄鎌、鉄斧、鉄鏃が、また粘土槨から大刀、矛身、鉄鏃が出土している。築造は5世紀中葉から後半頃に比定される。

⑥長瀬西古墳（高崎市剣崎町）

開墾を経た現状でも直径25m前後を測り、高さは開墾前で6m近くあったとされる。周辺古墳に比して突出した規模を持った大形円墳で、主体部は自然石で構築された竪穴式石室であったという。捩文鏡（面径10.6cm）の他、滑石製勾玉、石製模造品の鏡、鉄斧、鉄鎌、刀子、白玉、短甲、鉄矛及び石突、鉄鏃が検出されている。5世紀後半に位置づけることができる。

⑦若田大塚古墳（高崎市若田町）

付近に存在する小古墳群中最大級の円墳で、径29.5m、高さ6.5m～7.5mを測る。埋葬主体部は竪穴式石室

で、石室内より鉄槍、鉄矛、短甲が出土している。本古墳の築造は6世紀初頭以降と考えられる。

⑧前二子古墳（前橋市西大室町）

基壇基部で主軸長92m、後円部径71m、前方部幅61m、くびれ部幅55m前後の前方後円墳であり、全長に対して後円部径が大きく、寸詰まりのずんぐりした印象を与える。埴輪配列があったことが推定されており、墳丘主軸に対してほぼ直交する自然石乱石積の横穴式石室を持つ。銅鏡、鉄矛2個体、鉄鏃、鉄製轡、鉄製輪鏡、鉄製鉸具、留金具、鎖、金銅製剣菱形杏葉、ガラス製小玉、金製耳環、須恵器飾器台、同器台、同提瓶、同直口壺、同高坏、同臙、土師器台付壺、同高坏、同坏等多種多様の副葬品の出土が知られる。構築は6世紀中葉以前と考えられる。

⑨観音山古墳（高崎市綿貫町）

全長約97m、後円部径61m、前方部前端幅約64m、くびれ部幅約44mで、高さ後円部で9.6m、前方部9.4mを測る前方後円墳である。後円部頂部、前方部頂部、及び中段平坦面には人物、器財などの埴輪が配置されており、古墳上における祭祀儀式を表現したものや墓域守護的な性格をもって墳丘を飾ったものなどの意義づけが推定されている。全長12.6mを測る横穴式石室は後円部やや斜め後方に向けて開口しており、ほぼ埋葬当時の姿を滞める形で、極めて豊富な遺物が出土している。金製中空丸玉、ガラス玉、獣形鏡、金銅製鈴付大帯、金環、銀環、冑、挂甲、青銅製轡、金銅製花弁付鈴、二神六獣鏡、銀製大刀、銀製刀子、鉄鏃、鉄矛、大刀、馬具類及び須恵器甕、同蓋坏、同高坏、土師器埴、同高坏、銅製水瓶、石突などが残存しており、石室の構造や副葬品の性格から推して6世紀後半、それも末に近い時期のものと考えられる。

⑩金冠塚古墳（前橋市山王町）

全長約52m、後円部径約32m、前方部端幅42m、くびれ部幅約25mを測る前方後円墳である。全長3.64mを測る横穴式石室からは、金銅製冠、同大帯、冑、雲珠、須恵器壺、同脚付埴、同坏と共に鉄矛、石突が各4個体出土している。出土遺物から見て、広瀬古墳群においては特異な存在であり、構築年代は6世紀末から7世紀初頭の頃と考えられる。

⑪観音塚古墳（高崎市八幡町）

前方部が高く、西方を向く典型的な二子山型の前方後円墳で、主軸長90.05m、後円部径75.50m、前方部幅91.10m、高さ9.50mを測る。石室は自然石乱石積の両袖型石室で、内行花文鏡、画文帯神獣鏡、獣形鏡、五鈴鏡、銀装圭頭大刀、銀装大刀、銀鶏冠頭柄頭、刀子、鉄鏃、挂甲、金銅製杏葉、銅鏡、須恵器高坏、同台付臙、長頸壺、提瓶、鉄製工具など豊富な遺物に混って、鉄矛と石突が2個体検出されている。本古墳の年代は6世紀末、ないし7世紀初頭の頃と推測される。

⑫神流中学校校庭第四号墳（藤岡市下栗須）

神流塚合古墳群19基の中で、中型規模を持つ円墳である。現状で東西径10.1m、南北径14.5mを計測するが、当初は径16m程度の規模を持ち得たらしい。胴張型の横穴式石室で、直刀、刀子、鉄矛、石突、耳環、角釘が出土している。古墳終末期に急増した小群集墳中の一基で、7世紀中葉の構築と推定される。

⑬弦巻古墳（前橋市朝倉町）

弦巻古墳出土の鉄矛として、『増補 日本上代の武器』（末永雅雄著）に2個体が掲載されている。

この他、出土地が不分明であるが、県内出土とされるものがいくつか見られる。⁽⁶⁾

⑭高崎市岩鼻町出土品（岩鼻町 火薬製造所構内）

第三章 北山茶白山西古墳

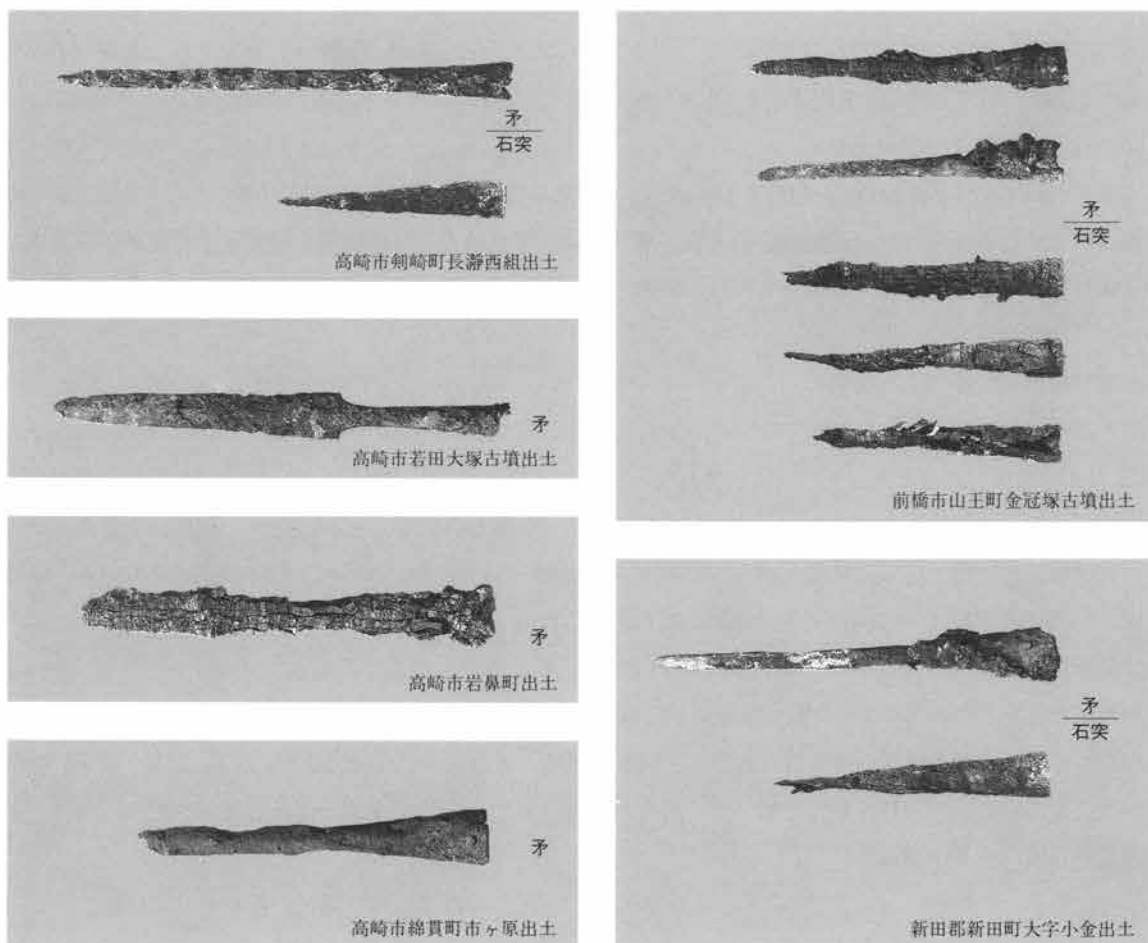
東京国立博物館に「群馬県より引き継ぎ」として、一括して収蔵されている。古墳自体の様相は定かではないが、長持形石棺、五神四獣鏡、鉄鏃、鉄斧、鉄剣、直刀、石製刀子に混って鉄矛が見られる。「上野国群馬郡岩鼻村火薬製造所構内俗称二子山、大なる瓢形古墳にして、刳拔式舟形石棺二個あり。棺辺多少の砂利ありし由なれど、石槨と称すべき構造なし。埴輪あり。刀身、劍身、槍身、斧、鏡及び鉄製鏃、伴出。大正三年発掘。」(高橋、1919)と記載される。古墳の可能性が大きい。

⑮高崎市綿貫町市ヶ原出土品 (西群馬郡綿貫村字市ヶ原小丘)

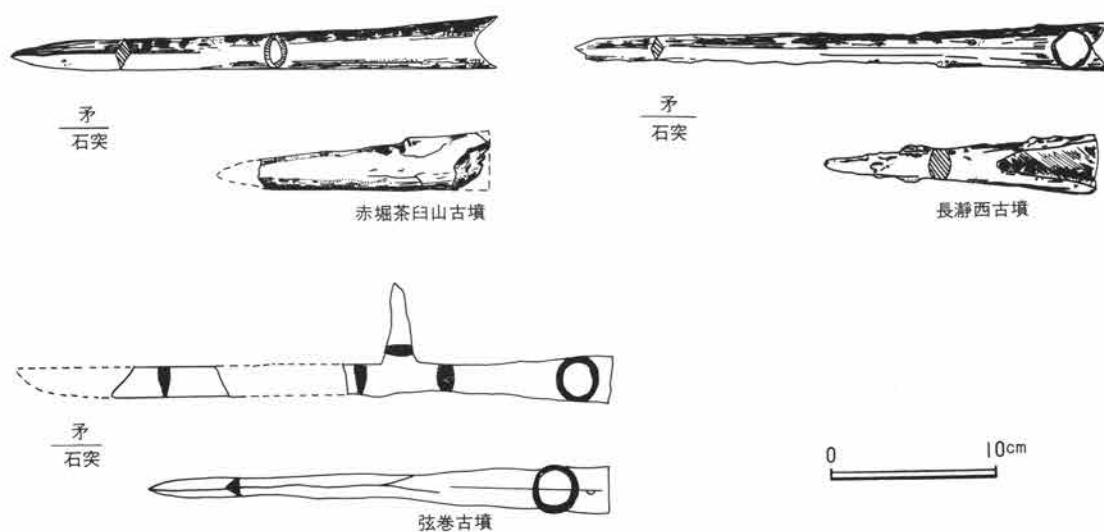
東京国立博物館に「群馬県より引継ぎ」として、一括して収蔵されている。銀環、刀子、直刀、刀装具、鏝、鉄鏃、轡に混って、鉄矛が見られる。

⑯新田郡新田町大字小金

須恵器細頸瓶、鉄斧、刀子、縁金具、鞆尻金具、銀箔、鉄鏃、轡、雲珠に混って鉄矛と石突が出土している。



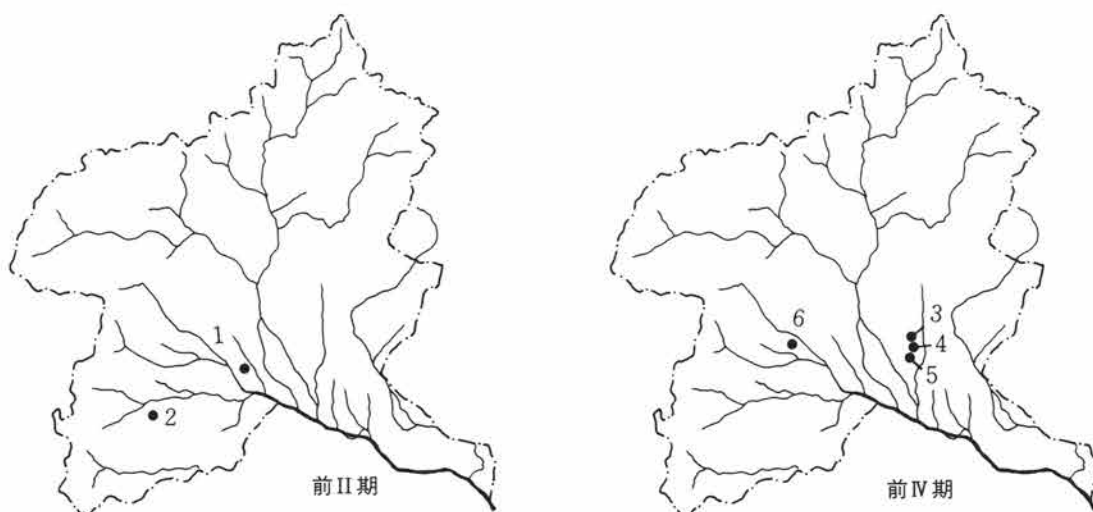
第145図 県内出土鉄矛(1)



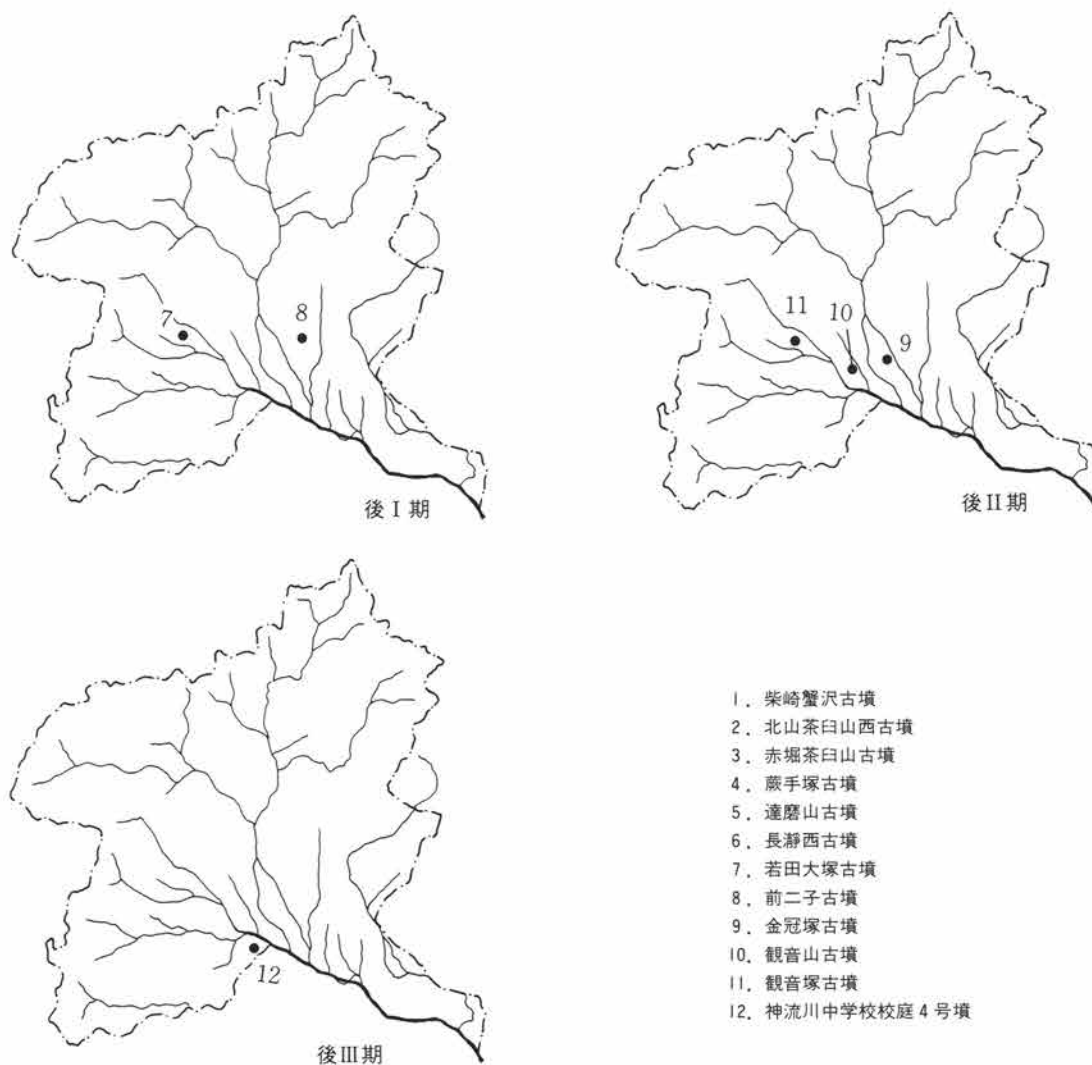
第146図 県内出土鉄矛(2)

(2) 鉄矛の出土状況

これら鉄矛の出土状況を地域別に見たとき、二つの地域に分布のまとまりを指摘することができそうである。一つは烏川の中流域であり、ここには前IV期から後II期まで連綿として鉄矛を出土する古墳が存在する。その間に古墳の被葬者は村落支配者の階級層から碓氷川流域、鑄川中流域に広がりをもつ有力豪族層に昇華していく過程を見て取ることができる。また一つは粕川の中流域であり、前IV期から後I期にかけて集中化が見られる。ここでは特に前IV期に赤堀茶臼山古墳、達磨山古墳、蕨手塚古墳と三古墳が存在し、小地域支配者層を中心に鉄矛を所持し得たことがわかる。そして、この伝統は前二子古墳という大規模地域を支配する上毛野君へ引き継がれていったことであろう。実際、赤堀茶臼山古墳、達磨山古墳、蕨手塚古墳からの鉄矛の出土は一例のみであるが、前二子古墳ではそれが二例になることは示唆的である。



第147図 県内鉄矛出土地(1)



第148図 県内鉄矛出土地(2)

(3) 鉄矛の分類

次に白杵氏の行なわれた分類基準を元に県内出土の鉄矛の類型化を試みることにする。

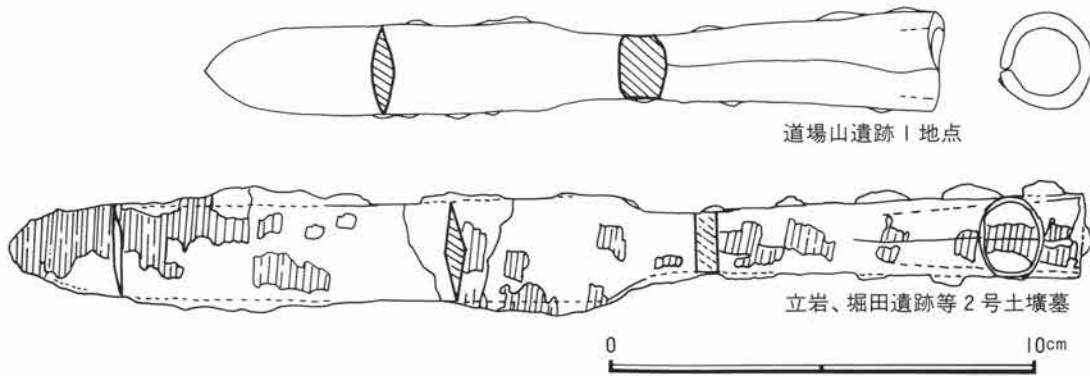
第32表 鉄矛の類型

番号	出土地	身部の分類				袋部の分類		石突の有無	備考
		断面形	鋒の広狭	関の有無	身の長短	断面形	端部の形態		
①	赤堀茶臼山古墳	菱形	狭鋒	有	普通形	円形	山形	有	石突は2個体出土
②	長瀬西古墳	菱形	狭鋒	無	普通形	八角形	山形	有	
③	若田大塚古墳	菱形	狭鋒	有	普通形	不明	山形	無	鉄槍も共伴
④	前二子古墳	不明	狭鋒	不明	普通形	不明	不明	無	2例出土はほぼ同じ形態
⑤	金冠塚古墳	菱形	狭鋒	有	普通形	不明	不明	有	矛、石突とも複数出土
⑥	観音塚古墳	三角形							石突は2個体出土

⑦	弦 卷 古 墳	正三角形	狭鋒	無(?)	普通形	円形	直截	無	
⑧	弦 卷 古 墳								枝刃を持つ特殊形態
⑨	高崎市岩鼻町出土	菱形	狭鋒	不明	普通形	不明	山形	無	
⑩	新田町小金出土	正三角形	狭鋒	不明	普通形	不明	不明	有	
⑪	高崎市綿貫町出土	不明	狭鋒	有	普通形	不明	直截	無	
⑫	北山茶臼山西古墳	偏平な杏仁形	狭鋒	有	普通形	円形	直截	無	

このように見てくると、前IV期から後I期にかけては、断面菱形の、所謂、縞を持つ身部を有し、袋部はV字状に抉られた、山形例が多いことが知られる。この他の時期については資料の制約下から明確なことは言えないが身部の断面形にのみ絞ってみた時、大きく菱形と正三角形（三角穂造り）に二分されること、袋部の断面形ではそれが円形と八角形に別れる傾向が看取される。

これらの類型化の元では、北山茶臼山西古墳出土の鉄矛は唯一の例である。身分が断面偏平な杏仁形（平造り）は県内では初見であり、白杵編年では4世紀後葉～5世紀代に位置づけられる。いずれにしても、北山茶臼山西古墳出土の鉄矛は北部九州で弥生時代中期以降から後期初頭にかけて多く出土する鉄矛の形態に酷似しており比較的古式の鉄矛の形態であるといえる。これは、鉄製武器の東漸に伴い東国に移入してきた段階における形態、換言すれば弥生期の鉄矛の形態を色濃く残した時期の製品ということが言えよう。



第149図 北九州出土鉄矛実測図

- 註 (1) 児島隆人 「下伊川甕棺遺跡」『嘉穂地方史』先史編、(嘉穂地方史編集委員会) 1973
 (2) 小田富士雄 「鉄器」『立岩遺跡』福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会編 (河出書房新社) 1977
 (3) 小林行雄 「歩兵装備から騎兵装備」『古墳の話』(岩波新書) 1959
 (4) 茂木雅博 「古墳出土の鉄銚について」『常陸観音寺山古墳群の研究』(茨城大学人文学部史学第5研究室) 1980
 (5) 白杵 勲 「古墳出土銚の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 (古墳文化研究会) 1985
 (6) この他、富岡市久保遺跡から多数の石製模造品とともに、鉄矛が出土している。
 (7) 掲載写真の鉄矛、石突は全て東京国立博物館の所蔵である。
 (8) 第146図-1 赤堀茶臼山西古墳出土鉄矛、石突、第146図-2 長瀬西古墳出土鉄矛、石突は『群馬県史』資料編3より、第146図-3 弦巻古墳出土鉄矛は「鉄銚」(水野清一、小林行雄編)『図解 考古学辞典』よりそれぞれ転載した。

3. 北山茶臼山西古墳と北山茶臼山西古墳

北山茶臼山西古墳は東西に長く伸びる低丘陵の（通称「離山丘陵」）西端に位置する。丘陵の南は旧野上川の流路であり、野上川によって形成された沖積低地が離山丘陵にほぼ平行して東西方向に展開する。また丘陵北側は通称「高瀬田圃」と称される沖積低地であり、鑄川の低位段丘面を形成する。ここは富岡で最も肥沃、且つ広大な沖積地であり、現在も水田が広範囲に展開する。離山丘陵の北側、南側、どちらをとるにしても、信濃から毛野に入ったとき最初に目にする平地であり、肥沃な土地といえることができる。

「高瀬田圃」は条理制遺構と推定される地区で、中高瀬地区から弥生時代の農具である石鍬が採集されていることから、すでに弥生時代には水田化が行われていたことを十分に推定することのできる場所である。また、田篠塚原遺跡からは折り返し口縁の壺や甕、鉢などが出土しており、弥生時代の終末期の様相を伝えている。すなわち、鑄川の上、中流域は弥生時代から人々が定住し、農耕生活を営んでいた伝統的地域とすることができる。

これらの社会的状況を背景として、北山茶臼山西古墳（以下、西古墳と称する）と北山茶臼山西古墳（以下、茶臼山西古墳と称する）の二古墳が造営されることになる。

(1) 立地

西古墳と茶臼山西古墳はいずれも単独丘陵的な様相を呈す小丘陵上に立地する。特に西古墳においては、北側からの、すなわち高瀬田圃側からの眺めにおいて屹立傾向が顕著であり、丘陵全体を一つの古墳と見なすことができる。また前方後方的なシルエットを期すならば、北東からの眺めがその好位置である。いずれにしても大局的には北側からの視線を意識していることが首肯される。すなわち、西古墳の被葬者は高瀬田圃を開発、経営した人々の統率者、首長層という位置づけが可能であろうと思われる。また茶臼山西古墳の立地と比較した時、西古墳の立地する丘陵の方が独立傾向が顕著であるという特徴をもつ。その意味では第一位的な占地といえることができる。

(2) 底部穿孔二重口縁壺型土器

西古墳からは既述してきたように、周溝を中心として高坏、小型丸底土器に混って、底部穿孔二重口縁壺型土器が出土している。また、西古墳の東約500mに位置する茶臼山西古墳からも、底部穿孔二重口縁壺型土器が採集されている。茶臼山西古墳からの採集遺物は今のところ、底部穿孔二重口縁壺型土器のみであることから、西古墳との時間的関係を考察する上で、底部穿孔二重口縁壺型土器を資料として取り上げておきたい。

西古墳から出土する底部穿孔二重口縁壺型土器は全て埴輪質の荒いハケメを持つ。頸部は胴部から外側に開き気味に立ち上がり、口縁部に移行する。口縁部は複合口縁としての形態にかなり退化傾向が窺え、外面において弱い稜を残すのみとなっている。また、内面もそれに呼応して、顕著な変換点を持たず、頸部と口縁部との境界を明瞭に止どめるものは皆無といってよい状況である。口唇部は内、外面共に横ナデが施され、丸く仕上げられている。胴部は外側に大きく開き、無花果状の胴部を持って、胴下半に最大径がくると推定されるものと、底部から比較的急角度で立ち上がり、球形、ないしは若干長胴化した胴部を持ち、胴中位に最大径を持つと推定される2形態がある。

茶臼山西古墳の底部穿孔二重口縁壺型土器は内、外面共にヘラ削りが施される。頸部は外反気味に開き、口縁部に移行する。頸部と口縁部の境界は内、外面共に強い稜を持って、顕著に残存する。口唇部は上方と下

方につまんで突出部をつくったもので、横ナデが施される。また、口縁部から胴部上半にかけては赤色塗彩が見られる。胴部は底部から比較的急角度で立ち上がって、球形、ないしは長胴化するものと、これよりも更に急角度で立ち上がり、長胴化現象がより顕著なものとの2種類が看取される。

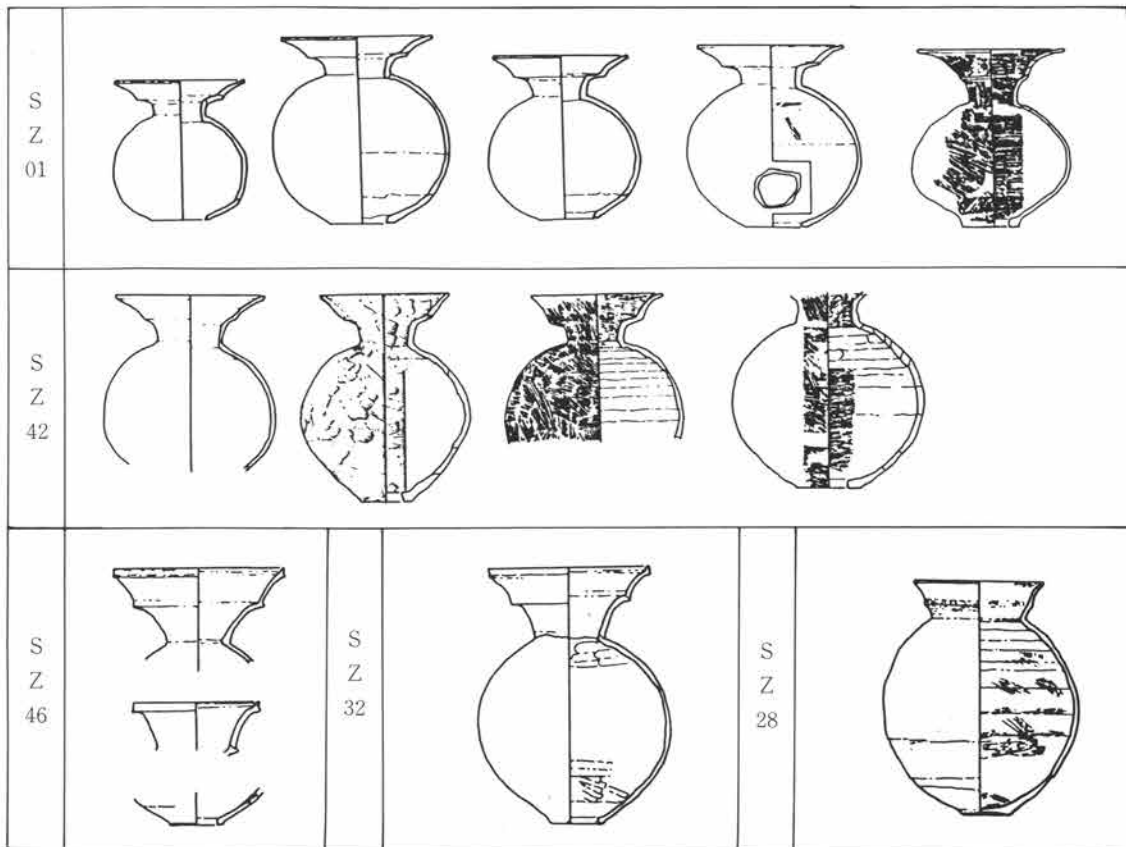
西古墳と茶臼山古墳の底部穿孔二重口縁壺型土器を比較してみると、器形や調整方法に明らかに差異が認められる。これは、西古墳と茶臼山古墳の立地関係から考えて、時間的差異に基づくものと考えられる。

ところで、底部穿孔二重口縁壺型土器の形態的推移については『下郷遺跡』⁽²⁾における考察がある。報告書の中で、巾 隆之氏は底部穿孔二重口縁壺型土器を共伴する土器の器種組成、ないしは土器の持つ形態上の相異点などから底部穿孔二重口縁壺型土器の形態的推移を5段階に分けて推察している（第150図参照）。

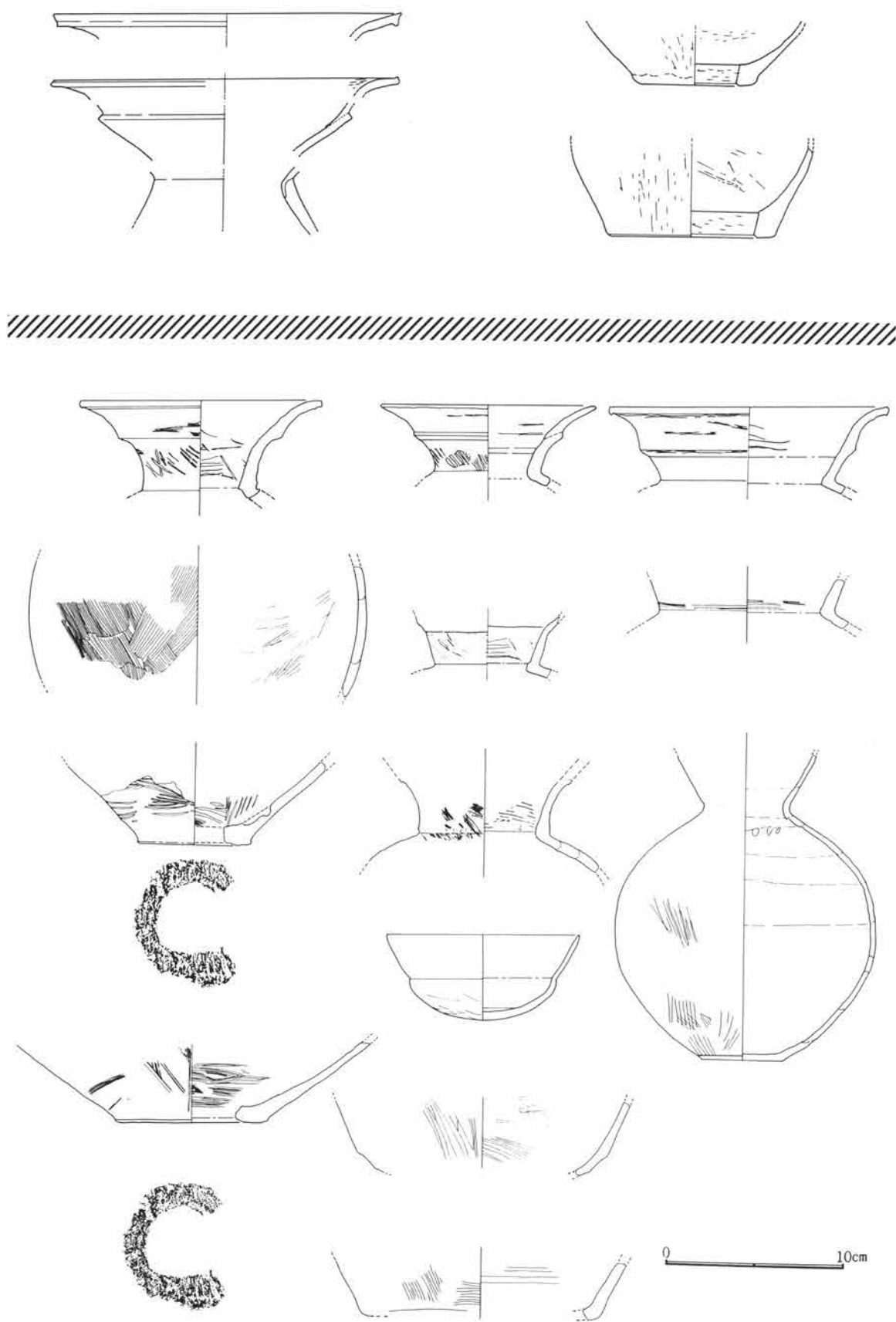
これに論拠すれば、茶臼山古墳の口縁部から口唇部の形態は概ね、S Z 46、S Z 32に相当し、西古墳のそれはS Z 46に相当するものである。胴部の形態は茶臼山古墳の方が長胴化が顕著であり、その点ではS Z 28に近いといえる。また、西古墳の胴部はS Z 28まで長胴化するものは見られず、S Z 46、S Z 32、ないしはS Z 42までさかのぼる可能性が看取される。

すなわち、底部穿孔二重口縁壺型土器の口縁部、胴部の比較により西古墳から茶臼山古墳への時間的推移を推定することができる。

尚、共伴遺物から見ると、西古墳が所謂、高坏、小型丸底土器などの供献土器を出土するのに対して、茶臼山古墳が底部穿孔二重口縁壺型土器、一器種であることは、茶臼山古墳の段階では未だ整っていなかった首長継承儀礼が西古墳の段階に至って確立したということが出来ようが、茶臼山古墳については正式な調査が行われていないので速断にすぎるきらいがあり、今後の資料の増加をまって共伴遺物については考察を加えていくべきであろう。



第150図 下郷遺跡出土壺型土器



第151図 北山茶臼山西古墳(上)、北山茶臼山西古墳(下)出土遺物

(3) 墳丘形態

北山茶臼山古墳の墳丘形態については円墳とする説が有力であるが、地形図を詳細に観察すると、北側に伸びる緩斜面が存在することが確認されることから、前方後円墳の可能性も考えられる。大和を中心に分布する前方後円墳が舶載鏡と碧玉製の石製品を中心に発展しているという小林行雄⁽³⁾氏の説に従えば、北山茶臼山古墳が円墳の他に、前方後円墳の可能性があり、三角縁神人車馬画像鏡（舶載鏡）と石釧（碧玉製石製品）を副葬品として有することから、正しく畿内型の前方後円墳の性格を具備したものと言える。これに対して、西古墳の有する前方後方形の墳丘については既に茂木雅博⁽⁴⁾氏の考察がある。氏は前方後方墳の占地、構築法、埋葬施設等の観察から、同形墳が全国各地の最古形式の墳墓であることを論証されている。それは、群馬県においても例外ではなく、前橋台地における八幡山古墳から前橋天神山古墳、井野川流域（高崎）における元島名将軍塚古墳から下郷天神塚古墳、蛇川流域における寺山古墳から太田八幡山古墳、矢場川流域における藤本観音山古墳から矢場薬師塚古墳という変遷をたどることができる。

すなわち、墳丘形態から見た時、鎭川上・下流域における前方後方形の西古墳から円形ないしは前方後円形の茶臼山古墳へという変遷の図式が描けるであろう。

この他、内部主体部の様相の違いがあるが、茶臼山古墳が粘土槨を持つと推定されるのに対して、西古墳が木棺直葬であることは、西古墳のより初現的な様相を伝えるものと考えられる。

以上の如く、占地、底部穿孔二重口縁壺型土器、墳丘形態、内部主体部の各比較から、西古墳の茶臼山古墳に先行する可能性を把握できた。すなわち、鎭川の上・下流域を支配し得た首長者層は西古墳の段階においては、前方後方墳という在地的色彩の濃い古墳を構築して、未だ畿内との強い連合関係を持たなかったが、茶臼山古墳を構築する段階に至って、畿内との連合関係を持ち、結果として円形、ないしは前方後円形の墳丘と三角縁神人車馬画像鏡を持ち得たものと推定することができよう。茶臼山古墳から出土している三角縁神人車馬画像鏡は大和政権から与えられた、連合関係を象徴的に表すシンボルであったと考えられるが、質感といい、量感といい、鏡式は異なるものの、西古墳出土の方格規矩鏡、変形四獣鏡をはるかに圧倒するものである。まさに、鎭川の上・中流域の第一級の古墳を飾るにふさわしい優品である。茶臼山古墳の被葬者は大和政権との連合関係を強化する過程で、三角縁神人車馬画像鏡を付与されたと推定することが出来る。

西古墳の時期は西古墳から出土している小型丸底土器、壺型土器の形態的特徴から、石田川Ⅱ式期に相当するものと考えられ、実年代を4世紀後半と推定しておきたい。また、西古墳に引き続き造営されたと考えられる茶臼山古墳の被葬者は西古墳の次期首長層と考えることができよう。

註(1) 群馬県立歴史博物館所蔵。実測図は歴史博物館作図のものを転載させて頂いた。

(2) 巾 隆之『下郷遺跡』（群馬県教育委員会）1980

(3) 小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『古墳時代の研究』1961

(4) 茂木雅博「出現期古墳の性格」『出現期古墳墳丘構築論』『墳兵よりみた出現期古墳の研究』（雄山閣）1987

付載 1

北山茶臼山西古墳出土 ガラス小玉の分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 田口 正美

Ⅰ 試料

主体部埋土の篩作業を行った結果、数片の土器片に混ってガラス小玉が2個体検出された。

試料No.1 は径0.35~0.37mm、厚さ0.19mm、重量3.2mgを測り、淡い空色を呈す。

試料No.2 は径0.34~0.36mm、厚さ0.34mm、重量5.7mgを測り、淡い空色を呈す。試料1に比べて、若干青味が濃い。

Ⅱ 分析目的

非破壊を目的として、①ガラス成分中に鉛が含まれるか、否か、②含まれるとすれば、どの程度の含有量か、以上2点を目的として分析を行った。

その際、標準ガラスの試料測定結果を、試料No.1、試料No.2の判断の基準とした。

Ⅲ 分析方法

蛍光X線分析により非破壊で行った。主な条件は次のとおりである。

装置：理学電機(株)製KG-4型

管球：銀対陰極

電圧、電流：50KV、20mA

測定は走査速度4/minで行い、分光結晶はLiF、EDDTを用い蛍光X線スペクトルを得た。

Ⅳ 分析結果

蛍光X線スペクトルからSiK α 、PbL β のカウント数を読みとった。これを表33に示す。

第33表 蛍光X線スペクトルの強度

	SiK α (cps)	PbL β (cps)	PbL β /SiK α
No.1 (薄いブルーのガラス玉)	278	348	1.25
No.2 (濃いブルーのガラス玉)	235	87	0.37
標準ガラス (PbO33%)	322	8700	27.0

Ⅴ 考察

クリスタルガラス(鉛ガラス)の主成分であるSiK α 、PbL β の蛍光X線強度を測定し、PbL β /SiK α を求めて検討した。No.1、No.2は標準ガラス(PbO:33%)よりはるかに鉛含有量の少ないことがわかった。またNo.1、No.2では、No.1の方がNo.2よりPbO含有量は多い。

参考

鉛ガラスは窯業辞典(窯業協会編、丸善(株)、昭和29年4月)によれば次のように説明されている。

Lead glass

Bleiglas

鉛ガラス 酸化鉛を構成成分の中に含有するガラス。分子量の大きな成分が入るために、一般に比重および屈折率が大きくなり溶解温度の低いことが共通の性質。また酸化鉛はそれ自身だけではガラス化しないが、ガラス成分としてきわめて多量に入り得ることも著しい特徴である。鉛ガラスの例をあげると次のようなものがある。二成分系としてPbO-SiO₂、PbO-B₂O₃、PbO-P₂O₅、三成分系としてR₂O-PbO-SiO₂、(または-B₂O₃-P₂O₅)およびアルカリと上記二成分からなるもの。四成分系以上としてはR₂O-RO-PbO-SiO₂、R₂O-R₂O₃-PbO-SiO₂等。ROはZnO、CaO、BaO等、R₂O₃はAl₂O₃、La₂O₃、Ce₂O₃、Nd₂O₃等。鉛ガラスは低溶融ガラスとして上絵付用に、高屈折率の光学ガラスに、その他管球のステムに、工芸用としてクリスタル・ガラスに、または模造宝石に等々、きわめて用途が広い。(境野)

付載2

北山茶臼山西古墳出土 方格規矩鏡の成分分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一

大山 義一

小沢 達樹

勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 田口 正美

I 試料

主体部肩より、方格規矩鏡が数片に割れた状態で検出された。鏡面は多少錆化が見られるものの、比較的良好に現状の様相を残しており、鏡背には赤色顔料の付着が特に内区全面に涉って散見された。

赤色顔料の呈色は鮮かであり、土壌の鉄成分に基く発色とは考えられない。

尚、試料として選択した鏡は破片の内、鏡背に最も顕著に赤色顔料が残るものである。

II 分析目的

非破壊で、①方格規矩鏡の主成分の分析、②赤色顔料の成分分析を目的とし、分析を行った。

III 分析方法と測定条件

試料を非破壊で分析するため、蛍光X線分析によった。条件は以下のとおりである。

蛍光X線分析装置は理学電機(株)製KG-4型を用いX線管球はAg対陰極、電圧、電流は50kV、20mAで走査速度4°/minで定性分析した。

IV 分析結果

結果は表に示したとおりである。

第34表 鏡の分析結果

	赤色顔料の付着した部分(鏡背)	鏡 面
主 成 分	銅、錫、鉄	銅、錫
少 量 成 分	ヒ素	ヒ素

表より、鏡の赤色原因物質は鉄化合物と考えられる。

なお、水銀は検出されなかった。

V 考 察

以上の結果より、①方格規矩鏡の主成分は銅と錫であり、②赤色顔料は鉄化合物、すなわちベンガラ(Fe₂O₃)と判断される。

付載3

北山茶臼山西古墳出土 木質片の樹種同定

金沢大学教養部助教授 鈴木三男

勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 田口正美

北山茶臼山西古墳で発見された方格規矩鏡の下にあった木質遺物の1点の樹種同定を試みた。試料は朱で彩色された薄板状の小片で完全に乾燥収縮している。剃刀刃を用いて横断、放射、接線の3方向の切片の作成を試みたが、いずれも満足のいく切片は得られなかった。不十分な切片の光学顕微鏡による観察の結果、下記のような構造が認められ、ニレ科のニレ属の材である可能性が示唆された。同定に用いた切片のプレパラートは金沢大学教養部生物学教室に保管されている。

標本番号：北山茶臼山西古墳-1

横断面一年輪の始めに大管孔が数層になる環孔材で、晩材部には小管孔が多数集まって塊状となったものが密に分布している（写真1、2）。柔組織や繊維細胞の形態、分布はよく観察されない。

接線断面—乾燥収縮のため放射組織はよく観察されないが、どうやら比較的幅広の同性放射組織のように見える部分がある。（写真3、4）。

放射断面—放射組織は平伏細胞のみからなる同性放射組織のように見える（写真5）。道管の穿孔は単一で、小道管には明瞭な螺旋肥厚が見える（写真6）。

小道管に螺旋肥厚を持った環孔材は、ニレ科のニレ属、エノキ属、ケヤキ属など、クワ科のクワ属など、そしてムクロジなど広葉樹に多く認められる。しかし、小管孔の配列はニレ科の諸属によく似た形態を示し、しかも放射組織は同性ではないかと考えられることから、ニレ属の材である可能性が考えられる。しかし、ニレ科に特徴的な鎖状につながった柔組織の結晶細胞群は観察されておらず、断言できない。

顕微鏡写真の説明

- 1：横断面（×40）矢印が年輪界、その下部が晩材部の小管孔の集合したもの、上部が左右方向に著しくつぶれた数層の大管孔。
- 2：横断面の拡大図（×100）小管孔の複合した塊が見える。
- 3：接線断面（×100）左右方向につぶれた放射組織と道管。
- 4：接線断面の拡大図（×200）放射組織が同性であるように見える。
- 5：放射断面（×200）大道管の側壁に接した放射組織の一部、平伏細胞からなっているものが見える。
- 6：放射断面（×400）右の小道管に螺旋肥厚があり、左の小道管の穿孔が単一であるのが見える。

埋葬具、すなわち木棺資材として使用される樹種は針葉樹が多く、そのうちでもコウヤマキ、ヒノキの占める割合が最も高い。コウヤマキの出土は近畿地方に偏在しており、近畿を中心として普及利用された樹種といえる。近畿以外ではヒノキ、マツ、ケヤキ、クスノキなど種々雑多な木材が使用されており、特に限定はできないようである。

今回、北山茶臼山西古墳から出土した木質片は方格規矩鏡の鏡面に付着した形でかろうじて残存していたものであり、片面には赤色顔料とともに直弧文状の刻文が確認された。これを棺材とすれば、木棺の表面には直弧文状の装飾がなされており、方格規矩鏡は棺外遺物ということになるし、また鏡函とすれば鏡函の内面に装飾がなされていたことになる。鏡函の内面に装飾が施されることは可能性の問題として、かなり無理があるものと考えられる。

鑑定の結果、木質片はニレ科ニレ属の材であることが確認されたが、コウヤマキではないことをもって棺材の可能性を否定することはできないし、かといって棺材としての使用を積極的に支持するものでもない。しかし、ここでは出土状況と近畿以外では種々雑多な樹種が棺材として使用されることが多かったとする事例⁽¹⁾をもつて、北山茶臼山西古墳出土の木質片を棺材の残片として把握しておきたい。

註(1)『日本の遺跡出土木製品総覧』(雄山閣出版) 1988



1 横断面(×40)



2 横断面(×100)



3 接線断面(×100)



5 接線断面(×200)



6 放射断面(×200)



7 放射断面(×400)

第152図 木質片顕微鏡写真

付載4

方格規矩鏡系古鏡出土地一覽

九州地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径(cm)	伴出遺物
1	福岡県糸島郡二丈町一貫山 鏡子塚古墳	前方後円墳	竪穴式石室	船	鍍金方格規矩四神鏡 他に連弧文鏡(船)1面、三角縁神獸鏡(仿)8面、内行花文鏡1面	21.7	勾玉2、管玉33、鉄剣6、素環頭大刀3、鉄刀3、短刀1、鉄鏃14、土師器片、鉄鏃14
2	福岡県糸島郡前原町井原竈溝	弥生後期初頭 (推定)	竈 棺		流雲文方格規矩四神鏡 波文方格規矩四神鏡 忍冬様華文方格規矩四神鏡 獸帯(方格)規矩四神鏡 波文(方格)規矩四神鏡 草葉文方格規矩鏡 草葉文方格規矩四神鏡 菱形文(方格)規矩四神鏡 流雲文(方格)規矩四神鏡 草葉文方格四神鏡 華様文規矩鏡 波文方格四神鏡 他に流雲文鏡(船)1面、四神鏡() 2面、波文鏡()1面、華文鏡() 1面	14.1 14.1 14.1 14.1 14.0 13.8 13.8 13.8 13.8 13.2 13.2 12.8	巴形銅器3、刀剣類
3	福岡県糸島郡前原町 大字有田字平塚	方形周溝墓		船	方格規矩四神鏡31面 他に内行花文鏡(船)1面、同(仿) 5面、四蛇鏡(船)1面	11.0~ 23.0	素環頭大刀1、鉄刀子1、ガラス勾玉、ガラス管玉 30、ガラス連玉多数、ガラス小玉600、メノウ管玉12、 メノウ小玉1、コハク丸玉1000、管玉1
4	福岡県福岡市西区周船寺			仿	方格規矩鏡		
5	福岡県福岡市西区長垂山		箱式石棺	船	方格渦文鏡	12.5	
6	福岡県福岡市西区西新町 藤崎地下		箱式石棺	船	方格渦文鏡	9.4	
7	福岡県福岡市南区老司 老司古墳	前方後円墳	竪穴式石棺 1号 横穴式石室 3号	仿 船 船 船	方格規矩鏡 他に重圈文鏡1面、内行花文鏡() 2面、三角縁神獸鏡()1面 方格規矩鏡 方格規矩四神鏡 方格規矩鏡	11.5 14.8 12.5 9.3	鋤先、鎌2、鉄斧3、鍬5、刀子14、蕨手刀子12、 砥石1、刀1、剣4、鉄鏃、硬玉製勾玉2、小形扁 平滑石製勾玉24個以上、碧玉製管玉48、小玉多数、 櫛1、土師器器台1 鋤先4、鎌3、鉄斧11、鍬6、鑿4、鋸1、刀子10、 蕨手刀子5、鹿角柄3、砥石1、刀8、剣7、矛3、 短甲1、鉄鏃多数、硬玉製勾玉7、ガラス製管玉1、 硬玉製環玉1、小玉1、金環2、櫛1、土師器片1、 鎖状鉄製品4、土師器器1
8	福岡県福岡市東区蒲田水ヶ元	弥生後期	住居跡柱穴	船	方格規矩鏡	10.5	
9	福岡県福岡市須玖岡本町B地点		竈 棺	船	方格規矩鏡 他に日光鏡(船)1面	13.9	
10	福岡県福岡市須玖岡本町D地点 支石礎墓	弥生中期	竈 棺	船	方格四乳草葉文鏡 他に重圈四乳葉文鏡(船)2面、精 白鏡(船)10面、日光鏡(船)1面		
11	福岡県太宰府町太宰府 蒲古墳		割竹形木棺	船	方格規矩鏡	14.4	直刀、剣1、針1、刀子3、鍬、勾玉1、U字形鋤 先1、櫛、滑石製白玉、鉄斧形鉄器1
12	福岡県筑紫郡太宰府町			船	方格四乳葉文鏡	13.9	
13	福岡県宗像郡福岡町宮地嶽近郊			船	方格規矩渦文鏡 他に菱鳳鏡(船)1面		
14	(伝)福岡県宗像郡福岡町			船	方格規矩鏡	21.8	
15	福岡県宗像郡津屋崎町渡			船	方格規矩鏡	9.2	
16	(伝)福岡県津屋崎町桂			船	菱歯文方格規矩四神鏡	18.1	
17	(伝)福岡県宗像郡大島村 沖ノ島4号(岩陰)遺跡			船	獸帯文方格規矩四神鏡 他に獸形鏡(仿)1面、乳文鏡(仿) 2面、四獸鏡(仿)1面	18.0	土師器、滑石製品、鉄利器、三輪玉、馬具、銅器、 鉄製雑器
18	福岡県宗像郡大島村沖ノ島 沖ノ島8号(岩陰)遺跡			仿	方格規矩鏡 他に菱形文鏡(仿)1面	14.1	鉄利器、馬具、玉類、その他多数

付載 4 方格規矩境系古墳出土地一覧

19	福岡県宗像郡大島村沖ノ島 沖ノ島16号(岩陰)遺跡			仿	変形方格鏡 他に連弧文鏡(仿)1面	9.1	鉄剣7、鉄鎧2、鉄刀3、鉄矛2、鉄鏃21、鉄斧5、 藏手刀子14、勾玉19、菅玉164、璽玉12、ガラス小玉 246、白玉2、銅剣2、滑石玉類232、鉄鋼6、石剣 7その他
20	福岡県宗像郡大島村沖ノ島 沖ノ島17号遺跡			仿 仿 仿 仿 仿 仿 仿	変形鳥文縁方格規矩鏡 変形半円方形帯方格規矩鏡 擬銘帯方格規矩鏡 変形方格規矩渦文鏡 変形雲文縁方格規矩鏡 変形珠文帯方格規矩鏡 変形素文帯方格規矩鏡 他に連弧文鏡(仿)3面、だ龍鏡 (仿)2面、変形文鏡(仿)1面、獸 帯鏡(仿)2面、画像鏡(仿)2面、 三獸鏡(仿)1面、神獸鏡(仿)1面、 夔鳳鏡(仿)1面	27.1 26.2 22.1 21.5 17.8 16.6 18.0	刀、剣、藏手刀子、勾玉、璽玉、小玉、石剣、車輪石
21	福岡県宗像郡大島村沖ノ島 18号遺跡(第三次)			舶 仿	方格規矩四神鏡 方格規矩渦文鏡 他に夔鳳鏡(舶)1面、三獸鏡(仿) 1面、神獸鏡(仿)1面	20.0 24.8	
22	福岡県飯塚市付近			仿	鋸歯文縁方格鏡	14.85	
23	福岡県嘉穂郡碓井町飯田 五穀神社		土 塚 墓	舶	唐草文帯方格四神鏡	14.0	
24	福岡県嘉穂郡稲架町口の春	円 墳	横穴式石室	仿	波文帯方格規矩鏡	11.6	刀剣、矛、刀子、玉類、短甲
25	福岡県嘉穂郡若宮町汐井掛	古 墳 群	箱式石棺 (4号)棺外	舶	方格規矩鏡 他に夔鳳鏡(舶)1面、連弧文鏡 (舶)1面	8.0~ 9.0	
26	福岡県遠賀町高屋、城ノ越		箱式石棺	仿	方格渦文鏡	9.0	
27	福岡県八幡西区馬場山		箱式石棺	舶	方格規矩鏡 他に連弧文鏡(仿)1面	10.0	
28	福岡県浮羽郡田主丸町大井	弥生後期 古墳前~中		舶	方格規矩鏡 方格規矩鏡 他に内行花文鏡()1面	10.1 10.0	
29	福岡県浮波郡岡山亀の甲95号		箱式石棺	舶	方格規矩鏡	14.1	
30	(伝)福岡県			舶	流雲文方格規矩四神鏡	16.1	
31	福岡県鞍手郡若宮町大字 汐井掛遺跡		箱式石棺		方格獸文鏡 他に内行花文鏡2面、飛禽文鏡片、 他に2面	8.9	鉄刀、剣、素環頭鉄刀、鉄鏃、鉄農具類、馬具等 鉄製品50点、玉類
32	長崎県上県郡上対馬町 塔ノ首4号石棺		箱式石棺	舶	方格規矩鏡	9.8	鉄斧1、ガラス玉
33	長崎県志岐郡勝本町立石 カラカミ	貝 塚	包含層 (貝 層)	舶	方格規矩鏡片 他に連弧文鏡(仿)2面		
34	長崎県志岐郡石田町	弥生遺跡	壘 棺	舶	方格規矩鏡	10.0	ガラス玉、有鈎銅劍
35	長崎県南高来郡国見町 多比良下高下 高下古墳			仿	方格規矩鏡	8.6	小玉
36	佐賀県唐津市桜馬場四丁目 桜馬場遺跡	弥生遺跡	合口 壘 棺	舶 舶	流雲文縁方格規矩四神鏡 素文縁方格規矩渦文鏡	23.2 15.4	銅劍26、巴形銅器3、鉄刀片1、ガラス小玉1
37	佐賀県唐津市鏡今屋敷 島田塚(四方塚)古墳	前方後円墳	横穴式石室 舟形石棺	舶	方格規矩四神鏡 他に六獸鏡(仿)1面	16.4	勾玉3、銅劍1、鉄刀、菅玉22、銅劍4、切小玉、 ガラス小玉12、須恵器、金環1
38	佐賀県唐津市鏡柏崎			仿 仿	方格規矩鏡 方格規矩鏡		
39	佐賀県唐津市半田矢作 半田神社古墳			仿	方格鏡		
40	佐賀県浜玉町横田下 横田下古墳	円 墳	横穴式石室	舶	方格規矩鏡 他に換文鏡(仿)1面、変形四獸鏡 (仿)1面	10.4	鉄刀3、勾玉、小玉、筒形銅器、土師器24

第III章 北山茶白山西古墳

41	佐賀県北波多村田中 親玉塚古墳	円墳	横穴式石室	船	流雲文縁方格規矩鏡		鉄剣、鏃、須恵器
42	佐賀県久保泉町川久保 関行丸古墳	前方後円墳	横穴式石室	仿	方格規矩鏡 他に珠文鏡(仿)2面、変形文鏡(仿)1面	10.1	貝銅、金銅製冠帽、玉類、刀子、三環鈴、鉄鏃、留金具
43	佐賀県佐賀郡大和町川上池の上 十三塚		箱式石棺 (2体埋葬)	仿船	方格珠文鏡 方格規矩四神鏡(鳥文鏡) 他に夔鳳鏡(船)1面	15.5	鏡片、碧玉製管玉
44	佐賀県神埼郡東脊振村在川 松葉丘陵遺跡		箱式石棺	船	尚方作方格規矩鏡	15.0~ 15.4	ガラス小玉数個
45	佐賀県神埼郡東脊振村横田 横田遺跡		弥生要塚	船	方格規矩四神鏡	17.4	素環頭刀、鉄剣
46	佐賀県神埼郡神埼町城原北外		箱式石棺	船	方格規矩鏡 他に連弧文鏡(仿)1面	11.0	
47	佐賀県神埼郡神埼町志波屋 寺ヶ里		竈 箱式石棺	船	方格規矩鏡(方格四孔鏡)	8.5	
48	佐賀県鳥栖市鏡町薄尾 薄尾古墳群		竪穴式石室	仿	方格規矩鏡	10.3	
49	佐賀県三養基郡上峰村 五本谷遺跡		土壇墓外	船	方格規矩鏡 他に連弧文鏡(仿)2面	11.8	
50	佐賀県杵島郡北方町 梳島山遺跡		箱式石棺	船	方格規矩鳥文鏡(四神) 他に内行花文昭明鏡()1面	13.0~ 13.2	勾玉3、管玉36、素環頭刀子1
51	佐賀県東松浦郡浜玉町 横田下古墳	円墳	横穴式石室		方格規矩鏡 他に変形四獣鏡()1面、だ籠鏡()1面	10.4	筒形銅器、直刀、鏃、短甲、斧、土師器
52	(伝)佐賀県			船	流雲文縁方格規矩鏡	13.2	
53	熊本県玉名市繁根木宮中 (玉名図書館敷地)	古墳	箱式石棺		方格規矩鏡	10.2	
54	熊本県山鹿市方保田 大道小学校西南の畑	古墳		船	方格規矩四神鏡	17.0	
55	熊本県菊池郡酒水町豊水 若宮古墳	円墳	家形組合 石棺	仿	方格規矩鏡	8.3	剣、鏃、帯金具、くつわ
56	熊本県熊本市健軍町陣内		箱式石棺	仿	方格規矩鏡		
57	熊本県熊本市松尾町千金甲	円墳	舟形石棺	船	方形規矩鏡	9.0	鏃、刀子
58	熊本県上益城郡御船町秋只 秋只古墳	円墳	横穴式石室	仿	方格規矩鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面	15.4	
59	熊本県宇土市松山町 向野田古墳	前方後円墳	竪穴式石室 (舟形石棺)	船	方格規矩鏡 他に連弧文鏡(船)1面、鳥獸鏡(仿)1面、内行花文鏡()1面	18.6	車輪石、勾玉、管玉72、小玉、貝輪(棺外)、長剣1、短剣3、刀4、刀子78、斧3
60	熊本県熊本市小島町下松尾 高城山3号墳	円墳	舟形石棺	船?	方格規矩鏡	9.0	刀子
61	熊本県上益城郡矢部町 下名連石 桔木原			船	方格規矩鏡		
62	熊本県玉名市繁根木字馬場 繁根木古墳	古墳	箱式石棺		方格規矩鏡	10.35	
63	大分県大分市良興 尼ヶ城	弥生末期	住居跡	船	方格規矩鏡	13.0~ 16.8	
64	大分県大分市玉沢雄城台	弥生後期	7次1号 住居跡	船	方格規矩鏡	8.9	
65	大分県大分市坂ノ市町 上ノ坊古墳	前方後円墳		船	方格規矩鏡	11.5	勾玉、管玉、刀子21、刀、剣
66	大分県日田市草場	弥生	箱式石棺	船	方格規矩鏡	12.0	

付載 4 方格規矩境系古墳出土地一覽

67	大分県宇佐郡安心院町			船	方格規矩鏡	8.7	
68	大分県杵築市八坂本庄 重光古墳	円墳	箱式石棺	船	方格規矩鏡 他に倭文鏡(仿)1面	10.6	
69	大分県大野郡大野町 中原松ノ木	弥生中期 後半～後期	住居跡	船	方格規矩鏡	11.6	
70	大分県竹田市菅生小園 A区4号住居跡	弥生後期	住居跡	船	方格規矩鏡 他に連弧文鏡(仿)1面		
71	宮崎県西都市三宅西都原 西都原35号(旧3号) 西都原72号(旧21号) (飯盛塚古墳)169号	前方後円墳 円墳	粘土槨	仿 仿 船	変形方格規矩四神鏡 変形方格規矩四神鏡 方格規矩鏡	破片 15.1 7.0	刀1、小剣1、勾玉2、管玉21 刀、剣 刀2、刀子2、斧頭2、鉄片、銅削1、貝削2、鉄鏃
72	宮崎県西都市西都原古墳群			船	方格規矩鏡 他に連弧文鏡()1面		大刀1、刀1、剣1、金環2、銀環1、切子玉、小玉12、銀製金具1、鏃1、須恵器1、馬具
73	宮崎県西都市妻町祇園原			仿	方格規矩鏡 他に神獸鏡(仿)1面		
74	宮崎県宮崎市下北方町 陣ヶ原横穴		横穴	仿	方格規矩四神鏡	14.5	刀3
75	宮崎県宮崎市古城字曾井	前方後円墳		仿	変形方格規矩鏡		刀、玉類、貨泉
76	宮崎県宮崎市諸塚村 家代神社			仿	方格規矩鏡	8.8	
77	宮崎県児湯郡高鍋町持田 (伝)持田古墳群			船	方格規矩八乳鏡 他に変形五獸鏡(仿)2面、四獸鏡(仿)2面、六獸鏡(仿)1面、刀鏃鏡()1面、神獸鏡()1面		
78	鹿児島県東串良町唐仁町 大塚神社				方格規矩四神鏡		

中国・四国地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径(cm)	伴出遺物
1	(伝)岡山県総社市			船	方格規矩文鏡	11.3	
2	(伝)岡山県吉備郡高松町 (旧真備町) 東山古墳			船	方格規矩鏡	11.5	
3	岡山県岡山市沢田 金藏山古墳	前方後円墳 165m	竪穴式石室		方格八乳鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面	9.2	鉄形石、石削、筒形銅器、鉄器
4	岡山県岡山市山陽町 用木古墳群第2号墳	円墳	土壌葺1主体 (土壌・木棺)	船	方格規矩鏡 他に内行花文鏡()1面	4.7	
5	岡山県岡山市山陽町 吉原第6号墳			船	方格規矩鏡 他に鳥獸鏡(船)1面	13.5	勾玉、管玉、小玉
6	岡山県備前市鶴山 鶴山丸山古墳			仿 仿 仿 仿 仿 仿 仿	変形半円方形帯方格規矩四神鏡 変形方格規矩八獸鏡 変形方格規矩獸形鏡 変形方格規矩渦文鏡 変形方格規矩渦文鏡 変形方格双禽文鏡 変形方格規矩獸形鏡 変形方格規矩渦文鏡 他に変形禽獸文鏡(仿)1面、三角縁神獸鏡(仿)3面、半円方形帯盤籠鏡(仿)2面、変形四禽鏡(仿)2面、環状乳四神四獸鏡(仿)1面、画文帯神獸鏡(仿)2面、変形三神三獸鏡(仿)1面、変形五獸鏡(仿)1面、変形大獸鏡(仿)1面、形式不明(仿)2面、三角縁神獸鏡(船)1面、変形神獸鏡1面	19.7 16.9 12.7 13.0 16.7 16.5 13.0	車輪石、石製品、刀、剣、鏃、斧

第III章 北山茶臼山西古墳

7	岡山県津山市河辺 天神橋4号墳			仿	方形規矩文鏡	9.0	
8	島根県荒島町 造山第1号墳	方墳	竪穴式石室 (第1石室) (第2石室)	船舶	方格規矩鏡 方格規矩四神鏡 他に三角縁神獸帶鏡(船)1面	17.4 19.0	ガラス管玉、刀身残欠、刀、劍、管玉、紡錘車
9	鳥取県東伯郡羽合町上橋津 小塚916馬山第4号墳	前方後円墳 110m	竪石室 箱式棺	船舶	方格規矩四神鏡 他に二獸鏡(船)1面、同(仿)1面、 神獸鏡(仿)1面、花文鏡(仿)2面、 獸形鏡(仿)1面	15.2	車輪石3、石釧9、勾玉1、管玉17
10	鳥取県西伯郡大山町所子 末吉海岸		箱式棺	仿	方格式鏡		勾玉、管玉、平玉
11	愛媛県東宇和郡宇和町岩木 安養寺裏山古墳			仿	方格規矩鳳文鏡	16.2	直刀1
12	愛媛県松山市平井谷	表面採集		船舶	方格規矩鏡	10	
13	愛媛県松山市道後 伊佐爾波神社裏古墳			仿	方格規矩鏡	8.3	
14	愛媛県松山市御幸山 御幸山古墳	滅?		船舶	流雲文縁方格規矩四神鏡	13.6	
15	香川県高松市 姫塚古墳(石塚)	円墳 43m		船舶	方格規矩四神鏡	18.3	刀、劍、土器
16	香川県高松市西春町 鶴尾神社4号墳	前方後円墳	竪穴式石室		方格規矩四神鏡	18.2	土器片
17	香川県観音寺市(旧常盤村) 鏡子塚古墳			船舶	方格規矩鏡	13.0 (破片)	
18	香川県綾歌郡綾歌町栗熊 快夫山古墳	前方後円墳	割竹形石室 (第1号石室)	船舶	獸帯方格規矩文鏡 他に内行花文鏡(仿)2面	18.6	刀劍、刀子、鏡、石釧、玉類、斧、鏃、管玉
19	香川県大川郡津田町 赤山古墳	前方後円墳 50m	舟形石棺		方格規矩禽獸渦文鏡		勾玉、管玉、小玉
20	香川県大川郡大川町富田西 古枝大井古枝古墳	前方後円墳 30m	竪穴式石室	船舶	方格規矩四神鏡 他に三角縁人物獸形鏡()1面	11.2	小玉、管玉、鏃、鉄鏃
21	(伝)香川県内			仿	方格規矩鏡	10.0	

近畿地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	直径 (cm)	伴出遺物
1	兵庫県揖保郡香島村松山			船舶	方格規矩鏡		
2	大阪府豊中市桜塚 南天平塚古墳	円墳	粘土槨 (2号)	仿	方格規矩文鏡 他に変形六獸鏡(仿)1面	21.2	刀、劍、鏃、短甲、鏃、弓、盾、馬具
3	大阪府茨木市宿久庄 紫金山古墳	前方後円墳	竪穴式石室	船舶	新高方作流雲文方格規矩四神鏡 他に勾玉文帯神獸鏡(仿)1面、獸 文帯神獸鏡(船)1面、三神獸帶鏡 (仿)5面、唐草文帯神獸鏡(仿)3 面、唐草文獸帶鏡(仿)1面	22.8	獸形石、車輪石、貝輪、短甲、刀、劍、短刀、鏃、 斧、のみ、鏡、鏃、鏃、鏃、鏃、簡形銅器、紡 錘車
4	大阪府藤井寺市美陵町道明寺 珠金塚古墳	方墳 1辺 28m	粘土槨	船舶	方格規矩獸文鏡(北槨) 他に環状乳画文帯神獸鏡(船)1 面、変形獸形鏡(仿)1面、四獸鏡 ()1面	14.5	硬玉勾玉、ガラス勾玉、滑石勾玉、管玉、膏玉、ガ ラス小玉、金銅製空玉、櫛、三角板革綴短甲1、三 角板革綴短甲3、肩甲、頸甲、小札鋸留衝角付冑3、 刀、劍、刀子、鏃、斧、鏃、鏃、のみ、鏃、盾
5	大阪府藤井寺市美陵町道明寺 鞍塚古墳	円墳 径 39m	粘土槨 木棺	船舶	方格規矩四神鏡	14.0	碧玉製勾玉、管玉、ガラス玉、三角板鋸留式衝角付 冑、滑石小玉、三角板革綴短甲1、肩甲、頸甲、頸 当、脇当、刀、劍、矛、鹿角装刀子、鉄鏃
6	大阪府羽曳野市 駒ヶ谷北古墳	前方後円墳 50m	粘土槨 割竹形木棺	仿	方格規矩四神鏡	16.0	短劍3、刀子、鏃、獸(?)

付載 4 方格規矩境系古墳出土地一覽

7	大阪市平野区瓜破 瓜破北遺跡				方格規矩鏡片 他に内行花文鏡片、連弧文清白鏡 ()1面		弥生土器、石器、古式土師器	
8	京都府京都市伏見区深草 稲荷山三の峯 藤原古墳			仿	変形方格規矩四神鏡	23.6		
9	京都府京都市右京区樫原町 百々ヶ池古墳	円	墳	壱穴式石室	仿	方格規矩四神鏡 他に平縁式神獸鏡(船)1面、三角 縁仏獸鏡(船)1面、画文帯神獸鏡 (船)1面、細線式獸帯鏡(仿)1面、 平縁式神獸鏡(仿)1面、三角縁神 獸鏡(仿)2面	22.7	勾玉2、管玉65、刀、石釧6、車輪石6
10	京都府向日市寺戸町 大塚古墳	前方後円墳 100m		壱穴式石室 (後円部)	仿	方格変形獸文鏡 他に三角縁神獸鏡(船)1面、三角 縁仏獸鏡(船)1面、獸帯鏡(船)1 面、三角縁獸帯鏡(仿)1面	15.8	勾玉、管玉、石釧8、鉄鎌斧、ちょうな、刀子、刀、 素環頭太刀、劍、鏃、鏃、紡錘車、琴柱形石製品、 鏃、銅鏃
11	京都府向日市物集女 恵美須山古墳				仿	変形方格渦文鏡 他に変形四獸文鏡(仿)1面	23.9~ 24.5	
12	(伝)京都府向日市向日町				仿	方格規矩獸文鏡	16.1	
13	京都府長岡京市長法寺 長岡近郊古墳					方格規矩変形獸文鏡 他に三角縁神獸鏡(船)1面、平縁 式神獸鏡()1面、三角縁神獸鏡 ()1面、小鏡()1面	15.0	勾玉1、管玉、碧玉製石釧2、刀
14	京都府綴喜郡八幡町八幡花芝 西車塚古墳	前方後円墳		壱穴式石室	仿	変形方格四神鏡 他に六獸鏡(仿)1面、画文帯神獸 鏡(船)1面、盤籠鏡(船)1面、三 角縁神獸鏡(船)1面	21.8	勾玉、管玉、小玉、車輪石、石釧、鍬形石
15	京都府綴喜郡八幡町 美濃山古墳 (王塚古墳?)				仿 仿	方格規矩四神鏡 方格規矩四神鏡 他に菱鳳鏡(船)1面、内行花文鏡 (船)1面、内行花文鏡(仿)2面、 半円方形帯神獸鏡(仿)4面、平縁 式盤籠鏡(仿)1面、変形神獸鏡 (仿)1面	16.7 10.6	玉、刀、劍、斧、鏃、冑
16	京都府相楽郡山城町 橋井大塚山古墳	前方後円墳		壱穴式石室	船	波文方格規矩四神鏡 他に長宣子孫内行花文鏡(船)1 面、内行花文鏡(船)1面、画文帯 環状孔獸帯鏡(船)1面、神獸鏡 (船)27面、三角縁神獸鏡(船)1面、 三角縁神獸鏡()2面、三角縁盤 龍鏡()1面、有銘巨口1面	18.2	
17	京都府相楽郡山城町平尾山 城山古墳	前方後円墳		壱穴式石室	仿	変形方格規矩渦文鏡	16.7	勾玉、管玉、白玉、金銅環、釧、鉄劍、車輪石、 土器
18	京都府山城南部				船	尚方作方格規矩四神鏡 他に内行花文鏡(船)2面、乳文鏡 (仿)1面、換文鏡(仿)1面、半円 方形帯神獸鏡(仿)1面	22.0	
19	京都府舞鶴市伊佐津境谷 切山古墳	円	墳	壱穴式石室	仿	方格規矩四神鏡	28.8	鏃、劍、杖状利器、土師器、人骨
20	京都府中郡峰山町 カジヤ古墳	円	墳	壱穴式石室	仿	方格変形獸文鏡	13.5	管玉、石釧、車輪石、鍬形品、筒形銅器、(棺外)劍、 刀子、のみ、鏃、鍬先、土師器、不明鉄器
21	京都府与謝郡加悦町温江 加悦丸山古墳	円	墳	箱式石棺	仿	方格規矩神獸文鏡	28.8	
22	京都府福知山天田 寺1段2号墳	方	墳	木棺直葬	船	方格規矩鏡	17.0	
23	京都市西京区樫原 百々ヶ池古墳	円	墳	壱穴式石室	仿	方格規矩八獸鏡	22.7	
24	京都市伏見区深草 稲荷藤原古墳				仿 仿	方格規矩変形獸文鏡 方格規矩四神文鏡	23.2 25.9	
25	京都府今里4丁目 今里車塚古墳	前方後円墳			仿	方格規矩獸文鏡片	22.0	

第III章 北山茶臼山西古墳

26	滋賀県草津市 北谷古墳群第11号墳			仿	方格規矩鏡		
27	奈良県奈良市柴屋町 なまり塚丸山古墳	円墳	粘土槨	仿	方格規矩鏡		勾玉、鏃、銀劍、刀、矛、短甲、鹿角装刀子
28	奈良県奈良市山陵町 日葉酢媛御陵	前方後円墳 207m	竪穴式石室	仿 仿	流雲文縁変形方格規矩四神鏡 唐草文縁変形方格規矩四神鏡 他に直弧文縁変形連弧文鏡(仿)1面	35.0 32.5	石鏝、車輪石、鉄形石、イヌ形石製品、鹿角装刀子 形石製品、勾玉、管玉
29	奈良県奈良市山町円照寺裏山 墓山第1号墳	円墳	礎、粘土槨	仿 仿	波文帯方格規矩四神鏡 唐草文帯方格規矩四神鏡 他に三角縁神獸鏡(複像式)(仿)1面、四蛇鏡(仿)1面	11.7 27.6	衝角付青、眉庇付青、頸鏡、肩鏡、短甲、小札、刀、劍、刀子、鏃、斧、馬具
30	(伝)奈良県生駒郡平群町 西宮古墳				波文方格規矩禽文鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面、変形四乳鏡(仿)1面、四獸鏡()1面、線形文鏡()1面	15.5	
31	奈良県天理市渋谷町			仿	方格規矩滿文鏡	17.8	
32	奈良県天理市柳本町 伊射奈岐神社境内 天神山古墳	前方後円墳 105m	竪穴式石室 (木槨)	船 船 船	流雲文縁方格規矩鏡 流雲文縁方格規矩鏡 流雲文縁方格規矩鏡 波文縁方格規矩鏡 波文縁方格規矩鏡 流雲文縁方格規矩鏡 他に画文帯神獸鏡(船)2面、連弧文鏡(船)1面、画像鏡(船)1面、連弧文鏡()3面、三角縁変形神獸鏡()2面、獸形鏡()3面、画像鏡()1面、画文帯神獸鏡()2面、半三角縁人物鳥獸文鏡()1面、獸帯鏡()1面	23.4 20.3 20.8 15.9 16.0 14.1	鉄製品(大刀、劍身、刀子、鏃、鏃)、木篋、朱、土師器
33	奈良県桜井市外山 茶臼山古墳	前方後円墳 207m	竪穴式石室		(平縁)方格規矩四神鏡 他に三角縁神獸鏡(船)2面、連弧文鏡(仿)6面、半三角縁神獸鏡(船)1面、三角縁神獸鏡()8面、平縁半円方形帯神獸鏡()3面、平縁獸帯鏡()2面、神獸鏡()1面		玉製品(杖頭、杖身)、石製品(鉄形石、鏝、車輪石)、勾玉、管玉、ガラス玉、劍、銅鏃、鉄鏃、土師器
34	奈良県橿原市川西町新沢千塚 500号墳	前方後円墳 62m	粘土槨	仿	方格規矩鏡(大) 方格規矩鏡(小) 他に連弧文鏡(船)2面、三角縁神獸鏡(仿)1面、懸垂鏡(仿)1面	27.8 12.8	石鏝、車輪石、鏃、琴柱形石製品、筒形銅器、短甲、刀、劍、斧、鏃、鏃、銅鏝、小玉、勾玉、管玉
35	奈良県北葛城郡広陵町大塚 新山古墳	前方後円墳 127m	竪穴式石室	仿 仿 仿 仿	変形方格規矩四神鏡 変形獸帯方格規矩四神鏡 変形流雲文方格規矩四神鏡 変形波文帯方格規矩四神鏡 他に環状乳画文帯神獸鏡(船)2面、尚方作三角縁神獸鏡(船)5面、画文帯神獸鏡(船)1面、三角縁神獸鏡(仿)2面、三角縁広獸帯鏡(船)1面、三角縁波文帯神獸鏡(船)1面、だ籬文鏡(仿)1面、素文縁連弧文鏡(仿)17面	29.1 20.3 24.3 27.4	刀、劍、金銅製帯金具、勾玉、管玉、車輪石、石鏝、鉄形石、筒形石製品、石製刀子把、石製鏃、椅子形石製品、石製斧
36	奈良県北葛城郡河合町 佐味田宝塚古墳	前方後円墳 100m	粘土槨	仿 仿 仿 仿	変形獸帯方格規矩四神鏡 変形方格規矩四神鏡 方格規矩四神鏡 方格規矩四神鏡 他に尚方作三角縁神獸車馬画像鏡(船)1面、流雲文四神鏡(船)1面、家屋文鏡(仿)1面、三角縁神獸鏡(船)11面、神獸鏡(船)1面、三角縁神獸鏡(仿)1面、三角縁神獸鏡(仿)6面、神獸画像鏡(仿)1面、変形獸帯鏡(仿)1面、だ籬文鏡(仿)1面、平縁変形六獸鏡(仿)1面	23.8 27.9 16.1 17.3	勾玉、石鏝、鉄形石、石製品(鏝、斧、のみ、かま、刀子)

付載 4 方格規矩境系古墳出土地一覽

37	奈良県北葛城郡当麻町兵家 兵家2号墳				方格規矩鏡 他に変形四獸鏡(仿)1面	8.9	
38	(伝)奈良県山辺郡都都村				方格規矩文鏡	20.6	
39	(伝)奈良県			仿	方格規矩文六鈴鏡	11.5	
40	兵庫県豊岡市森尾 市ノ尾古墳	方墳 9m	竪穴式石室	船	花文帯方格規矩鏡 他に三角縁神獸鏡(船)2面	13.6	勾玉、管玉、小玉、劍、銅鏃、鉄鏃、斧、鎌、漆器片
41	兵庫県城崎郡日高町鶴岡 太田谷の一古墳			仿	素文鏡(方格鏡?) 他に櫛齒文鏡(仿)1面	3.2	切子玉、鉛環
42	兵庫県朝来郡和田山町岡田 城の山古墳	円墳	粘土槨	船	方格規矩八獸鏡 他に三角縁獣文帯神獸鏡(船)3面、青蓋作四獸鏡(船)1面、唐草文帯重圍文鏡(仿)1面	15.4	琴柱形石製品1、石製合子1、勾玉、石釧4、刀2、劍1、斧1、刀子9、鏃8

中部地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	直径(cm)	伴出遺物
1	三重県久居市木造 木造里古墳	円墳		船	方格規矩鏡 他に変形丸龍鏡(仿)1面	10.1	
2	三重県多気郡明和町齊宮金剛坂			船	方格規矩四神鏡		
3	(伝)三重県伊勢市			仿	方格規矩鏡	13.65	
4	三重県志摩郡阿児町志島 (おじよか古墳)志島第11号古墳	円墳	横穴式石室		方格規矩鏡 他に珠文鏡()1面	14.3	短甲、刀、劍、矛、斧、鎌、櫛玉
5	三重県上野市千歳 野添古墳			仿仿	変形方格規矩鏡 変形方格規矩鏡 他に内行花文鏡(仿)3面、擬形文鏡(仿)1面	10.45 11.1	
6	三重県上野市久米山 第6号墳	円墳	粘土槨	仿	方格規矩四神鏡 他に変形獸帯鏡(仿)1面	16.7	勾玉、丸玉、直刀
7	愛知県名古屋市瑞穂井戸田 おっくり山古墳	円墳	粘土槨	仿	方形方格規矩鏡 他に変形獸形鏡(仿)1面	11.0	鏃、刀、劍、鏃、小玉、短甲、桂甲、環、鈴、鈴釧
8	愛知県犬山市北白山平 東之富古墳	前方後方墳 78m	後方部割石積 竪穴式石室 (前方部) 木槨	仿	方格規矩鏡 他に三角縁神獸鏡(船)5面、四獸鏡(仿)4面、三獸鏡(仿)1面	21.4 (21.8)	勾玉3、管玉、石釧3、車輪石1、楸形石1、石製合子2、劍、刀、鉄、鏃、斧
9	愛知県一宮市今伊勢本神戸 目久井 車塚古墳	前方後円墳 70m			方格規矩鏡 他に四獸鏡(仿)1面、擬文鏡(仿)1面	不明	刀、斧、矛、玉類
10	岐阜県岐阜市長良真福寺 龍門司古墳 龍門司1号墳	円墳	粘土槨	船	方格規矩鏡 他に五獸鏡(仿)1面、三角縁獣文帯四神四獸鏡(船)1面	15.7	短甲、刀、鏃、玉類、工具、櫛
11	岐阜県美濃加茂市太田町鷲之巣 大塚古墳	円墳(消滅)		仿	方格規矩波六鏡 他に内行花文鏡片1面	18.2	巴形銅器、刀、鉄鏃、勾玉、管玉
12	岐阜県内				方格規矩鏡 他に内行花文鏡2面 変形四神鏡1面	8.3	
13	静岡県磐田郡豊田町広野	円墳		仿	方格T字鏡 他に乳文鏡(仿)1面	9.1	大刀身、土師器
14	静岡県磐田市岩井 鰐塚古墳	円墳	横穴式石室 箱形石槨	仿	変形方格四神鏡	14.0	大刀、矛、十字鏡板、須恵器、劍菱杏葉
15	静岡県袋井市友永 某古墳	不明	不明	船	流雲文縁方格規矩四神鏡	16.0	
16	静岡県島田市阪本高根森東 高根森古墳	円墳	横穴式石室 (組合箱式石槨)	仿仿	方格T字鏡 方格八乳鏡	15.1 10.3	頭推大刀、玉類、金銀環、馬鐙、杏葉鈴、須恵器

第三章 北山茶白山西古墳

17	静岡県清水市庵原町 三池平古墳	前方後円墳 (舟形石棺)	竪穴式石室	仿	菱雲文縁方格規矩四神鏡 他に変形四獣鏡(仿)1面	19.5	筒形銅器、帆立貝形石製品、石剣、車輪石、紡錘車、 剣、鉄、鎌、のみ、玉類
18	(伝)静岡県清水市袖師町上嶺 薬山古墳	方墳		仿	菱雲文縁方格規矩四神鏡 (鈴付に変形された)	17.8	管玉、直刀
19	(伝)静岡県将来品			舶	方格規矩鳥文鏡	12.0	
20	福井県遠敷郡上中町天徳寺 森の下 十善の森古墳	前方後円墳 39.8m	横穴式石室 2	舶	流雲縁方格規矩四獣鏡	21.0	馬具、勾玉、管玉、経飾、刀、剣、鏡、三輪玉、須 恵器、土師器
21	石川県鹿島郡鹿島町水田鍋塚山 鍋塚山古墳	円墳 50m	箱式石棺	仿	方格規矩鏡	9.8	刀、斧
22	石川県加賀市分校町分校 高山古墳	前方後円墳		舶	方格規矩四神鏡		玉類
23	石川県宿東山 一号墳				方格規矩四神鏡	17.9	
24	富山県中新川郡立山町日中 藤塚古墳	円墳	石室		方格規矩鏡(破片)		直刀、鉄鍬、木片
25	新潟県南魚沼郡六日町余川 飯綱山古墳群 第十号墳	円墳 38m	竪穴式石室 木炭層	仿	規矩鏡 他に乳文鏡(仿)1面	8.7	直刀、鉄、馬具、玉、短甲、瓊瑤、砥石
26	長野県須坂市高浦 鏡塚1号墳	円墳 (積石塚)		舶	方格規矩四神鏡 他に形式不明(仿)1面		碧玉、石剣、矛、刀、鏡、勾玉、管玉、水字貝製貝輪
27	長野県長野市篠ノ井川柳	前方後円墳	竪穴式石室	舶	高方作方格規矩四神鏡 他に異体字日月銘内行花文鏡(舶) 1面、変形四獣鏡(仿)1面、変形 乳文鏡(仿)2面、変形模形文鏡 (仿)1面、内行花文鏡(仿)2面、 珠文鏡(仿)1面	12.9	鏡、筒形銅器、金環、銀環、車輪石、勾玉、管玉、 琴柱形石製品、切子玉、小玉

関東地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径 (cm)	伴出遺物
1	埼玉県児玉郡美里村谷沢長坂 聖天山古墳	円墳	第1主体部	仿	方格規矩四神鏡 他に六獣鏡(仿)1面	22.8	勾玉、滑石製白玉、刀、剣、刀子、櫛
2	埼玉県朝霞市岡 一夜塚古墳	円墳	木炭層	仿	方格T字鏡	9.5	鏡、甲冑、直刀、馬具、鎧、雲珠、銅杏葉、管玉、 須恵器、土師器
3	千葉県木更津市太田字鳥越 鳥越古墳	前方後円墳	第2主体部		方格規矩鏡		水晶、ガラス玉
4	茨城県竜ヶ崎大塚町 弁天社古墳	円墳		仿	方格規矩四神鏡	15.2	鉄、甲冑、刀、剣、鉄鍬、勾玉
5	群馬県太田市牛沢 頼母子古墳	円墳?	粘土棺?	舶	方格規矩四神四獣鏡(?) 他に有銘文帯三角縁神獣鏡(舶)1 面	17.8	銅鏃27、勾玉、刀
6	群馬県群馬郡箕郷町和田山 桜塚古墳	円墳	横穴式石室	仿	方格規矩四神鏡	18.8	刀、馬具、金銅製帯金具、須恵器
7	群馬県富岡市南後箇 北山茶白山西古墳	前方後方墳	木棺直葬	仿	方格規矩鏡 他に変形四獣鏡(仿)1面	15.9	管玉、鉄矛、ガラス小玉、木質片、底部穿孔土器、 鉄斧
8	栃木県小山市 桑57号墳	前方後円墳 (帆立貝式)	木棺直葬		方格T字鏡 他に変形龍虎鏡(仿)1面、不明文 鏡(仿)1面	8.9	直刀、鉄剣、蛇行剣身、銅鈴、天冠

※一覧表は「日本における古鏡」(東アジアより見た日本古代墓制研究)各地方篇を元に編集したものである。なお、後補資料として、「肥後考古 第3号」(肥後考古学会)1983年、「図録 三世紀の九州と近畿」(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館)1983年、「京都府内巡回展図録 鏡と古墳―景初四年と芝ヶ原古墳―」(京都府立山城、丹後岡郷土資料館、京都府教育庁文化財保護課、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987年、日本考古学協会年報等を利用した。

付載 5

四獸鏡系古鏡出土地一覽

九州地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径 (cm)	伴出遺物
1	福岡県稲築町漆生 漆生古墳	円墳	横穴式石室	仿	四獸鏡 2面		短甲、勾玉、小玉、管玉、具輪、釧、鉄刀、鈴(5鈴)
2	福岡県築穂町上穂波 (上穂波中学校敷地)桜ヶ丘古墳	円墳?	横穴式石室	仿	変形四獸鏡(振文鏡)		
3	福岡県三井郡大刀洗町立石 干潟、下鶴		箱式棺	仿	四獸鏡	10.6	斧、劍
4	福岡県山門郡山川町清水面上	円墳	箱式石棺	仿	四獸鏡	12.6	円形銅釧、鹿角装鉄劍
5	福岡県苅田町与原 御所山古墳	前方後円墳	横穴式石室	仿	変形四獸鏡	8.7	勾玉、管玉、霰玉、丸玉、鉄鏃
6	(伝)福岡県(旧仲津郡)			仿	変形四獸鏡 他に連弧文鏡(仿)1面、画像鏡 (船)1面、画文帯神獸鏡(船)1面		
7	福岡県行橋市延永 琵琶隈古墳	円墳	竪穴式石室	仿	四獸鏡 他に連弧文鏡(船)1面	9.2	勾玉、小玉、素環頭太刀、劍、鏃、挂甲
8	福岡県行橋市 稲重古墳群第8号墳	円墳	竪穴式石室 の手法を持つ	仿	四獸鏡 他に四神四獸鏡(仿)1面	10.5	衝角付冑、短甲、刀、劍、矛、金環、馬具、須恵器
9	(伝)福岡県			仿	変形四獸鏡 他に画像鏡(船)1面		
10	佐賀県唐津市佐志 惣原古墳	円墳	竪穴式石室	仿	盤龍鏡(変形四獸鏡)	12.8	管玉3、小玉4
11	佐賀県唐津市佐志 女山古墳	円墳	小形 竪穴式石室	仿	四獸鏡		管玉、ガラス小玉
12	佐賀県東松浦郡浜玉町 谷口古墳	前方後円墳	舟形石棺 (東西) 竪穴式石室	仿	変形複式四獸鏡 他に三角縁神獸鏡(仿)3面、同 (船)1面、位至三公双獸鏡(船)1 面、撰形文鏡(仿)1面	8.3	(棺外) 鉄刀、鉄劍、鉄斧、鉄鏃、勾玉、管玉、小玉、石釧11
13	佐賀県東松浦郡浜玉町横田下 横田下古墳	円墳	横穴式石室		変形四獸鏡 他にだ龍鏡1面	13.7	筒形銅器、直刀、鏃、短甲、斧、土師器
14	佐賀県神埼郡神埼町仁比山朝日 小川光雄氏宅地		箱式棺	仿	変形四獸鏡	9.3	石釧
15	佐賀県三養基郡上峰村堤 二塚山遺跡		石棺 (土壌内)	船	獸帯鏡(波文縁四獸鏡)	14.1	
16	佐賀県三養基郡有明町 童王崎3号墳	円墳群	横穴式石室	仿	四獸鏡	9.8	
17	熊本県熊本市清水町打越 稲荷山古墳	円墳	横穴式石室	仿	四獸鏡	9.7	玉類、鉄鏃、鏃、馬具、須恵器
18	熊本県宇土郡不知火町長崎 国越古墳	前方後円墳	横穴式石室 家形石棺	船	四獸鏡 他に神獸鏡(船)1面、獸帯鏡(船) 1面	9.1	刀、金、銀環、玉類、帯金具、馬具、鉄器(斧、鏃、 鋤、鎌、刀子)
19	熊本県阿蘇郡一の宮町中通 鞍掛塚古墳	円墳	箱式棺	仿	変形四獸鏡 他に変形文鏡(仿)1面、珠文鏡 (仿)2面	14.8	勾玉、小玉、管玉、銀環、劍
20	熊本県玉名郡菊水町 江田船山古墳	前方後円墳	横口式 家形石棺	仿	四獸鏡 他に画像鏡(船)1面、神獸鏡(船) 3面、獸帯鏡(船)1面	9.0	
21	大分県豊後高田市玉津呉崎 草地境界丸山 丸山古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形四獸鏡	12.7	刀1、劍6、斧2、鏃110、管玉12、勾玉2、鏃、石 製模造品2

第三章 北山茶臼山西古墳

22	大分県西国東郡太田村上奇掛 小川原 灰土山古墳	前方後円墳	箱式石棺	仿	変形四獣鏡 他に珠文鏡片(仿)1面	9.6	ハリ小玉1、管玉3、刀子1
23	大分県臼杵市稲田 白塚古墳	前方後円墳	舟形石棺	仿	変形四獣鏡 他に双龍鏡(船)1面、鏡片(不明)	9.5	人骨、勾玉、管玉、直刀、短甲、刀、貝鏝
24	宮崎県日向市富高草場 古城山古墳	前方後円墳		仿	変形四獣鏡	11.8	鉄鏃、鏝
25	宮崎県宮崎市下北方町陣ヶ平				四獣鏡	10.9	
26	宮崎県宮崎市下北方			仿	変形四獣文鏡		
27	宮崎県児湯郡高鍋町持田 持田古墳群 推定 持田第25号墳 (伝)乙女塚古墳 持田第34号墳 (伝)持田古墳	円墳 前方後円墳		仿 仿 仿	変形四獣鏡 他に画文帯神獸鏡(船)1面 変形四獣鏡 変形四獣鏡 変形四獣鏡 他に変形五獣鏡(仿)2面、変形六 獣鏡(仿)1面、変形神獸鏡()1 面、変形だ龍鏡()1面	20.0 16.5 11.0 13.5	刀、勾玉、管玉 刀、勾玉、金銅環、刀柄頭、鏃、小銅鈴

中国・四国地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	直径 (cm)	伴出遺物
1	岡山県笠岡市山口長福寺 押撫古墳			仿	変形四獣鏡	9.4	
2	岡山県総社市上林 (旧 都窪郡三須村)			仿	変形四獣鏡	8.2	
3	岡山県総社市上林 宮山古墳	前方後円墳 38m	竪穴式石室	舶	素縁四獣鏡		ガラス小玉1、鉄刀、剣2、鉄鏃3、弥生銅鏃1
4	岡山県都窪郡庄村矢部 ヒヤブ塚	前方後円墳	竪穴式石室	仿	変形四獣鏡	10.8	
5	岡山県吉備郡足守町下足守 貝坂向山		箱式石棺	仿	変形四獣鏡	7.0	碧玉、勾玉、メノウ勾玉、ガラス小玉、碧玉管玉
6	岡山県吉備郡真備町辻田			仿	変形四獣鏡	9.09	
7	岡山県吉備郡足守町 下足守貝塚		箱式石棺	仿	変形四獣鏡	10.0	
8	岡山県岡山市津島山麓		竪穴式石室	仿	変形四獣鏡	14.8	
9	岡山県備前市鶴山 丸山古墳			仿	変形四獣鏡 他に内行花文鏡(仿)6面、方格規 矩鏡(仿)7面、禽獸文鏡(仿)1面、 三角縁神獸鏡(仿)4面、盤龍鏡 (仿)2面、変形四禽鏡(仿)2面、 神獸鏡(仿)5面、変形五獣鏡(仿) 1面、変形大獣鏡(仿)1面、形式 不明(仿)2面	12.1	
10	岡山県赤磐郡山陽町 用木古墳群第3号墳	前方後円墳	第1主体 (木棺)	仿	波文帯四獣鏡	15.0	鉄斧、鏃、土師器、高坏、小器台
11	岡山県赤磐郡宝満 坂上古墳			仿	変形四獣鏡	10.9	
12	岡山県赤磐郡宝満(旧高月村) 和田、東山			仿	平縁竊歯文帯変形四獣鏡 他に内行花文鏡(仿)1面	10.3	
13	岡山県津山市高野山西正仙塚 竹塚古墳	前方後円墳 65m	長持形石棺	仿	変形四獣鏡 他に獸形鏡(船)1面	10.1	玉類、鉄斧、鉄剣、土師器
14	岡山県津山市川崎金田 丸山古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形四獣鏡	8.1	土師器

15	鳥取県西伯郡淀江町宇田川付近			仿	変形四獣鏡 他に乳文鏡(仿)1面、擬形文鏡(仿)1面、変形神獸鏡(仿)1面	22寸	
16	愛媛県伊予市大平曾根日の神社	円墳			四獣鏡?		
17	愛媛県伊予郡砥部町(原町)三角付近			仿	四獣鏡	約12.5	
18	香川県高松市石清尾山の一古墳(石船山古墳とも伝う)	前方後円墳	割竹形石棺 小 堅穴式石室	仿	変形四獣鏡		
19	香川県坂出市蓮尺第3坂出水道配水地 茶白山古墳			仿	変形四獣鏡 他に三角縁神獸鏡(仿)1面	12.1	碧玉管玉
20	香川県善通寺 中東古墳			舶	有銘四獣鏡	19.2	銅鈴、刀、勾玉、管玉、小玉
21	香川県善通寺市西村山根古墳	円墳	礫 塚	仿	四獣鏡	8.4	石剣、鉄鏃、動物形埴輪
22	香川県大川郡寒川町奥第14号墳	円墳	堅穴式石室	舶	画文帯四獣鏡 他に画文帯神獸鏡(舶)1面	12.7	勾玉、管玉、ガラス小玉
23	徳島県徳島市名東町節節山2号墳	円墳	箱式棺	舶	四獣鏡	10.7	(棺内)勾玉、布片、人骨 (棺外)鉄剣1、刀子1、斧1、鉾1
24	徳島県徳島市丈六町丈領古墳	円墳	箱式棺	仿	四獣鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面		

近畿地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径(cm)	伴出遺物
1	兵庫県加古川市平荘町又平新田カンス塚古墳		堅穴式石室	仿	変形四獣鏡		剣、鉾、工具、短甲、須恵器、勾玉
2	兵庫県印南郡志方町西飯坂上の山古墳		石棺	仿	六鈴変形四獣鏡	12.0	紡錘車、勾玉、須恵器
3	兵庫県小野市敷地町宮林大塚古墳	円墳 30m	堅穴式石室		四獣鏡 他に四神鏡()2面	16.1	碧玉、管玉13、剣、ガラス小玉
4	兵庫県揖保川町長久山1号墳	前方後円墳	堅穴式石室	舶	四獣鏡		剣、鏃(?)
5	兵庫県揖保川町竜子三ツ塚2号墳	円墳 20m	堅穴式石室	舶	四獣鏡鏡片 他に嬰鳳鏡(舶)1面	11.4	
6	兵庫県三木市別所町大山	円墳	堅穴式石室	仿	四獣鏡 他に乳文鏡(仿)1面	13.5	勾玉
7	兵庫県城崎郡城崎町今津小見塚古墳	円墳	粘土塚	舶	細線式四獣鏡 他に三角縁神獸鏡(舶)1面	18.7	勾玉、刀、剣、鏃、紡錘車
8	兵庫県出石郡出石町下安良安良古墳2号墳	円墳	組合石棺	仿	変形四獣鏡	12.1	石枕、剣、刀、刀子、鉄鏃、須恵器
9	兵庫県朝来郡和田山町岡田城の山古墳	円墳	粘土塚	舶	青蓋作四獣鏡 他に三角縁神獸鏡(舶)3面	14.8	琴柱形石製品1、石製合子1、勾玉、石釧4、刀2、剣1、斧1、刀子9、鏃8
10	大阪府高槻市服部弁天山C1号(大蔵司)古墳	前方後円墳	後円部 堅穴式石室	仿	四獣鏡 他に2獣鏡(舶)1面、三角縁三獣鏡(仿)1面、擬文鏡(仿)1面	13.15	勾玉、管玉、石釧、車輪石、合子、筒形石製品、刀、刀子、銅鏃、鎌、鋸、斧、鏃、剣
11	大阪府高槻市別所奥阪古墳				四獣鏡 他に内行花文鏡()1面、変形神獸鏡(仿)2面	10.4	勾玉、磁石
12	大阪府柏市玉手山ロバリ山玉手山西山古墳	円墳	堅穴式石室	舶	四獣鏡 絹布付着	16.66	鉄剣

第三章 北山茶臼山西古墳

13	大阪府藤井寺市美陵町道明寺 珠金塚古墳	方墳 1辺28m	粘土槨		四獣鏡 他に方格規矩獣文鏡(北槨)(船)1面、環状乳画文帯神獸鏡(船)1面、変形獣形鏡(仿)1面	12.0	硬玉勾玉、ガラス勾玉、滑石勾玉、管玉、霏玉、ガラス小玉、金銅製空玉、櫛、三角板革綴短甲1、三角板銀留短甲3、肩甲、頸甲、小札銀留衝角付冑3、刀、劍、刀子、鏃、斧、鎌、鉈、のみ、鏃、盾、鉄
14	大阪府藤井寺市美陵町古屋 大鳥塚古墳(應神天皇陵陪塚)	前方後円 107m		仿	変形四獣鏡	11.2	刀、劍、鉄鏃
15	大阪府南河内郡千早赤坂村			仿	四獣鏡 四獣鏡 他に五獣鏡()1面	15.3	
16	和歌山県和歌山井辺大日57 (旧岡崎村)	円墳	横穴式石室	仿	変形四獣鏡	15.8	馬具、刀身、須恵器
17	和歌山県日高郡南部町山内 城山古墳	円墳	箱式棺 (人骨)	仿	獣帯文四獣鏡	15.3	銅鏃7、鉄劍
18	和歌山県田辺市 (日高郡周辺の一古墳)				平縁式四獣鏡		
19	京都府京都市上京区岩倉橋枝町 深泥ヶ池	性格不明		仿	四獣鏡	20.2	ガラス小玉、鉄鏃
20	京都府伏見区深草稲荷山 三の峯古墳			仿	変形四獣鏡 他に神獸鏡(船)1面	13.2	勾玉、切子玉、管玉(1916荒神峯)
21	京都府向日市物集女 惠美須山古墳	円墳	粘土槨	仿 仿	変形四獣鏡 変形四獣鏡 他に変形方格渦文鏡(仿)1面	7.0 12.7~ 13.7	石銅、管玉
22	京都府宇治市宇治大谷 丸山(播鉢山)古墳	前方後円墳	粘土槨 (木棺)	仿	変形四獣鏡	12.0	刀、劍、斧、鏃、土器、不明鉄棒
23	京都府原山大畠町 大畠古墳			仿	四獣鏡 他に変形獣帯鏡(仿)1面	9.8	
24	京都府綴喜郡八幡町美濃山 西の口古墳			仿	四獣鏡		銅鏃5、鉄刀、斧、紡錘車、鏃
25	京都府京都市西京区大原野 上里北町 鏡山古墳	円墳	磯槨 (木棺)		四獣鏡	9.7	劍、刀、銅鏃、滑石(鏡4、斧4、刀子5)紡錘車2、勾玉138、石製品(下駄3、臼杵1)
26	京都府相楽郡木津町口土師 中ノ中条 七ツ塚古墳	円墳	木棺	仿	変形四獣鏡	13.6	玉類、刀、馬鐙
27	京都府相楽郡和束町 原山西手古墳			仿	変形四獣鏡	10.0	鉄鏃、矛、槍、刀、甲冑
28	京都府竹野郡丹後町竹野 産土山古墳	円墳	長持形石棺	仿	四獣鏡	12.6	勾玉、管玉、櫛、刀、刀子、劍、木弓
29	京都府城陽市寺田大谷 芝ヶ原古墳	前方後方墳	木棺	仿	四獣形鏡	12.0	銅鏃2、硬玉製勾玉8、碧玉製管玉187、ガラス製小玉1276、鉄鏃1、鉄錐(?)8、古式土師器片(4個体分)
30	京都府福知山市今安 狸谷17号墳				四獣鏡 他に四乳鏡()1面	11.0	
31	京都府船井郡園部町内林 垣内古墳	前方後円墳	粘土槨	仿	半円方形帯四獣鏡 他に三角縁神獸鏡(仿)1面、同(船)1面、盤龍鏡(船)1面、画像獣帯鏡(仿)1面、三角縁仏獣鏡(船)1面	19.1	
32	京都府宇治郡岩滝町岩滝 日ノ内古墳	不明	木棺直葬	仿	四獣形鏡	10.0	
33	京都府城陽市平川室木 青塚古墳	方墳	粘土槨	仿	四獣形鏡 他に乳文鏡(仿)1面	11.2	
34	京都府福知山市前田町 八ヶ谷古墳	方墳	箱式石棺	仿	四獣形鏡	8.9	
35	京都府城陽市平川古宮 箱塚古墳	前方後円墳		船	画文帯四獣鏡 他に三角縁神獸鏡(船)1面	12.7	

付載5 四獸鏡系古鏡出土地一覽

36	京都府城陽市平川車塚 久津川車塚古墳	前方後円墳	長持形石棺	仿 仿 仿 仿	四獸形鏡 四獸形鏡 四獸形鏡 四獸形鏡 他に面文帯神獸鏡(仿)1面、同(船)1面	13.9 13.8 13.8 13.6	
37	京都府宇治郡加悦町加悦 作り山1号墳	前方後円墳	箱式石棺	仿	四獸形鏡	9.6	
38	京都府城陽市久世下大谷 西山第2号墳	方墳	粘土槨	仿	四獸形鏡 他に三角縁神獸鏡(船)1面	11.4	
39	京都府綴喜郡田辺町飯岡 トツカ(十塚)古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形一神四獸形鏡 他に神人画像鏡(船)2面	16.2	
40	京都府亀岡市藤町下西 櫛塚古墳	方墳	粘土槨	仿	四獸形鏡 他に素文鏡(仿)1面	12.6	
41	京都府伏見区醍醐(伝経塚)			仿	四獸形鏡 他に盤龍鏡(船)1面	12.3	
42	京都府宇治市五ヶ庄 二子塚古墳	前方後円墳	横穴式石室 ?	仿	四乳四獸形鏡	12.0	
43	奈良県奈良市山陵町 日葉酢媛御陵	前方後円墳 207m	竪穴式石室	船	平縁式四獸鏡 (神獸鏡)	14.0~ 15.0	
44	奈良県奈良市山陵町御陵前 マナ塚373 マエ塚古墳	円墳 径50m 高7m	粘土槨 木棺 副室	仿 仿 仿	四獸文鏡 変形四獸鏡 四獸文鏡 他に変形文鏡(仿)1面、八獸文鏡(仿)1面、連弧文鏡(仿)2面、三角縁四獸文鏡(仿)1面、変形方格花文鏡(仿)1面	9.9 15.3 11.8	石釧10、石製合子、石製埴、剣、直刀、刀子、斧、鎌、鍬先
45	奈良県生駒郡平群町 西宮古墳				四獸鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面、波文方格規矩禽文鏡1面、変形四乳鏡(仿)1面、線形文鏡1面	10.6	
46	奈良県桜井市外山森谷山9913				四獸鏡 他に変形神獸鏡(仿)1面	12.1	勾玉、三輪玉、小玉、剣
47	奈良県橿原市川西町高塚ノ内 千塚山(一括)				四獸鏡	14.8	勾玉、管玉、石製刀子、鉄器、鉄斧、鉄鏃
48	奈良県北葛城郡広陵町三吉 馬々崎				四獸鏡	8.1	
49	奈良県北葛城郡河合町佐味田 貝吹 貝吹山古墳	前方後円墳			変形四獸鏡 他に連弧文鏡(船)1面、だ龍鏡(仿)2面、三角縁神獸鏡(船)1面、変形四獸鏡(仿)1面、連弧文鏡2面	15.8	
50	奈良県北葛城郡当麻町 岩崎平石				四獸鏡	13.0	
51	奈良県北葛城郡当麻町竹ノ内 一葉古墳			仿	変形四獸鏡	17.9	
52	奈良県北葛城郡当麻町兵家 兵家2号墳			仿	変形四獸鏡 他に方格規矩鏡()1面	8.4	
53	奈良県北葛城郡当麻町兵家 兵家6号墳			仿	変形四獸鏡	10.8	
54	奈良県北葛城郡榛原町上井足 愛宕山古墳			仿	変形四獸鏡(四獸鏡?) 他に神獸鏡(船)1面	15.1	勾玉、小玉、刀、刀子、馬具、須恵器
55	(伝)奈良県 北和城南古墳			仿	四獸鏡 他にだ龍鏡(仿)1面、三角縁神獸鏡(仿)1面、面文帯神獸鏡(船)1面	13.8	石釧、車輪石、鍬形石

第三章 北山茶臼山西古墳

中部地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	直径 (cm)	伴出遺物
1	三重県鈴鹿市江島町 愛宕山古墳群			仿	七珍四獣鏡	11.75	
2	三重県一志郡竈野町大字一志 滝野古墳	前方後方墳	粘土槨	仿	四獣鏡 他に三角縁神獣鏡(船)2面、「位至三公」鏡(船)1面	11.15	石銅、玉類
3	三重県松坂市佐久米 三つ子塚古墳群	円墳		仿	四獣鏡		
4	三重県松坂市松尾立尾 浅間古墳			仿	四獣鏡 他に盤龍鏡(仿)1面、内行花文鏡(仿)1面、八獣鏡(仿)1面、乳文鏡(仿)2面		
5	三重県上野市岩倉 二の谷古墳	円墳		仿 仿	四獣鏡 変形四獣鏡	7.8 13.8	硬玉勾玉、メノウ勾玉
6	三重県上野市岩倉 イト塚古墳			仿	変形四獣鏡	7.5	
7	愛知県北区桶町味鏡堂の前 白山蔵古墳	前方後円墳 (消滅)	木棺	仿	四乳四獣鏡 他に三角縁神獣鏡(船)1面、内行花文鏡(仿)1面	10.3	鉄斧、刀、剣、矛、鏃、勾玉、管玉、丸玉
8	愛知県北区桶町味鏡神社			仿	四獣鏡 他に振形文鏡(仿)1面、珠文鏡(仿)1面	11.4	
9	愛知県名古屋市区北桶町岩窟堂			仿	四獣鏡	16.0	
10	愛知県岡崎市岩津町西坂 岩津1号墳		横穴式石室	仿	四獣鏡	8.3	金環、勾玉、直刀
11	岐阜県岐阜市笠谷 瑞龍寺山第二支群第1号墳	円墳			四獣鏡		玉、武器
12	岐阜県岐阜市長良平瀬 龍門司12号墳			仿	四獣鏡	12.1	
13	岐阜県岐阜市高富町佐賀咽洞 金池古墳	円墳	横穴式石室	仿	四獣鏡	8.0	須恵器
14	岐阜県揖斐郡大野町上磯 龜山古墳	前方後円墳 98m		仿	変形四獣鏡 他に変形六獣鏡(仿)1面	13.6	馬具、玉類、須恵器、(伝)冠、刀、鏃
15	岐阜県海津郡南野瀬町山崎 行基寺北古墳	円墳		仿	四獣鏡 他に神人鏡(仿)1面、変形文鏡(仿)1面、内行花文鏡(仿)1面	14.8	石銅4、玉類
16	岐阜県可児郡御嵩町伏見 土居ノ内 東寺山1号墳	前方後円墳		仿	四乳四獣鏡		銅鏃、直刀、土師器
17	岐阜県可児郡可児町広見 身隠山丘頂 御獄神社	山頂円墳	粘土槨	仿	変形四獣文鏡 他に「長宜子孫」内行花文鏡(船)1面、内行花文鏡片	9.8	勾玉、管玉、白玉、小玉、刀、石銅3、土器
18	岐阜県加茂郡坂祝町黒岩 前山古墳	円墳		仿	変形四獣文鏡 他に変形振形文鏡(仿)1面、変形乳文鏡(仿)2面	9.4	管玉35、勾玉
19	岐阜県中津川美濃 権現塚古墳			仿	変形四獣鏡	12.4	
20	静岡県引佐郡三ヶ日町付近	不明	不明	仿	四獣鏡	16.4	
21	静岡県引佐郡細江町中川 陣座ヶ谷古墳	前方後円墳 53m		仿	変形四獣鏡 他に花文鏡()1面	8.3	大刀身
22	静岡県磐田市勾坂新A5号墳	円墳?	粘土槨	仿	変形四獣鏡	11.3	大刀身、剣身、鉄鏃、鏃、斧頭、鋤先、玉

付載 5 四獸鏡系古鏡出土地一覽

23	(伝)静岡県磐田市鎌田	不明	不明	仿 仿	変形四獸鏡 変形四獸鏡 他に変形獸文鏡(仿)2面、八乳鏡(仿)1面、重圈文鏡(仿)1面	10.5 8.5	
24	静岡県磐田市新貝 相月氏邸内古墳	円墳?		仿	変形四獸鏡 他に内行花文鏡(仿)1面	10.9	大刀身、勾玉、管玉、銅環、須恵器
25	静岡県磐田市新貝 松林山古墳	前方後円墳	竪穴式石室 (木棺)	仿	変形四獸鏡 他に三角縁神獸鏡(舶)1面、内行花文鏡(舶)1面、同(仿)1面	12.0	勾玉、管玉、琴柱形石製品、石釧、水字貝釧、刀身、大刀、劍身、矛、鉄鏃、銅鏃、鎌、鑿、斧頭
26	(伝)静岡県磐田市新貝 松林山古墳			仿	変形四獸鏡	8.4	
27	静岡県小笠原郡小笠原町上平 大塚古墳	前方後円墳	礎 床	仿 舶	変形四獸鏡 三角縁神獸鏡 他に神獸鏡(舶)1面	12.4	勾玉、管玉、小玉、劍身
28	静岡県袋井市豊沢神長 天神山古墳			仿	変形四獸鏡	12.7	大刀、管玉
29	静岡県宮ヶ崎町 一本松古墳			仿	変形四獸鏡	9.4	石枕、直刀
30	静岡県富士市比奈 東坂(比奈G1)古墳	前方後円墳	粘土床 木棺片	仿	変形四獸鏡 他に内行花文鏡(仿)1面	9.7	蛇紋岩勾玉、管玉、白玉、小玉、石釧、琴柱形石製品、劍身、大刀身
31	静岡県田方郡修善寺町 加殿子神社 子神塚古墳	祭祀跡?		仿	変形四獸鏡		
32	福井県遠敷郡上中町藤袋 西塚古墳	前方後円墳 83m	竪穴式石室 横穴?	仿	変形四獸鏡 他に画像鏡(舶)1面	12.1	衝角付冑、勾玉、管玉、短甲、金製耳飾、直刀、馬具
33	福井県福井市鬼武(屋座越) 小山谷古墳	円墳	舟形石棺	仿	四獸鏡 他に神獸鏡()1面		勾玉、管玉、劍(又は鏃)、刀、車輪石、石釧、鍬形石、滑石製白玉
34	福井県鯖江市市入町 天神山1号墳 孤山古墳	前方後円墳	粘土塚	仿	変形四獸鏡	9.0	管玉、小玉、土師器
35	福井県福井市松岡町吉野塚 石ヶ谷 石船山古墳	前方後円墳	舟形石棺	仿	変形四獸鏡	10.6	金、銅冠、冑、劍、短甲、鹿角刀装具
36	福井県福井市松岡町 二本松山古墳	円墳	舟形石棺8	仿	四獸鏡		眉庇付冑、短甲、刀、劍、金銅冠、管玉、鹿角製刀装具
37	長野県長野市篠ノ井川柳 將軍塚古墳	前方後円墳	竪穴式石室	仿	変形四獸鏡 他に内行花文鏡(舶)1面、変形八乳文鏡(仿)1面、変形楕形文鏡(仿)3面、変形七乳文鏡(仿)1面、内行花文鏡(仿)4面、珠文鏡(仿)1面、方格規矩四神鏡(舶)1面、素文鏡(仿)1面、変形珠文鏡(仿)1面	10.5	銅鏃、筒形銅器、金環、銀環、車輪石、勾玉、管玉、琴柱形石製品、切子玉、小玉
38	長野県長野市篠ノ井塩崎長谷 八幡宮古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形四獸鏡	11.2	管玉、小玉、劍
39	長野県飯田市座光寺 石行2号古墳	円墳	墳	仿	変形四獸鏡	10.1	鉄矛、鉄鏃、土師器、埴輪
40	長野県飯田市座光寺 鳥屋場3号古墳	円墳	墳	仿	変形四獸鏡	10.8	勾玉、管玉、土師器、直刀
41	(伝)長野県飯田市座光寺			仿	変形四獸鏡	15.5	
42	長野県飯田市龍丘桐林塚原 龜塚5号古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形四獸鏡	10.0	直刀、馬鐙、短甲(絞金あり)
43	長野県飯田市川路 殿村1号古墳	円墳	墳	仿	四獸鏡 他に素文鏡()1面	10.6	管玉4、須恵器
44	長野県飯田市三穂伊豆木齊木 石原田古墳	円墳	竪穴式石室	仿	変形四獸鏡	7.0	短甲、挂甲、矛、金属片、土師器、埴輪、劍、直刀、刀子、刀子柄、衝角付冑

第三章 北山茶臼山西古墳

関東地方

番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径(cm)	伴出遺物
1	神奈川県平塚市大野町真土 大塚山古墳	前方後円墳	粘土槨	仿	四獣鏡 他に三角縁神獣鏡(船)1面	7.75	銅鏃、巴形銅器、刀、刀子、斧、鋤先、勾玉、管玉、人骨
2	東京都大田区田園調布 蓬来山古墳	前方後円墳	粘土槨	仿	四獣鏡	12.8	勾玉、小玉、丸玉、剣、刀、紡錘車
3	埼玉県行田市須加中郷	円墳	竪穴式石室?	仿	変形四獣文鏡 他に変形乳文鏡(仿)1面	11.8	
4	千葉県印旛郡君津村下方代田 (現佐倉市)			仿	変形四獣鏡 他に内行花文鏡()1面、撰文鏡(仿)1面	7.2	硬玉勾玉、メノウ勾玉、管玉、ガラス小玉
5	茨城県東茨城郡大洗町磯浜 日ヶ塚鏡塚古墳	前方後円墳	木棺 粘土槨	仿	変形四獣鏡 他に内行六花文鏡(仿)1面	13.2	勾玉、管玉、小玉、銅、直刀、新鍔、刀子、鎌、斧、不明品、滑石製模造品(鬘、新、刀子、鎌、紡錘車、鏃、鋤、銅、勾玉、管玉、異形品)、櫛
6	栃木県宇都宮市宮高宮新町 牛塚古墳	前方後円墳	石室	仿	変形四獣鏡 他に函文塔神獣鏡(船)1面、四鈴鏡(仿)1面、五鈴五獣鏡(仿)1面	17.0	鈴銅、金環、鈴杏葉、鈴、柄、鉄鏃、鍔片、勾玉、管玉、ガラス玉、土師器、石斧片
7	群馬県前橋市鳥取町南原203	円墳	横穴式石室	仿	変形四獣鏡	14.1	馬具、杏葉、管玉、刀身、斧
8	群馬県前橋市後閑町坊山 天神山古墳	前方後円墳 129m	粘土槨 (着竹形木棺)	仿	変形四獣鏡 他に禽獣鏡(船)1面、神人画像鏡(船)1面、三角縁神獣鏡(船)2面	13.2	太刀5、直刀3、剣12、銅鏃30、鉄鏃74、刀子、斧、鏃、鬘、鞆、碧玉製銅、紡錘車、(頂上の)古式土師器
9	群馬県高崎市貝沢正天1418 聖天山古墳	円墳	箱式石棺	仿	四獣鏡	11.0	剣、籠
10	群馬県高崎市元島名町 将軍塚古墳	前方後円墳	粘土槨	仿	変形四獣文鏡	7.1	石銅、剣、刀、鏃
11	群馬県高崎市倉賀野町	不明	不明	仿	四獣鏡		
12	群馬県高崎市岩島町	不明	不明	仿	四獣鏡	11.5	
13	群馬県藤岡市白石 稲荷山古墳	前方後円墳 93m	磯槨(東棺)	仿	四獣鏡 他に連弧文鏡(仿)1面	6.6	勾玉、切子玉、ソロバン玉、石製模造品、管玉
14	群馬県富岡市南後箇 北山茶臼山西古墳	前方後方墳	木棺直葬	仿	変形四獣鏡 他に方格規矩鏡(仿)1面	9.9	管玉、鉄矛、ガラス小玉、木質片、鉄斧、底部穿孔土器
15	群馬県太田市茂木塚稲居 第5号古墳	円墳	不明	仿	四獣鏡		

東北地方

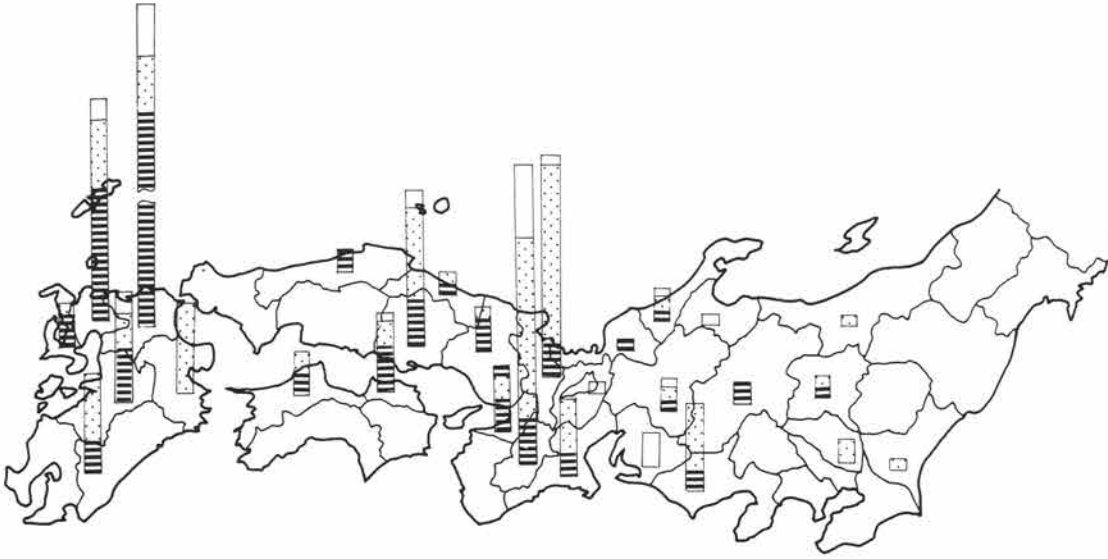
番号	発見地名	遺構	内部構造	種	鏡式	面径(cm)	伴出遺物
1	福島県会津若松市一箕町八幡 大塚丁大塚山古墳	前方後円墳	割竹形木棺 (南棺)	仿	変形四獣鏡 他に三角縁神獣鏡(仿)1面、撰文鏡()1面	9.5	銅鏃、鉄鏃、刀、剣、斧、鏃、刀子、鞆、勾玉、管玉、櫛、石柁、台石、砥石、算盤玉、小玉、棒状鉄器、碧玉製紡錘車、直刀

※本一覧表は「日本における古鏡」(東アジアより見た日本考古学墓制研究)の各地方篇を元に編集したものである。なお、後補資料として、「肥後考古、第3号」(肥後考古学会)1983年、「図録 三世紀の九州と近畿」(奈良県立橿原考古学研究所付属博物館)1983年、「京都府内巡回展図録 鏡と古墳—景初四年鏡と芝ヶ原古墳」(京都府立山城、丹後両郷土資料館、京都府教育庁文化財保護課、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987年、日本考古学協会年報、「日本の古代遺跡」(保育社)、「群馬の古鏡」(群馬県立歴史博物館)1980年等を利用した。

※※これら、方格規矩鏡、四獣鏡を出土する遺跡の内、北山茶臼山西古墳と同様、2つの鏡式の鏡を同時に出土する遺跡は次に掲げるように9古墳が数えられる。

- ① 岡山鶴山丸山古墳 獣鏡、三角縁神獣鏡、盤龍鏡、四禽鏡、神獣鏡、五獣鏡など計33面を副葬
- ② 大阪珠金塚古墳 神獣鏡、獣形鏡など計4面を副葬
- ③ 京都恵美須山古墳
- ④ 奈良平群町西宮古墳 神獣鏡、四乳鏡、撰文鏡など計5面副葬
- ⑤ 奈良天神山古墳 神獣鏡、連弧文鏡、獣形鏡、画像鏡、人物鳥獣文鏡、獣帯鏡など計23面副葬
- ⑥ 奈良兵家2号墳
- ⑦ 愛知東之宮古墳 神獣鏡、三獣鏡など計11面副葬
(瓢箪塚)
- ⑧ 静岡三池平古墳
- ⑨ 長野将軍塚古墳 連弧文鏡、乳文鏡、撰文鏡、珠文鏡など計9面副葬

方格規矩鏡系古鏡出土地都府県別グラフ（舶載鏡125面、仿製鏡101面、不明34面、計260面）

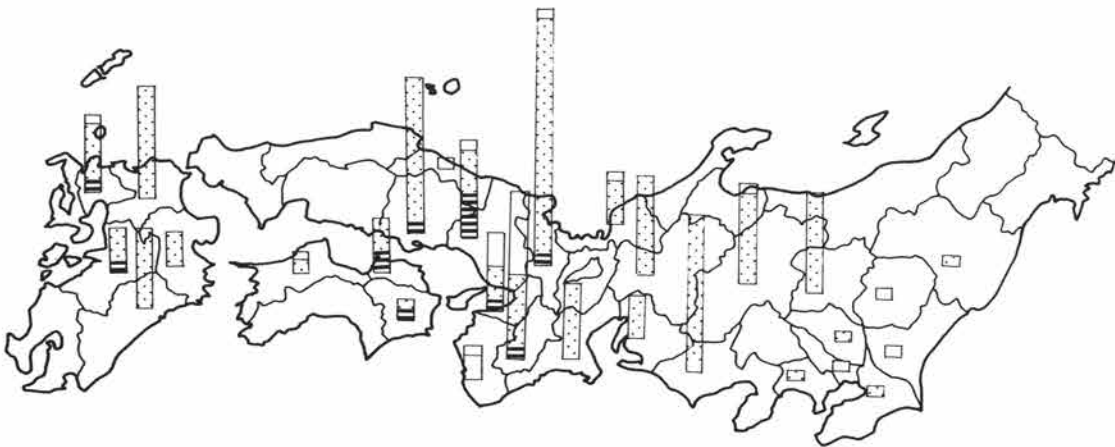


第153図 方格規矩鏡系古鏡出土地

これによると、方格規矩鏡の絶対量は北九州と畿内で突出していることが指摘できる。特に福岡県の87面は全体の面数259面に対して、約34%を占め、出色である。

また、舶載鏡と仿製鏡の分類で見ると、北九州にその中心があることがわかる。これは北九州の方格規矩鏡を出土する遺跡が弥生時代に比定されるものが多いことに起因するものであろう。

四獣鏡系古鏡出土地都府県別グラフ（舶載鏡14面、仿製鏡145面、不明22面、計181面）



第154図 四獣鏡系古鏡出土地

四獣鏡の出土地は京都府が28面で最も多い。北九州においても出土量が多いが、むしろ畿内から中部地方及び群馬県において出土が目立つ。

舶載鏡と仿製鏡の分類では兵庫県が9面と全体量は多くないが、そのうち4面が舶載鏡であり、他地域と大きな違いを示す。

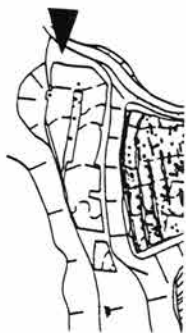
写 真 图 版



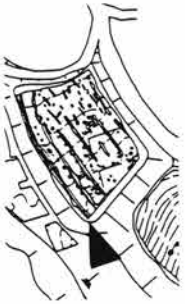
遺跡航空写真（中央や、上寄りの丘陵が大島上城、下が西古墳）東より



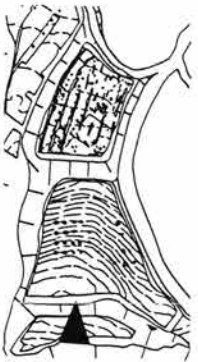
テラス⑩ 1号住穴列全景 東より



テラス① 全 景 南より



テラス③ 大溝全景 北より



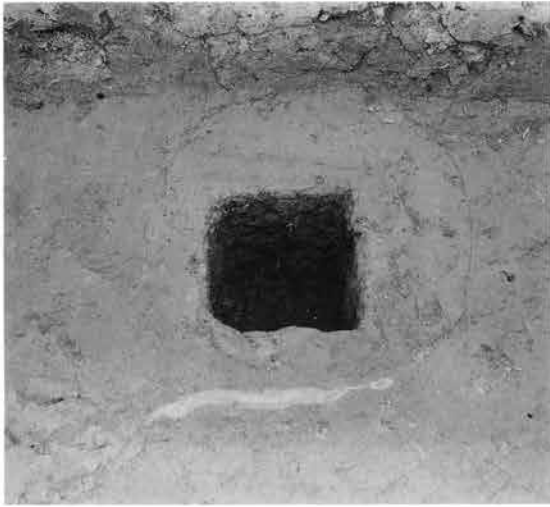
テラス③, テラス④ 全 景 北より



1号土坑（テラス①内）かわらけ出土状況 西より



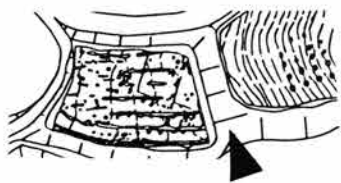
ピット（テラス③内）かわらけ出土状況 南より



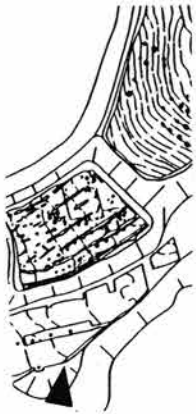
1号土坑 西より



1号墓壙 東より



テラス③ 北斜面石組状況 東より



テラス① 調査風景 (下のテラスでは上物焼却作業中)

南より



テラス④～テラス⑯ グリッド設定状況

東より



テラス④～テラス⑦ 雑草伐採後 東より



発掘調査後遺構全体



図版 8 大島上城遺跡



テラス⑧ 1号集石 北より



テラス⑩ 土鍋出土土坑
遺物出土状況 東より



同掘り方 東より



テラス⑪～テラス㉔ 遺構全景 北東より
(手前の2条の溝が近世の耕作溝)



1号溝 西より



2号溝 西より



2号墓壙全景 北東より

人骨出土状況



全 景 南西より

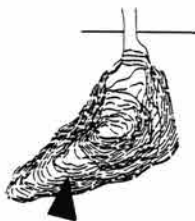
右手木立が大島上城中心部
中央丘陵が大島富士

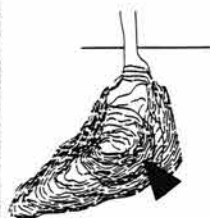


大島富士全景 北西より



大島富士（近世面） 北より

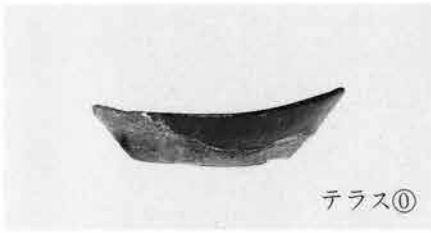




大島富士中世盛土状況 北東より



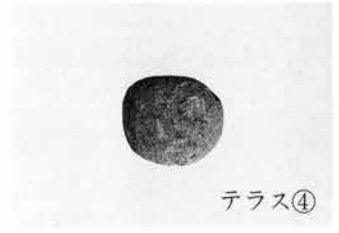
古銭出土状況 中世面（盛土は古銭の上に高く積まれる）



テラス⑩



テラス①1号土坑



テラス④



テラス③ピット7



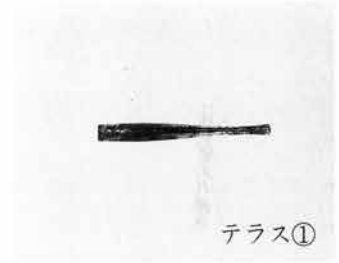
テラス③大溝



テラス④



テラス⑩土鍋



テラス①



テラス⑩土鍋



テラス⑩土鍋



テラス⑩土鍋



大島富士木質片



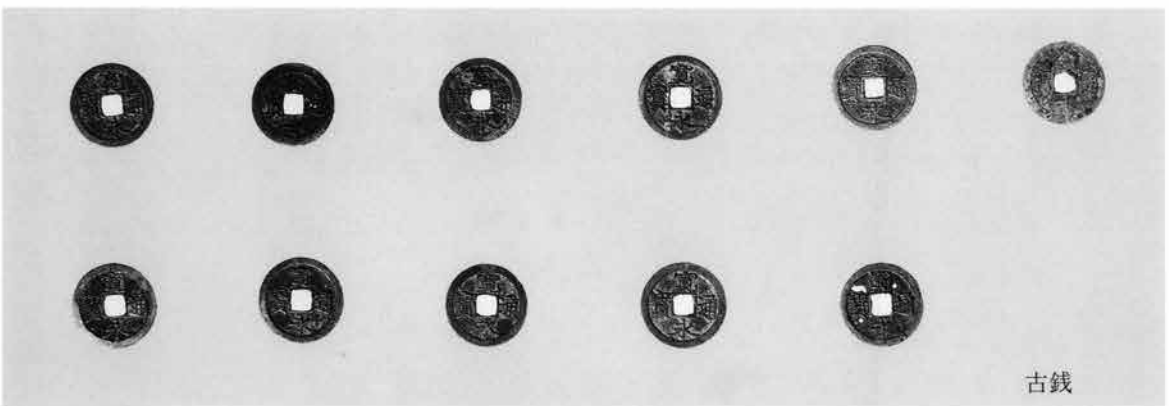
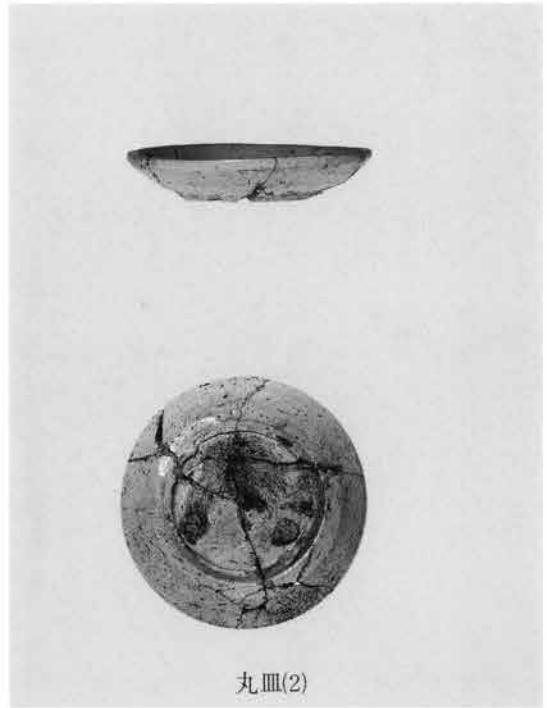
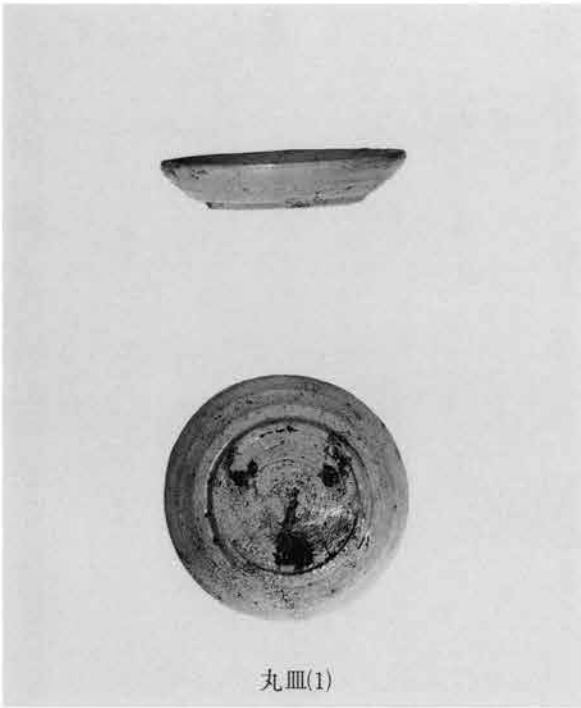
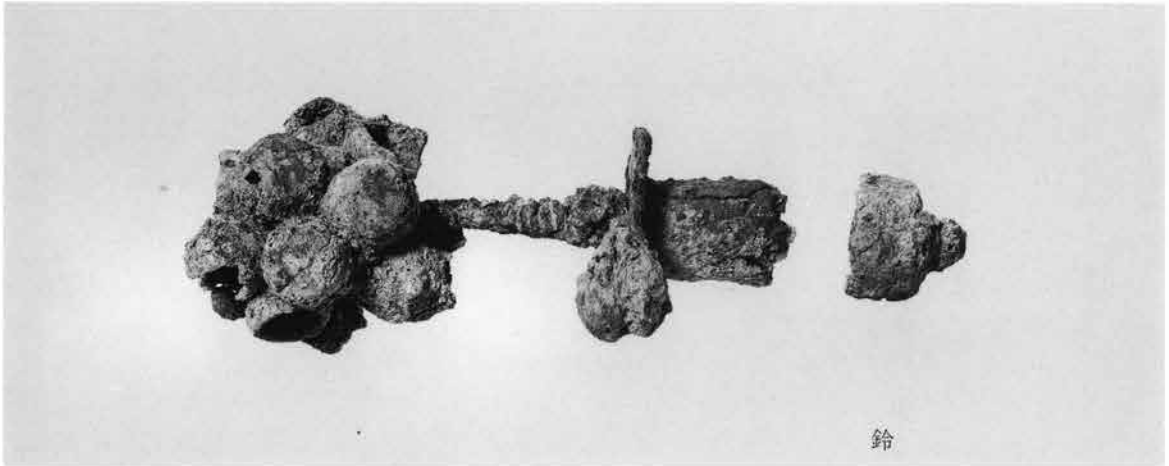
大島富士木質片



大島富士鉄釘



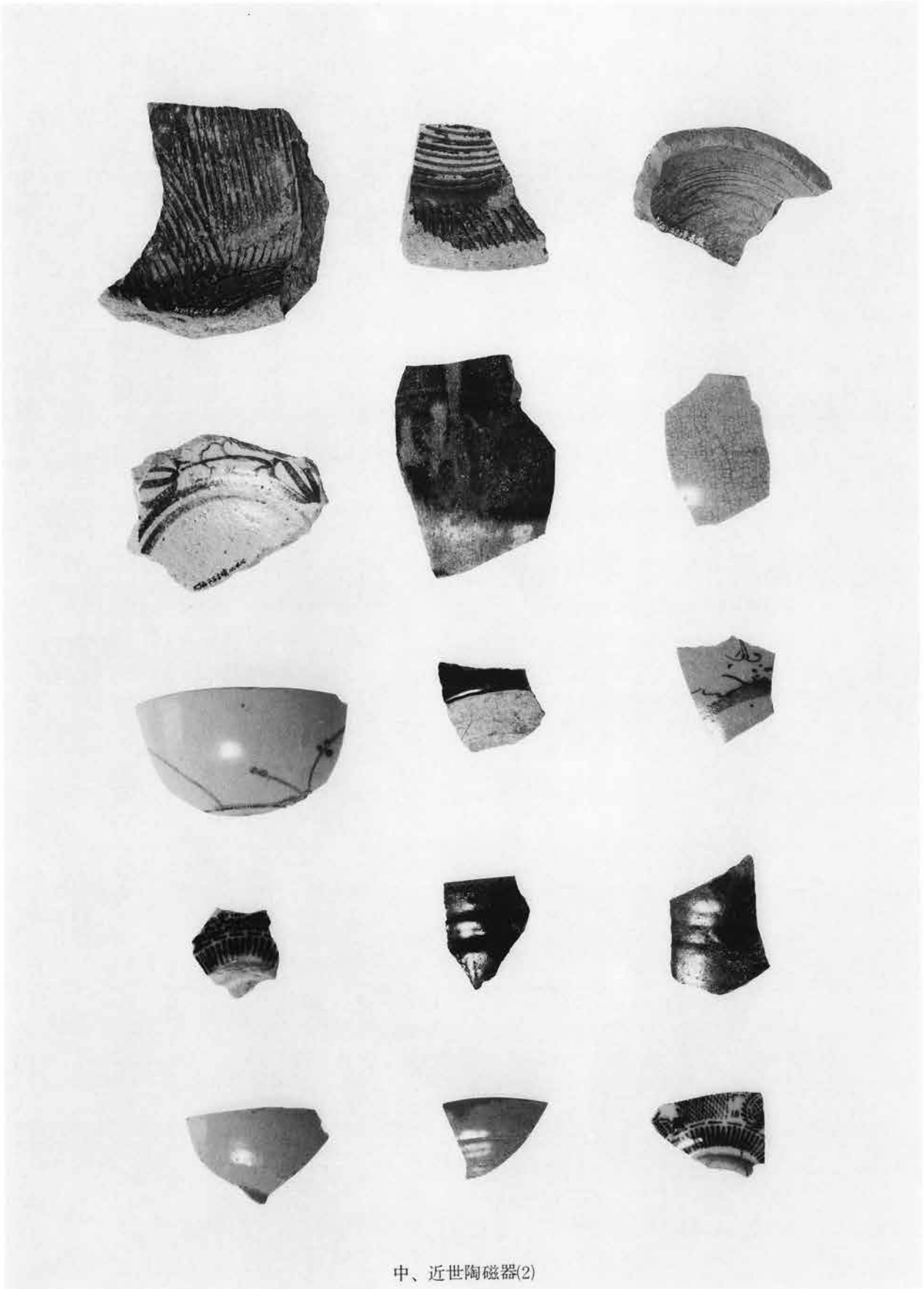
鉄砲玉



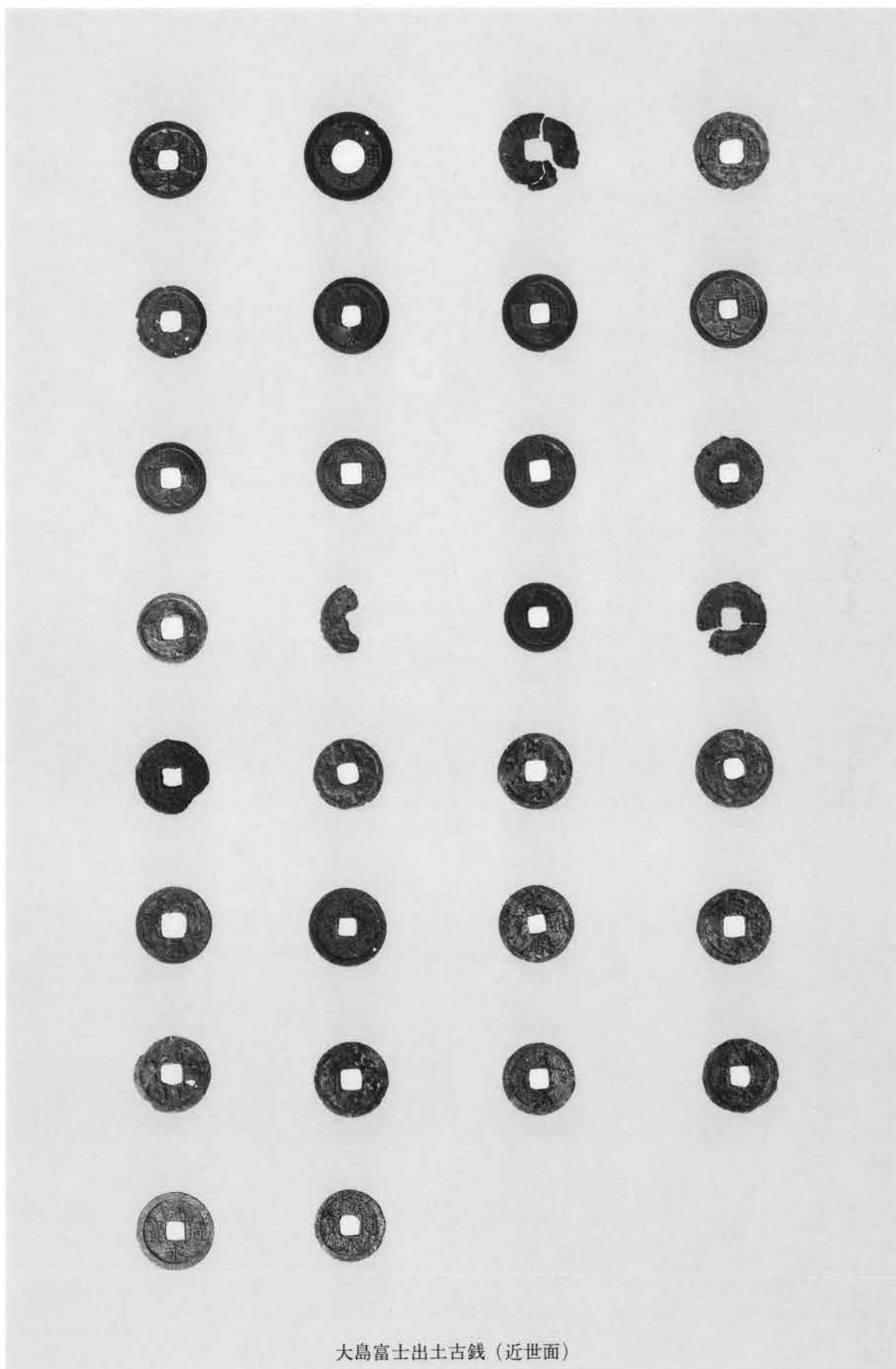
2号墓壙出土遺物



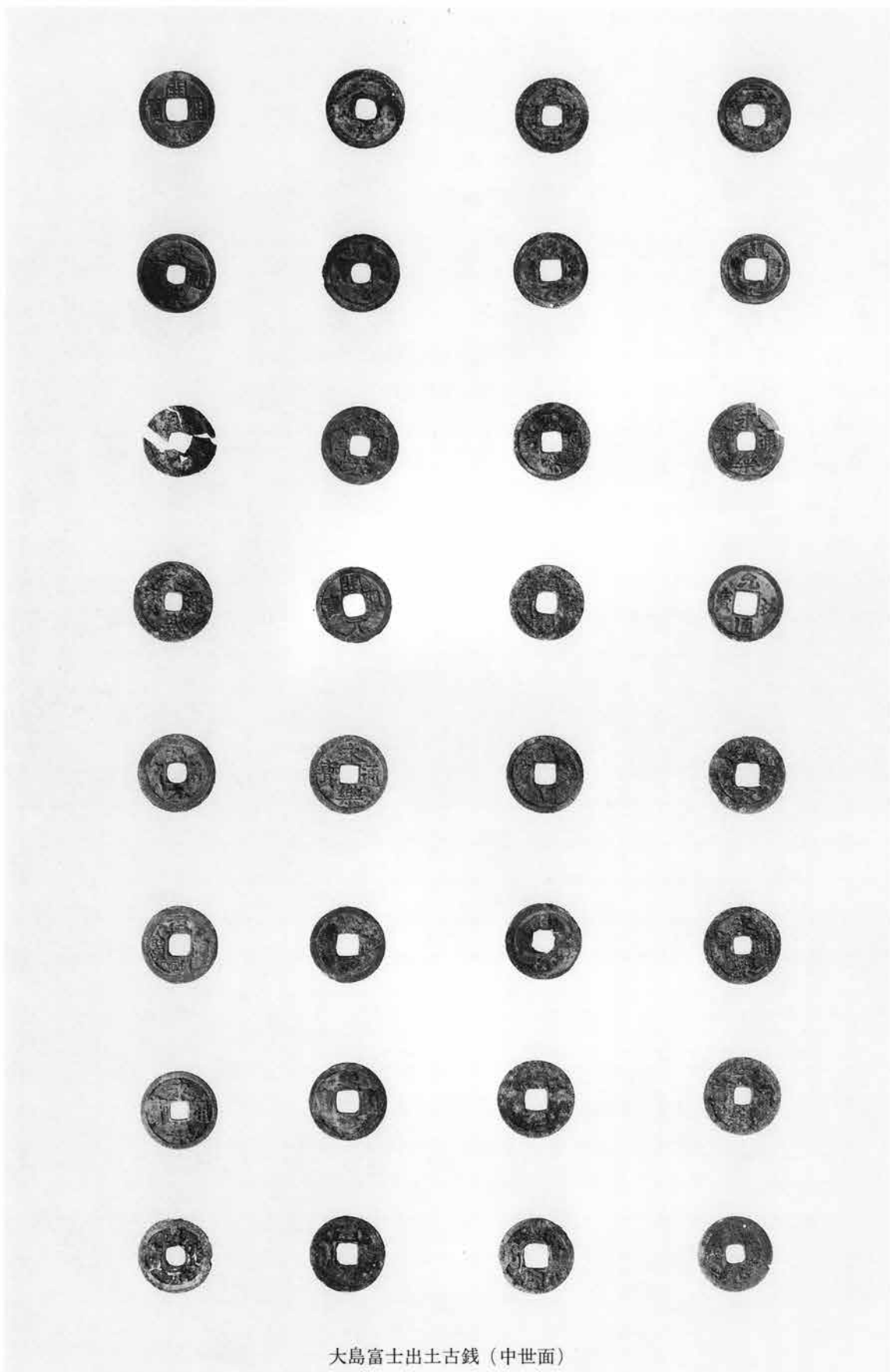
中、近世陶磁器(1)



中、近世陶磁器(2)



大島富士出土古銭（近世面）



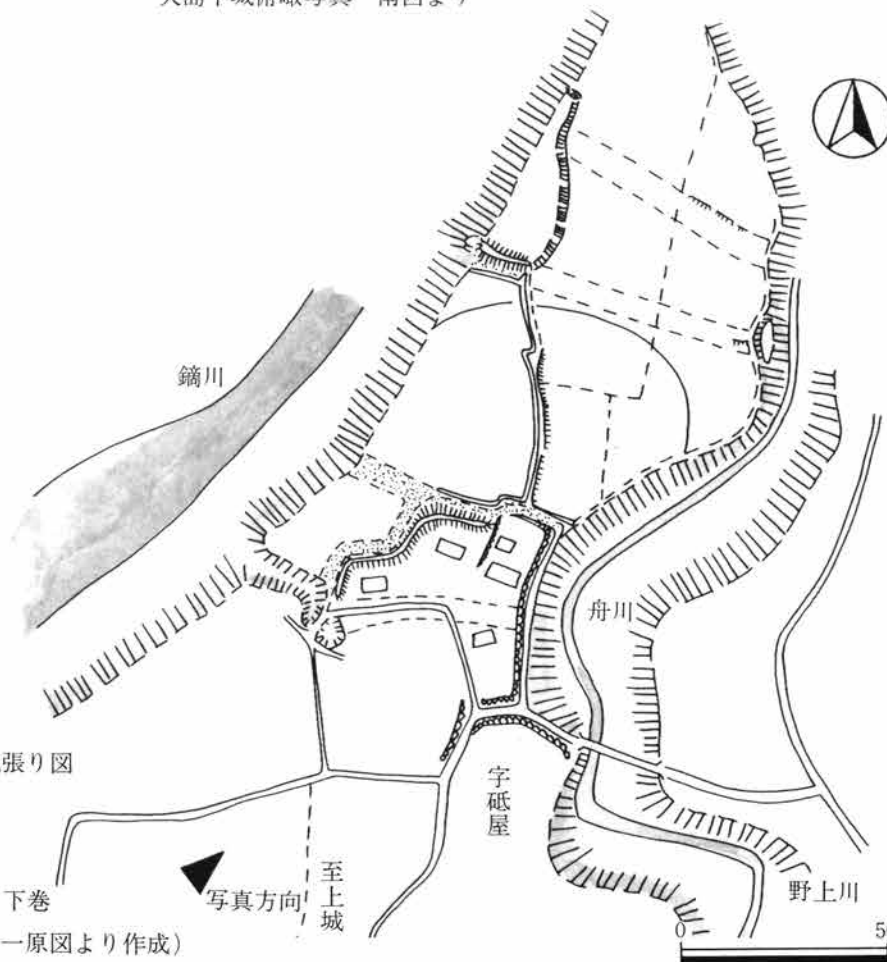
大島富士出土古銭（中世面）

富岡市街地



鑄川

大島下城俯瞰写真 南西より



大島下城縄張り図

「群馬県古城址の研究」下巻

(山崎一原図より作成)

写真方向

至上城

字砥屋

舟川

野上川

50 m



南東上空より

北山茶白山西古墳 航空写真

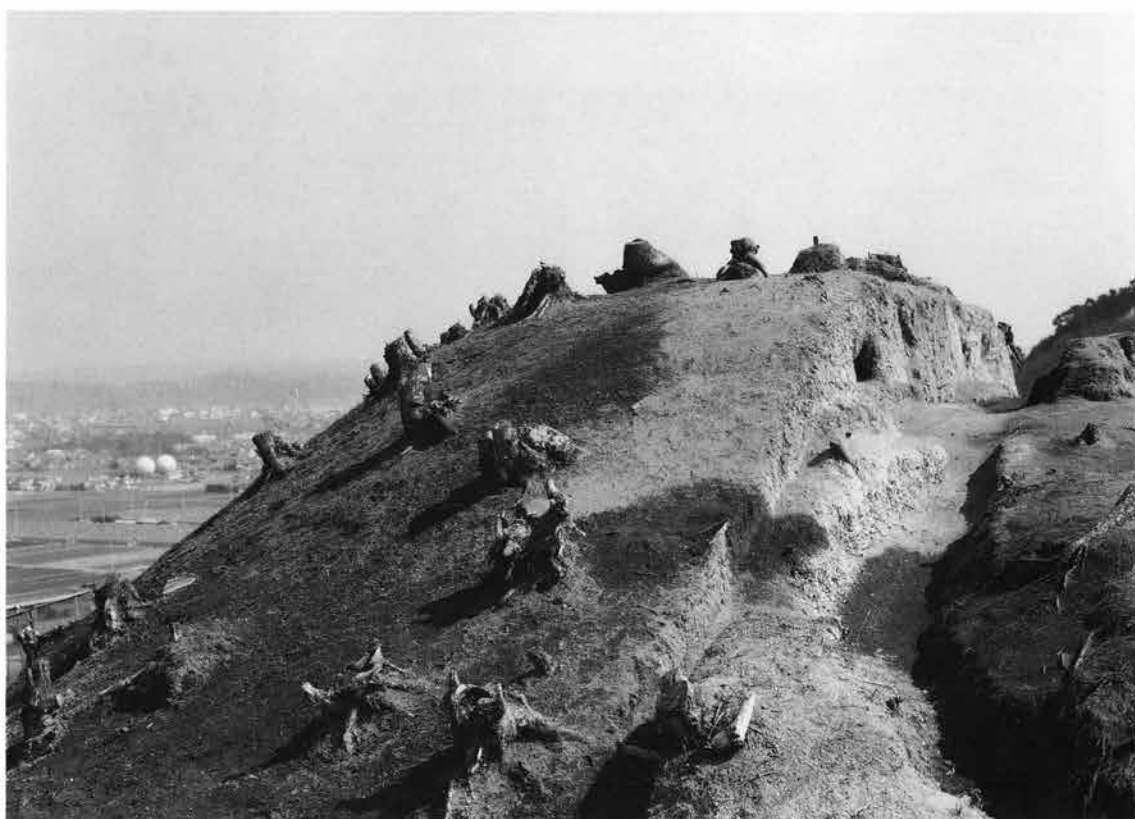


南上空より

北山茶臼山西古墳 航空写真



北山茶白山西古墳調査前状況 南より



墳 丘 (A 軽石除去後) 西より



1号溝 全 景 北より



2号溝 全 景 南東より





内部主体部 地層断面(1) 南東より



内部主体部 地層断面(2) 南東より



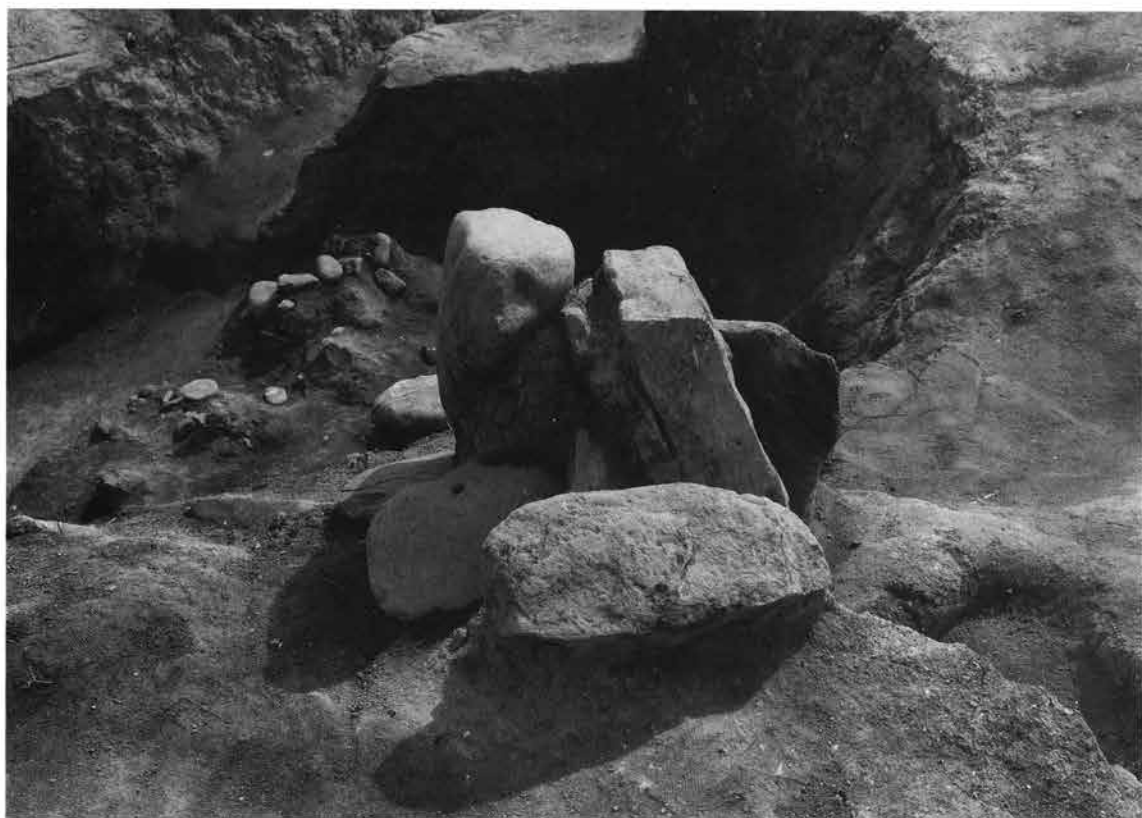
東木口 礫検出状況 北西より



西木口 礫検出状況 南東より



内部主体部 掘り方全景 南東より



内部主体部 北西隅石組検出状況 北より





西古墳 全 景 (墳丘構築面)



地層断面、東部分

▲
構築面石組状況 ▶



平面、東部分



方格規矩鏡出土状況

南東より



鉄矛出土状況

南東より



1号住居 全 景 西より



1号住居かまど部分 全 景 西より



窯体状施設(1)

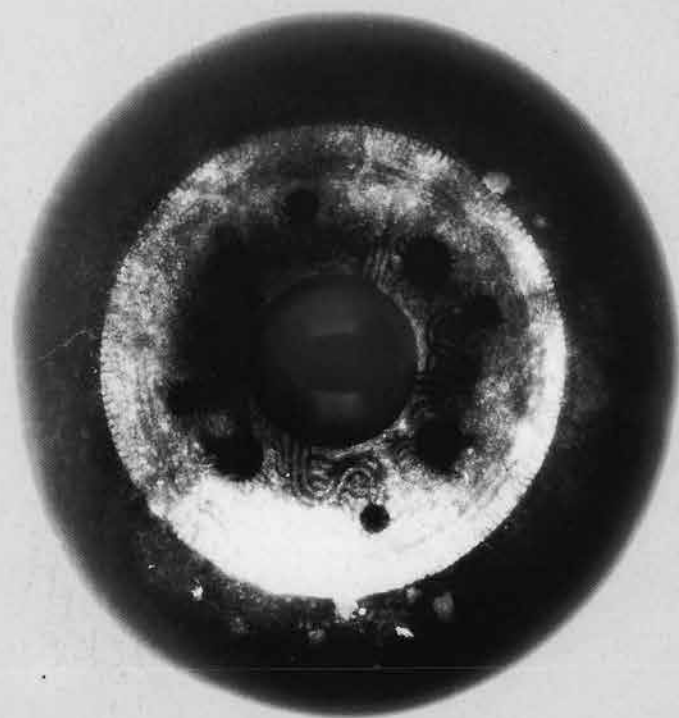


窯体状施設(2)





変形四獣鏡



同 (X線写真)



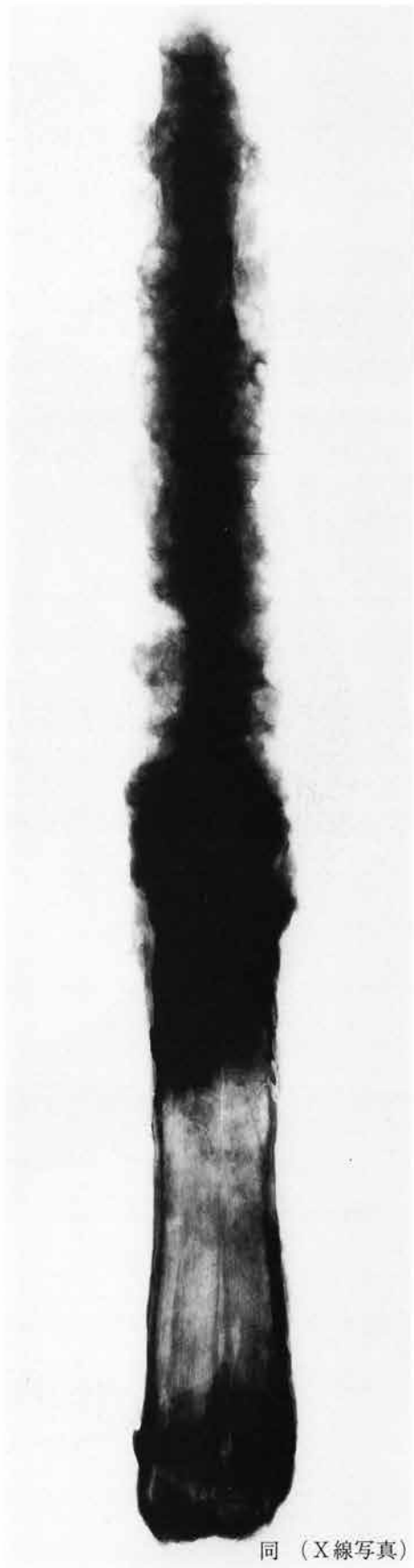
方格規矩鏡（部分放大）



方格規矩鏡 X線写真



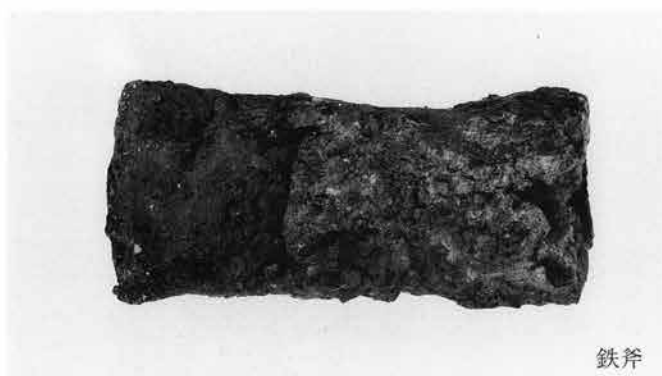
鉄矛



同 (X線写真)



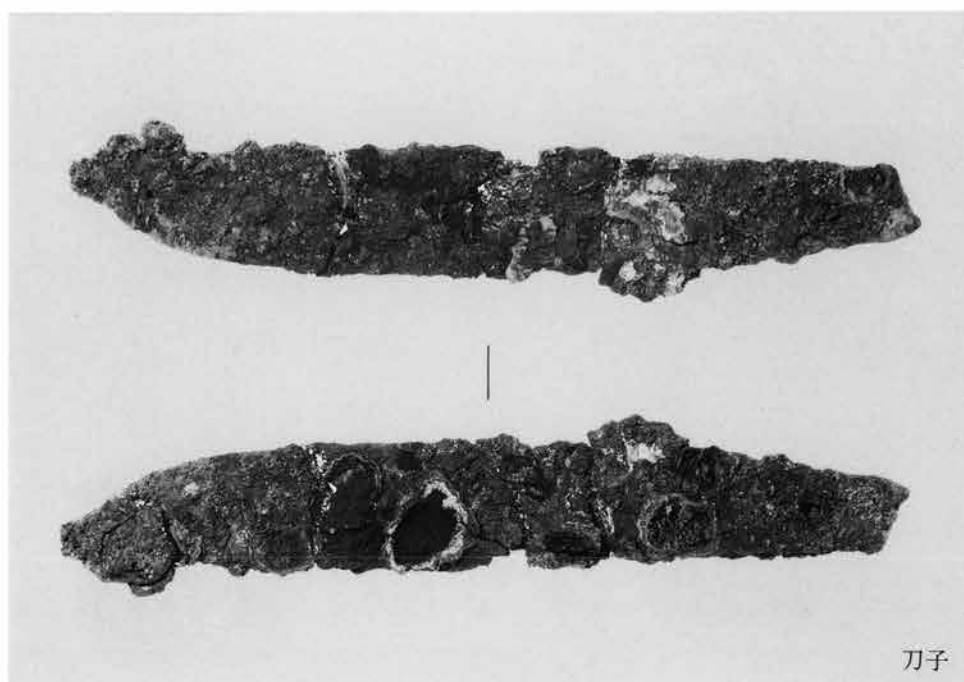
木質片



鉄斧

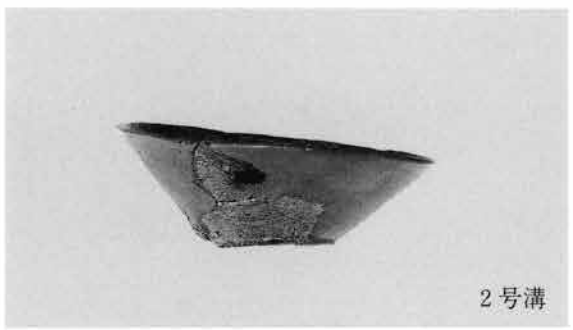
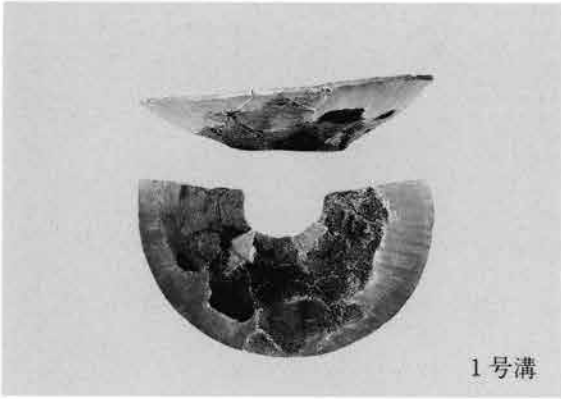


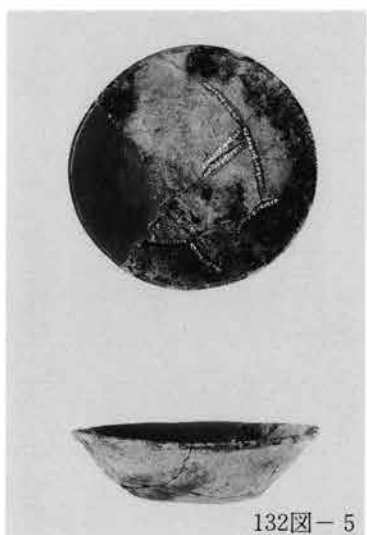
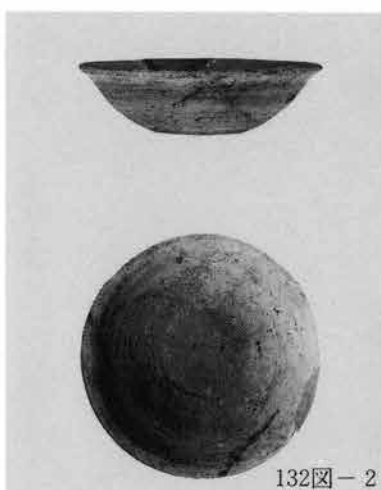
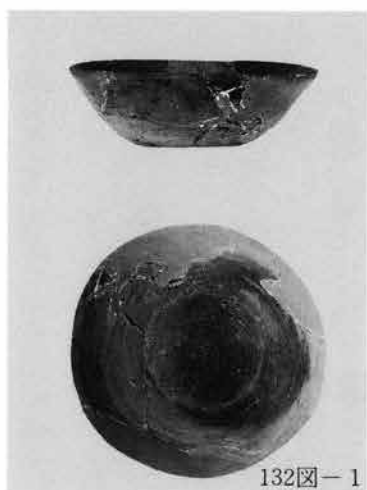
鈍状鉄製品



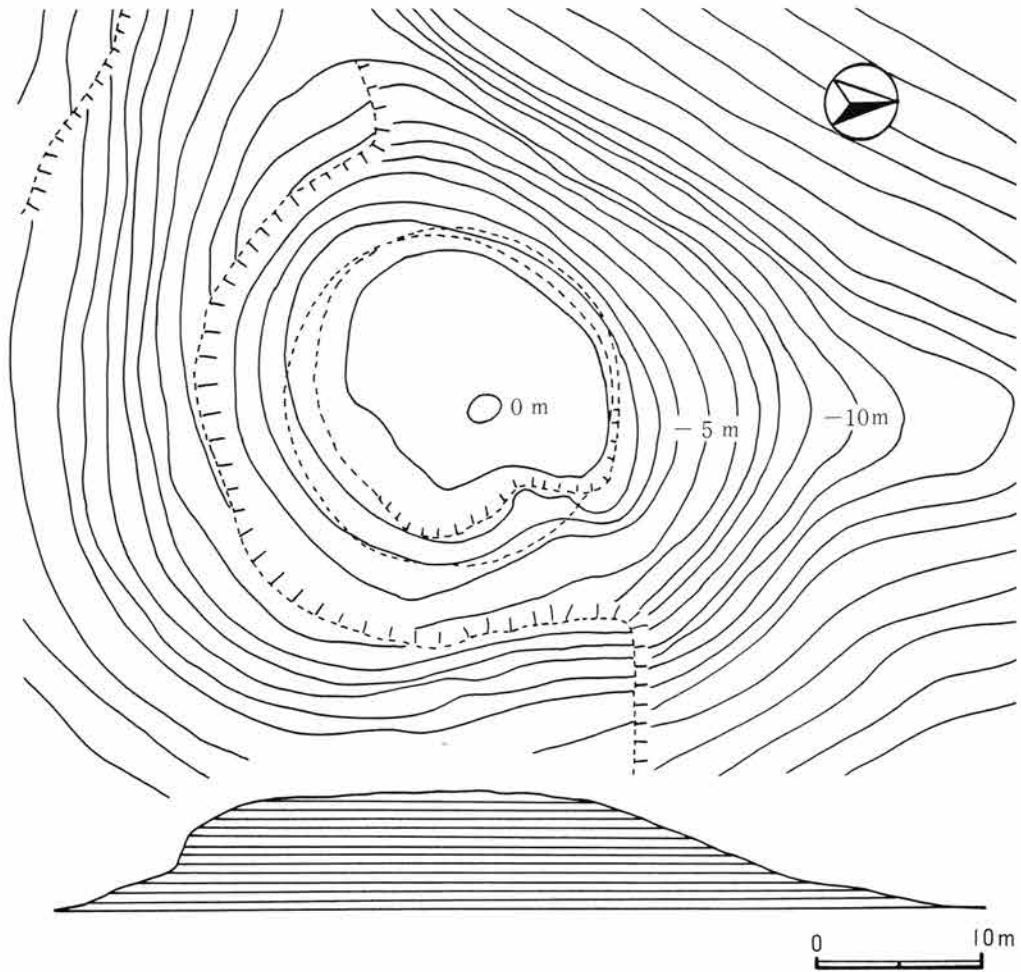
刀子

内部主体部出土遺物





1号住居出土土器



北山茶白山古墳地形図（『群馬県史』資料編3より）



三角縁神人車馬画像鏡（宮内庁所蔵）

お礼の手紙

一ノ宮小学校 4年3組 今井貴子

私は、学校からいつでも西茶うす山を見ていました。私は、いつでも、「なんであそこの山は、こうじをしているのかな。いつてみたいな。」と、思っていました。でも、名前はしりませんでした。それに、いけることもでした。

そして、なん日かたったら、西茶うす山にいけるということを先生からききました。私は、ゆめみたいでうれしかったです。

西茶うす山まで、三キロかかりました。つかれました。あせがいっぱいでした。ついたらお兄さんがよくせつめいをしてくれました。本当にこわいようなおもしろいようなかんじでした。

……………中略……………

てっぺんにのぼったら、きもちがよかったです。けしきもよかったです。きれいでたまりませんでした。お兄さん、今日いろいろとおせわになりました。またいろいろおしえてください。

さようなら。

おれいのがみ

一ノ宮小学校 4年3組 佐々木哲也

ほくは、茶白山に行ってわからないことがよくわかりました。ほくもそうゆうものをはっけんしてみたいです。はっけんしたらぜひ茶白山へ行ってみたいです。ほくは、ほんとうにみつかるといいとおもいます。ほくたちが今度、いったときはもっといいものを見つけておいてください。よろしくおねがいします。今日はどうもありがとうございました。ほくはみなさんにもっといろいろなものをはっけんしてくれるようにがんばってほしいです。

大島上城遺跡 北山茶白山西古墳

—群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第78集—
—関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集—

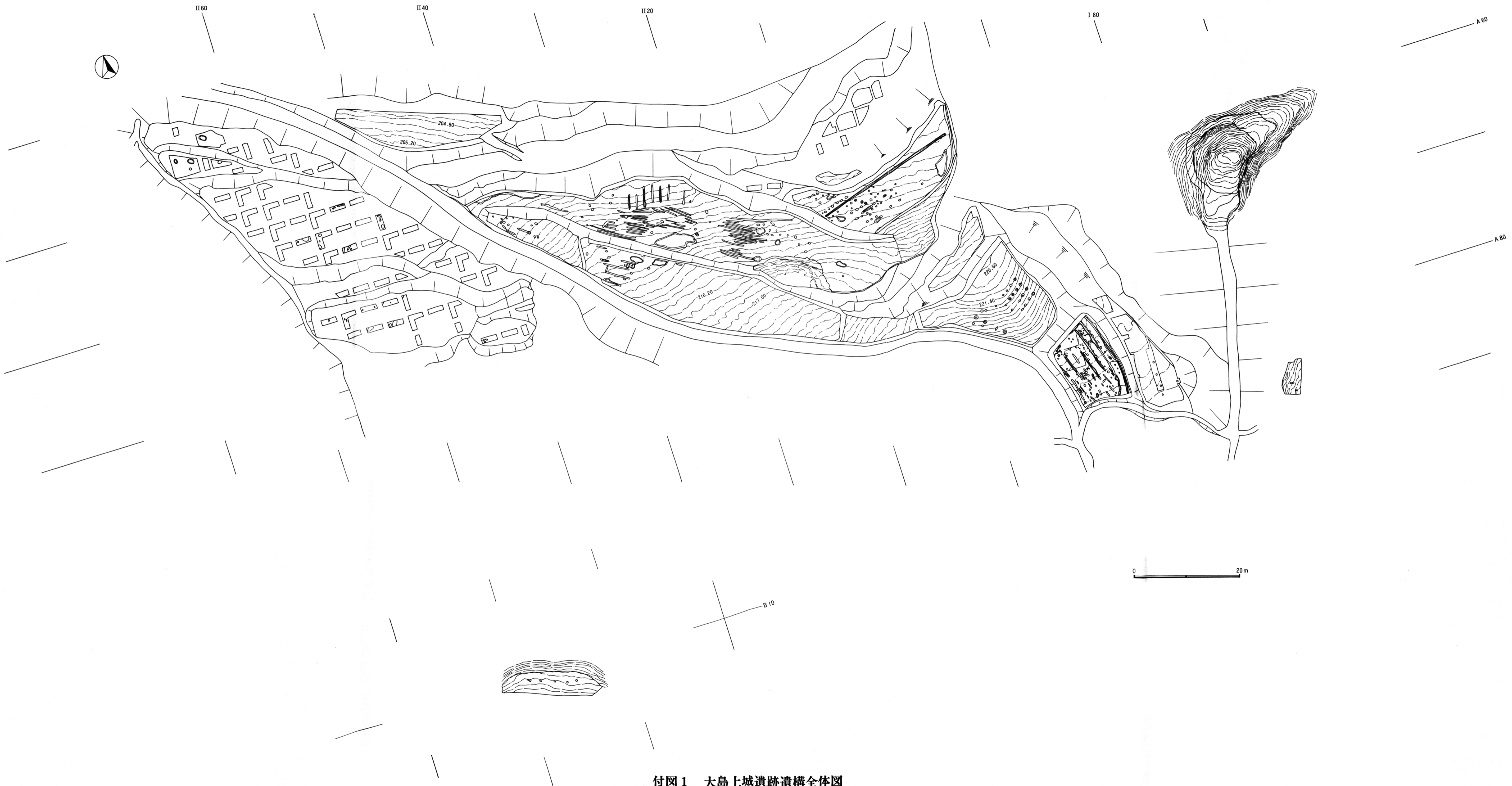
昭和63年12月15日 印刷

昭和63年12月20日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

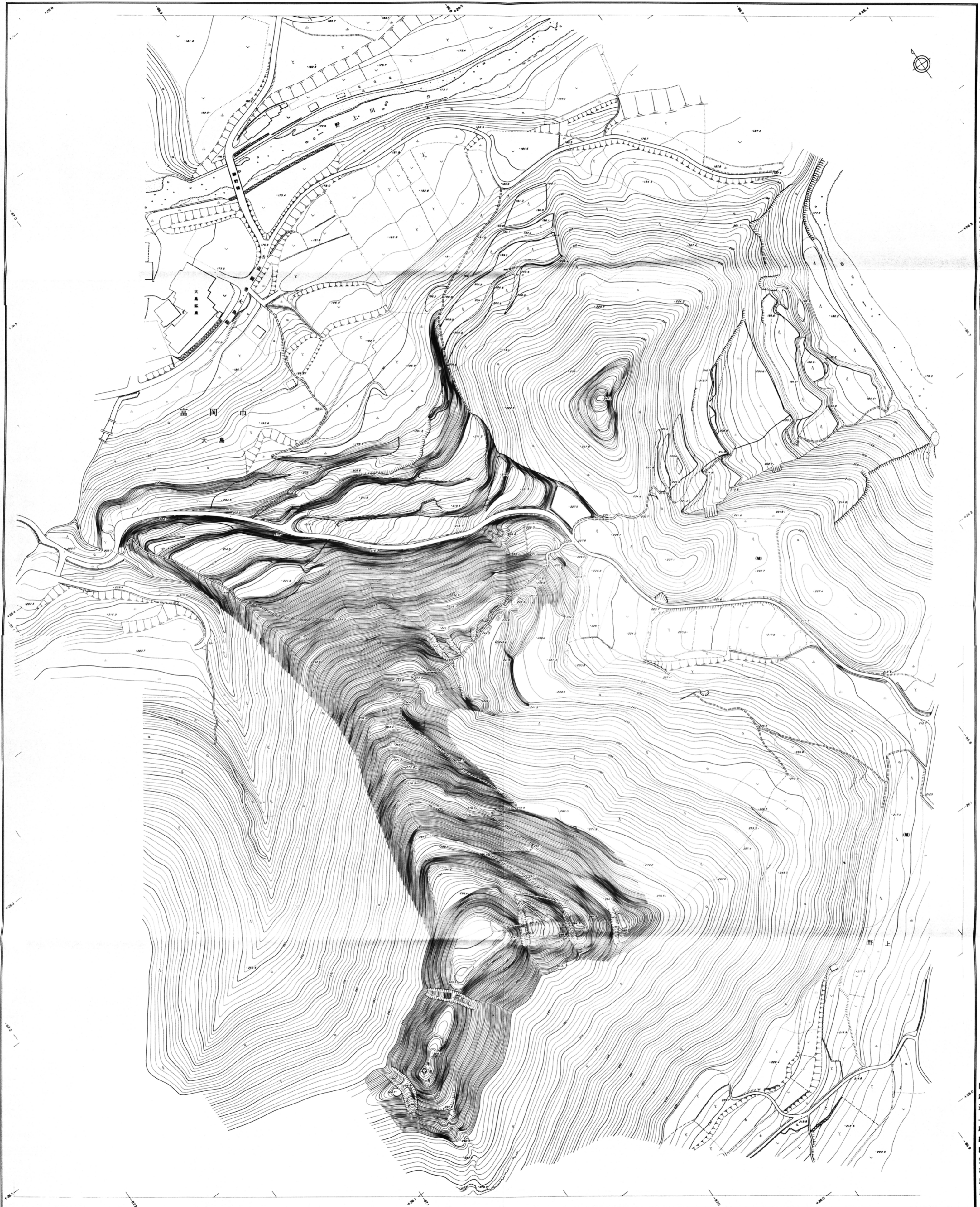
印刷／朝日印刷工業株式会社



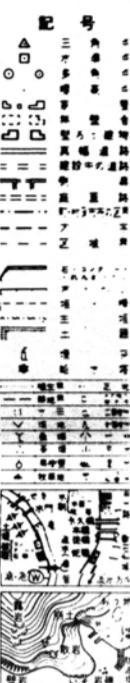
付図1 大島上城遺跡遺構全体図

1:1000

付図2 大島上城遺跡地形測量図



行政区域

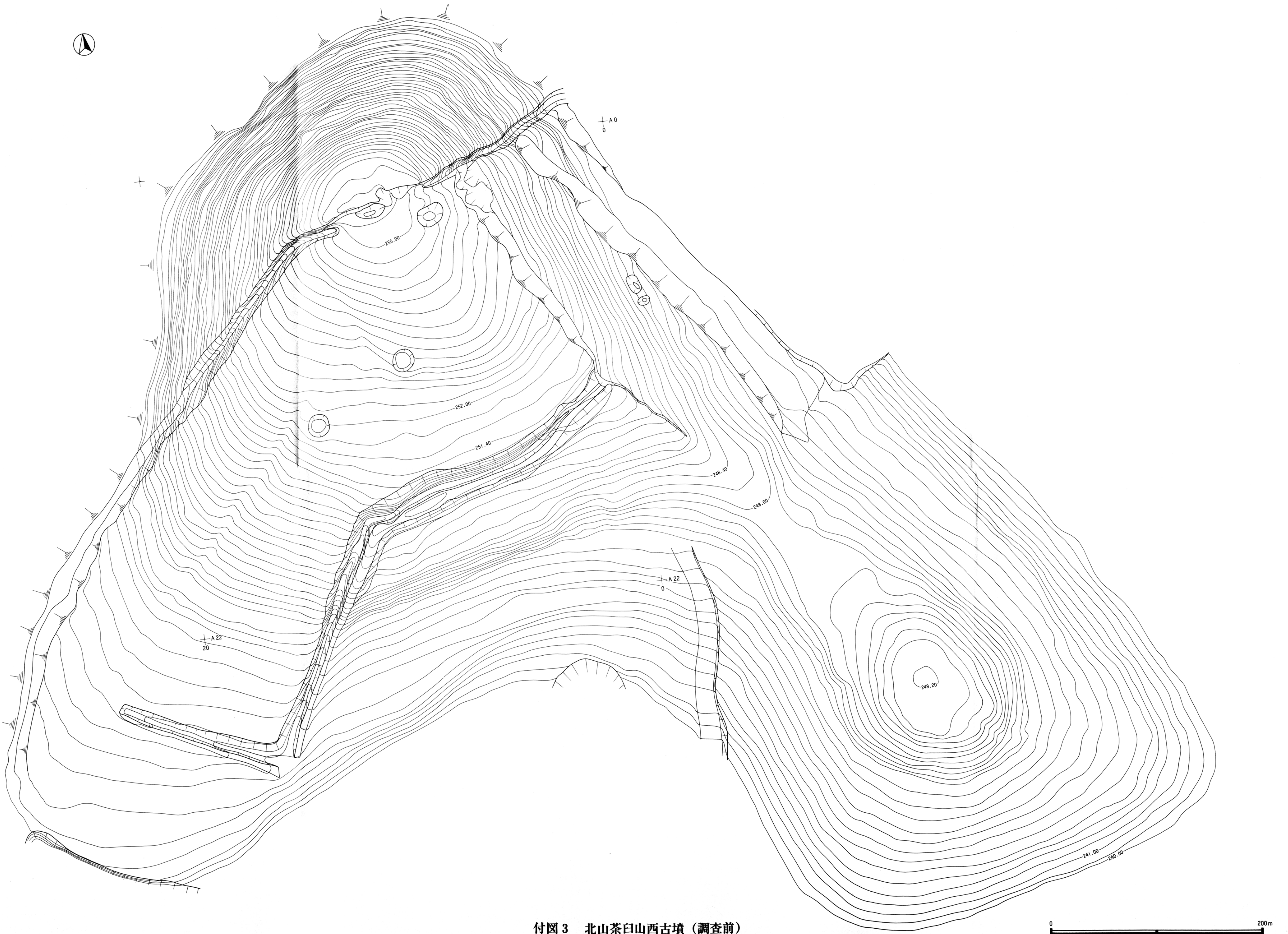


財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
関越道上越線調査事務所

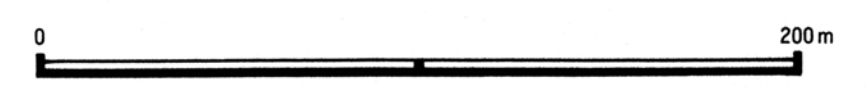
中央建設株式会社調製

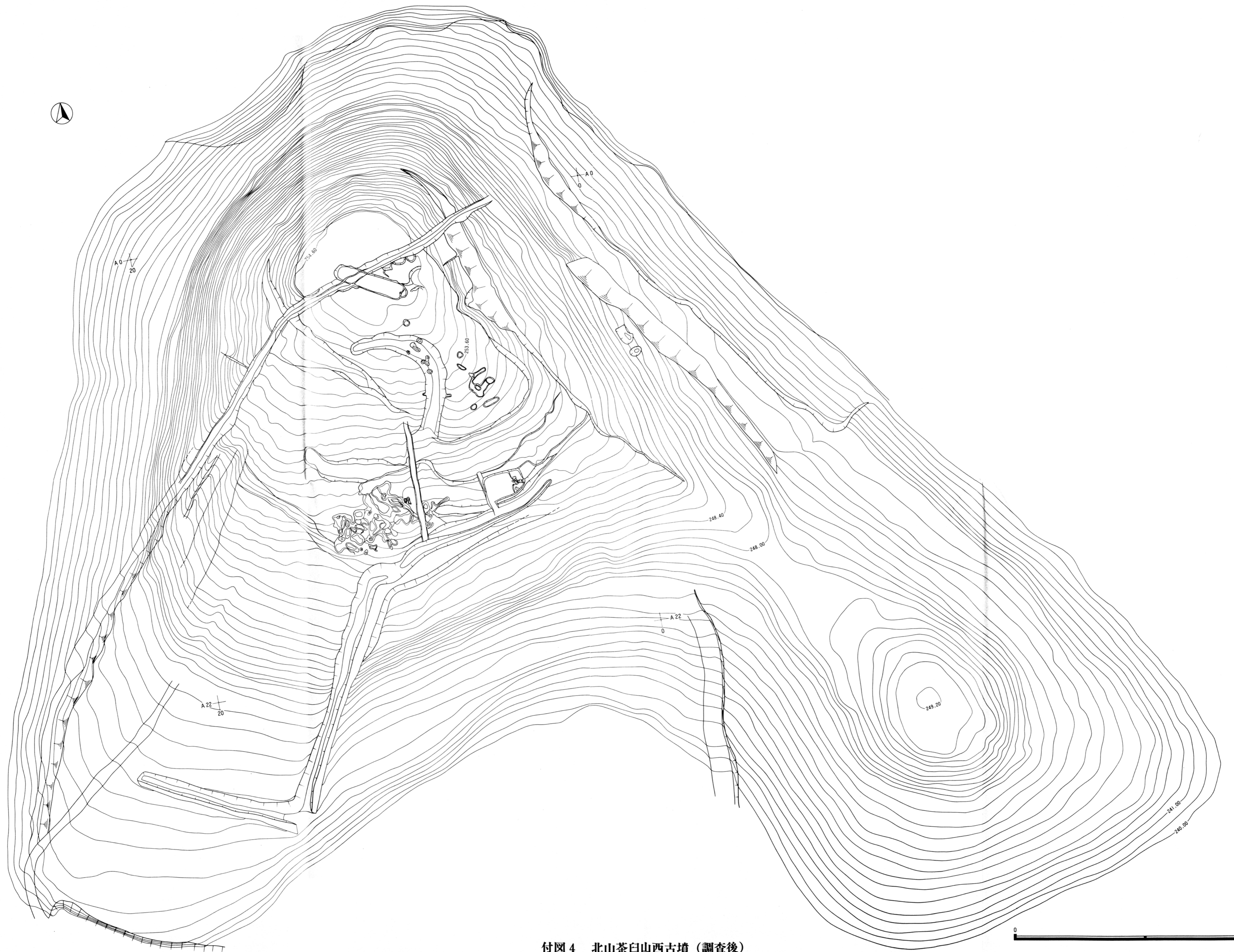
昭和41年12月測量 等高線間隔 1m
縮尺 1:1000

1:1000



付図3 北山茶白山西古墳（調査前）





付図4 北山茶臼山西古墳(調査後)